

熊本県高森町文化財調査報告書 第一集 (二〇二四年)

高森のわか

熊本県阿蘇郡高森町教育委員会



に
わ
か



旭向上会 『向上会の未来』



旭向上会 口上



上町向上会 『鶴の恩返し』



上町向上会 移動舞台



横町向上会 『親友の初盆』



横町向上会 落とし



下町向上会 『未来へつなぐ風鎮祭』



下町向上会 お囃子



昭和向上会 『# (ハッシュタグ)』



昭和向上会 子供にわか (『おつかい』)



高張



節刀渡し

造り物



「造りもん」大集合（高森保育園前で一堂に展示）



山引き（各向上会のトラックが各地区の造り物を先導する）



平成元年假装行列（商工会アルバム）



年代不明 豊前屋写真

序

「高森のにわか」は、熊本県阿蘇郡高森町で一〇〇年以上続く民俗芸能で、毎年八月に行われる風鎮祭の中で上演されています。

にわかを演じるのは、五つの町内の向上会と呼ばれる青年組織に加入した青年たちです。彼らは向上会ごとに移動式の仮設舞台で町内を廻りながら、場所ごとに異なる演目を披露しています。この「高森のにわか」は、一〇分程度の滑稽な芝居で、そこには社会風刺や頓知の利いた笑いが盛り込まれています。即興的で一度限りの寸劇が特徴で、熊本県内でも伝承が少なくなっているにわかのひとつとして評価されています。

平成三十一年三月には、国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択されました。この「高森のにわか」を今後も継承していくために令和三年度より「にわか」、「造り物」、「仮装行列」、「横町祭礼関係文書」について調査を実施し、このたび、調査報告書として刊行するはこびとなりました。

本書が研究者のみならず、県民、高森町民の皆様にご利用され、地域の歴史、文化を理解する一助になることを願います。最後になりますが、本書の刊行にあたり、地元の皆様、関係各位に多大な御理解と御協力をいただきました。ここに心よりお礼申し上げます、巻頭の挨拶とします。

令和六年（二〇二四年）三月

熊本県高森町長 草村 大成

例言

一、調査

文化庁の民俗文化財調査事業として国庫補助の採択を受け、令和三年（令和五年度に「高森のわか」民俗文化財調査事業として実施した。）

二、調査の目的

「高森のわか」は平成三十一年三月二十八日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（国選択無形民俗文化財）」に選択され、令和二年一月二〇日には、高森町無形民俗文化財に指定された。

風鎮祭は、「高森のわか」を中心として造り物の山引きや手踊りが行われる。これらは基本的にこの年限りの演目、造形物で翌年には継承されない。

このようににわかや造り物は、一回性ゆえにこれまでどのようなものが演じられ、製作されてきたのか記録が残されていない点が課題であった。今回、令和四年度の風鎮祭の準備から祭礼当日までの記録、関係者への聞き書きを実施し、現状を把握、記録保存することで今後の継承活動につなげていく必要性があった。また、にわかと一体となつて行われてきた造り物や仮装行列についても祭礼全体の構成を把握するために調査と記録することが必要であった。

かつては、熊本県内各地において盛んにおこなわれていたにわかの上演や造り物製作が現在は実施する地域も減少し、衰退の危機に晒されている。本調査は、風鎮祭のみならず、熊本県内における祭礼文化の解明にもつながることを目的に「高森のわか民俗文化財調査事業」を実施した。

三、調査実績

二〇二一年度

第一回委員会（六月二九日）高森町役場

今回、調査事業を実施するにあたり、高森のわか調査委員会を立ち上げたが、新型コロナウイルス感染症の影響により風鎮祭は中止となり、委員会もオンラインで行った。今年度の調査内容として、「横町文書」調査を実施すること、風鎮祭の動画や写真資料の収集、向上会OBから聞き取り調査を行うことを確認した。

第二回委員会（八月一九日）高森町役場

委員会では、報告書の章立てについて検討し、報告書の執筆分担の確認を行った。併せて県内全域のにわか分布状況を調査する必要から熊本県内の市町村商工会、各市町村教育委員会宛てにアンケート調査を実施した。

第三回委員会（三月二五日）高森町役場

今年度の調査成果を確認するとともに次年度の調査内容等について検討した。

二〇二二年度

第一回委員会（六月一七日）高森町役場

委員会では、事業スケジュールを確認するとともに調査報告書の章立てについて引き続き協議を行った。この段階では風鎮祭の開催可否は不明であったが、開催を前提として風鎮祭当日の調査担当の割り振り、各向上会に対し共通する調査カードを作成することを確認した。また当日の調査の補助として、熊本博物館の湯川氏、写真撮影として元熊日新聞力メラマンの間氏にわか調査員を委嘱した。

第二回委員会（八月四日）高森町役場

委員会では、報告書章立ての修正をはかり、報告書本文の体裁や印刷部数、配布リストについて協議した。また、風鎮祭における目覚し・にわか・造り物に係る調査カードが提示され、了承された。このほか、風鎮祭当日の各向上会のタイムテーブルやルート確認を行うとともに本年の風鎮祭では、各向上会と吉本興業所属の熊本出身タレントによるわかコラボ企画があるため、タレントの稽古日以外にわか調査に入ることを確認した。造り物については、昭和区・旭通区・横町区における造り物の製作過程の調査を行うことを確認した。

第三回委員会（八月一九日）高森町役場

委員会では文化庁吉田調査官に報告書章立て案を提示し、令和四年度に調査を行うにわかの実況とこれまでのにわか状況を書き分けるよう指導を受けた。また、カメラマンの間委員には、向上会の演者の近接写真、移動舞台の写真、観衆を含めた写真など報告書に掲載すべき写真をあらかじめ指定し、巻頭図版レイアウト作成を依頼した。吉本興業とのわかコラボ企画の映像記録作成は、教育委員会で行うこととした。

第四回委員会（二月二四日）熊本博物館

委員会では、各執筆担当から草稿を提出してもらい、執筆内容について報告した。また、下町向上会のにわか『嗚呼、熱闘甲子園』の台本を書き起こし、その台本内容について下町向上会に確認してもらうこととした。このほか、松岡委員及び竹原委員には、令和四年度の風鎮祭におけるにわか及び造り物の調査成果についてTPC（高森ポイントチャンネル）において報告することとなった。

令和五年二月一五日から三月三十一日までの間、にわか調査報告書への

掲載、原稿執筆の参考とするため「横町文書」について事務局で借用し、堤調査員による写真撮影、史料調査を実施した。調査終了後、史料については専用の封筒にて分類・整理し返却した。

第五回委員会（三月二四日）高森町役場

委員会では、引き続き報告書の草稿の検討を行った。また、堤委員による豊前屋が保管する史料の解説を行った。事務局からは令和四年度のにわか調査の実績を報告するとともに令和五年度の調査スケジュールについて提示し、協議した。

二〇二三年度

第一回委員会（七月三〇日）熊本博物館

委員会では、各委員の原稿執筆状況の確認と今後の報告書の入稿スケジュールについて協議した。また、「横町文書」の掲載について、内容や掲載分量について検討した。

編集作業については、松岡委員、竹原委員、事務局で進めることとした。また、執筆要項の内容について提示し、了承を得た。

令和五年度の風鎮祭は予定通り開催することとなり、令和五年度は令和四年度の補足調査を行うことで合意した。

第二回委員会（八月一八日）高森町役場

委員会では、原稿の締め切りを一月末とし、それまでに町内の関係団体・機関にて原稿を確認することとした。資料の掲載許諾については、まとめて事務局で行うこととした。巻頭図版については、向上会のにわか、造り物、仮装行列のレイアウト構成とすることとした。

昨年度、昭和向上会は会員の多くが体調不良等により十分な上演ができなかったため、令和五年度に補足調査を実施した。

編集会議 八月二九日(火) 十一月三日(金)、十二月三日(水)

四、事業費

令和三年度 国宝重要文化財等保存・活用事業費 高森のわか民俗文化財調査事業(一年次)

六二九,九二四円

令和四年度 国宝重要文化財等保存・活用事業費 高森のわか民俗文化財事業(二年次)

二,〇六二,七四二円

令和五年度 国宝重要文化財等保存・活用事業費 高森のわか民俗文化財事業(三年次)

三,〇九九,〇九〇円

五、調査体制

指導・助言 吉田 純子(文化庁文化財第一課 芸能部門 調査官)

熊本県教育庁教育総務局 文化課 樋口 和紀(令和三、四年度)

原田 信敬(令和五年度)

高森のわか調査委員会

委員長 安田 宗生(熊本大学名誉教授)

委員 松岡 薫(天理大学文学部講師)

委員 松尾 正一(元熊本日日新聞社記者)

委員 竹原 明理(熊本博物館学芸員)

委員 迫田 久美子(熊本県博物館ネットワークセンター博物館活

動嘱託員)

委員 堤 将太(熊本県博物館ネットワークセンター整理嘱託員)

委員 吉留 徹(熊本市夏目漱石記念館長)

委員 湯川 洋史(熊本博物館学芸員)

委員 間 文男(元熊本日日新聞社カメラマン)

令和四年度 五町向上会 会長

旭向上会 会長 児玉 海人(年番会長)

昭和向上会 会長 緒方 洋貴

上町向上会 会長 谷川 大樹

下町向上会 会長 小篠 勇一

横町向上会 会長 松山 和隆

事務局

二〇二一年度 高森町教育委員会 教育長 佐藤 増夫 局長 緒方

久哉 社会教育係長 植田 雄亮 会計年度任用職員 三森 結衣

二〇二二年度 高森町教育委員会 教育長 佐藤 増夫 局長 緒方

久哉 社会教育係長 植木野 秀徳 参事 井鍋 誉之 主事 秋山

清歌

二〇二三年度 高森町教育委員会 教育長 佐藤 増夫(〇九月)

教育長 古庄 泰則(二〇月〇) 局長 村上 純一 社会教育係長

植木野 秀徳 参事 井鍋 誉之 主事 秋山 清歌 安方 菜々美

六、執筆分担

本書の執筆分担は以下のとおりである。

総論 安田 宗生

第I部

第一章 事務局 安田 宗生

第二章 松岡 薫

第三章 竹原 明理

第四章 迫田 久美子

第Ⅱ部

第一章 松岡 薫

第二章 松尾 正一

第三章 竹原 明理

第四章 吉留 徹

史料 横町祭礼関係文書 堤 将太

上演台本 (書き起こし) 迫田 久美子

七、編集

本書の編集は、事務局がおこなった。

凡例

一、報告書の構成は、章・節・項に分け、以下は適宜追加した。

一、本文中の図・表・写真、節ごとに番号を付した。

一、文の記述は、常用漢字・現代仮名づかいを使用した。固有名詞・専門用語・史料の引用部分などについては、一部例外とした。

一、年号は、西暦を基本とし、適宜和暦を()内に付した。

一、執筆にあたり、参照した参考文献・史料名等は、()内に略して記載し、詳細は、各節末に載せた。

一、難解な用語や、特殊な読み方をする用語については、適宜、ルビを付した。

一、本書で引用・参照した新聞記事は、記載がない限り全て本委員会の

安田宗生委員長よりご教示いただいたものである。なお、本文中で引用した新聞記事については、『九州日日新聞』は『九日』、『九州新聞』は『九州』、『熊本新聞』は『熊本』、『熊本日日新聞』は『熊日』と新聞名を略記した。

一、本書に掲載した二〇二二・二〇二三年度の風鎮祭における、にわかおよび造り物の写真は、撮影者の記載がない限り、間文男委員が撮影したものである。撮影者が異なる場合は、写真キャプションに撮影者を()で記載した。

史料凡例

一、合名会社 豊前屋本店が保管する古文書については、「横町祭礼文書」として明記し、本文中は、「横町文書」と略記した。

一、収録史料は番号、史料名(もしくは見出し名)、本文の順に収録した。

一、史料の収録にあたり、原則的に原本の表示に従ったが、一部次のように表記を改めた。

(一) 原史料の体裁に従うこととしたが、余白等の体裁によって一部変更した。

(二) 字体は常用漢字を原則としたが、一部の漢字については原文どおりに表記した。

(三) 変体仮名は仮名に改めた。但し、「者」「茂」「而」「江」・「之」「与」は漢字で表記した。

(四) 合字の「ㄅ」(より)、「ㄆ」(しめ)、「ㄇ」(して) はそのまま表記した。

(五) 反復記号については、漢字は「々」、ひら仮名は「々」、カタ仮名は「々」を用い、二字は「くく」を用いた。

(六) 史料には、適宜読点「、」と並列点「・」を付した。

(七) 判読できない文字は、文字数がわかるものは■で、文字数が不明な場合は「」で示した。

(八) 抹消・見せ消し・誤字は、文字が判読できるものについては訂正文字を記した。判読できないものについては、■で示した。

(九) 収録にあたって文意の通らない文字には(ママ)と左傍に表記した。

(十) 近代以降の史料に記載されている個人名については、原文通りに表記したが、一部は、編集委員会によって省略した。

史料目録凡例

一、本目録は、「横町祭礼関係文書」(以下、横町文書)から「風鎮祭」、「にわか」、「造物」、「仮装行列」、「手踊」などの『風鎮祭』に関連するものを抽出した上で特に重要なものを目録に示した。

一、収録史料は編年で配列し、作成年次、史料名、内容、作成者(差出人)、宛先、備考の順に収録し、一部の冊子史料については中に記載されている記事を記載年次、見出し、内容、備考の順に情報を加えた。

一、作成年次もしくは記載年次を欠く史料でも内容から年代を明らかにできるものは「」で示し、作成時期を推定できるものは、凡その時期を記した。

一、史料名は原題を尊重し、内容などから仮題として付けたものは、「」内に表記した。また、内容を補記した場合は「()」を用いた。

一、特記事項または一括情報や整理時に付けた番号などは備考にまとめて記した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

第Ⅰ部 調査編

総論

第一章 調査対象の概要

第一節 高森町の概要

第二節 風鎮祭の概要

第二章 高森のにわか の現況

第一節 町内の概要

第二節 にわかを担う組織と運営

第三節 にわか の稽古及び準備

第四節 祭礼当日の状況

第三章 造り物

第一節 二〇二二年度の各造り物の概要

第二節 「風鎮祭造り物」の審査の流れ

第三節 「造りもん大集合」と「山引き」の流れ

第四章 高森阿蘇神社による神事

第一節 五穀豊穰祈願祭

第二節 節刀渡し

第Ⅱ部 論考編

第一章 高森のにわかの特徴

第一節 高森のにわか の芸態の特徴

第二節 高森のにわか の歴史の変遷

第三節 演者組織「向上会」

第四節 高森のにわか の継承にむけて

第二章 熊本県内のにわかの特徴と分布

第一節 アンケート調査の結果から

第二節 県内各地のにわか

第三節 調査から見えるのにわか の姿

第四節 高森のにわか の位置

第三章 造り物

第一節 記録に見る風鎮祭の「造り物」

第二節 風鎮祭の「造り物」今昔―聞き取り調査を加えて―

第三節 風鎮祭における「造り物」の役割

47

11

1

20

116

93

75

69

第四節 熊本県における「造り物」と風鎮祭の「造り物」

第四章 風鎮祭における仮装行列とにわか 135

第一節 通し物―仮装行列とは―

第二節 仮装行列の歴史の変遷―内容および組織―

第三節 にわかと仮装行列の関連性

史料 横町祭礼関係文書 153

解題

翻刻

目録

上演台本 181

二〇二二年度 風鎮祭にわかコンクール優勝作品

下町向上会 『嗚呼、熱闘甲子園』

調査協力者

あとがき

第I部

調査編

風鎮祭は、にぎやかな三味線、太鼓の囃子に乗って祭りの開始を告げる目覚し、各町内が出陳する造り物とにわか、及び女性や子供の手踊り、仮装行列などで構成されていた。現在は仮装行列など一部の出し物が行われなくなっている。

この祭りは基本的に造り物、にわか、仮装行列が重要な役割を果たしている。それについては各章で明らかにした。従って、本報告書では、祭りの行事がどのように催されているかを簡単に触れ、国選択のにわかについてその上演過程（台本作成・稽古・上演方法）、運営組織について調査し、いくつかの台本を掲載してその特徴を析出することにした。

また、風鎮祭同様、造り物とにわかを伴う祭りが熊本県内各地に存在している。そのため、高森以外の地域に見られる、あるいはかつて見られたにわかについても概観し、高森のにわかのかの位置づけを試みた。高森と共通する構成要素を持つ他地域の祭りと比較するため、にわか以外の仮装行列、造り物に関しても詳述した。これによって、高森のにわかを持つ意味が明らかになると考えた。

風鎮祭に関する戦前の資料も乏しく不明な点が多い。それで新聞記事でそれを補った。風鎮祭は近世に始められた祭りであり、「横町文書」にも近世末期の記録が残されている。それで「横町文書」も調査対象として、その一部を収録した。ただ、「横町文書」以外の史（資）料の調査は出来なかった。今後の課題である。

本論では、風鎮祭全体の行事日程にそって各行事について補足的説明をする。

第一節 祭りの名称と起源伝承

風鎮祭の名称 「横町文書」では明治一五年（一八八二）が初出で、それ以前は「俄山引」と記されている。新聞に風鎮祭として紹介されるのは、明治三四年（一九〇一）九月八日の『九日』記事で「毎年旧七月十六日より十八日まで三日間風鎮祭と称して夜間は手踊り昼間は諸種の作り物三味太鼓其他囃しを入れて町内を担ぎ廻るの習慣」が初出で、それ以前の記事は「俄山引き」と書かれている。昭和九年（一九三三）八月九日の『九州新聞』に寄稿した高森町在住の井上空山が「風鎮祭と云ふも却って土地の人には通じかねるほどコビリ着いた名前は山引である」と書いている通り、地元では「山引き」という名称が広く用いられていた。風鎮祭開催の新聞広告は昭和二五年（一九五〇）から毎年掲載されているが、「風鎮祭」に「やまひき」とルビをふっている。それが、風鎮祭という名称が次第に定着していくことで「山引き」が祭りの余興（造り物の曳き廻し）と考えられるようになったと思われる。

起源伝承 風鎮祭の開始年を新聞記事から拾うと、元禄年間（一六八八〜一七〇四）から文政年間（一八一八〜三二）まで諸説ある。戦前は文化、文政年間（一八〇四〜三二）とする記事が、戦後は宝永、宝暦（二七〇四〜六四）とする記事が多い。戦後は開始年を戦前より古い時代と報じている。

このように開始年は年によって異なっているが、昭和二五年に定められた「風鎮祭規約」では第一条で、風鎮祭は「文政五年（一八二二）、矢村社（現高森阿蘇神社）に風鎮めの行為」として開始されたとしている。その根拠は不明である。

昭和二五年から毎年新聞に掲載している風鎮祭開催広告を見ると、三四年までは開始年に関する記述はなく、三五年からは「風鎮祭規約」にあるように、宝永年間（一七〇四〜六四年）としている。それが同四五年から宝暦二年（一七五二）開始と変更されている。いかなる経緯で変更されたのかは不明であるが、『高森町史』も宝暦二年説を採っており、現在では風鎮祭の紹介するさまざまな媒体で最も多く採用されている。

祭りがどのような経緯で始まったのかについては、高森の町方の商家が在方の人々へ感謝の意を表して始められたとされる。そのため、高森阿蘇神社で二百十日の風よけと五穀豊穰を祈願する神事を執行し、其の後にさまざまな催しが始まったという。

商家が農家への感謝の意を表して始められたという伝承は、宇土市の地藏祭り（八月二三、四日）、阿蘇郡白水村吉田新町の鎮火祭（八月二四日）でも聞くことが出来る。上益城郡矢部町のなどで八朔祭り（九月一、二日）は、宝暦七年（一七五七）、矢部郷では不作が続いたことを案じて藩が豊作祈願祭を行うよう総庄屋に命じて開始され、豊年踊りを演じたされる。その後、明和年間（一七六四〜七二）ごろ現在の形態になったと伝えられる。造り物などの催し物は商家が農家の人々への感謝して始めたといわれる。

祭りの実施日 風鎮祭の特色の一つは盆行事に引き続き行われる点に

ある。近世藩内では川尻町の代表されるような盆後踊りが行われていた。玉名市では盆にわかを演じていたが西南戦争後は熊本招魂祭で演じるようになったと伝承されている。

祭日変更 祭りは近世末期から例年旧暦七月一六、一七、一八の三日間執行されていた。それが大正一三年（一九二二）に、七月一七、一八の二日間に短縮された。祭日が短縮された理由は不明であるが、この当時農村が疲弊し、県下各町村に民風作興委員会が組織され、儉約奨励の普及徹底に努めていた時期で小作争議も頻発していた。

さらに、祭日が二日に短縮される前年、阿蘇地方は阿蘇山の降灰により農作物が被害を受け、その上早魃に見舞われ、高森町では、八月に町内鎮座の各神社、及び含蔵寺においても数日間にわたり、雨乞い祈願が実施された。火山灰による被害は、翌年にも続き、阿蘇地方は、同郡野尻村（昭和三二年高森町に編入^①）の青年は「火山灰の被害甚だしく収穫激減農家収入皆無：農家の青年処女が都会へ都会へと出かけるのは無理ならぬことです」（七月一四日『九州』）と述べているように、阿蘇南郷谷全体が極度の困窮状態に陥っていた年である。祭日の短縮は農家収入の減少は購買力の低下を招き、商家にとっても無関心ではいられないことであった。かかる状況下で決定されたものと考えられる。

祭りが三日間であった時代と二日に短縮された時代とは当然のことながら、行事日程に変更が生じている。

大正二年（一九一三）八月二二日の『九日』記事では、「昼間造り物町内を練り歩き、夜間は数組の屋台より『にわか踊り』とあり、昼間は造り物が町中を練り歩き、夜間はにわか演じられていた。

昭和八年（一九三三）九月九日の『九州』では、「昔は旧暦七月一六

日の朝から『通しもの』をやって一七日まで続き、一七日と一八日の夜『二輪加』をしたものだが、この頃では一七日と一八日になってゐる、一八日が「山引」の時刻である」と書かれている。一七日に仮装行列や手踊りなどが町を練り、夜間ににわか演じられていたようである。

祭りは日中戦争が勃発した昭和一四年（一九三九）から同二〇年（一九四五）まで、時局柄自粛、及び物資不足という理由で中止された²⁾。

祭りが復活するのは戦後の昭和二一年（一九四六）からである。祭りは従来通り旧暦で実施していたが、昭和三三年（一九五八）から旧暦より一月遅れの新暦八月一七、一八の二日間執行されるようになり、現在は一七、一八日に最も近い金、土曜日に実施している。

第二節 行事内容

祭りの日程、行事内容は固定したものと年によって変わってきているものがある（第一章第二節を参照）。

目覚し 祭り開始を知らせる午前零時からの行事であるが、「目覚し」という名称が記事で確認出来るのは昭和二七年（一九五二）の「前夜祭では目覚し行事」（九月八日）からである。向上会員によってこの行事が担われたことがはつきりするのには昭和二八年の「四町向上会の目覚し行事」からである。それ以前は必ずしも向上会員だけで行われていなかった。二八年以降、現在に至るまで、高張提灯を先頭に向上会青年たちによる目覚し行事が継続している。

この行事を目覚しという以前は、特に名称はなかったようで、大正六年（一九一七）「払曉前より各町の『にわか』手踊り」（八月一日）『九

日』、昭和二年（一九二七）「十四日は未明から囃子物を打ち鳴らし」（八月一日）『九日』と報じられ、午前零時開始とも報じられていない。古くは開始時刻は決まっていなかったと思われる。午前零時開始と書かれるのは昭和二五年（一九五〇）からである。

高森同様、未明に三味線、太鼓の囃子に乗って町を練り歩き、祭りの開始を告げる行事は旧阿蘇郡蘇陽町馬見原の火伏地蔵祭り、吉田新町の鎮火祭、矢部町の八朔祭りでも見られる。阿蘇町阿蘇神社の秋季大祭（田実神事）でも行われていた。

高森、馬見原では「目覚し」、吉田新町、阿蘇町、矢部町では「朝起こし」という。矢部町では町方の人が付近農家に祭りの案内するため行い、農家ではそれから田を見回り豊作を祈願した後、祭り見物に出掛けたものという。

この行事を目覚しと称したことがはつきりするのには、大正一五年（一九二六）の馬見原火伏地蔵祭りに関する記事で、「徹宵翌早朝目覚める奇天烈なる考案…未だ暗き中に騒ぎ出す習慣…目覚ましと名づけ」（九月三日）『九日』とある。このことから、目覚しという名称は馬見原で命名されたのかも知れない。

五穀豊穰祈願祭 現行の五穀豊穰祈願祭については第四章第一節の通りである。祈願祭が神社主催であることを示す根拠となった史料は同宮司岩下八束の「昭和三四年八月風鎮祭に就いて」で、宝暦四年（一七五四）、「神事相済まざるに余興相始め候不都合に付使差立差止候事」とあり、風鎮祭開始時から神社祭祀として行われていたとしている。

しかし、明治期の新聞記事には神社での神事に関する記述は皆無で、「横町文書」にも記載がない。昭和八年（一九三三）の潮倭文、同九年

(一九三四)の井上空山の文でも神社での祈願祭について一言も触れてない。

神社が祭りに関与したことが新聞ではつきりするのは、大正一〇年(一九二一)八月二五日記事で、「午後三時に新設高森阿蘇神社遷拝所で岩下社掌以下各青年分会長参列の上修祓の式あり」とあるのが初出で、各町内のにわか盛んに演じられている最中に神事が執行されている。その翌年から神社で神事が実施されたことが報じられるようになる。ただ、開始日時は大正一二年(一九二二)は一八日午前十時、同一四年(一九二五)は一七日午前八時、昭和一一年(一九三六)は一八日午後一時、二九年(一九五四)以降は一八日午前八時に固定され、その後同日午前十一時に執行されている。

なお、神社での神事について、戦前の記事では単に神社で「神事」、「祭典」が執行されたとのみ報じられている。二五年(一九五〇)の「風鎮祭規約」では、第一条で「風鎮めの神事」と規定し、風を鎮め豊作祈願のためという記事は昭和三一年(一九五六)からで、五穀豊穰祈願祭と報じられるのは昭和三五年(一九六〇)からである。

にわか 現行のにわかについては、第Ⅱ部第一章の通りである。そこで指摘している通り、高森のにわかには高森方言で、舞台上で演じられることである。方言で演じられる点はこのにわかにも共通する。向上会員も方言で演じることが特に重要と意識していることは平成元年からの広告に、年番向上会長名で「情報化社会の世の中で忘れさられようとしている方言が、この『にわか』の中にはまだしつかり生きつづけている。方言は言葉の文化であると思う。標準語の波におしよせられた今日では、いわゆるださいと言われるかも知れない。しかしその一つ一つの

言葉は実に奥深い意味のすばらしいものがある」とあることから明らかにである。

舞台の上で演じることが高森のにわかの特徴といえることができる。ただ、第Ⅱ部第二章で紹介されている通り、県内でにわかを演じる場合は、熊本招魂祭(熊本市)、玉名市高瀬、天草市など各地の招魂祭、加藤・代継神社(熊本市)、菊池神社(菊池市)などの神社大祭、山鹿温泉祭(山鹿市)、日奈久丑の湯祭り(八代市)など必ず仮設舞台の上で演じられている。多数のにわか組が出演していた熊本、玉名の招魂祭では各町内に仮設舞台が設置されていた。

高森では現在では中央の仮設舞台と移動(車上)舞台で各町内で演じているが、古くは他地域と同様、仮設舞台を各所に配置していたことは、明治三九年(一九〇六)「各町共予て構造したる舞台(後略)」(『九日』九月一三日)、昭和三年(一九二八)「到るところに設けられたる舞台には各種の俄手踊(後略)」(『九州』九月三日)、昭和九年(一九三四)「三町各目貫ぎの場所に設けた舞台(中略)俄芝居が開幕」(『九州』八月九日)とあることから明らかである。移動舞台がいつごろから見られるようになったかは明らかではないが、大正二年(一九一三)の記事で「夜間は数組の屋台より俄踊りをなし」(八月二二日『九日』)とあり、同八年(一九一九)に「数台の山車(中略)手踊や俄踊」(九月一〇日『九州』)。昭和二年(一九二七)は「各町より屋台をくり出し俄手踊り等」(八月一六日『九日』)とあり、大正期以降は、にわか仮設舞台と移動舞台とで演じられるようになったと思われる。戦後は、昭和二六年(一九二六)に「青年が押し出す四ツの移動舞台」(『熊日』八月二二日)とあり、仮設舞台は「町内の中央に設けられた仮設舞台」(昭和三

〇年（一九五五）九月四日『熊日』一ヶ所となり、各町内の仮設舞台を廃して移動舞台のみで各町内を廻って演じるようになった。

県内のにわかすがすべて舞台上で演じられていたかというところではなく、葦北郡芦北町の嫁入り時や各種の祝いの席で座敷で演じられる即興的なものや宇土郡網田、菊池郡七城町加恵（旧加茂川村）の道楽のように歌舞伎の演目に振付をして路上で演じられるにわかも存在していた。

高森でも出し物については、古くは歌舞伎を題材にしたものも演じられていた。文久三年（一八六三）の「横町文書」に、「盆踊連面付忠臣蔵七段目、近江源氏五段目役者老人竹迫関十郎」とあり、慶応四年（一八六八）に「俄弁に踊目録忠臣蔵五段目近江源氏六段目一の谷嗽軍記三段目」の演目が挙げられている。年不明ではあるが「盆踊之面付」と書かれた記事がある。

この「横町文書」の記事は、風鎮祭のにわか盆踊りのなかで演じられていたことを示唆しているように思える。七城町加恵では、歌舞伎を題材にし、その振付を考えて芝居に仕立て、その周囲で盆踊りをする。しかも、踊り手は面を付ける。高森の場合も踊り手は面を付けていた可能性が高い。

高森では演じ手は原則男性である。高瀬や伊倉（玉名市）のにわかも同様である。女性によるにわか酒の席での即興的なもの、雨乞い、或いは地搦きなどの作業の場で踊られるものが多かったようである。にわか踊りは男性は女装、女性は男装原則で、明治二十一年（一八八八）の第五高等中学校校舎の地搦きには、男子は女装、女子は洋服を着て、髻を生やし「百鬼夜行の図と仮装舞会の画をこねまぜたよふな奇観」（『紫

溟』三月一三日）であったという。

しかし、新聞には、八代市八代宮例祭では女性が趣向を凝らしたにわかを演じてことがあり、合志市合生では婦人会、処女会が一夜作りのにわか手踊り、玉名郡和水町では婦人会員のにわか数番上演されたところ、かつては女性だけで筋書きも作って演じるにわかも県下各地で行われていたと思われる。

仮装行列 大正一二年（一九二三）「当日の呼物の一たる余興の仮装行列」（八月二二日『九州』）とあるように、仮装行列は、風鎮祭の呼物の一つであった。

この仮装行列は『通しもの』は行列行進であって普通一年間の重要な事件をモデルとして取材する。これを三町で競争的に仮装するのである（昭和八年（一九三三）九月九日『九州』）。また、阿蘇全体の話題も仮装の対象となっており、例えば大正一五年（一九二六）、阿蘇を国立公園にするための調査が行われた年は「上町『大阿蘇国立公園案内』、下町『阿蘇博物館の一部』、横町『四季の色々』等の仮装行列」（八月二七日『九州』）が出ている。これら風鎮祭における仮装行列の詳細は第四章第一節の通りである。

仮装行列を祭礼の呼び物としていた祭りは多く、四月の山鹿市温泉祭、天草市牛深町の港まつり、八代市日奈久（旧葦北郡）の温泉祭、九月の鹿本郡来民町の招魂祭、一月の天草市本渡町恵比須祭りなどがあり、仮装行列コンクールは多くの祭りで採用されている。これらの仮装行列も高森同様、地域の出来事、歴史に由来するものを題材としている例が多く、仮装行列といいながら、山鹿の温泉祭のように竜宮を模した造り物を山車に載せ、その前で浦島太郎の仮装をした人物が登場する。

このように行列に造り物を伴う事例は多く見られた。

なお、商工会が主催となっている県下の祭りに商工会員が仮装する事例は多いが、役場職員が仮装行列を行う祭りは馬見原地蔵祭り、吉田新町鎮火祭、阿蘇市内牧温泉祭、矢部町八朔祭りでも昭和二十七年（一九五二）ごろから行われている。

手踊り かつての風鎮祭では、にわかや仮装行列以外に手踊りも間断なく町内を廻った。この手踊りは昭和二十七年（一九五二）に「山引音頭」、四一年（一九六六）に「高森音頭」、四六年（一九七一）に「新高森音頭」が作られるようになって伝統的な手踊りは次第に姿を消した。

この手踊りは盆踊りであったと考えられる。大正一〇年（一九二一）の記事に「老若男女が打寄り盆踊りをなし」（『九州』八月十三日）、一四年（一九二五）に「農家の男女が集まって夜を徹して盆踊りをなす」（『九州』八月二四）とあり、この盆踊りは、町民総出の盆踊りとして昭和四十三年（一九六八）まで催されている。戦前の記事から、踊りは在方が担っていたと思われる。

風鎮太鼓 風鎮太鼓の記事が出るのは昭和四七年（一九七二）からである。戦前の新聞には太鼓が叩かれたという記事がない。昭和四〇年代に入って作られたと思われる。風鎮太鼓は町内各所で演じられ、神社での神事にも奉納されていた。

造り物 現在は車で移動しているが、本来は青年たちが担いで練り歩くものであった。明治三四年（一九〇一）には「昼間は諸種の作り物をして三味太鼓其他囃しを入れて町内を担ぎ廻るの習慣：各町何れも三十四名の多き造り物なれば近郷より数百加勢人あるに拘らず人不足を訴るを以て牛車又馬車に登載」（九月十四日『九日』）とあり、昭和八年（一

九三三）にも「造り物は：夕陽西山に没する火ともし頃：各町揃ひの裃纏姿の青年によつて担ぎ出される」（八月九日『九州』）と報じられていることから、少なくともこの年までは担いで移動するのが原則であった。

「横町文書」の昭和二五年記録にも「かつぎ廻る」とあり、戦後もしばらくは担いで廻っていたと思われる。

この造り物を引き廻すことを「山引き」と呼ぶことは前述の通りであるが、「山引き」という表現は吉田新町でも使われている。この「山引き」について、昭和八年（一九三三）に潮倭文が新聞に寄稿した文によれば、『山引』は山を引くから『山引』と云ふ、この『山』を『作り物』の最後に付けて引くのである」とし、昭和六年（一九三一）の「山引き」を例に挙げている。それによれば、「▲下町組Ⅱデンキーあやめーまつーえびーかぶとーふばこー雲に龍ーぶどうー笠に尺八ー蝶ーたかー山」▲横町組Ⅱがまーばせうーぎめーかたつむりー梅に鶯ーもみぢに鹿ーいねーぎめー松竹梅ーがまーライオンーかめー山▲上町組Ⅱ龍ー孔雀ーとんぼー月にがんーえびーはちーぶどうーひうそーいもりー蝶ーにはとりーくもー山」（九月九日『九州』）の順で引き廻したという。この「山」は屋台の一種であろうとし、昔は仮装した子供を乗せたとして記している。現存する「山」は高さ約二・七メートル、幅二・三メートルのもので、担ぐのは無理で古くから引くものであったと思われる。

造り物の最後に大きな「山」が付随していたことは、昭和八年（一九三三）の「横町文書」に「大山組立」とあり、同十年（一九三五）には「大山道具及び踊り屋台の材料を倶楽部前に運搬」とあることからはっきりしている。この「大山」は昭和二十一年（一九四六）の風鎮祭記録で

は「大山各町据置」とあり、造り物と一緒に引き廻さず、町内に飾るだけで済ませたと思われる。注目すべきはこの山に化粧した子供を乗せていたということである。

各町（現在は向上会）が交代で祭りを主催するのは熊本市から県北に広く広がる座祭りと同じ祭り運営の方法である。だとすれば、山は祭りを象徴するもので、山に乗った子供は荒尾市野原八幡宮祭礼の節頭行事で馬に乗る稚児（地面に足をつけてはいけない）と同じ役割を果たしていたのかも知れない。山が出ない限り祭りは始められないのである。風鎮祭を古くは「山引き」といったのは単に山を引き廻したからでなく、祭り開始を意味する表現であったとも考えられる。

造り物は県内各地で、さまざまな場面で盛んに作られていた。県内で見られた造り物は、作品を店舗の一角や街路に固定して展示する宇土、御船、熊本市内などの地藏祭りと、製作した地区で展示した後、担いだり車などに乗せて町内を引き廻す、馬見原、吉田新町、矢部などに分けることができる。高森や馬見原などは大勢で担いでいたが、天草市の天草招魂祭ではワラやタバコの葉などで造った人形を青年が手にして「通せ、通せ」の掛声で町中を練り歩く通しもんが呼び物であった。上天草市大矢野の上八幡宮でも神幸に人形を捧持する者が供奉している。

造り物コンクール 造り物審査が実施されたのは大正九年（一九二〇）からで、一等から三等まで賞品が贈られた（八月二十七日『九日』）。

翌年からは予想投票が実施され、町中央部に臨時に設けられた神社遙拝所で風鎮祭御祈禱札を受けた観客に投票用紙一枚を進呈することから始まった（八月一三日『九州』）。その後、町内の商店で買い物をした人に投票用紙を渡すようになり、祭りの人気行事となった。造り物予想投票

がいつ終わったのかは明確にし得ないが、昭和二十七年（一九五二）までは実施されている（八月二一日『熊日』）。

造り物を審査して等級を決めることは宇土市、益城町、宮原町などの地藏祭りや、矢部の八朔祭り、城南町（現熊本市）の頓写会などでも実施しているが、高森は造り物審査と予想投票を組み合わせたのが特徴で、造り物コンクールの実施も他地域に先駆けて実施している。

高森の造り物審査の採点基準（第三章第二節参照）は、造り物コンクールを行っている県内各地の採点基準と共通する点が多いが、作品の全体バランスが重視されるが、以前は「大きい事を良いとするが」とあるように出来るだけ大きな作品がより評価の対象となっていた。大きいことが精巧な作品に勝るということは矢部の八朔祭りも同様である。

この造り物は、それが町に電気が普及し、それに伴って狭い道に電柱が立ち、電線が張り巡らされ、これが造り物の大型化の障碍の一因となったと言われる。昭和五二年（一九七七）の「審査規定」では高さ四・五メートル以下、五七年には三・五メートル以下と高さ制限が定められている。それから、大型の作品は制作経費がかさむこともあって次第に小型化したと思われる。

節刀渡し 現在は中央四つ角で年番引継ぎの節刀渡し行事が高森阿蘇神社宮司の立ち合いのもとに行われている。これは次年度の祭り執行を担う向上会引継ぎの儀式である（第四章第二節参照）。

四つ角で実施される以前は高森阿蘇神社で行われていたようで、元町教育長で『高森町史』の編纂に携わった今村俊男は、「節頭」渡しと表記した上で、古くは中央四つ角ではなく、神社もしくは付近の田んぼで行われていたと述べている。

節刀渡しの儀が新聞記事に掲載されるのはきわめて遅く、昭和三〇年（一九五五）「午後五時から神事と節刀渡し行事」（九月五日）が初出で、この年以降、毎年午後六時頃町中央四つ角での神事と節刀渡しが報じられるようになる。

この節刀渡りに神社がいつから関与していたかどうかは不明である。それは昭和八年（一九三三）『山引』が終ると向上会員は街の中心、辻に於て会集する。風鎮祭が無事終了したことを祝福し、手打して年番を次の組に譲り万歳三唱して別れる」（九月一〇日『九州』）とあり、翌九年の記事でも「三町の青年：町内の中央に揃ひの提灯をふりかざして集合、長老の音頭に『ウチマシヨウ』の手打で：解散」（八月九日『九州』）とあり、節刀渡しという表現も神社の関与をうかがわせる記述もない。「横町文書」にも記述がない。

祭りの主催者 「横町文書」から近世末期においては恐らく町部の商店と青年組織が中心となって祭りを運営していたと思われる。これを新聞記事から見ると、大正四年（一九一五）に「同地青年会は（略）青年会事務所にて幹部の協議会を開き準備に着手」（『九日』八月二〇日）、造り物コンクールは商工会主催で行われていたことが分かる。同一年（一九二二）には商工会正副会長以下評議員と青年団首脳部が会合し「各種協議を遂げ本年は一層盛大に行うに決し」（八月三十一日『九州』）とあり、一三年（一九二四）には祭りの中核を担うのは「商工会長山村信吉、副会長馬原泰平、青年会第三分会長河野実、第四分会長岩田勘次郎、第五分会長後藤末久」（八月二二日『九州』）と報じられている。

祭りの実動は青年組織が担うという形態は県下の祭りに共通する点である。ただ、大正一五年（一九二六）に組織された向上会が次第に祭り

の中核を担うようになった。通常の青年団の中から向上会という選ばれた青年組織を設けて祭りを運営するようになった（第Ⅱ部第一章第二節参照）。これが県内他地域の祭り実行組織と異なる点である。

昭和二年（一九二七）には祭りの「主体となる商工会や向上会」とあり、造り物が向上会員によって担がれていたことが記されている。同一〇年（一九三五）にも向上会員により山引きが行われたとある。

昭和六年（一九三一）には祭りが商工会及び各町内青年団で行われ、にわかには向上会が中心と書かれている。戦前においては商工会、青年団及び向上会によって企画運営されていたと思われる。

戦前には向上会が目覚し、山引き及びにわかに関与していた。

向上会がより実質的に祭りを主導していくようになったのは戦後と思われる。昭和五年（一九五〇）の風鎮祭の広告には、主催が町商工会と連合向上会となっていることから窺える。

毎年新聞に掲載される風鎮祭開催広告と祭りの記事から昭和二七年（一九五二）は、記事では商工会が主催を町に移管するよう要望したが町は同意せず財政的援助に留めたとあるが、広告では町・商工会の共催となっている。けれども、昭和二八〜三〇年は商工会主催で町との共催とはなっていない。その後、三一〜五三年までは町・商工会の共催であるが、五八、九年は不明（熊本日日新聞社後援とのみ報じる）。六〇年は商工会・連合向上会共催、六三年以降は町、町商工会、向上会を核にして町内の各種団体などから成る風鎮祭委員会主催となり現在に至っている。

おわりに

風鎮祭は基本的に目覚し、仮装行列（現在は行われなくなった）、手踊り（盆踊り）、造り物、にわかから構成されており、それに年によってさまざまな催し物が付随して行われている。目覚し、仮装行列、造り物、にわかで構成される祭りの形態は馬見原、吉田新町と共通性が高い。ただ、留意すべきは阿蘇本社（阿蘇市宮地鎮座）との関係である。阿蘇本社祭典でも未明に祭りを知らせる行事があり、明治初期には造り物が作られ、娘手踊りも行われていた。風鎮祭と類似する祭りが挙行されている白水、馬見原、矢部のいずれもが中世阿蘇氏の支配領域であった。

最後に、近代以降の風鎮祭の催し物の変化についてふれておきたい。風鎮祭は近世末期において南郷で知られた祭りであった、明治末期には近隣町村だけでなく、隣県の宮崎、大分からの見物客を集める祭りになった。大正期には県内の風祭りの代名詞になり、南郷谷最大の夏祭りと称されるまでになった。その背景には風鎮祭を町振興の一つにしようとした商家の人達の働きかけがあった。

明治末期に町の一部の商家が実業同志会を組織し、大正八年会員の範囲を拡大して商工会を組織し、二月に創立祝賀会を催している。会の活動として「年中行事の主催又は補助後援」を行うことを定めている（昭和一五年（一九四〇）七月七日『九日』）。これを契機に風鎮祭に商工会が積極的に主たる役割を果たすようになったと思われる。

その後、大正五年（一九一六）十一月一日に豊肥本線肥後大津立野間の鉄道開通し、肥後大津立野間が馬車に較べて約三時間短縮され、同

区間の運賃も格段に安くなった³⁾。これにより、遠方からの集客が可能になった。さらに、大正九年（一九二〇）に高森を基点とする南郷自動車株式会社が設立され八月八日より高森立野間のバス運行を開始した⁴⁾。南郷自動車は大正一三年（一九二四）九月一日から立野駅発着の全列車に接続するバス運行を開始、翌年（一九二五）一〇月には野尻村との運行を開始した。そして、高森線の開通が目前に迫った大正一四年（一九二五）から風鎮祭を、「肥後の三馬鹿騒ぎ」というキャッチフレーズで宣伝するようになる。

南郷自動車は大正一二年（一九二三）に風鎮祭開催日に下田間に料金三割引の臨時増発、翌年は立野間、長陽間にそれぞれに臨時増発、特に長陽間は三割引で運行している。高森線が開通した昭和三年（一九二八）には臨時列車を出すよう鉄道当局と交渉して実現させた。

交通網の整備と呼応して造り物コンクールを実施し、造り物の技術向上を図り、その精巧さを呼び物とし、併せて街中の商店で買い物をした人に造り物予想投票券を渡すことが行われるようになった。予想当選者を見ると高森町、草部、色見、野尻以外に、郡内の白水・久木野・宮地・坂梨、郡外の熊本市、大分、宮崎に及んでいる。

今一つ催し物に変化をもたらしたのは昭和三〇年（一九五五）の町村合併である。この年から旧高森町の祭りから新高森町全体（町民総参加型）の祭りとすべく各種の催しを実施されるようになったと思われる。のど自慢、町民総踊り、風鎮太鼓、風鎮太鼓に婦人会員の振付、子供風鎮太鼓、樽神輿、風鎮サンバ、高森中学校吹奏楽、バンド演奏などが企画され、旧高森町以外の地域から参加を促す企画が考えられている。今後、祭りの中核をなす目覚し・造り物・にわかを堅持しつつ観光客誘

致と全町民参加の祭りとするのが試みられていくものと思われる。

註

(1) 『高森町史』四六九頁では「戦前戦後通じ一度の欠典もなく開催された」とあるが、昭和一四年より戦後二〇年までは、神社で神事のみ執行され、造り物やにわかなどの催しは中止されている。

(2) 『高森町史』四七〇頁では、昭和三〇年八月に旧高森町と草部・色見・野尻村が合併とあるが、同年の合併は旧高森町と草部・色見の二村で、四月一日発足である。八月としたのは恐らく合併祝賀式典が風鎮祭に併せて実施されたことによると思われる。なお、野尻村が高森町へ編入されたのは三二年八月一日である。

(3) 豊肥本線汽車開通以前の交通機関は馬車だけであった。肥後大津から阿蘇に向かう馬車数は一日二五〜三〇台が稼働していたが大半は戸下、栃木温泉行で、高森、宮地に向かう馬車は五ないし一〇台に過ぎなかったという。馬車の料金は、肥後大津戸下間三十一銭、栃木間三六銭であったのに対し、汽車は肥後大津立野間一等一三銭、二等八銭、三等四銭。熊本立野間一等六五銭、二等三九銭、三等二五銭であった。立野から高森までは馬車を利用せねばならないが、その馬車賃を加えてもかなり安い料金で済むようになった。

(4) 発足時は、一四名乗りのバスで立野高森間（二台）、立野吉田新町間（二台）は、午前午後それぞれ二往復、立野栃木間（一台、複数回）の運行であった。

第一章 調査対象の概要

第一節 高森町の概要

一 地理的環境

高森町は、北は阿蘇市、南は山都町、西は南阿蘇村、北東部に大分県竹田市、南東部は宮崎県西臼杵郡高千穂町に接し、熊本県の東端に位置する。本町域は、南郷谷東部と外輪山上から構成され、面積一七五キロ平方メートルである。人口は令和五年六月現在、五九九二人、二九二八世帯である。人口の大部分は、南郷谷のカルデラ床地域に集中し、行政、商工観光の中心的機能が所在する。

高森町の町名の由来は、阿蘇大神健甕龍命が住居を定めるために阿蘇山上より矢を放ち、その矢の落ちたところを住居に定めたといわれ、その付近を「御矢村」といって高森発祥の地と伝えられている。「高森」の名もこれから端を発し、高は高皇産霊、高御座などの尊称言で、森は、「杜」で祖先神霊の鎮まる浄地という意味で、「高貴な人が住居を定められたところ」からといわれている。

本町は、昭和三〇年（一九五五）に阿蘇郡高森町、草部村、色見村が合併し、昭和三二年（一九五七）に阿蘇郡野尻村が編入合併し、現在の高森町が誕生している。



図1 高森町の位置

町の特徴として、南阿蘇のなかでも奥座敷と呼ばれ、観光業と農林業が中心である。とくに農業は稲作と畜産に加え、高冷地野菜などの生産が盛んである。

町のシンボルは、阿蘇五岳のひとつである、根子岳がある。標高は一四〇八メートルで、尾根は浸食により鋸歯状を呈する。中央には天狗岩がそびえ、勇壮な景観を見せてくれる。

交通網は、平成二八年（二〇一六）四月に発生した熊本地震で崩落した橋の復旧工事をすすめ、令和三年（二〇二一）

に国道三二五号線の新たな阿蘇大橋ルートが開通した。

鉄道網は南阿蘇村の立野駅から終点の高森駅をつなぐ南阿蘇鉄道高森線（以下高森線）がある。高森線も、熊本地震で被害を受け、全線で不通となったが、令和四年（二〇二二）までに復旧工事をすすめ、令和五年（二〇二三）七月に全線開通した。今回の開通により、JR豊肥線の肥後大津駅まで乗り入れることになった。

このように鉄道ルート、国道ルートともに復旧がすすみ、熊本市域への利便性の向上、観光客の増加が期待される。

地形・地質 阿蘇の火山活動は、今から二七万年前に始まったといわれており、大きく、二七万年前、一四万年前、一二万年前、九万年前の四回の噴火があったといわれている。現在、見ることのできるカルデラ地形は、九万年前の噴火によりつくられ、カルデラ内に水がたまり、湖



写真1 旧高森駅と新高森駅（根子岳を望む）

ができた。湖は、カルデラ壁の一部が崩壊・流出したが、中央火口丘の火山活動により、再び水がせき止められた。こうしたことが繰り返され、現在の地形を形成することになったと考えられる。カルデラは東西一八キロメートル、南北二五キロメートル、面積は、三八〇キロ平方メートルに及び、外輪山はこれらを取り囲み、西端は、立野火口瀬として熊本平野に向かって開けている。

カルデラ床は、中央火口丘群の北側と南側に広がり、北側は「阿蘇谷」、南側は「南郷谷」と呼ばれている。南郷谷は、白川の流域に形成された沖積平野である。南郷谷の溶岩流のせき止めは、一部であったため、東西に勾配のある盆地地形を形成している。

阿蘇火山では、地元ではヨナと呼ばれる黒色火山灰が放出される。特に秋から冬に阿蘇中岳が噴火している。近年の噴火は、平成二五年（二〇一五）～平成二八年（二〇一六）にかけて、比較的大きな噴火が発生し、平成二九年（二〇一七）～平成三〇年（二〇一八）にかけて、比較的穏やかで令和元年（二〇一九）以降は小規模な噴火がたびたび起きている。

阿蘇地域は、地下水が豊富で、多くの湧水が分布している。とくに白川水源は、日本の名水百選に選ばれ、阿蘇を代表する名水である。白川水源を含めた南郷谷の湧水は、段丘崖の下に多く認められる。南郷谷では、外輪山上の原野一帯に降った雨を起源とする地下水や、中央火口丘群への降水が起源とする地下水が



写真2 高森湧水トンネル

主体を占める。当町の主な湧水として上洗川神社の湧水、高森湧水トンネル公園、草部吉見神社の湧水が挙げられる。

二 歴史的環境

阿蘇地域の旧石器時代の遺跡は、外輪山北側と南西側の標高五〇〇～七〇〇メートルの台地面に多く分布しているものが高森町では確認されていない。

縄文時代から弥生時代 縄文時代の遺跡は、カルデラ内、外輪山斜面に分布しており、旧石器時代と比べると遺跡数は増加している。しかしながら、カルデラ内の低平地は遺物の散布が認められるに過ぎず、遺構は確認されていない。これは、カルデラ内は、温暖化と阿蘇谷湖の枯水化がすすみ、低地にすすんできたものいまだ、外輪山西側の山麓部や火砕流台地上に大規模な集落が認められるためである。

阿蘇における弥生時代の集落は、弥生時代中期までさかのぼり、狩尾方無田遺跡で見つかった竪穴建物があるが集落数は少ない。集落の最盛期を迎えるのは、弥生時代後期に入ってからである。阿蘇地域の弥生時代の集落を特徴づけるものとして、ベンガラと鉄製品が挙げられる。

ベンガラは、酸化鉄に由来する赤色の顔料であり、阿蘇市域には褐鉄鉱と呼ばれる鉄分を多く含む堆積物がある。阿蘇では阿蘇黄土とも呼ばれ、この黄土を焼成することで赤色に変化する。弥生時代以降、ベンガラは石棺内部や土器に彩色を施し、埋葬や儀礼の場面に多く使用されている。

近年の南郷谷における幅・津留遺跡の調査では、八一三点の鉄製品が出土し、そのうち、鉄鏃、鑿・斧、鎌、刀子、鉋、穿孔具などの小型鉄



鉄製品 (刀子)



幅・津留遺跡の遠景



石製品



赤彩土器

写真3 幅・津留遺跡の出土品

一方、外輪山上にある五ヶ瀬川流域沿いには、土行松古墳、高塚横穴群がある。特に高塚横穴群からは、横矧板鋌留短甲、大型の透孔鉄鏃などが出土している。横矧板鋌留短甲の副葬は、近畿中央政権との強い結びつきを示すとともに、大型の透孔鉄鏃は、南九州との密接な交流を示すものとして注目される横穴群である。



写真4 高塚横穴群 短甲

器が多く認められる。この小型製品が多い理由の一つに四基の攻玉遺構が見つかっており、玉生産との関わりが指摘されている。

古墳時代 阿蘇谷の古墳は、外輪山の急斜面とそこから突出する丘陵に分布する。阿蘇谷の首長墓として挙げられるのは、二基の前方後円墳と円墳一二基から構成される中通古墳群である。中通古墳群は、昭和三四年（一九五九）に熊本県史跡に指定され、平成三十一年（二〇一九）には、前方後円墳の長目塚古墳の出土品が熊本県重要文化財に指定されている。

高森町では、上色見地区に中大村古墳群があり、昭和五六年（一九八一）に発掘調査が行われている。箱式石棺内には人骨三体、竪櫛が発見されている。高森地区では、上の園古墳群があり、円墳四基が調査されている。横穴式石室内に石棺が配置されていたと推測され、出土遺物から古墳の築造時期は六世紀半ば〜後半と考えられる。このほか、古墳の詳細は不明であるが、豆塚古墳が存在する。

奈良時代から平安時代 阿蘇の火山信仰は、『隋書』倭国伝に阿蘇火山信仰を伝える記事があることから古来よりその重要性が指摘されている。その火山信仰を司っていたのは、阿蘇君一族及びその系譜に連なる阿蘇氏であり、古代から中世にかけて阿蘇地域一帯に多くの寺院寺社が建立されていた。中でも中岳付近には、三六坊、五二庵と数えられる僧房（古坊中）は八世紀、南阿蘇村の祇園社は九世紀に起源があるとされている。杉の本遺跡では、七世紀後半から一三世紀後半の集落遺跡であり、八世紀から九世紀にかけて竪穴建物から掘立柱建物に転換し、最盛期を迎えている。

阿蘇氏は、阿蘇谷から中央火口丘南側の南郷谷に本拠地を移しており、その年代は不明であるが、『吾妻鏡』養和元年（一一八一）に南郷大宮司の記述がみられることから、平安時代末頃と考えられる。南阿蘇村にある二本木前遺跡は、堀に囲まれた方形館で、掘立柱建物、柵列が検出されており、隣接する祇園遺跡を含めて、この地が南郷大宮司の居館と推定されている。

中世から近世 当町域には、カルデラ内及び山東地区に中世山城が分布している。なかでも高森城は外輪山麓の南郷谷を見下ろす要害の地に築造されている。阿蘇二四城のひとつとされ、高森伊予守惟直の居城とされている。天正一二年（一五八四）から天正一三年（一五八五）にかけ阿蘇合戦において高森城は落城するが、周囲には、討死した武将たちの墓碑、頌徳碑などが点在しており、合戦の激しさを物語っている。

天正一五年（一五八七）豊臣秀吉による九州征伐以後、当町域は、佐々成政、加藤清正による支配に属した。寛永九年（一六三二）には、細川忠利は郡と村の中間に手永を置き、その長を惣庄屋と称し、村庄屋

を一括して管理するようになった。

南郷には、布田、高森、野尻、菅尾の四手永があった。現在の高森町は、野尻手永と高森手永の東半が含まれる。会所には、惣庄屋、御山支配人、手付横目の三役の役人がおり、庄屋のもとには、頭百姓、払頭、村横目などの役付きがあり、身分制を利用した支配体制が確立した。

会所は、高森に置かれたが、のちに吉田新町に移され、高森には、出会所が置かれた。

高森手永の初代惣庄屋に任命されたのは、小糸惣右衛門である。小糸氏は、もともとは豊後の緒方家の者で、主家の大友家の没落に伴い高森に移り、細川忠利の肥後入国に伴い、高森惣右衛門と称したとされる。

その後、高森伊予守の家臣に仕えていた武田氏大蔵の孫にあたる武田五左衛門が細川忠利に召し抱えられ、高森手永の惣庄屋を務め、五代目の武田儀兵衛まで武田氏が務めた。

この頃には、現在の高森町の形態も整ったとされ、貞享二年（一六八五）には、藩より月三度の市立てが許可されている。宝永期には、町屋三五軒と記されている。この頃が宿場町としての繁栄期とされ、風鎮祭もこの時期に始まったとされる。

町を繁栄させた重要な交通インフラとして南郷谷には、熊本城下から南郷谷を経由して豊後竹田あるいは日向高千穂方面に至る交通路である南郷往還があり、人や物資の移動を支える身近な街道筋であった。

峠により他地域と隔絶されていた南郷谷にとって豊後竹田の岡藩との結び付きが強く、文化年間頃には岡（竹田）藩札が広く流通し、町の商圈は、豊後に属していたとされる。また、豊後出身の商人が定着しやすく、現在の商店の屋号に「豊前屋」「日向屋」などが認められることが

ら他県からの出身者が多いともいわれている。

近代 慶応三年（一八六八）には王政復古の号令により幕府は崩壊し、新政府が成立した。明治二年（一八六九）には版籍奉還が許され、細川韶邦が熊本藩知事となり、肥後藩は、正式に熊本藩に改まった。

明治四年（一八七一）には廃藩置県により熊本県、人吉県（のちに八代県）が誕生し、明治六年（一八七三）には、両県が合併し、現在の熊本県が誕生した。

明治七年（一八七四）の改正大小区制のもとで高森、色見を合わせて第一一大区第九小区に編入され、明治十二年（一八七九）には高森のみで一行政区域をなした。明治十七年（一八八四）に色見、上色見が加わったが明治二十年（一八八九）町村制施行のとき、色見、上色見の両村が分離し、単独で町となった。

明治二十九年（一八九六）には、県道立野・高森線が開通し、熊本市街との交通網がつながり、一気に利便性が向上した。さらに高森町より柳、川走を通る日向街道も高森トンネルの開削により、柳谷、木郷を通り、高千穂町の三田井に至る幹線道路が通じ、高森町は物資の集散地として発達する。

さらに大正八年（一九一九）南郷自動車株式会社が設立され、立野・高森間、熊本・高森間のバスが開通されるとともに昭和三年（一九二八）には、豊肥線の前身である宮地線の支線として立野、高森間として営業を開始した。当時の時刻表から熊本駅から高森駅までが二時間半で結ばれることになったとされる。

これにより南郷谷地域の交通インフラ整備がすすみ、高千穂方面、高田方面からの交通の要衝だけでなく、熊本市内への時間短縮、利便性の

向上、人々の流入もあり、高森町において昭和区といった町を生み出す原動力となった。

参考文献

阿蘇郡市世界文化遺産登録事業推進協議会事務局 阿蘇世界文化遺産推進室
二〇一六『阿蘇の文化的景観』保存調査報告書 I 総論 阿蘇市・南小国町・小国町・産山村・高森町・南阿蘇村・西原村

熊本県立装飾古墳館

二〇〇六『神のすむ郷阿蘇ものがたり展 あなたは阿蘇をご存じですか？』

肥後の至宝展四 熊本県立装飾古墳館

杉井健 二〇一四『長目塚古墳の研究』『長目塚古墳の研究―古墳時代阿蘇谷の首長墓―』熊本古墳時代共同研究グループ

杉井健 二〇一九『高森町高塚横穴群出土遺物の調査報告』『古墳時代の阿蘇ルート

の研究』熊本大学文学部

高森町・高森町教育委員会 二〇一六『熊本・阿蘇 高森町の文化財』

高森町町史編さん委員会 一九七九『高森町史』

水野哲郎ほか 一九九八『二本木前遺跡』熊本県教育委員会

宮崎敬士 二〇一九『幅・津留遺跡』熊本県教育委員会

村上恭通 二〇二一『弥生時代から古墳時代における鉄生産と阿蘇』『中通古墳群を考

える―長目塚古墳の温故知新 シンポジウム記録集』阿蘇市教育委員会

第二節 風鎮祭の概要

南阿蘇を代表する夏祭りである風鎮祭は八月盆明け直近の金・土曜の二日間にわたって開催される、令和四年度（二〇二二）は八月一九、二〇の両日に執行された。

祭り初日は町中央四つ角を中心に、町の目抜き通りが午後三時より交通規制され、同四時から午後一時まで歩行者天国となる。

高森町は宮崎県に接し、宮崎県高千穂町三田井を経て延岡へ、草部村から野尻村を経て大分県竹田市に、郡内の馬見原を経て上益城郡矢部町に通じ、郡内宮地（現阿蘇市）へも日尾峠で結ばれた交通の要衝であった。そのため高森は近世以来阿蘇南郷谷の物資の集散地で、商業活動の盛んな町であった。昭和三年（一九二八）高森線（現南阿蘇鉄道）が開通すると更に経済活動が活発となった。高森線開通以前の大正一四年（一九二五）の人口は二七三六人であったが、昭和五年（一九三〇）には三三六一人、同一〇年（一九三五）には三九三四人と毎年人口が増加していった。

昭和一二年（一九三七）の戸数は七百戸で、職業別内訳は、農家数二五十二戸に対して商業二四一戸、工業六六であった。旧高森町は農家数はそれほど多くはなかったが、北部の色見、東部の草部、東南部の柏の農林業の盛んな各村に接し、西部は阿蘇有数の畜産（産馬）の中心地であった白水とつながっていた。風鎮祭見物客は草部、色見、白水、馬見原、宮地などから多くやって来ていた。

風鎮祭だけでなく、例年七月三〇日に執行される高森阿蘇神社の夏祭りは阿蘇郡最終の、阿蘇南部最大の祭り、宮地の阿蘇神社のおんだ祭

り（御田植神事）に匹敵するとまでいわれる賑わいを呈し、冬と春に開かれる市も盛んであった。

高森町では、戦前から大字を用いず区を用いた。旧高森町は村上、山在、津留、森、冬野、上町甲、上町乙、下町、横町、昭和の一〇区に分かれていた。

風鎮祭は古くは上町、下町、横町の三区によって担われてきた。その後、前述の通り、鉄道開通後人口が増えたことにより、昭和区が出来て四町に、更に旭通り区が新たに設けられ五町となり、この五町が風鎮祭の運営組織を担うことになった。

なお、向上会は昭和二五年（一九五〇）までは三町、翌年から四町となる。旭向上会の誕生日は確認していないが、平成元年（一九八九）からは五町向上会となっている。

風鎮祭は町方の商家が農家に報恩感謝して江戸時代から始まったもので、最初は盆前に村芝居を催し、農家の人々の慰安に供していたが、いつのまにか商家が自家の商品を利用して造り物を利用した見立て細工を飾るようになったと言われている。

令和四年度に執行された行事日程は表1の通りである。ただ、新型コロナウイルスの流行により、令和二、三年度は祭りが中止され、同四年から再開されたが、従来とは異なる日程、行事内容で実施された。本報告は令和四年（二〇二二）の行事の記録であるが、従来と異なる点は明示するよう心掛けた。

祭りは目覚し行事から始まる。町内五地区の向上会が高張提灯を先頭に中央四つ角に集合し、午前零時、年番向上会員によって爆竹が上げられる。それを合図に高張提灯を先頭に年番向上会から順に中央四つ角で

演芸を披露する。それから商店街で演じてからそれぞれの町内の公民館に戻る（第二章第二節参照）。

午前一一時から高森阿蘇神社で同社岩下宮司祭のもとに五穀豊穰祈願祭が執り行われる。この祈願祭は例年祭り二日目の午前中に行われることになっている。

神事には町長、町議会議長、各町内区長、向上会会長、商工会長、実行委員長など祭り関係者が参列し、修祓、奉幣、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠、撤饌と型の如く執行される。

神事終了後、拝殿で直会があり、解散となる（第四章第一節参照）。

午後二時からオープニングセレモニーが中央会場で行われ、高森吹奏楽団の演奏が開始される。

引き続き県警音楽隊の演奏が中央会場で催され、同音楽隊の市中パレードに移る。夕方からは町民参加の総踊りが市街地を練り、風鎮太鼓の演奏が行われる。

造り物は祭り初日の昼までに各地区の一角に展示される。造り物の順位を決める審査が一〇名の実行委員会が依頼した審査員によって「審査規定」に基づき採点が行われる。この審査に関して戦前から不公平という批判が出るがあった。そのため、現在は毎年、採点基準を明示し、人選も公平を期している。

夜七時、爆竹を合図に各向上会のにわかが始まる。にわか演者は必ず化粧を施す。その年に作られたすべての演目を披露する。にわか移動舞台で町内一円を廻る。八時から花火大会が催される時間帯はにわか中断される。

祭り二日目、午前一〇時半に非公開の造り物審査会を開催し順位を決

定する（第三章第二節参照）。昼すぎから造り物は一カ所に集合し展示される。この頃に順位が発表される。

造り物は午後三時頃から各向上会のお囃子を伴って約二時間かけて町内を巡回する山引きが開始される。順番は年番を務める向上会に属する地区から出発する。

山引きが終わる午後五時から表彰式が行われる。山引き終了後、再び各町内に戻り展示され、祭り終了後、直ちに解体される（第三章参照）。

午後六時に節刀渡しが行われる。中央四つ角に四本の竹に注連縄を張り巡らした臨時の祭壇が設けられる。ここで向上会、祭り関係者列席の上、今年の年番向上会会長から次年度年番向上会長に刀を手渡し、宮司の掛け声で参列者一同が手打ちして行事は終了する。

節刀渡しが終わると各町内のにわかのお囃子が一齐に演奏する打ち込みが開始される。それが済むと最初の上演場所に移動する。各町内に向けて移動舞台により町内を廻りにわかを演じる。

八時半から中央舞台でにわかコンクールが実施される。コンクールが終わるとそれぞれの町内に戻り、幾つかの演目を上演する。これで祭りは幕を閉じる。

令和四年（二〇二二）の風鎮祭はコロナウイルス流行が完全に終息していないこともあって過去の祭りと比較して催し物が少なくなっている。それと、過去の祭りの催し物は継続して実施されるものと短期間で廃されたものもある。それを詳細に示すことは出来ないが、その一端を、比較的細かく知ることが出来る昭和、平成の日程を表2に示した。

令和四年の行事の日時と新型コロナウイルス流行以前と比較すると、前述の通り五穀豊穰祈願祭の執行日時が変更されている。

大きな変化としては仮装行列が行われなくなったことが挙げられる。かつては仮装行列が呼び物の一つで、各町内対抗、向上会対抗、町役場、各官公署が工夫を凝らした仮装を考え、その奇抜さを競い、仮装コンクールも実施されていた。これが祭りを盛り上げる重要な要素となっていた（第四章参照）。この仮装行列は昭和二九年（一九五四）から少なくとも同三年（一九三三）までは初日、二日の両日に亘って行われていた。出場する組が多かったことも一因であったと思われる。その後は二日目だけとなったようである。

昭和三〇年（一九五五）は町村合併記念祝賀を兼ねて開催され、町役場、官公署、婦人会など草部、色見からも仮装行列隊が参加し総数二〇組にも及んだという。町の祭礼に町役場、官公署が仮装行列で加わっていたのは高森町にかぎったことではない。また、祝賀行事に周辺町村から祝意を表してにわか隊を繰り出すことも県下に広く見られたものである。仮装行列は祭りを構成する上で重要な役割を果たしていた。

町内の芸能として草部村の尾下獅子舞は昭和三二・四三・四四・四五・四六・五一年、同村峰の宿のぼんば踊りは大正一五年、昭和三〇・三二・四三年に参加している。

草部村は藩政時代は高森手永に属し、明治一二年（一八七九）郡区改正で高森町と合併したが、同二年（一八八九）町村制施行で分離した経緯があり、もともと高森町とは非常に関係が深い村であった。昭和二八年（一九五三）町村合併促進法により、昭和三〇年（一九五五）四月一日県内第一〇回合併で、草部、色見両村を加えた新高森町が発足した。三一年（一九五六）には町の演芸団を組織して草部、色見への巡回公演を実施している。

祭りを盛り上げるためさまざまな企画が試みられている。その多くが合併後の風鎮祭を町民全体の祭りとすることを意図し、子供、青少年、婦人などが参加する催しである。

その主なものを新聞記事から拾ってみる。

女性参加の踊りとして、伝統的な手踊り以外に、昭和四一年（一九六六）に高森音頭、四四年（一九六九）に山引き踊り、五四年（一九七九）に風鎮太鼓に婦人会の振り付け、六二年（一九八七）に風鎮サンバが、子供参加の行事としては昭和四四年に子供手踊り、五二年（一九七七）に子供樽神輿、五五年（一九八〇）に子供風致太鼓が登場している。青年が演奏する風鎮太鼓がいつ開始されたか不明であるが、新聞で報じられたのは昭和四八年（一九七三）で、五穀豊穣祈願祭に奉納されたことがはっきりするのは昭和五三年（一九七八）以降である。風鎮太鼓は以前は町内数ヶ所で演奏されていたが、現在は観光交流センター一ヶ所のみとなっている。

青少年を対象としたものとして、風鎮太鼓以外に高校生バンド演奏、エレキギター演奏なども見られた。

花火大会は昭和二九年（一九五四）から毎年催されている。場所は初期は高森高校グラウンドであったが、その後は長く別所の堤が会場となった。

なお、風鎮祭と連動する催しとして、南阿蘇の小、中、高校生の体育大会、弓道大会やテニス大会、あるいは熊本日日新聞社主催のチビツ子スケッチ大会、写真コンテストなどが組み込まれたこともあった。

それ以外に、子供手踊り、樽神輿、子供風鎮太鼓、高森中学校吹奏楽、バンド演奏、のど自慢大会などが催されていた。これらの催しも見

表1 令和四年(2022)行事日程

1日目 8月19日(金)	2日目 8月20日(土)
0:00 目覚し	10:30 造り物審査会
11:00 五穀豊穡祈願祭 (高森阿蘇神社)	12:00 ダンス教室
14:00 オープニングセレモニー 高森吹奏楽団	13:00 造りもん大集合 民謡競演
15:00 警察音楽隊	15:00 山引き
16:00 警察音楽隊パレード	15:30 造りもん表彰式
17:00 開会式	19:00 節刀渡し(中央四つ角)
18:00 総踊り 風鎮太鼓	20:00 にわか(移動舞台)
19:00 向上会にわか ダンス	20:30 にわかコンクール
20:00 花火大会	
22:00 にわかコンクール	

表2 昭和・平成の行事日程

昭和59年(1984)	
1日目 8月17日(金)	2日目 8月18日(土)
0:00 目覚し	8:00 五穀豊穡祈願祭 (風鎮太鼓奉納)
10:00 道中子供手踊り	仮装行列、樽神輿
16:00 夏の大売出し抽選会 造り物優勝旗返還式 郷土芸能の競演会	14:00~15:00 自衛隊音楽隊演奏
17:30~19:30 尾下獅子舞 南阿蘇盆踊り競演会 高森音頭・山引踊り	15:00 風鎮太鼓 16:00 山引き 19:00 節刀渡し 20:00 にわか、舞踊
19:30~23:00 演芸会 にわか・舞踊など	
20:00~21:00 花火大会	
平成7年(1995)	
1日目 8月17日(木)	2日目 8月18日(金)
0:00 目覚し	8:00 五穀豊穡祈願祭 (風鎮太鼓奉納)
12:00 子供手踊り	9:00 樽神輿
15:00 尾下獅子舞 オープニングセレモニー 巫女舞、風鎮太鼓、開会	11:00 五町連合仮装行列 14:00 役場総踊り
17:00 高森商店会抽選会	15:00 自衛隊八特太鼓
18:00 町民総踊り	16:00 山引き
19:00 高森にわか 高校生バンド(HAVE)	18:30 造り物表彰式 19:00 節刀渡し
20:00 花火大会	19:30 向上会にわか
20:50 舞踊、歌謡ショー	20:00 バンド演奏
21:30 向上会にわか	21:30 にわかコンクール

風鎮祭の過去のプログラムを見てみると、毎年多彩な催し物が組まれていたことが分かる。そのうち、少なくとも明治以降一貫して行われているのは、目覚し・仮装行列・造り物(山引き)・にわか(五つである。この五つに共通するのは人目を驚かす趣向を競う精神であるといえる。

これらの催し物の中には現在行われなくなったものがある。

第二章 高森のにわかの実況

第一節 町内の概要

高森のにわかには高森町高森のなかでも、高森商店街を中心とした町部において行われる。具体的には、上町区・天神区（上町区と天神区は別の行政区だが、風鎮祭においては上町区と天神区が合同で「上町」として活動している）、横町区、下町区、昭和南・北区、旭通り区である。これらの区域を総称して、「五町」と呼ぶ。また、各区には、青年組織の「向上会」が組織されている。

昭和初頭まで、風鎮祭を行っていた区域は上町、横町、下町の三町であった。この三町については、「横町文書」等の記録により、少なくとも江戸後期には現行の上町、横町、下町に連なる地域共同体が成立し、この三町には若者組が組織された。現在にわかを担う向上会は、この若者組の流れをくむ（向上会結成の経緯については、第II部第一章参照）。

高森町にとって大きな転換期となったのが、昭和三年（一九二八）の国鉄高森線（現・南阿蘇鉄道）開通である。高森駅開業に伴い、町の中心部から高森駅までを結ぶ新道ができた。この新道に沿って、店舗や住宅が建ち並び、町の景観が大きく変化した。こうした変化のなか、昭和区ができた（住民の増加により、平成二九年（二〇一七）より昭和区は昭和南区と昭和北区にわかれている）。その後、高森中学校裏に団地や住宅地ができ、住民が増えたことにより、昭和三五年（一九六〇）に旭通り区ができた。



図1 高森町五町町域図（地理院地図 Vector を加工して作成）

五町の区域と各町公民館（風鎮祭期間中、向上会の活動拠点）の位置については図一のとおりである。

第二節 にわかを担う組織と運営

風鎮祭における高森のにわかは、「向上会」と呼ばれる組織の会員によって演じられてきた。向上会は風鎮祭の中心的な担い手であり、にわかのほかにも目覚し、子供手踊り、仮装行列（平成二十七年（二〇一五）まで実施）、五穀豊穣祈願祭においても中心的に関わっている。このように風鎮祭を実施するうえでは欠かせない、中心的な組織である。

現在、向上会は高森町内の五町それぞれにあり、上町向上会、下町向上会、横町向上会、昭和向上会、旭向上会として活動している。二〇二二年八月の調査時において向上会の構成員数および年齢構成は表一のとおりである。

各向上会には十数名が所属し、活動している。二〇代から三〇代が中心となってきたが、近年は会員数の減少もあり、四〇代となっても向上会に関わる者も少なくない。とくに以前は会長を経験すると退会という意識も強かったが、現在は会長職を複数年務めたり、会長職を辞したあとも引き続き向上会に残るケースもみられるようになってきている。

また、これまでは向上会員は男性に限るといふ不文律があったが、ここ数年は女性も向上会員として受け入れる町内がみられるようになってきている。

一 向上会

役職 向上会には、会長、副会長、会計の役職があり、これらを「三役」と呼ぶ。会長職はとくに重要で、自町の向上会運営に関する権限を持つ。また、他町の向上会と調整し、その年の風鎮祭全体に関わる決定

事項を自町の向上会員に伝える役目もある。こうした五町向上会の会長・副会長・会計による組織体を「五町会」と呼び、風鎮祭実行委員会側へ向上会からの意見や要望を伝えることもある。また、風鎮祭後には、実行委員会と五町会による反省会も行われる。

各役職の任期はとくに定めないとする向上会がほとんどであるが、下町向上会は二年交代としている（二〇二〇年頃までは一年交代だった）。また、横町向上会や旭向上会のように会長職に就くのは自町出身者に限るとしているところもある。また、年番が終わると会長職を交代するところもある。

風鎮祭期間中、目覚し、五穀豊穣祈願祭、節刀渡しは三役として参加する。とくに目覚し、節刀渡しは浴衣を着用し、三役の役職が書かれた提灯を持って参列する決まりになっている。節刀渡しでは、会長は浴衣に袴と笠を着用する。

年番向上会 向上会には、毎年「年番向上会」もしくは「年番」と呼ばれる

表1 向上会の年齢構成

向上会名	総数	～20代		30代		40代～	
		男	女	男	女	男	女
上町向上会	13	1	0	7	0	5	0
下町向上会	15	3	0	6	0	6	0
横町向上会	11	2	2	7	0	0	0
昭和向上会	14	6	0	6	0	2	0
旭向上会	13	3	2	4	1	3	0

2022年8月の調査による

向上会がある。年番向上会は五つの向上会を取りまとめ、風鎮祭実行委員会との調整を図る。年番は一年交代で回しているが（上町↓横町↓下町↓昭和↓旭通りの順番で回す）、コロナ禍により二〇二〇、二〇二一年と風鎮祭が行われなかったため、本来二〇二〇年に年番向上会をする予定であった旭向上会が二〇二二年の年番向上会を務めた。

風鎮祭に係る主な業務として、警察に提出する道路使用許可書の取りまとめ、高森阿蘇神社で行われる五穀豊穰祈願祭での供物の手配、にわかの実施に関すること（にわかコンクール含め）がある。各向上会との連絡調整が重要な役割であるため、各向上会とも年番にあたる年の会長選出については、十分な配慮をした上で選出している。

また、風鎮祭の翌週に行われる地蔵祭の世話も年番向上会の仕事である。横町にある勝軍地蔵での法要のほか、夕方から町内で行われる催事の段取りについても年番向上会が行う。

二 囃子・高張・アナウンス

(一) 囃子

にわかの道行きや移動中などの時、三味線と太鼓による囃子の演奏がつく【写真1】。囃子は移動舞台とは別に、トラックの荷台を改良した囃子専用の車に乗り、演奏する【写真2】。

各町内とも三味線が二〜四人、太鼓が一人である。太鼓は向上会経験者の男性が、三味線は女性が務める町内がほとんどであるが、明確な決まりがあるわけではない。

現在、風鎮祭で演奏される囃子の楽曲は、主に「道行き」「道中」「山引き音頭」の三つがある。

「道行き」はにわかの道行きの時に演奏される曲で、通称「ポツチャン」とも呼ばれる。これはノーエ節をもとにアレンジされた曲である。

この「道行き」は五町全てで演奏されるが、基本的なメロディーは同じである一方で、曲のテンポや曲調が町内によって異なる。これは、三味線を弾く時に押さえるツボの位置が異なったり、太鼓の入れ方が異なるためである。町内によって曲調が異なる理由として、囃子を聴いてどの町内がにわかをしているのかを観客たちに示すために、あえて町内で弾き方を変えていたという話も聞かれた。このように、町内ごとに微妙に弾き方が異なるため、にわかコンクールにおいてよその町内のお囃子で演じる時は間合いなどが異なるので少し難しいという。

「道中」は、移動舞台を曳いて移動している際に演奏される曲で、町内ごとに演奏する楽曲は異なる。各町内とも、通称「ツンチリ」と呼ば



写真2 囃子のトラック
(2023年8月18日昭和向上会)



写真1 囃子
(2023年8月18日昭和向上会)

れる曲を演奏するが、このほかにも町ごとに独自の曲を演奏するところもある。例えば横町は五曲（「ツンチリ」、「よろい弾き」、「どんたく」、名称不明の二曲）を順に演奏している。「よろい弾き」については、横町のほかに上町、下町も演奏する。「どんたく」は横町と上町が演奏している。このほか、横町と昭和では「山引き音頭」も演奏している。

現在演奏されているにわかのお囃子は、戦後に現在の形になったといわれる。その当時、佐賀県唐津市で芸者をしていた女性が、年に何度か、大津に数週間滞在し、三味線（竹本節）の教室をしていた。その三味線教室に町民数名が通い、稽古をつけてもらっていた。その時、三味線の御師匠さんが、にわかのお囃子用にと、民謡のノイエ節をアレンジした道行きの曲（通称、「ポッチャン」）を作り、教室に通っていたお弟子さんたちに教えた。これが現在、全町に伝わっているにわかのお囃子になったといわれる。

その後、にわかのお囃子は、個人的に習ったり勉強したという人のほかに、かつて後継者育成のための三味線教室のようなものが高森町で行われ、その時に習ったという人もいる。

現在は、各町内、一々四人程が囃子として三味線を弾いている。三味線については、必ずしも自町の者に限ってはならず、長年の付き合いや頼まれてほかの町内に住んでいる者が手伝いに来ている場合もある。しかしながら、町内に三味線を弾ける者が限られており、同じ人が一〇年、二〇年と変わらず演奏しているケースも多く、三味線の育成が課題だという声も聞かれる。



写真3 高張
(2023年8月18日旭向上会)

(二) 高張

にわかのお囃子や囃子のほか、にわかの上演に欠かせない存在として「高張」がある【写真3】。高張とは、上演場所をほかの向上会に先駆けて確保するため、自町の名前が書かれた高張提灯を地面につけておく役割である。

かつては、上演権をめぐって向上会同士が喧嘩をすることもあった。そのため、にわかや移動舞台のことに熟知している年長者が高張の役割とされた。現在は、にわかを演じない向上会員や向上会OBなどが担当する。

(三) アナウンス

そのほか、移動舞台の移動中やにわかの上演前に、にわかの上演が行われることを周囲に案内するアナウンスがある。アナウンス係（「マイク」と呼ばれることが多い）はお囃子のトラックに乗り、「こちらは〇〇向上会芸部一行でございます。」といったようにアナウンスをする。町内によつては、その年の三役名やにわかのお囃子の読み上げるところもある。この役は、会長職を勤め上げ、にわかのお囃子からは離れた年長の会員が行うことが多い。

第三節 にわか稽古および準備

高森のにわかには、その多くが毎年新しく制作した演目である（一部、再演もある）。そのため、八月に入ると、向上会では今年どのようなにわかを演じるのか、にわか演目作りを開始する。また、演目作りと並行して、にわか上演に関わる道具や装置の準備や、風鎮祭の実施に關する準備や話し合いが行われる。

ここでは、向上会がどのように稽古や準備を行っているのか、二〇二二年度の実態に即して記述する。

一 にわか制作および稽古

にわか稽古は八月に入った頃から向上会ごとに行われる。稽古期間に入る前にはそれぞれの向上会で「小屋入り」と呼ばれる集まりが行われる。小屋入りとは町内の飲食店に向上会員が集まり、飲食しながら今年の風鎮祭について語り合う決起集会である。

二〇二二年の小屋入りおよび稽古開始日については次のとおりである【表2】。

表2 2022年度小屋入り日および稽古開始日

向上会名	小屋入り	稽古開始日
上町向上会	8月2日	8月3日
下町向上会	7月29日	8月1日
横町向上会	7月30日	7月31日
昭和向上会	7月30日	8月1日
旭向上会	7月31日	8月1日

小道具作りなどを行う。また、にわか稽古と並行して、祭りの準備や当日の役割分担といった実施に関わることを相談し合う。二〇二二年はコロナ禍での風鎮祭実施であったため、祭りに参加できる者が限られたところもあり、稽古期間の前半は参加メンバーの確保や調整に追われた向上会もあった。

稽古には、にわか演者である向上会員のほかに指導役の向上会OB（会長経験者など）やお囃子の人たちが参加することもある。稽古始めの時期は向上会員のみでの稽古が多いが、祭りが近づく頃になると向上会OBが顔を出す機会も増え、緊張感のある雰囲気となっていく。にわか稽古は概ねどの向上会も以下のような流れで行われる。

(一) 題材や粗筋、落としの決定

稽古期間が始まると、ここ一年間での話題の出来事や流行のものなど、にわか題材や落としになるようなアイデア（言葉）を出し合う。例えば、ある向上会では次のような言葉が出された。

コロナ ワクチン ユーチューバー 通信障害
 ワールドカップ 漫画 096k マイナンバーカード
 おうち時間 z o m ロックダウン ウクライナ
 ふるさと納税 マスク T i k T o k

この時出された意見のなかから、題材になりそうなもの、落としが作れそうなものを選んでいく。こういう題材はにわかネタにはならないといった禁止事項があるわけではないが、観客を不快にさせたり、

センシティブな題材や内容は避けられる傾向にある。

上記の向上会では、アイデアを出し合った後、そのなかから落としが上手くつくものをあげていき、最終的には七つに絞っていった。題材と落としが決まったものから黒板に書き出し、その年の演目の素案とする【写真4】。ただしこの時点で確定というわけではなく、その後の稽古でのやり取りを経て、演目が練られていく【表3】。

稽古開始から一週間程（八月上旬）は、このような題材を考える作業にあてられる。話題にする題材や設定、話の粗筋が先に決まるものもあれば、先に落としを決めてから粗筋や設定を考えていく場合もある。

(二) 配役の決定

題材や粗筋の選定と並行して、誰がどの演目に、どのような役柄で出演するかを相談する。高森の場合、一演目、三名で演じられることがほとんどである。配役についても、誰かが決めるといふよりも、個人の意思が尊重される。例えば、ある向上会では次のように配役を決めた。

まず、それぞれが何演目に出演するかを決める。その年に参加できる人数にもよるが、だいたい二〜三演目には出演するようにしている。次



写真4 演目のアイデアを書き出す
(2022年8月8日横町向上会 吉留撮影)

表3 にわか題材と落としの例

題材	落としで使われている掛詞	時事性
096k 熊本歌劇団	町内／腸内	2020年から高森町を拠点として演劇活動等を行っている女性のみによる歌劇団。代表的な演目として『前田慶次かぶき旅』がある。漫画出版社であるコアミックスが熊本を拠点に旗揚げしたことで話題になった。
漫画	書く仕事／隠し事	2023年度から高森高校にマンガ学科が出来ることが話題となった。
ユーチューバー	撮り終えた／トリオ得た	ベネッセが実施した「小学生がなりたい職業ランキング2022」において、ユーチューバーが小学生男子のランキング1位となった。
汚職事件	汚職事件／お食事券	
潜水艦	航海／後悔	
警察	今日来とる／凶器とる	

2022年の横町向上会での調査による

に、相手役を選び、どの演目にするか相談する。例えば、「●●ちゃん一緒にやろう、どれにすんな？」といったやり取りがみられる。年上の者が年下の者を指名することが多い。なるべく、去年と重複しない組み合わせになるよう心がける。基本的には事前に決めた三人で演じるが、誰でも代役ができるようにしている。とくに二〇二二年はコロナ禍ということもあり、いつでも代役ができるよう準備をしていた。そのほか、自分が考えた演目は考えた者が出演するようにしている。

ほかの向上会では毎年組んでいて慣れているので今年も同じ相手と組むというケースもみられた。また、この人はこういった役が得意（例えばお婆さん役、とぼけたお爺さん役など）ということもあるので、演目の登場人物や設定に応じて配役を決めていくこともある。

(三) 立ち稽古

おおまかに今年のにわかの設定や落としが決まると、次は実際に演じながらの稽古となる【写真5】。例えば、ある日の稽古は次のようなやり取りのなかで進んでいった。

一九時頃になると、公民館に向上会員らが集まり出す。集まった人たちで飲食しながら雑談し、そのなかで時々になわかのことが話題にあがる。例えば台詞の言い方、声の大きさといった演技に関することや、話の展開の仕方（オチの前のフレーズをどのように持つていくかなど）といったことである。雑談の時間が過ぎていき、夜も更けていくと（だいたい二二時頃）、になわかの上手な人（声が大きい人）が「さーやりましょうか！」と言って実際のにわかを演じてみる。ほか

の向上会員はその演技を見て、意見を出しあう（例えば、台詞の声をもっと大きくしたらとか、話がわかりづらいのもっとわかるような台詞にしたらか、体の向きとか気になるところなどを指摘していく）。

稽古では一つの演目を最後まで通して演じてみる。演じ終わると、見ていた向上会員から演技についての講評が始まる。高森の場合、どの向上会にも台本作家や演出家のような人はいない。経験の豊富な年長者や向上会OBが意見を出すこともあるが、稽古に集まった向上会員同士で演技を見て、意見を出し合いながら、具体的な台詞やストーリー、動作を決めていく。ただし、向上会によって、演目の流れや設定を作るのが上手な人がいるので、その人を中心に相談することはある。

一つの演目の講評や検討が終わると、別の演目へという流れで稽古が進む。一日の稽古では、上演予定の演目



写真5 にわかの稽古風景
(2022年8月15日横町向上会 吉留撮影)

全てを一回は演じてみるようにしている。稽古に参加できない会員がいる場合は、代わりに別の会員が入って演じてみることもある。

高森のにわかでは、文字で書かれた台本を準備しない。題材や登場人物の設定、落としを黒板などに書き出して、皆で共有することはあっても、細かな一つ一つの台詞を文字化して稽古するという方法は採らない。上演中の台詞はそれぞれの演者が役柄や流れに応じて、自分で考えて台詞を発している。そのため、稽古では「オチへのつながりを咄嗟にアドリブで入れる」など、いかに機転を利かせられるかという点も指導される。

盆が終わり、祭りが近づいた頃になると、にわか仕上がってくる。

この時期になると、今年のにわかの実況を見に、公民館にやって来る向上会OBや関係者も増えてくる。とくに会長経験者のOBは、現役の会員の演技を見て、細かく演技指導をすることが多い。祭りの前日や目覚しの前には、リハーサルを兼ねて町内の者や向上会OB、区長らを公民館に呼んで、全てのにわかを披露する向上会もある【写真6】。

(四) 外題の決定

風鎮祭の前日(目覚し前)や前々日、上演する演目が出来上がると、向上会でそれぞれの演目の外題を考える。外題の付け方は演目の題材から連想してつけたものや、「高森」や高森町にちなんだ言葉が使われているものもある。題材からシンプルにつける向上会もあれば、内容(とくに落とし)が連想されにくいように凝ったものにする向上会まで様々である。二〇二二年は例えば次のような外題がつけられた。



写真6 年長者からの指導
(2022年8月20日昭和向上会 松岡撮影)



写真7 舞台脇に置かれためくり
(2023年8月19日下町向上会)

【旭向上会 二〇二二年度外題】

新人アルバイト 地域おこし協力隊 坊主やめます 将来の夢

山菜採り 老人ホーム

この場で決めた外題は、当日までに「めくり」に書かれて準備される。「めくり」は本番中、舞台脇に置かれ、観客に対し上演中の演目の外題を伝える役目をする【写真7】。

(五) 吉本芸人とのコラボにわか稽古

二〇二二年の風鎮祭では、風鎮祭実行委員会による特別企画として、

吉本芸人とのコラボにわか（にわかコンテスト）も実施された。これは、五町にそれぞれ一名の吉本興業所属の芸人が加わり、一九日の晩に向上会員と一緒ににわかを演じるというものである。そのため、向上会では吉本芸人とのコラボ用のにわかを準備し、稽古することになった。

二 祭りの準備

にわか稽古と並行して、向上会ではにわかを演じる移動舞台の組み立て、衣装や小道具作りに追われる。昼間はそれぞれ仕事があるので、こうした準備はお盆休みや祭り直前に行われることが多い。また、二〇二二年はコロナ禍のため子供踊りが実施されなかったが、本来であればにわか稽古とあわせて子供踊りの楽曲選びや振り付け、子供への稽古などもお盆頃から行われる。

(一) 移動舞台

移動舞台とは、向上会がにわかを演じる際に用いる移動型のステージである。移動舞台がいつ頃から高森で使われていたのかは判然としない。現在、高森で使われている移動舞台は荷馬車を改良したもの（横町・下町・昭和）、トラックを改良したもの（上町・旭）の二種類ある。荷馬車を改良したものは「馬車」と呼ばれることもある。荷馬車型の移動舞台のほうが古い。上町向上会では今から三〇年程前に、火の国祭り（熊本市）で使用していたトラックを譲り受け、現在でも使用している。

馬車を使っている向上会では、祭りの前に向上会員が集まって舞台の組み立てを行う。下町向上会では八月一日に移動舞台の組み立てを

行った【写真8】。下町では前年の片付けの際に全てバラし、板や柱だけにして公民館横の倉庫に保管している。そのため、組み立て作業は人が集まりやすい休日やお盆期間中に行われる。組み立て終わった舞台は公民館の駐車場に保管し、飾り付けやマイクの配線などの細かな作業は祭りが近くなってから改めて行う。

① 移動舞台（馬車型）【写真9・10】



写真9 移動舞台（馬車型）・下町向上会
(2022年8月19日)



写真10
移動舞台（馬車型）を曳く様子
(2022年8月19日昭和向上会)



写真8 移動舞台の組み立て
(2023年8月13日下町向上会 堤撮影)

② 移動舞台（トラック型）【写真11・12】



写真11 移動舞台（トラック型）・上町向上会
(2022年8月19日)



写真12 移動舞台（トラック型）・旭向上会
(2022年8月19日)

(二) 小道具・衣装

にわか の衣装は、白色の肌着や白色のステテコを着用する者が多いものの、特に決まりがあるわけではなく、各自で思い思いの服装をしている。役柄や得意のキャラクターに応じた衣装を着用することもある。ただし、このキャラクターだとかこういう衣装というのが必ずしも決まっているわけではない。演者の裁量に任されている部分も大きい。

基本的には例年使っている衣装をそのまま使用し、演目によって足りないものや破れているものは、その都度修理したり、新調して使用する。毎回新しくするという事はない【写真13】。

かつらや杖、鉄砲といった小道具も自分の役に必要なものを、現在あるものの中から選び、どうしても新しくつくらないといけない場合は、各自作るか、あるいは購入している。

特徴的な衣装として、上町向上会が着用している矢旗で作ったズボンや上着があげられる。これは、上町町内の呉服屋に特注で頼んでもらったのだという。このような揃いの衣装はほかの町内では見られない。

第四節 祭礼当日の状況

これまで風鎮祭の日程は八月一七、一八日と決められていたが、祭りを平日に開催することに対する意見が出るようになり、平成二八年（二〇一六）は祭日を変更し、八月一九日（金）、二〇日（土）に行うことにした。これは、同年春に起きた熊本地震の復興祈願も兼ねて行われた。その後、風鎮祭実行委員会での会議により、平成二九年（二〇一七）以降は八月一七、一八日に近い金土曜日に行うということが決定された。

二〇二二年は、八月一九、二〇日の日程で風鎮祭が行われた。以下、風鎮祭前日の一八日から風鎮祭翌日の二一日までの向上会の動きについて述べる。



写真13 公民館に保管されている衣装類
(2022年8月15日横町向上会 吉留撮影)

一 八月一日

(一) 祭りの準備

午前中より、それぞれの公民館では向上会員が風鎮祭にむけた準備を行う。準備は主に移動舞台やトラックの飾り付けである。どの向上会もこの日までに移動舞台やお囃子用および荷物運搬用のトラックを公民館まで出しておき、皆で装飾や配線などを行う。

移動舞台の準備が一通り終わると、明日からのにわかに向けた小道具作りや衣装の確認を行ったり、にわか演目に関する相談、祭りのスケジュールや段取りの確認などを向上会員同士で行う。

だいたいの準備が終わると、一旦自宅に戻り、夕方頃再び公民館に集合する。昼間仕事で準備に参加できなかった会員も、ここで皆集合する。会員が揃ったところで、二

四時からの目覚しまでの間、にわか最終調整や外題の決定を行う。

町内によっては、区長や区の年長者を招き、その年に上演するにわかを披露するところもある。例えば上町では、二〇時から上町、天神両区長ほか一人が見守る中、その年に上演するにわか全演目を披露する「打ち込み」を実施する。演技の後は、上町区長らからアドバイス



写真14 出発前の様子
(2022年8月18日横町向上会 吉留撮影)

を受けていた。

二二時頃になると、会長・副会長・会計の三役と、高張は自町の浴衣に着替える。三役と高張は浴衣に法被(三役の法被は、ほかの会員のものと比べて丈が長い)を着用し、目覚しに参加する。通常だとこの時間に、残りの向上会員たちは目覚しの演芸に向けた着替えやメイクを行うのだが、二〇二二年はコロナ禍のため目覚しの演芸は中止となったため、残りの向上会員は着替えなかった。

公民館を出る際には御神酒(下町では「出立ちの酒」という)を飲んだから出発する。これは、翌日、翌々日のにわか出発前も同様である【写真14】。

(二) 目覚し

二四時から中央四つ角にて、目覚しが行われる。目覚しとは、祭りの開始を町内に告げるもので、中央四つ角に五町向上会が集まり、それぞれ演芸の出し物を披露する。二〇二二年はコロナ禍中ということで、例年より縮小し実施された。ここでは、二〇二二年の様子を中心に記述する。

二〇二二年の目覚しは、演芸が中止となったため、各町の三役と高張が参加した。お囃子については、お囃子が参加した町内とテープの音源で済ませたところがあった。

二三時三〇分頃になると、それぞれの向上会が高張を先頭に三役が公民館を出発し、中央四つ角へ向かう。この時、三役と高張は浴衣と法被を着用している。また、高張は高張提灯を掲げ、三役は手にそれぞれの役職が書かれた提灯を持つ。中央四つ角に向かう際は鳴り物を鳴らしたりせず、

静かに中央四つ角へ向かう。

二三時五〇分頃、全町の三役と高張が中央四つ角に到着する。中央四つ角を四方から取り囲むように、五町の高張と会長が並ぶ。到着すると、爆竹が鳴るまでの間、五町の向上会会長が揃い、今年の祭りの成功と無事を祈って、挨拶と酒を一杯交わす【写真15】。

二四時、年番向上会が道路の中央で爆竹をあげる。この合図をもって、風鎮祭の開始となる。本来は、爆竹の後、年番向上会から順に中央四つ角にて演芸を披露するが、二〇二二年はコロナ禍ということで演芸は行われず、各町がお囃子を鳴らす「打ち込み」のみが行われた【写真16】。

例年、それぞれの向上会は高森商店街内で演芸を披露しながら、自町へ戻っていくが、二〇二二年は演芸がな



写真16 目覚し
(2022年8月18日 松岡撮影)



写真15 中央四つ角に集まる五町会長
(2022年8月18日 松岡撮影)

かったため、祭りの開始を告げるマイクやお囃子とともに自町へ戻っていった。従来は、一時間ほどかけて高森商店街や自町内をまわった後、公民館へ戻るが、二〇二二年は一〇分程度で公民館へ戻ったところもあった。また、お囃子を鳴らしたトラックだけ、町内を回る向上会もあり、向上会ごとに対応が様々であった。なお、他町のトラックが他町を通行する時はトラックのスピーカーの音を消して通るようにしている。これは、事前に向上会長同士で話し合った際に申し合わせたことだろう。

公民館に三役と高張が戻ると、翌日のスケジュールを確認し、この日は解散となった。

二 八月一九日：にわか一日目

風鎮祭一日目は、おもに高森阿蘇神社での五穀豊穰祈願祭、総踊り、にわか、花火の打ち上げが行われた。以下、向上会が関係したところを中心に述べる。

(一) 五穀豊穰祈願祭

朝一一時より、高森阿蘇神社において五穀豊穰祈願祭が行われた(詳細については第I部第四章)。五穀豊穰祈願祭における供物の準備や世話は年番向上会の役割とされている。

年番以外の向上会三役も五穀豊穰祈願祭に参列する。開始一五分程前に、向上会の三役がお供えの日本酒を携えて、高森阿蘇神社へ到着する。

神事終了後、五町向上会の会長が境内の脇に集まり、二〇日夜に実施

されるにわかコンクールの順番をくじ引きで決めていた。

くじは年番向上会が準備をし、じゃんけんでくじを引く順番を決めた後（年番向上会は最後にひく）、割り箸に番号を書いたくじを引く。コンクールの順番は評価（優勝できるか）に大きく影響するとみな考えているため、責任重大である【写真17】。



写真17 にわかコンクールの順番決め
(2022年8月19日 松岡撮影)

(二) にわかに向けた準備

平成二七年（二〇一五）までは、一日目午前中から昼間にかけて子供手踊り、二日目午前中から昼間にかけて向上会による仮装行列が行われていた。平成二八年（二〇一六）からは仮装行列が取りやめとなり、子供手踊りが二日目午前中に行われるように変更となった。また、二〇二二年は子供手踊りも実施されなかったため、一日目、二日目とも昼間は向上会員が関わる行事はとくに行われなかった。

こうした事情により、現在、昼間はそれぞれで過ごし、夕方にまた公民館へ集合する。以前は、午前中にも行事があったため、祭りの期間中は家には戻らず、空いた時間は公民館に待機しているという向上会員も少なくなかった。祭りの期間、公民館に寝泊まりし、食事も公民館で取ることを、「ムコメシ、ムコクソ」と言った。公民館にシャワー設備が

ある町内もあり、家に帰らずとも化粧を落としたり、着替えができるようになった。

一七時頃から公民館に向上会員が集まってくる。お囃子の人達も集合し、向上会員と挨拶を交わす。公民館に到着した者から、軽く食事を取り、その後になわか化粧をしたり衣装に着替える。また、この後上演する演目の最終的な調整を行う者もいる。

化粧は各自で思い思いに行っている。今は白粉で顔を白くする者がほとんどだが、かつてはそのような白塗りはしていなかったという話も聞かれた。どのような道具で化粧をするかも個人の好みにより、例えば眉を黒くするのも黒ずみを使う者もいればマジックで描く者もいる。また、例えば青色の顔料は髭に、赤色の顔料は頬に、というようにして使われている。そのほか、現在の演者の多くが役柄とは必ずしも関係しない化粧をしている【写真18】。

化粧が済むと、にわか的小道具や道中の飲料などをトラックに積み込み、出発に向けた準備を行う。そのような作業をしていると、演者としては出演しない、手伝いの向上会OBも公民館にやって来る。また、総踊りの人達が公民館前を通ると、法被を着て通りに出て、声援を送る向上会もある。



写真18 化粧をする様子
(2022年8月19日下町向上会 松岡撮影)

(三) にわか

一九時、爆竹の合図とともに、一日目のにわか運行がスタートする。この時、目覚しと同様、出発前に御神酒を一杯飲んでから出発する。

一日目は、各向上会ともその年作った演目を一通り披露する。実際に客の前で披露し、その反応をみて、翌日のにわかコンクールで演じるにわかを決める向上会も多い。各向上会の上演一覧と移動舞台のルートは次のとおりである(資料一)。ただし、花火があがる時間帯(二〇時～二〇時半頃)は観客も花火に関心がいくこと、打ち上げ花火の音でにわか台詞がかき消されることから、にわか上演を中止する。

二〇二二年は、コロナ禍でのにわか上演ということで、舞台にあがる演者はすべて透明のフェイスガードを着用して演じることが決められた。

また、二〇二二年のみ実施された企画として、吉本興業の芸人と向上会員と一緒ににわかを行うコラボ企画がある。これは中央四つ角に設置されたステージで、それぞれの向上会に一名の吉本芸人が加わり、一緒ににわかを演じるというものである。演目は向上会が作り、事前に何度か稽古も行われた。ステージでの上演は風鎮祭実行委員会によって審査が行われ、横町向上会が優勝した。

二三時頃、一日目の上演を終えると、それぞれ公民館に戻り、直会を行う。翌日も祭りがあるので、二時間程で終了し、それぞれ帰宅する。

にわか上演権に関する決まり事

先述したように、高張の役目は移動舞台の停止場所の確保、つまりにわか上演場所の確保である。高森では、先に高張提灯を立てたほうが上演の優先権を持つ決まりになっており、高張は移動舞台が到着する前

に上演場所へ向かう。そして、前の上演を終えた移動舞台は、高張がいる場所へと移動する。これが基本的な高張のルールである。これに加えて、いくつかの決まり事があり、にわか上演権を巡ってもめ事が起こらないようになってきている。その決まり事について、ここでは述べたい。

現在、にわか移動舞台は事前に警察署へ申請したルートに従って運行している。しかしながら、しかしながら、人が多く集まる中央四つ角や高森商店街の付近では、同じ時刻に他町の高張とすれ違うことがある。この時、どちらの移動舞台の高張が優先されるのかは決まりがある。かつては、高張同士の通行に関して次のような決まりがあった。

① 高張の追い越し禁止

同じ道路で二つの町内の高張が向かい

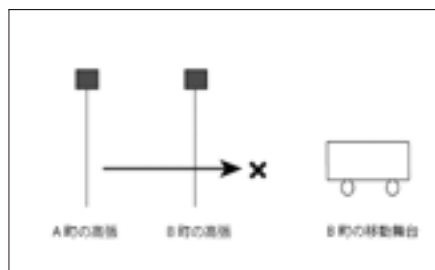


図2 高張のルール①
追い越し禁止

合った場合、後から来た高張(A町)は先に来ていた高張(B町)を追い越して通り過ぎてはならない【図2】。

② 通り抜けの禁止

交差点などにおいて、他町(B町)の高張と移動舞台の間を別の町内(A町)の高張が通り抜けてはならない【図3】。

現在は、このルールが少し

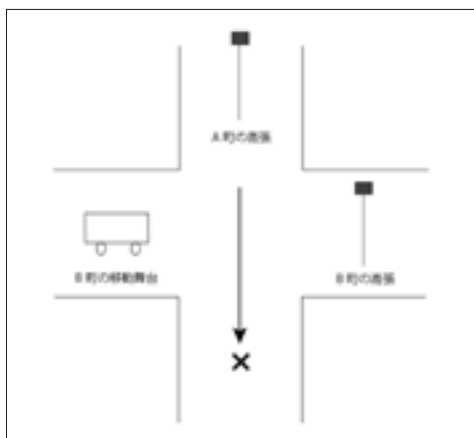


図3 高張のルール②
通り抜けの禁止

緩和され、高張を倒して通れば通行してよいことになっているほか、高張同士がすれ違う場合にも、お互い高張を倒したまま通るように決まっている。また、他の向上会が舞台上で上演中に舞台の後ろを通る際も高張を倒して通ることになっている。なお、舞台上でにわかを上演中に他の向上会員が舞台前を横切る際には法被を脱いで通る、もしくは最低でも姿勢を低くして通るといふ決まりがある。

三 八月二〇日：にわか二日目

二日目は、コロナ禍前までは昼間に子供手踊りを行っていたが、二〇二二年はコロナ禍による自粛ということで、子供手踊りは取りやめとなった。そのため、二日目の午前中から夕方まで向上会は特に役割はなかった。ただし、山引きでのお囃子は、にわかのお囃子と同じ人達が担当するため、向上会からお囃子の者へ出演依頼をしていた。また、山引きのトラックが公民館前を通る際は、通りに出て声援を送ることにしている向上会もある。

一六時半頃から、会長は節刀渡しのための着付けに向かう。残りの者はにわかコンクールに向けた最終調整をしたり、お囃子の練習をしたりしている。

一七時半頃、節刀渡しに参加する三役、高張、お囃子が中央四つ角へ向かう。下町向上会ではこの時も出発の際に御神酒を飲む（節刀渡しについては第I部第四章参照）。

一九時頃、節刀渡しが終わると、打ち込み開始となる。各町内のお囃子が一斉に演奏することを「打ち込み」と呼ぶ。打ち込みが終わると、そのままお囃子を乗せたトラックは最初の上演場所へと向かう。二

日目は公民館からスタートではないため、昼間、事前に一番目の上演場所へ移動舞台を持って行っておく。

二日目の各向上会の上演一覧と移動舞台のルートは次のとおりである（資料二）。ただし、二日目は二〇時半から中央四つ角のステージにてにわかコンクールが行われるため、一日目と比べて上演数は各向上会とも少ない（にわかコンクール中はその向上会も移動舞台を行わない）。

にわかコンクール

にわかコンクールは昭和六二年（一九八七）から行われている、風鎮祭のメインイベントの一つである。現在、にわかコンクールは高森の人々の間に定着し、にわかコンクールに出場し、優勝することは彼らの中で名誉なこととなっている。そのため、稽古の段階からコンクールのにわか候補を準備しておき、一日目での観客の反応を見ながらコンクールで上演する演目を決めるといふ向上会もある。

コンクールは風鎮祭実行委員会が主体となって行う。審査員は各町内から推薦された向上会OB（にわか経験者）のほか、高森町教育長や高森町警察署長など町内の主要な役職に就いている人も入っている。

なお、二〇二二年度は、下町向上会の優勝であった（二位以下は発表されなかった）。

にわかコンクール終了後、自町にて数本にわかを披露し、二日目の祭りが終了する（二三時頃）。二日間にわたるにわかの上演を終えると公民館へ戻り、直会を行う。にわかコンクールで優勝した向上会は祝勝会となり、よい成績をあげられなかった向上会は反省会となることが多い。



写真19 囃子トラックの装飾の片付け
(2022年8月21日昭和向上会 松岡撮影)



写真20 移動舞台の解体
(2022年8月21日下町向上会 松岡撮影)

四 八月二日

風鎮祭の翌日(二日)はそれぞれの向上会で片付けが行われる。にわかで使用した衣装や小道具の片付け、移動舞台やトラックの装飾や配電の取り外しが主な仕事である。衣装や小道具は倉庫にしまっておき、来年夏に使用するまで保管される【写真19】。

移動舞台については、多くの町内では装飾や配電を取り外した後はそのまま倉庫に保管しておくが、下町では全ての部材を外し、板の形状で公民館の倉庫に保管する【写真20】。

これらの片付けと並行して、三役は御花であがった寄付を集計し、商店への支払いなどを済ませます。

全ての片付けが終わると、向上会ごとに町内の飲食店で打ち上げを行い、向上会員を慰労する。後日、風鎮祭実行委員会の反省会(三役が出席する)をもって、全ての風鎮祭行事が終了する。

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	居酒屋大夢	19時00分	新人アルバイト
②	高森石油	19時15分	地域おこし協力隊
③	草村企業駐車場	19時32分	坊主やめます
④	四季彩	19時45分	将来の夢 (子供にわか)
⑤	塚本商店	20時44分	山菜採り
⑥	大塚商店	20時58分	将来の夢 (子供にわか)
⑦	中央四つ角	21時16分	老人ホーム
⑧	なべや	21時32分	坊主やめます
⑨	渡辺酒店	21時52分	老人ホーム
⑩	旭公民館	22時06分	将来の夢 (子供にわか)

資料一
にわか一日目・上演場所およびにわか外題
(一) 旭向上会



旭向上会一日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	福永カメラ	19時17分	高森リベンジャーズ
②	杉永石材	19時36分	令和水戸黄門
③	四季彩	19時56分	アマビエ高森に現る
④	草村企業	20時33分	本場のお笑い教えます
⑤	高森石油	20時48分	高森リベンジャーズ
⑥	桐原写真館	21時05分	鬼滅の刃高森編
⑦	阿蘇観光タクシー	21時23分	アマビエ高森に現る
⑧	天神区長宅前	21時37分	鬼滅の刃高森編
⑨	木崎商店	21時51分	高森リベンジャーズ
⑩	馬原医院	22時05分	にわか教えます
⑪	村田屋	22時19分	今日は買われてどこへ行く

(二) 上町向上会



上町向上会一日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	石坂家前	19時06分	お年寄の携帯料金
②	馬原内科前	19時37分	伝説のユーチューバー
③	阿蘇観光タクシー	19時50分	警察学校
④	居酒屋さくら	20時00分	伝説のユーチューバー
⑤	渡辺酒店	20時12分	大物新人 私はアイドル
⑥	なべや	20時42分	新型コロナ
⑦	中村薬局	21時00分	警察学校
⑧	中萬屋	21時15分	私はアイドル
⑨	中川家（大阪屋前）	21時37分	大物新人
⑩	豊前屋	21時52分	新型コロナ
⑪	ヘアークラブ岩下	22時14分	横町バトルシップ
⑫	一咲	22時20分	私はアイドル
⑬	高月家	22時59分	お年寄りの携帯料金

(三) 横町向上会



横町向上会一日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	ゲストハウスサニー	19時01分	嗚呼、熱闘甲子園
②	杉永石材本店	19時20分	高森リベンジャーズ
③	ひらもり建築工房	19時45分	嗚呼、熱闘甲子園
④	塚本商店	20時00分	嗚呼、熱闘甲子園
⑤	大塚商店	20時34分	高森リベンジャーズ
⑥	オパール前	20時46分	町おこし
⑦	中央四つ角	21時00分	096k歌劇団
⑧	なべや	21時20分	高森リベンジャーズ
⑨	渡辺酒店	21時35分	高森リベンジャーズ
⑩	桐原写真館	21時51分	ぶらり高森
⑪	草村企業駐車場前	22時08分	町おこし
⑫	本田たたみ店	22時20分	高森リベンジャーズ

(四) 下町向上会



下町向上会一日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	高森駅裏住宅地	18時20分	駅前開発
②	中川原団地	18時45分	WBC
③	飯干製材所	19時05分	Drコトー
④	高森駅前	19時20分	駅前開発
⑤	高森石油前	19時40分	おつかい (子供にわか) # (ハッシュタグ)
⑥	交流センター	20時40分	おつかい (子供にわか) WBC
⑦	渡辺酒店前	21時08分	# (ハッシュタグ)
⑧	なべや前	21時36分	おつかい (大人にわか)
⑨	中央四つ角	22時04分	Drコトー
⑩	福永写真前	22時20分	駅前開発
⑪	杉永石材前	22時43分	# (ハッシュタグ) WBC
⑫	四季彩前	23時05分	Drコトー

(五) 昭和向上会 ※二〇二三年度の上演情報



昭和向上会一日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	中萬屋	18時34分	坊主やめます
②	桐原写真館	19時22分	にゃあ
③	中央四つ角 (にわかコンクール)	—	新人アルバイト
④	渡辺酒店	22時11分	将来の夢 (子供にわか)
⑤	旭公民館	22時25分 22時31分	老人ホーム コンクール後の三人

資料二 旭向上会
にわか二日目・上演場所およびにわか外題



旭向上会二日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	工藤クリーニング	18時31分	アマビエ高森に現る
②	大阪寿司	18時45分	今日は買われてどこへ行く
③	ヘアークラブ岩下	19時04分	上町向上会にわか事情
④	豊前屋	19時17分	鬼滅の刃高森編
⑤	後藤又兵衛	19時34分	上町向上会にわか事情
⑥	中萬屋	19時47分	にわか教えます
⑦	中央四つ角 (にわかコンクール)	—	上町向上会にわか事情
⑧	スーパーよつかど	21時57分	アマビエ高森に現る 鬼滅の刃高森編 令和 water 黄門

(二) 上町向上会



上町向上会二日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	交流センター	18時35分	新型コロナ
②	四季彩	19時04分	伝説のユーチューバー
③	塚本商店	19時23分	警察学校
④	福永カメラ	19時38分	新型コロナ
⑤	中央四つ角 (にわかコンクール)	—	新型コロナ
⑥	中萬屋	22時	警察学校
⑦	豊前屋	22時20分	大物信心
⑧	ヘアークラブ岩下	22時38分	私はアイドル
⑨	一咲	22時52分	横町バトルシップ
⑩	高月家	23時23分	新型コロナ

(三) 横町向上会



横町向上会二日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	ヘアークラブ岩下	19時00分	高森リベンジャーズ
②	豊前屋	19時15分	町おこし
③	中萬屋	19時30分	高森リベンジャーズ
④	中央四つ角 (にわかコンクール)	—	嗚呼、熱闘甲子園
⑤	オパール美容院前	22時06分	高森リベンジャーズ 町おこし

(四) 下町向上会



下町向上会二日目 にわか上演場所

地図番号	場所	開始時刻	外題
①	豊前屋前	18時38分	Drコトー
②	中萬家前	18時54分 19時02分	駅前開発 おつかい (子供にわか)
③	スーパー四つ角前	19時15分	スイカ泥棒
④	福永カメラ前	19時30分 19時35分	おつかい (子供にわか) # (ハッシュタグ)
⑤	カミカミハウスサトウ	19時51分	WBC
⑥	中央四つ角 (にわかコンクール)	—	駅前開発
⑦	草村企業駐車場	22時03分 22時13分 22時27分 22時40分	WBC ゴルファー 駅前開発 駅前開発 (続き)

(五) 昭和向上会 ※二〇二三年度の上演情報



昭和向上会二日目 にわか上演場所

高森の今日は山引き風しずめ!

年番
旭
向
上
会



風鎮祭

ふうちんさい

令和4年

8月

19日(金)

20日(土)



ご協力をお願い

- 当日は換気・手指消毒を実施の上で参加ください。
- 換気ですら熱中症や体調が高い場合、体調がすぐれない方のご参加はご遠慮ください。
- 各自思いやりをもって感染拡大防止対策(密になる場でのマスク着用・大声をださないなど)をされた上でのご参加をお願いします。

令和4年 風鎮祭ポスター

第三章 造り物

はじめに

三年ぶりの開催となった二〇二二年度の風鎮祭には、計八基の造り物が出た。二〇一九年度の一二基よりも少ない出品となった。八月二〇日に実施された「風鎮祭造り物審査会」で決定された審査結果の順位は【表1】のとおりである。本章では、にわかと共に風鎮祭の目玉となっている造り物の二〇二二年度の様子を報告する。

【表1】

順位	区名	組名	作品名
特賞	旭	旭向上会	風を鎮める烏天狗
金賞一席	天神	天神区	山鳥の沢下り
金賞二席	横町	横町造り物愛好会	祭の女王蜂
金賞三席	下町	下町区	風鎮魚
銀賞一席	昭和	梅香苑デイスービス	梅太郎タートル(亀) 乗つとる 魚とる
銀賞二席	昭和	昭和第6組・7組	アマビエ
銀賞三席	横町	横町OB会	別所のオコゼ
銀賞四席	上町	上町向上会	アルパカと或る猿

第一節 二〇二二年度の各造り物の概要

現在、風鎮祭実行委員会では造り物の運営を第三部会が担う。出品された造り物が列をなして町内を巡る「山引き」に伴う交通規制や造り物審査会の運営などがこの第三部会で事前に話し合われる。

造り物は、風鎮祭一日目の昼までに五町の各地区で軽トラに載せて展示される。翌二日目の朝に「風鎮祭造り物審査」で順位が決定され、昼から一カ所に集合して展示される(造りもん大集合)。同日一五時頃から各向上会によるお囃子と作品紹介のアナウンスを伴って町内を巡行する(山引き)。山引きの後、造り物は再び各地区に戻って展示され、風鎮祭終了後の翌朝には全て解体される。

造り物にはにわかと共に風鎮祭の重要な構成要素となっている。かつては「一夜づくり」などといわれ、風鎮祭の本番直前に作るとされていたが、現在はライフスタイルの変化や人口減少などによって製作者や製作期間は出品団体によって異なっている。

そもそも「造り物」とは、日用品などを組み合わせて形を作り、出来上がった題材と素材とのギャップを楽しむ「見立て」の文化である。風鎮祭の造り物もこの「見立て」の発想に基づき、日用品のほか多種多様な素材を複数組み合わせで形作られている。題材は、動物や昆虫などの生き物が多く選ばれるほか、人気キャラクターなども見られる。

八基の出品となった二〇二二年度は、コロナ禍による二年間の休止の影響が大きかったことを示している。例年とはやや様子が異なるものの、本章では二〇二二年度の審査会の順位に従って各造り物について報告する。なお、二〇二三年度の風鎮祭において補足調査を行った。

一 特賞「風を鎮める烏天狗」(旭向上会)

寸法(概寸) 単位:cm	材料	製作人数	製作日数	展示場所
高さ一八〇×横一六五(羽含む) ×奥行七〇(羽含む)	土台:木材、金網、除草シート 頭部:黒漆塗椀、茶托、ヘアクリップ、トンゲ、木製スプーン、土瓶用つる、遮光ネット、鳶口の先、栓抜き、レンゲ 胴部:盆提灯の脚、剣道の防具(胴・垂)、簾、ソフトバレーボール、畳の縁布 羽・手部分:軍手、竹製魚籠、竹製手箕、畳の縁布、スコップ、ハッカー 扇:プラスチック製盆提灯の脚、竹製小型熊手、畳の縁布 脚部:モップ、スコップ、熊手、おしぼり受け、畳の縁布、トンゲ、バネ、ドリンクホルダー、 接合部:結束バンド、針金、たこ糸	五名程度	八月初旬から七日間程度	高森郵便局前

旭向上会会長(平成六年生)によると、三〇〜四〇歳くらいの向上会会員を中心に入れ替わりで製作したという。若い人はにわかに参加するため、比較的年齢が高い余裕のある会員を中心に作業したが、にわか



背面(吉留委員撮影)



左手部分拡大



顔部分拡大



脚部分拡大

参加しない。造り物を作るわけではない。土台は木材と針金を使用した。材料は、向上会会員が家から持参したものや旭公民館に保管されている過去の造り物の材料などを使用した。もともと鳥を作る予定だったが、会員の誰かが「天狗みたい」と言ったことから天狗に変更した。上半身を作っていく段階で当初の脚が小さくバランスが悪かったため大きくし、色味を足すためにスコップの爪を足したという。飾り付けには檜の葉を使用した。(調査日:二〇二二年八月一九日)



全体像

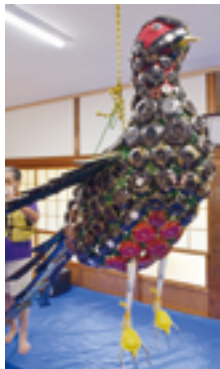
二 金賞一席「山鳥の沢下り」(天神区)

寸法(概寸) 単位:cm	高さ(頭頂〜脚先) 一六〇×横(体の高さ) 五〇×奥行 (尾の長さ) 一八〇
材料	土台:木材、金網 顔部分:黒漆塗茶蓋、おしぼり受、ぬいぐるみ用の動く 目玉、スコップ、今治タオル(赤) 羽・尾部分:プラスチック製盆提灯の脚 胴部分:黒漆塗椀、朱漆塗椀 脚部分:足ふきマット、タオル、洗濯ばさみ、プラス チック製スコップの先、針金ハッカー 接合部分:針金、畳糸
製作人数	七名程度
製作日数	七月下旬から一四日間程度(夜間のみ作業)
展示場所	篠田商店前

連日一九時から二二時の二時間程度、天神地区の集会所で六〇代後半〜七〇代後半のメンバー三〜四人ずつが作業に参加している。多くはかつて上町向上会でにわかをしていた。数年前に集会所を改修した際に、天井から造り物を吊り下げられるようフックを設置したという。かつては天神地区の各組ごとに作っていたが、人手不足によりしばらく中断し、三〇年程前から天神区で集まって作るようになったという。集会所には過去の造り物で使用された材料が種類別にケースに入れられ保管さ



顔部分拡大



頭部を上から下全体像
(報告者撮影)



底面

れている。飾り付けの際に軽トラ荷台の下部に回す幔幕は、四〜五年前に地区の住民から寄贈された着物を幕に仕立てたものという。天神区長(昭和二五年生)によると、二〇二二年度は知人から借りたキジの剥製を参照しながら作ったという。山鳥の顔の部分に使った赤いタオルは、今治タオル専門店ですと良いのを見つけて購入したという。「胴体と羽の比率、顔の表情が一番難しく、まずは胴体をきちんと作らねばならない」という。昔はシヨウケ(竹籠)など限られた材料しか無かったが、現在はホームセンターや一〇〇均などで入手できる材料の選択肢が広がり、題材を考えるのが大変という。土台は木材で基礎を作り、その上から材料が結びつけやすい金網を張る。お椀などの紐付け方が難しく、継承が課題となっている(調査日:二〇二二年八月一日・二二日。※二〇二三年八月六日・一一日補足調査)。



全体像

三 金賞二席 「祭の女王蜂」(横町造り物愛好会)

寸法(概寸) 単位:cm	高さ(頭頂〜脚先) 一六〇×横(体の高さ) 五〇×奥行(尾の長さ) 一八〇
材料	土台:木材、金網 顔部:剣道の防具(胴)、おしぼり受、クッキングスプーン、スコップ、はたき、しゅろ縄の束 胴部:剣道の防具(胴) 竹製ざる、プラスチック製ちり取り、トラロープ、鰻筈 羽部分:灯油ポンプ、ハンガー、網 脚部:たわし、プラスチック製盆提灯の脚、ロープ、針金ハッカー、自在ほうき、熊手
製作人数	三〜四名
製作日数	七月下旬から七日間程度
展示場所	豊前屋本店前(駐車場側)

岩下賢一氏(昭和四三年生)が中心となり、区外から熊谷文夫氏(昭和四〇年生)らが参加している。横町向上会を引退した後、二〇年くらい前から同メンバーで作っている。仕事の合間や休日を使って作業をする。数年前から熊谷氏の甥も帰省の際に手伝うことがある。

作業場所は、豊前屋の倉庫の一角である。豊前屋にはかつて横町六組で使っていた造り物の材料や道具が多く保管されており、基本的にそれらを使用する。材料を把握できているため、作っていく中で、各部位に



【胴部分底面】(吉留委員撮影)



お尻(針)部分



胴部分右側面(吉留委員撮影)



顔部分拡大

使えそうな材料を考えていく。
二〇二二年度は凶鑑などを参照して、キイロスズメバチを製作した。正確なタイトルは「六でもないけど祭の女王」である。「六」はもともと横町六組だったことに由来する。竹材を組んで金網を張った土台は、過去に何度か使用しているものである。(調査日:二〇二二年八月一日。※二〇二三年八月六日補足調査)



全体像（吉留委員撮影）

四 金賞三席 「風鎮魚」(下町区)

寸法(概寸) 単位:cm	高さ一六〇×横二四〇×奥行二五		
材料	土台:木材 全体:うちわ、扇子、レジャーシート(銀)、モップ、スリッパ、プラスチック製盆提灯の脚、オードブル用のプラスチック製皿、井ぶり、黒漆塗椀、クッション、おしぼり受、綿、クッション		
製作人数	三名		
製作日数	一日半程度		
展示場所	山村酒造前		
	接合部分:ネジ、タッカー、結束バンド		

製作の中心となった甲斐照男氏(昭和三四年生)によると、材料は以前造り物を出していた下町三区の倉庫に保管してあるものを提供してもらったという。メンバーは、甲斐氏をはじめ下町向上会会長経験者を含む。数年おきに造り物を作っており、特に二〇二二年度は下町区から造り物の一つが出ないことがわかったため、短期間ではあるものの有志で作ることとしたという。通常はタッカーやネジの使用は避けるが、今回は時間がなかったので使用したという。軽トラの荷台にブルーシートと黒の遮光ネットを敷き、海を表現した。一九日一〇時頃に山村酒造



左側面前方部



左側面後方部

(れいざん)前に移動し、作品名を書いた板を軽トラに括り付けて作業を終了した。(調査日:二〇二二年八月一八日。※二〇二三年八月一七日補足調査)。



全体像

五 銀賞一席「梅太郎タートル（亀）乗つとる 魚とる」
 （梅香苑デイスリーブス、昭和区）

寸法（概寸） 単位…cm	高さ二五〇×横一二〇×奥行一五〇
材料	土台…鉄骨、金網 梅太郎の頭部…竹製ざる、木製スプーン、ヘアクリップ、 マグネットクリップ、足ふきマット、手ぬぐい 梅太郎の胴部…竹製手箕、竹製ざる、剣道の防具（小手）、 法被（岳寿会／梅香苑）、藁、手拭い、竹製魚籠、介護用パジャマ（ズボン）、靴下 亀の頭部…おしぼり受、剣道の防具（胴）、徳利、丸たわし 亀の胴部…竹製ざる、スリッパ、簾 接合部分…テグス
製作人数	五〜六名
製作日数	七月末から延べ五日間程度
展示場所	田代スポーツ店前

梅香苑は、社会福祉法人岳寿会が運営する特別養護老人ホームである。昭和六・七組の造り物を製作している藤島昇氏に習い、二〇二二年度は久しぶりの製作で、二度目であるという。終業後に職員五〜六人で



浦島太郎の腰部部分
 （報告者撮影）



浦島太郎の頭部分拡大
 （報告者撮影）



亀の顔部分拡大（報告者撮影）



亀の右側面（報告者撮影）

交代しながら製作した。昭和区の田代スポーツ店前で展示を行った。
 なお、下町区に所在する岳寿会が運営するもう一つの特養施設「ひめゆり」も二〇一九年に初めて造り物を出してあり、二〇二三年度はひめゆりのみが造り物を出品した。（調査日…二〇二二年八月一日。※二〇二三年八月一日補足調査）



全体像

六 銀賞二席「アマビエ」(昭和6組・7組)

寸法(概寸) 単位:cm	高さ一九〇×横九〇×奥行八五
材料	土台:木材、金網 頭部:スポンジ、スコップ、ハンディファン、プラスチック ク製容器、ストロー 胴部:黒漆塗椀、朱漆塗椀、団扇 接合部分:糸、針金、結束バンド
製作人数	五名
製作日数	八月初旬から七日間程度
展示場所	個人宅前(高森石油向かい)

高森高校入口の民家の車庫で作業を行った。近年は昭和六・七組が合同で作っている。材料は昔の造り物のストックと百均やホームセンターで仕入れたものを使用する。作業場の車庫には、黒漆塗り椀や皿、スキ一の板など昔使用していた材料が残されている。

藤島昇氏(昭和二六年生)を棟梁に、井和幸氏(昭和一七年生)らが中心となって製作する。メンバーには、元昭和向上会員もいる。藤島氏が毎回構想を担当し、三月末くらいから「今年は何を作るか」を考え始めるという。今年はコロナ禍ということもあり、コロナ退散の意を込めて「アマビエ」をモチーフとした。



胴部分拡大(吉留委員撮影)



足もと部分拡大(吉留委員撮影)



右側面(吉留委員撮影)

アマビエの頭髪は当初割り箸を繋いだものを予定していたが、上手くいかなかったためストローを使うことに変更した。ストローの中に針金を通して長くしたものとなっている。黒いストローを使う予定だったが、百均でそろわなかったためピンクや青のストローを利用してカラフルな頭髪とした(調査日:二〇二二年八月一日・一六日)。



全体像

七 銀賞三席「別所のおコゼ」（横町OB会）

展示場所	製作日数	製作人数	寸法（概寸） 単位：cm	材料
豊前屋本店前（工場側）	八月初旬から延べ三日間程度	二名	高さ一七三×横四〇×奥行九三	土台：木材、金網 頭部：皿、湯呑、サングラス、スプーン、黒漆塗椀、たわし、植木鉢用水受皿、うちわ、モップ 胴部：黒漆塗椀、植木鉢用水受皿、ほうき、うちわ 背びれ部分：しゃもじ、プラスチック製盆提灯の脚、釣り用のブイ

「横町OB会」のメンバーは、平成三〇年（二〇一八）に横町向上会を引退した下田康弘氏（昭和五八年生）である。二〇一九、二〇二〇年に続き、二〇二二年で三回目の出品という。高森中学校近くの倉庫に保管されている造り物の材料は、かつて横町七組で使用していたもので二〇一一年のくまモンを最後に使われなくなっていた。七組は七軒ほどで構成されていたが、高齢化や人口減少により造り物を作る人が不在となっていたため、向上会を引退した下田氏が子どもの頃に造り物を作っ



右胸びれ拡大（吉留委員撮影）



尾びれ部分（吉留委員撮影）



顔部分正面

ている様子を見ていた経験を活かし、製作を始めた。一回目はロール紙の大きな芯を土台にSLを作ったという。八月に入ると一〇日頃に材料を確認し、内容を考える。作り方はオリジナルで、材料の接合は畳糸は使わず針金を使用する。二〇二二年は下田氏の父と二名で製作したという（調査日：二〇二三年六月二一日）。



全体像



全体像（オコゼ部分のみ）

八 銀賞四席「アルパカと或る猿」（上町向上会）

寸法（概寸） 単位…cm	高さ一九〇×横五〇×奥行一四五		
材料	土台…木材、金網 頭部…軍手、たわし、スポンジ、モップ、 胴部・脚部…軍手、雑巾、たわし、長靴		
製作人数	五名		
製作日数	八月初旬から延べ二日間程度		
展示場所	旧鶴屋酒店前（村田屋旅館周辺）		

製作の中心となった上町向上会員（昭和五七年生）によると、以前購入した軍手が大量に余っていたので活用を考え、凶鑑をめくりながらアルパカにすることをひらめいたという。向上会メンバーの今村翔太氏（平成三年生）が猿の着ぐるみを来て「或る猿」に扮し、アルパカの隣で身動きせずに造り物として立った。今村氏は平成二四年（二〇一二）頃から造り物の一部となる役を務める。展示時には立たず、山引きの時のみ登場した。上町向上会では、平成一四年（二〇〇二）に当時の向上会メンバーであった武田憲一氏（昭和四三年生）が造り物を作るようになった。以前は上町区だけで三基ほど出ていたといい、武田氏の祖父も造り物を作っていたというが、長らく作られなくなっていた。武田氏は、カラフルでよく知られているキャラクターを作り、向上会メンバー



お尻から脚部分（右側）
（松尾委員撮影）



顔部分（右側～正面）

が造り物のふりをして一緒に山引きに出るようになった。それが今日まで続けられてきた。（調査日…二〇二二年八月一九日。二〇二三年八月一、一七日補足調査。）
※二〇二三年度の風鎮祭では、警察の指導により山引きの際の造り物同乗は中止となった。



全体像

第二節 「風鎮祭造り物審査」の流れ

造り物の順位を決定する審査は、毎回「審査規定」に則って行われる。二〇二二年度の審査規定は以下のとおりである。なお、掲載にあたっては、「(4) 採点の点数配分」および「(6) 賞規定」の「(ハ) 賞金」金額については伏せた。

一 審査会

審査会は、風鎮祭実行委員会において委嘱せる者（各区推薦一名、各区から風鎮祭実行委員会が推薦した一名。）計一〇名をもって組織する。但し、風鎮祭実行委員長が必要と認めた時は、学識経験者を五名以内において委嘱することができる。

二 審査長（副審査長）

審査長は、風鎮祭実行委員長とし、副審査長は、風鎮祭実行委員会第三部会長とする。

三 審査

(イ) 造り物の完成陳列は、一九日午後二時までとする。陳列場所は、各区にて決定する。

(ロ) 審査員は、一九日午前一時事務局に集合の上うえ、作品の審査をなし、採点結果の投票を行う。尚、未完成のものは現状のまま審査する。

(ハ) 審査員は、全作品を審査採点するが自町の造り物には投票しない。

四 採点

(イ) 造り物は、大きいことを良いとするが、高さを地上三・五m以下とし、山引き（造り物引き廻し行列）に参加できるものに限る。

(A) 見立て

着想 材料

(B) 出来栄え（見栄え）

実感 色彩 大きさ

(ロ) 最高を一〇〇点から九五点（一作以上）とし、最低を五〇点以上とする。

(ハ) 造り物の材料は、解体後、原形に復し得るものであれば、いかなる材料を混合して制作しても差支えない。（切り刻み、着色は減点対象とする。）

五 選考会議

(イ) 一八日（二〇日の間違いか―筆者註）午前一時三〇分、風鎮祭造り物審査員会議で事務局が開封し、『入選』及び『特別賞』の該当作品を選考する。

(ロ) 審査長は、独自の立場で審査し、審査員において決定した等級につき、意見開陳を行い、審査員間に意見の相違があるときは票決する。

(ハ) 『特別賞』は、高森町賞・高森町議会賞・商工会賞・阿蘇森林組合高森支所賞・肥後銀行高森支店賞・県信用組合高森支店賞・J A阿蘇高森中央支所賞・高森観光協会賞・交通安全協会賞・安全運転管理者等協議会賞とし、高位入選作品の副賞とする。

六 賞規定

- (イ) 全作品に対し、参加奨励金を贈る。
- (ロ) 特賞には、優勝旗を贈る。(優勝旗は持ち回りとし、返還の際記念品を贈る。)
- (ハ) 入賞作品に対し、賞状(特賞及び金賞)と下記の賞金を贈る。
特賞(一組) 金賞(三組) 銀賞(四組) 銅賞(五組)
- 奨励賞
- (ニ) 審査結果の発表は、『造り物大集合』時とする。」

この規定は、「高森町風鎮祭造り物の伝統を保持し、本町独特の技術と創意を向上させる」ことを目的として定められたものである。この目的がいつから設けられたものか定かではないが、現在確認可能な高森町商工会資料では、昭和五〇年度以降の審査規定には毎年記されている。

審査員は、上町天神区・横町区・下町区・旭通区・昭和北南区の計五区から各区が推薦した一名と、風鎮祭実行委員会第三部会(造り物部会)が推薦した一名の二名ずつが選出され、計一〇名の採点を元に審査が行われる。審査員は全作品を審査し採点するが、自身が所属する町の造り物には投票できないことになっている。また、未完成のものがあった場合は、現状のまま採点することとなっている。

二〇二二年度は、風鎮祭初日の八月一九日午前一一時に高森町商工会から審査員へ審査道具一式が渡された。造り物は同日一二時までに各区の商店前などに展示されるため、審査員各自が各地区を巡回して採点した。

現在、造り物は軽トラックの荷台に飾り付けられるが、紅白の角材を



写真1 飾り付け(天神区)



写真2 飾り付け(旭向上会)



写真3 垂幕(昭和区)



写真4 垂幕(上町向上会)

使って櫓を立てて飾り付けたり【写真1・2】、荷台に垂幕を渡して装飾することもある。垂幕は端午の節句の矢旗(昭和区)や着物を幕に仕立てたもの(天神区)、商品宣伝用の旗(上町向上会)などが見られる【写真3・4】。

翌二〇日の一〇時半に各審査員が採点表を持ち寄り、山村酒造を会場に審査会が行われた【写真5】。審査員一名につき一〇〇点が与えられ、一〇名分の合計一〇〇〇点を満点とした総合点をもとに順位が決定



写真5 風鎮祭造り物審査会



写真6 表彰式

する。

点数の配分は「見立て」と「出来栄え（見栄え）」に大別され、「見立て」では題材の選定（着想）や使用した材料などが、「出来栄え（見栄え）」では彩りや大きさなどが審査の対象となっている。切断や穿孔など材料の加工や色付けなどは基本的に減点対象とされ、風鎮祭終了後に全ての材料を元通りに復すことが原則である。また、大きさは「大きいことを良いとする」としながらも、現在は三・五メートルまでの制限を設けている。以前は、荷車などに造り物を載せて山引きをしていたが、現在は全て軽トラックの荷台に載せられるため、その大きさに収まり、山引きの移動に差し支えない大きさが求められている。このほか、出品団体全てに対して参加奨励金が出、順位によって賞金と特別賞がそれぞれ贈られる。

審査結果は二〇日一三時から行われる「造りもん大集合」の頃に発表

される。順位は山村酒造の向かい側、下町・上町・横町・昭和町をつなぐ四つ角に設置されたにわかコンクリートの舞台に貼り出された。同日一五時から山引きを経て、一七時より表彰式が行われ、特賞を得た旭向上会がある旭通区長に優勝旗が授与された【写真6】。

第三節 「造りもん大集合」と「山引き」の流れ

初日に各地区で展示され審査を終えた造り物は、二日目の一三時から「造りもん大集合」として一堂に集合する。大集合する場所は、年番を勤める向上会が所属する地区に設定されるため、毎回変わる。山引きのスタート／ゴール地点、ルートも同様に毎回異なる。二〇二二年度は旭向上会が年番を務めたため、旭通が大集合と山引きのスタート／ゴール地点となった。山引きのルートは実行委員会第三部会で計画し、毎回造り物の出品団体に共有される。

二〇二二年度は、旭通の高森保育園前が大集合の場所となり、全造り物が勢ぞろいした。初日から二日目の午前中まで各地区で飾られた造り物が軽トラに乗って集合場所に一堂に並べられた【写真7】。造り物が並ぶ順番は年番を務める地区順で、二〇二二年度は旭通・上町・横町・下町・昭和の順で陳列された。

その後、同日一五〜一七時の約二時間をかけて造り物を軽トラに載せて各町を巡行する「山引き」が行われる。この山引きも大集合の陳列順に町内を回る。各地区の向上会の軽トラックが各町の造り物を先導し、向上会員が自町の造り物の解説や見どころをアナウンスして、荷台に乗った三味線と太鼓のお囃子が伴奏する【写真8】。



写真8 山引き



写真7 造りもん大集合



写真10 解体された造り物（横町造り物愛好会）
（堤委員撮影）



写真9 山引き巡行ルート（報告者撮影）

年番を務める向上会が所属する地区から山引きが始まるため、二〇二二年度の山引きは、大集合があった旭通の高森保育園前からスタートし、旭通から横町↓上町↓下町↓昭和の順で五町内それぞれをゆつくりと巡行した【写真9】。沿道の住民が自宅前に出、通過する造り物に拍手を送る姿も多く見られた。山引き終了後、造り物は各地区に戻り、風鎮祭終了まで再び各地区で展示され、八月二一日の朝にはそれぞれ解体された。各材料は次年度以降の造り物に再利用されるものもあるため、元の場所に保管される【写真10】。

おわりに

本稿では、二〇二二年度風鎮祭に出品された各造り物の概要と審査会、大集合、山引きの流れを報告した。二〇二二年度の風鎮祭は、新型コロナウイルスの影響で二年間の空白が生じたことに加え、感染症拡大傾向にあつて直前まで開催の可否が検討された。そのため、にわか練習期間だけでなく、造り物の製作期間にも大きな影響があり、以前よりも少ない八基の出品となった。

「高森のわか」が国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」となったことで、これまで以上にわかへの関心が集まったと同時に、造り物が風鎮祭全体を構成する重要な要素であることが本調査事業でも確認できたといえるだろう。

一方で、二〇〇三〇代を中心に構成される向上会とは異なり、造り物は五〇〇七〇代が製作の中心となっている。高齢化に加えて、向上会と同様、担い手の減少も懸念される。造り物は、かつて向上会引退者を中

心に各地区の隣組の住人が担い、多い時には全体で四〇〜五〇基が出ているという(第II部第三章を参照)。しかし、隣組の高齢化や人手不足を理由に出品が減少し、現在も大きな課題となっている。とはいえ、現役の向上会や向上会の引退者、地区外からの参加者、地元企業の参画などを得ながら、様々な工夫を凝らして造り物の製作が続けられている。これは、にわかと同様に造り物が風鎮祭の重要な構成要素として認識されているからである。にわか時代や場によって自在に変化する芸能であるのと同様、造り物もまた時代によって多様な変化を見せる一種の「民俗芸術」といえよう。出品団体にも頻繁な入れ替わりが見られるため、今後も継続的な記録が必要と考える。

〈付記〉

二〇二三年度風鎮祭に出品された造り物も全八基であった。記録として以下に審査結果を記す(写真は全て報告者撮影)。

写真番号	順位	区名	組名	タイトル
1	特賞	横町	横町造り物愛好会	巨大ワニ
2	金賞一席	下町	下町区	猛獣王
3	金賞二席	天神	天神区	ロイヤルペンギン
4	金賞三席	昭和	昭和第6組・7組	うさぎ
5	銀賞一席	下町	下町区有志の会	風鎮ヒラメント
6	銀賞二席	横町	横町OB会	カラスの王様
7	銀賞三席	上町	上町向上会	君たちは どう生きるか
8	銀賞四席	下町	下町ひめゆり	S D G s シャンデリア



4



3



2



1



8



7



6



5

第四章 高森阿蘇神社による神事

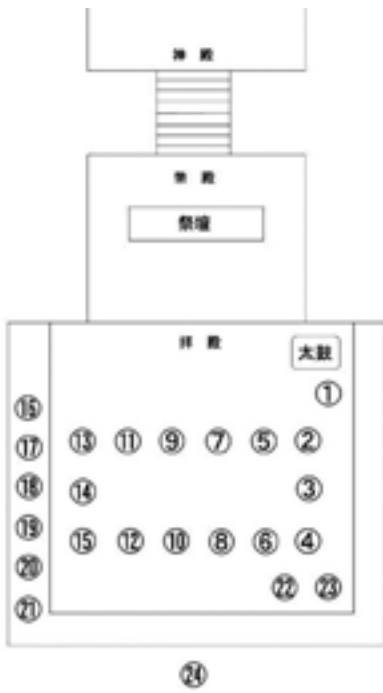
第一節 五穀豊穰祈願祭

- 一 日時 二〇二二年八月一九日 午前二時から二時
- 二 場所 高森阿蘇神社
- 三 神事の概要

阿蘇の神々と風の神に、台風などの厄災防除と五穀豊穰を祈願する。神事中は「風鎮めの御祭り並びに五穀豊穰祭」と称されていた。

この神事は例年、祭り二日目の午前におこなわれるが、二〇二二年は初日の午前開催となった。また、二〇一二年ころまでは神事のあと、境内で風鎮太鼓が奉納されていた。

四 参加者



席次図

- ① 宮司
- ② 高森町長
- ③ 高森町議会議長
- ④ 高森町教育長
- ⑤ 旭通区長
- ⑥ 旭向上会会長
- ⑦ 上町区長
- ⑧ 上町向上会会長
- ⑨ 横町区長
- ⑩ 横町向上会会長
- ⑪ 下町区長
- ⑫ 下町向上会会長
- ⑬ 昭和北区長
- ⑭ 昭和南区長
- ⑮ 昭和向上会会長
- ⑯ 商工会長
- ⑰ 観光協会会長
- ⑱ J A 阿蘇担当理事
- ⑲ 肥後銀行支店長
- ⑳ 信用組合支店長
- ㉑ 肥後銀行職員（撮影記録係として参加）
- ㉒ 実行委員長
- ㉓ 司会（実行委員）
- ㉔ 五町向上会の副会長と会計、旭向上会よりお手伝い三名、高森町関係者など。

五 式次第

九〇〇〇 宮司とその家族が境内と拝殿の掃除、御幣の準備などをおこなう。

九〇一〇 年番の旭町向上会から六名、神社着。

神饌、盆・盃・徳利、大きな皿などを運び入れる。

宮司、神饌（米、塩、昆布、イリコ、鯛、野菜、果物など）を祭壇に並べる。旭町向上会奉納の御神酒の化粧箱から一升瓶を取り出し、蓋を開けて祭壇の中央に置く。

旭町向上会、直会で出す御神酒の注ぎ方と配り方、イリコの出し方などを確認する。

一〇〇三〇 神社に参列者が集まってくる。

司会進行を務める実行委員と宮司とで打ち合わせ、人数を確認して座布団を並べる。

各向上会会長、奉納するお神酒（霊山一升瓶二本入りの化粧箱）を祭壇の左下に置いていく。

旭向上会は拝殿下で直会の酒の準備（徳利に酒を入れ、盃に移す作業）をおこなう。

*今年はコロナ感染予防対策として直会はしないことになつており、後から酒を戻した。

一〇…五〇 参会者たち、拝殿の決められた席に着く。座る場所は司会が確認して誘導。

一〇…五二 宮司入場、商工会長代理が挨拶に向かう。

一〇…五八 商工会長代理、前に出て参加者に挨拶。

「コロナ禍での実施の是非がいわれてきたが、向上会はコロナ検査をおこない、二日間、充分に対策をしていく。また、例年ならこの時間は子ども手踊りだが中止となったので、今年は初日に神事をすることにした。来年は神事が二日目になるかもしれないが、初日のこの時間にするのも意義があると思つている。」

一一…〇〇 神事開始、宮司が太鼓を叩いて神事の開始を告げる。

司会「ただいまより、風鎮めのみまつり、並びに五穀豊穣祭を執りおこないます。一同、神殿に向かつて一拝をお願いたします。」

一同、一拝

一一…〇一 修祓

宮司、幣殿の祭壇前へ座り祓詞を奏上。中央の大幣を持ち、祭壇の神饌、右横の棚の御幣を軽く祓う。参会者の前

に移動し、参会者の頭上で大幣を振つて祓う。

一…〇五 奉幣の儀
宮司、祭壇右横の棚に立てていた赤布を巻いた御幣を持つて神饌を祓う。祭壇の横から神殿前に移動し、先ほどの御幣を神殿の扉前に奉納する。

一一…〇九 献饌

宮司、祭壇中央の三方のお神酒徳利の蓋をあける。

一一…一一 祝詞奏上

宮司、祝詞奏上。参会者は低頭。

一一…一七 玉串拝礼

宮司、祭壇前の三方から玉串をひとつとつて奉納。三方をもつて拝殿まで下がり待機。司会に名前を呼ばれた人は前にでて、宮司から玉串をひとつ受けとり、祭壇に玉串を奉納して、二礼二拍一礼。関係者はその場で一緒に二礼二拍一礼する。

年番旭区長のときに他四町の区長及び向上会代表と一緒に二礼二拍一礼。

年番旭向上会長のとき、拝殿内の他向上会会長四名と、外にいた向上会全員と一緒に二礼二拍一礼。

一一…三二 撤饌

宮司、祭壇中央の三方のお神酒徳利の蓋をしめる。

一一…三四 司会の言葉に合わせて参会者一同、一礼。

司会「以上を持ちまして、風鎮めのみまつり、並びに五穀豊穣祭を終了いたします。」

参加者一同一礼し、神事終了。

一一三三七 拝殿内の参加者たち、マスクを外して集合写真撮影。

一一三三九 直会

拝殿内の参加者たちに旭向上会が空の盃を「エアお神酒です」「エアですみません、からっぽです」などといって配る。円になって空の盃を持って待機。全員に盃がいきわたったところで宮司から一言があり、宮司の「献杯」のその後、全員で「献杯」といって盃を頭上にかかげ、飲むふりをする。

一一三四〇 旭向上会、盃を回収してイリコを配る。各々、イリコをひとつとつたら、何もいわずその場ですぐ食べる。

一一三四一 全員で「ありがとうございました」と声をかけ、一礼して外に出る。

一一三四三 境内で向上会会長たちが、にわかコンテストの順番を決めるくじ引きをおこなう。くじ引きが終わったら、昭和町のにわかルート変更になったこと、コンテストとコンクルの時間などを確認。

一一三五〇 随時解散



高森阿蘇神社での五穀豊穰祭

第二節 節刀渡し

一 日時 二〇二二年八月二〇日 午後六時から六時半

二 場所 中央四つ角 臨時祭場

当日の午後四時半ころから風鎮祭実行委員らによって中央四つ角に臨時の祭壇が設けられる。約三メートル四方の四隅にブロックを置き、真竹を立て、高さ二メートルほどの位置で稲縄を張り巡らし、縄に紙垂を一片に三つ、計一二本垂らす。中央に祭壇を置く。祭壇の中央に節刀、左にお神酒（霊山一升瓶一本）、右に玉串、節刀と玉串の三方の間に大幣、奥の小机に大きい御幣五本が御幣立てに立てられる。祭壇の横に霊山の樽酒が置かれ、鏡開きの杵六本が準備される。

三 神事の概要

祭りを統括する年番向上会を交代する儀式。「節刀」とよばれる短刀の受け渡しをおこなう。

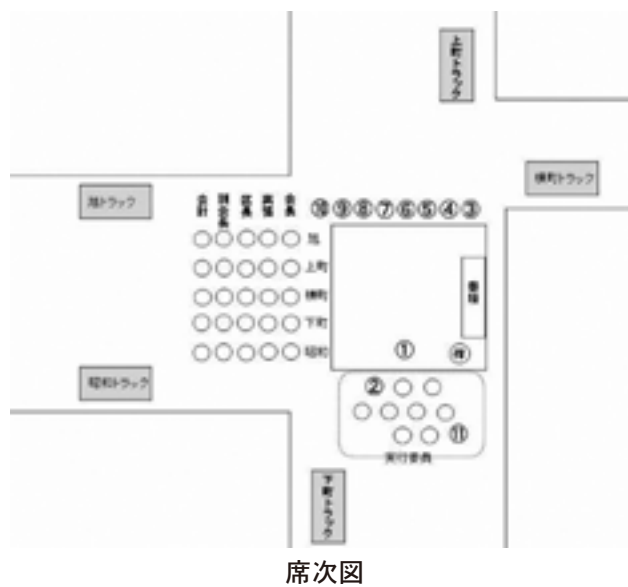
熊本県内では祭りの中心となる人・家・集団をセツトウといい「節頭」または「節当」の字があてられることが多い。また、当番を交代する儀礼を「セツトウワタシ」といい、酒を酌み交わし、御幣や祭事道具などを受け渡すというところが多い。「節刀」の字をあてて実際に刀の受け渡しをするのは県内ではここだけである。

昭和二五年に向上会と宮司の間で取り決めた「風鎮祭規約」によると、中央四つ角での「節刀渡し」の儀は、町民の要望により昭和二五年からはじめたもので、それまでは高森阿蘇神社の神前でおこなわれていた。

四 参加者

- ①宮司
- ②高森町商工会会長（代理）
- ③高森町町長

- ④高森町議会議長
- ⑤高森町教育長
- ⑥高森警察署長
- ⑦JA阿蘇高森支所担当理事
- ⑧阿蘇森林組合高森支所担当理事
- ⑨高森町観光協会会長
- ⑩肥後銀行高森支店長
- ⑪司会進行係



向上会の会長は袴を着て、頭に笠を被り、腰に扇子をさし、足袋に雪駄を履く。副会長と会計、高張は浴衣に各向上会の法被。区長も向上会の法被着用。他、参列者はそれぞれの所属の法被を着用している。

五 式次第

一六・二五 年番の旭向上会、節刀渡しに必要なもの（竹、ブロック、縄、お神酒など）を四つ角に運ぶ。四つ角では実行委員会により節頭渡しの会場設営がすでにはじまっている。

一六・三〇 各向上会会長、中萬屋で着物の着付けをしてもらう。また

中萬屋の社長に節刀渡しの上を教えてもらう。

一七三〇 四つ角のステージにて造り物表彰式がはじまる。

一七四一 ステージの造り物表彰式終了。

一七四二 四つ角に高森阿蘇神社宮司到着。旭町、昭和町の車、所定の位置に停車。

一七四七 着付けを終えた五町向上会長、中萬家からそろって出てきて四つ角で待機。高森町関係者、商工会ほか、神事参列者が四つ角に集まってくる。横町、上町、下町の車も到着し、所定の位置に停車。

一七五〇 祭壇に向かって五町向上会三役と高張提灯と区長が一行になつて並ぶ。先頭は向上会会長、次に高張、区長、向上会副会長、会計の順。会長と区長の足元に向上会の提灯を置いていける。他、向上会メンバーは各町の車の周りに待機。

一八〇〇 町内放送の「ふるさと」が流れ、爆竹があがる。

司会「ただいまより令和四年度風鎮祭、マチナカサイ、ならびに節刀渡しの儀を執りおこないます」

一八〇一 修祓

宮司、中央祭壇前で祓詞を奏上。大幣を持って祭壇を祓つたあと、懐から小さく切った紙を取りだし三回振りまく。

高森町長等の参列者側へ移動、頭上で大幣を三度振り、手に持った紙片を三回振りまいて参列者に一礼。中央の五町向上会側へ移動、頭上で大幣を三度振り、手に持った紙片を三回振りまいて参列者に一礼。実行委員側へ移動、頭上で大幣を三度振り、手に持った紙片を三回振りまいて参列

者に一礼。中央祭壇前に戻り一礼、大幣を祭壇に戻す。

一八〇六 祝詞奏上

宮司、中央祭壇前で祝詞を奏上。

一八一一 玉串拝礼

宮司が玉串をあげたら、司会に名前を呼ばれた人が前にでて玉串をあげる。

一八二二 節刀渡し

各向上会会長は足元の提灯を持って前へでて、祭壇前で横一列に並び足元に提灯を置く。宮司、中央祭壇の三方にのつていた節刀を手にとり、向上会会長らと向き合う。年番向上会の旭向上会会長と次の年番の上町向上会会長が一步前にでて向き合い、お互いに一礼。旭向上会会長、宮司から節刀を受け取り両手で持つ。実行委員のひとりが真ん中でマイクを持つ。旭向上会会長が節刀渡しの上を述べる。

「旭通向上会は令和四年度風鎮祭行事一斉をとどこりなく終了し、横町向上会、下町向上会、昭和向上会、立会いの下、令和四年度風鎮祭行事一斉を上町向上会へ申し送ります」

口上を述べ終えたら節刀を上町会長へ手渡す。上町向上会会長、節刀を両手で持って口上を述べる。

「上町向上会は、横町向上会、下町向上会、昭和向上会立会いの下、令和五年度風鎮祭行事一斉を旭向上会より確かに申し受けます」

他、三町の向上会会長が順に以下の口上を述べる。

「横町向上会、確かに見届けました」

「下町向上会、確かに見届けました」

「昭和向上会、確かに見届けました」

宮司、ひとつうなづき、

「ただいま、セツトウワタシの儀が滞りなく、あいすみましたので、ここでサラリをご一緒にお願ひします」

宮司の「ヨオオ」の掛け声で、参列者全員で手締め（三拍を三回 パンパンパン パンパンパン パンパンパン）をおこなう。

宮司「ありがとうございました」

一同礼

一八二二五 節刀渡し終了

上町向上会会長、節刀を宮司に渡し、五町向上会会長は元の提灯を持って元の列に戻る。宮司は節刀をもとの三方の上に置き、祭壇奥に立てていた御幣をもって五町向上会会長に一本ずつ配る。会長たちは配られた御幣を胸前に掲げ持ち、鏡開きが済むのを待つ。鏡開きに参加する人は祭壇横の樽酒の前に移動する。

一八二二七 鏡開き

町長、議長、教育長、商工会町、観光協会会長、警察署長の六名、エイエイの掛け声で酒樽に杵を打ちこむ。

アナウンス「本日はセレモニーだけで振る舞いはなしとさせていただきます」

一八二二八

鏡開き参加者、元の位置に戻る。
神事終了

会場アナウンス「神事、無事終了しました。それでは各向上会、打ちこみ、はじめ！」

この掛け声で各町のお囃子が演奏しはじめる。宮司は一礼して祭壇の片付けをはじめ。向上会会長たちは着替えのため中萬家へ移動。副会長、会計、高張は各自の舞台へ移動。実行委員たちは会場の片づけを素早くおこなう。



節刀渡し

第Ⅱ部

論考編

第一章 高森のにわかの特徴

はじめに

本報告書でも述べているように、「高森のにわか」は風鎮祭を構成する中心的行事の一つである。祭り期間中の夕刻から夜にかけて、町内各所で賑やかに上演されるにわか舞台は、普段は静かな高森の町並みを一転させる。狭い通りを行き交う移動舞台や囃子のトラック、舞台上から聞こえるにわか台詞や三味線の音色、にわか化粧や衣装をした向会上の人々、そして年に一度のにわかを楽しむに近郷から集まった人々で、町は一気に華やいだ空気になる。

高森で演じられてきたにわかには特定の演目や台本があるわけではなく、毎年、向会上の人々によって上演演目が作られ、稽古し、演じられてきたものである。主たる演者組織である向会上では、それぞれの向会上において様々に創意工夫しながら、その年の演目を作り上げてきた。そのため、時代によってにわか演技や演じ方も多様に変化しながら、今日まで継承されている。

本章では、「高森のにわか」がどのように現在まで伝承されてきたのか、その歴史や演技の特徴、にわかを支えてきた伝承組織について整理する。さらに、今後の継承に向けた高森地区での取り組みについて述べる。

第一節 高森のにわか芸術的特徴

「にわか」とは、一般に滑稽を主とし、オチをつける特定の芸能名称

として広く知られる^①。地域や時代によって、俄、二輪加、仁和加、仁○加などと表記されてきたが、現在高森では特定の漢字を当てて書くことはない。

二〇二二年現在、高森のにわかには一つの演目がおおよそ一〇分であり、^② 衣装をした三人の演者の軽妙な台詞のやり取りによって集まった観客を笑わせる。上演される演目はその年かぎり、毎年新たに作られる。上演中稽古で練習した台詞のやり取りにくわえて、咄嗟にアドリブで台詞が変わったりすることもある。また、観客からの笑い声やヤジが飛びこともある。このように事前に決められた定型的な演技と、その場限りの演技が交じりあって、高森のにわか演じられている。そこで本節では、現在の風鎮祭で演じられているにわか様相について整理する。

一 にわか構成

二〇二二年時点において、高森のにわかには①口上、②道行き、③演技の開始、④道行き・場面転換、⑤落とし、⑥御花の披露という一連の流れで演じられる。それぞれ、次のような演技によって構成される。

(一) 口上

移動舞台が上演場所に到着すると、舞台中央に向上の法被を着用した青年が舞台中央に上がり、正面を向いて拍子木を「タン、タン、タン、タン、タタタタタタタタタタ、タン」と打つ。その後、口上を述べ、これから演じる外題名を告げる【写真1】。口上の文言は、五町向会上でほぼ共通している。

「とぎーい、とーぎい。ただいまよ
り、□□向上会演芸部一行がお送りし
ますにわかの外題は、○○○○○（外題
名）、○○○○○（外題名）。どうぞ最後
までごゆっくりご観覧のほどをー」

口上を終えると、再び拍子木を「タ
タタタタタタタタ、タン」と打ち

ながら舞台を降りる。拍子木を打ち終わったタイミングで、お囃子が「道行き（通称ポッチャン）」を弾き始める。

（二）道行き

口上が舞台を降りると、化粧や衣装を着た演者二名が「道行き」をしながら舞台上に登場する【写真2】。この時、舞台脇ではお囃子が「道行き（通称ポッチャン）」を演奏している。

「道行き」とは、「三步進んで二歩下が
る」という足の運びをしながら、舞台の上で
円を描くように移動する所作である。舞台上
を一周程度すると、お囃子のほうに軽く手を
あげて、道行きの終わりを合図する。道行き
が終わると、台詞のやり取りが始まる。

道行きでは、どの向上会も二名の演者が前
後に並び、舞台上をまわる。演技のなかで小
道具を使う場合は、手に持ち登場する。



写真1 口上



写真2 道行き

この時、後ろの演者が前に行く演者
の腰や衣装を持ちながら、道行きをす
る向上会もある【写真3】。こうする
ことで、共に移動していることを観客
側に印象づける。また、この後演じる
役柄に応じた道行きをするよう（例え
ば、女性を演じるのであれば、腰をか
がめて女性らしいしなやかな動きの道
行き）、先輩から指導されたという話も聞かれた。

なお、道行きは高森のにわかでも重要な要素であると考えられてお
り、「正しく道行きができていくかどうか」という点は、にわかコン
クルの審査基準の一つとなっている。

（三）演技の開始

道行きが終わると、演技が始まる。多くの場合、まず二名の演者が舞
台に立ち、台詞のやり取りが始まる。高森のにわかには掛け合いが基本と
され、一人が舞台上上がり長い時間台詞を発するというような演技はあ
まり良しとされない。やり取りの内容は演目ごとにそれぞれ異なるが、
近年はテレビなどのお笑い芸人の影響もあり、ボケ役とツッコミ役のや
り取りで話が進むものが多い。

（四）道行き・場面転換

話がある程度進むと、例えば「誰かに会いに行こう」や「別の場所に
出かけよう」といった台詞のやり取りがなされる。多くの演目では、後



写真3 道行き（腰をもつ）

半に登場人物が一人増えるが、後半から登場する演者は、ここでの道行きで加わる。このような場面転換の役割として、二度目の道行きが行われる。

まず、二度目の道行きになる直前に、舞台上の演者がお囃子のほうへ軽く手をあげて合図をする。そうすると、最初の道行きと同様、お囃子が「道行き」の演奏を始める。お囃子が鳴り始めると、舞台上にいた演者二人が最初の道行きと同様に「三步進んで二歩下がる」という足運びをしながら、舞台上を大きくまわる。後半から登場する演者は、この道行きの途中から舞台に上がり、先に舞台にいた演者とともに道行きをする。だいたい一周したところでお囃子に合図をし、道行きの演奏が止まると、道行きをやめ、台詞のやり取りを再開する。

(五) 落とし

にわかの場合は、「落とし」と呼ばれる掛け言葉や語呂合わせで終わる。多くの演目で、落としの前になると登場人物の一人がそれまでのやり取りに納得できないと言い出す。これに対し、別の登場人物がそうではないと言い、説明する。この説明のやり取りが、落としとなる。例えば、次のようなやり取りである。

「嗚呼、熱闘甲子園」(二〇二二年下町・にわかコンクール優勝作品)

野球のキャプテンAと選手Bは、決勝戦で勝つためにはどうしたらよいか、監督Cに相談する。すると監督Cは、野球選手Bが試合で打つために、監督Cが使っている杖を一〇〇円で買って、代わりに選手Bのバットを監督Cに二〇〇円で売るようにいう。なぜ、そのようにしないと

いけないのか納得できないAとBに対して、監督Cが次のようにいう。

C おまえどんな、まだわからんや

A わからん

(AとC、立ち位置を替わりCが中央に立つ)

C お客さんもわからんな

客 わからん

C わからんなら、お客さんもよーつと聞いとつてはいよ。こやつやは今、売り買いをした。売買(バイバイ)をすればサヨナラになるじゃ、ないか

※太字は定型的な言い回し

この演目の場合、「バイバイ」という言葉に、売り買いという意味の「売買」と、人と別れる際に手を振る「バイバイ」の二つの意味がかかっており、「バイバイ」という語が後の「サヨナラ」という語に結びついている。さらにこの演目の場合、「サヨナラ」に別れの意味の「サヨナラ」と、野球の「サヨナラホームラン」の意味がかけてある。つまり、「売買(バイバイ)をすればサヨナラになる」が、この演目の落としとなる。

くわえて落としでは、これから落としを述べることがわかるように、決まった所作や演者・観客とのやり取りがある。

まず、落としになる前に、落としを言う演者が「わからんな」という。それに対し、二人の演者が「わからん」という。そして、観客に対して、「お客さんもわからんな」といい、観客が「わからん」と応じ

る。すると、落としをいう演者が中央へ立ち位置を移動し、落としを述べる。落としをいう前には、「わからんなら、お客さんもよーっと聞いとつてはいよ」という場合が多い。そして、落としの最後につく「〜じゃないか」という言葉にあわせ、演者全員が両手を斜め下方向に広げながら右足を一步前に出し、左足は後方へ直角に曲げる所作をする【写真4】。落としを言い終わると、演者は舞台を降り、太鼓が「ドンドン」と二拍ほど鳴る。



写真4 落としのポーズ

落としの前に定型的な台詞のやり取りが入る点は美濃や南河内など他地域のにわかでもみられるが、落としの前の手足の所作や、「〜じゃないか」という台詞の言い回しは高森独自のものである。こうした定型的なやり取りは、この演目の落としが何であり、にわかが終わったことを観客に示す効果を生んでいると考えられる。

(六) 御花(おんはな)の披露

「落とし」まで言い終わると、演者は舞台から降りる。演者と入れ替わるように、法被を着た向上会員一名が舞台上がる。にわかの上演中、上演場所近くで営む商店や企業、住民は封筒に入れた御花を向上会へ渡す習慣がある。封筒の表には商店名や氏名が書かれ



写真5 御花の披露

ており、舞台にあがった向上会員が封筒に書かれた名前を読み上げる【写真5】。読み上げる文言も次のように定型で決まっている。

「花の御礼(おんれい)を申し上げます。右は○○○○様、○○○○様(同じ名前を二度繰り返す)。□□□□様、□□□□様。△△向上会演芸部一行にくださる御花(おんはな)、高いところからではございますが、ありがとうございます。ありがとうございました」

また、御花を読み上げる途中で、観客が御花を持つてくることもある。その場合は、すぐさま舞台上の向上会員に封筒を渡し、「またまた、一封〜」と言いながら追加の御花を読み上げる。御花を読み上げが終わると、舞台から向上会員が降りる。そして移動舞台を曳いて、次の上演場所へ移動する。

二 演目・登場人物・落とし・小道具

(一) 演目・題材

高森のにわかでは、どのような演目や題材が演じられているのか。高森では、上演台本などが公式に残されるといふことはなく^③、これまでどのような演目が演じられてきたのか、はっきりとしたことはわからない。

二〇二二年における各向上会の外題一覧については、第Ⅰ部第二章でまとめたとおりであるが、このうち、時事性のあるものとして、コロナ禍(新型コロナウイルス)・アマビエ・鬼滅の刃・東京リベンジャーズ・ユーチューバー・高森高校マンガ学科、096k歌劇団などがにわ

かの題材になった。選ばれる題材は、世間一般に流行しているもの（テレビや漫画など）や、ニュースのほかに、高森町内での話題（二〇二二年であれば、高森高校マンガ学科の新設や096k歌劇団）もにわか
の題材となってきた。

また、にわか
の題材に時事性のあるものを選ぶことは、にわか
の制作においても強く意識されている（第一部第二章）。にわか
を制作するうえで最初に行われることはその年に話題となった出来事や流行を皆で出し合うことであり、そのなかからにわか
の題材にできそうなものを取捨選択していく。しかしながら、観客が見て笑えるものでなければいけないため、特定の人物や対象を批判したり、不快にさせるような題材は避ける傾向にある。

このように、その時々
の流行や世相を取り入れ表現するという行為は、造り物や目覚し、仮装行列、子供手踊りと風鎮祭を構成する出し物に通底している精神性といえる。

（二）登場人物

にわか
の登場人物は、とくに決まりや傾向はなく、多種多様である。高森の住民、政治家、親子、店の店主など様々な職業の人々である。近年の世相を反映した有名なキャラクターや人物を真似ることもある。一方で、町内に住む実在の人物（例えば、町長や議員、〇〇商店の店主など町民であれば誰でも知っているような人物）を、具体的な個人名をあげて物真似するということはない。⁴⁾にわか
のなかで演じる場合は、実在の人物とは切り離し一般化させて登場させる。

登場人物の衣装は役柄に応じたものを着用することが多いが、男性の

役では腹巻きをしたり、ハゲ鬘を着用したりして、年配の男性姿を演出する。女性の役の場合は、スカートをはいたり、髪の長い鬘を着用したりして、女性であることがわかるようにする。高森では、これまで男性だけでにわか
を演じてきたため、女性役も男性が演じてきた。そのため、女性の役を演じる場合は、衣装だけでなく、しぐさや声色を女性っぽく変えて女性らしくみせる工夫もしている。

また、登場人物のキャラクターを演じるために、演者たちは顔に化粧を施している。現在の高森では、顔全体に白粉を塗り、その上に眉や髭、頬紅などを誇張して描いていく。祭り当日は一人の演者が複数の演目に出演するため、役柄に応じて化粧を変えたいことはせず、同じ化粧で通す。現在は白塗りを基本としたメイクを皆しているが、かつては白塗りの化粧はしていなかったという。昭和五〇年代頃、テレビタレントが白塗りでお笑い番組に出ているのを見た当時の向上会員がこうした化粧をしてにわか
を演じたら面白いと思いつき、始めたのだという。

（三）落とし

にわか
を制作する上でとくに気を配っている点は、「落とし」である。高森にわか
の場合、落としは同じ音の言葉（同音異義語）で落とす場合と、言葉の類推で落とす場合がある。

同音異義語の落としの例としては、「ヤクルトを飲めば、腸内（町内）活性化するじゃないか」（町おこし）（二〇二二年下町）がある。「町内」と「腸内」のように、同じ音で別の意味を持つ単語を考え、落としのフレーズを作っていく。

また、同音ではなく、慣用句や言葉の類推から落としとする場合もある

る。高森にわかの落としは同じ音（同音異義語）の原則が厳守されているわけではない⁵⁾。とくに、観客に途中で落としを悟られないようにするため、落としではあえて同音異義語にしない場合もある。例えば、次のような落としがみられる。

「アマビエ高森に現る」（二〇二二年上町）

おまえたちはよく喋りよるけん。お前たちは死んどらんバイ。昔から
 いうどが。死人に口無しじゃにやあか

演者たちが落としにこだわる理由として、演目の途中で観客に気付かれることなく、移動舞台が去ったあとではじめて何が落としたのかを理解できるにわかが良いとされる点がある。例えば、最後に落としを聞いた時に、「すーと頭に入り、納得できるものが良い」と話す、向
 上会OBの者もいる。また「ただの洒落じゃ、にわかにはならん」とも
 言われる。

そのため、つねににわかのネタや落としになるフレーズがないか考えているという話や、落としを考える際の参考として、落語や漫談（謎かけ）を参考にしていくという話が多く聞かれた。稽古でも時間をかけて意見交換がなされるところである。

「落とし」の評価に対する意識は、他地域のにわかでもみられる。例えば、岐阜県美濃市の美濃流し俄の場合、「理想的な俄とは」戻り囃子と共に去っていく俄連の背中に拍手を貰うものだという。つまり、観客が「落とし」の趣向に気づくのにほんの一瞬の間があるのが最上の俄だ（括弧内筆者註）⁶⁾と言われている。

このように、「落とし」の出来がにわかの出来に大きく左右し、重要だとする意識は、全国のにわかのに共通してみられる点である。

（四）小道具

にわかの演目によつては小道具を使う場合がある。小道具は、購入したもののほか、自作する場合もある。近年は、にわか用にデフォルメしているが実物に似せたものを作っている。こうした小道具類は各向上会でストックしておき、翌年以降のにわかでも使えるようにしている。

一方で、以前から使われている

小道具として格子戸がある【写真6】。これは高さ五〇センチ程の木製の小道具であるが、玄関の入り口として使うほか、演者の間に置くことで異なる空間の仕切りを表現したり、床に打ち付け音を鳴らすことで、戸を叩いている様子を表現したりする。何かに見立てる表現形式がみられることも、高森のにわかの特徴といえる。



写真6 格子戸の小道具

三 台詞（高森弁）・地域ネタ

高森にわかは、高森弁で演じることを決まりとする。高森弁の演技はにわかのコンクールの審査基準にもなっており、演技の上で遵守すべきことの一つとして意識されている。

彼らにわかのなかで使用している高森弁には、例えば「よだきい」〔「疲れる」の意〕や「くばいた」〔「くである」の意〕のように、青年たちが普段の会話のなかではあまり使わなくなっている表現も含まれる。

また、固有名詞も例えば「風鎮祭」を「ふうちんさい」ではなく、「ふうちんしゃあ」と発音するように、高森弁らしい言い方が意識されている。

他方で、現在のにわかに対し、高森弁ではなく標準語に近い話し方になりつつあると、青年たちの高森弁が希薄になっていることを危惧する声も聞かれた。高森弁で演じることで、演技に迫力が出るのだといい、高森弁で演じることに強いこだわりがあることがわかる。

高森弁での演技とあわせて特徴的なのは、演技のなかで高森に実在する商店や地名をあげたり、高森高校マンガ学科新設や高森駅再開発といった、近年高森町で話題となった実際の出来事を取り上げたりする点である。また、架空の場合でも「高森〇〇」として演じることもある。高森弁での演技にくわえ、実在の地名や町内の話題を取り上げること、観客に対し「この話が高森のことである」「自分たちの暮らしと地続きの話題である」ことを印象づけている。

四 移動舞台での上演

(一) 移動舞台

第一部第二章でも述べたように、高森のにわかは移動舞台と呼ばれる、移動型の簡易舞台の上で上演される。舞台上は横四メートル×奥行二・六メートルの広さで、演者三人が立って演技をするとちょうど収まる大きさである。常設舞台のように地面に建てられたステージではないため、道行きや大きな動作をすると、舞台が大きく揺れる。しかし、こ

うした舞台の不安定さが観客の笑いを誘引することもあり、にわかの上演における重要な装置となっている。

移動舞台には引き幕や背景幕などはなく、そのかわりに各向上会は飾りや商店ののれんなどを舞台の周囲や後方に飾っている。また近年、舞台上にはマイクやスピーカーが設置されており、演者の台詞が屋外でも聞こえるように工夫されている。

(二) 上演環境・場所

移動舞台での上演の特徴は、上演場所まで舞台が移動するという点である。にわかの上演時間になると、各向上会がそれぞれのルートで移動舞台を曳き町内をまわる(第一部第二章・資料一および資料二)。

このルートからわかるように、移動舞台は中央四つ角と呼ばれる高森の中心部とそこから四方に広がる商店街という町の中心部、および自町を主に移動する。上演場所にはあらかじめ「高張」と呼ばれる高張提灯を持った向上会員が立ち、場所取りをしている。高張による場所取りや移動舞台のすれ違いについてはルールがあり、詳細については第一部第二章に述べた。

町外からの見物客も多く集まる中央四つ角とその周辺と、自町の住民が主な観客となる自町ではやや雰囲気異なる。中央四つ角付近では、にわかのほかにも花火や露天を目当てに集まった町外からの見物客も多く、多数の観客が移動舞台を取り囲む。立ち止まって舞台を見る者もいれば、通り過ぎてしまう者もいる。向上会員たちはこうした雑踏のなかでにわかを演じなければならない。

他方で、自町での上演では演者の家族や自町の住民が観客の中心で、

そのなかにはかつてにわかを演じた向上会OBも含まれる。これらの人々は、「落とし」における演者からの呼びかけに積極的に対応したり、御花を出したりし、にわかの上演には欠かせない存在でもある。演者の側も演技中にアドリブを入れたり、無礼講的な雰囲気がある。

また、移動舞台の上演場所は交通規制がされていない道路も含まれ、必ずしも落ち着いた空間ではない。上演中は、舞台の前を歩行者や車が行き交うこともある。こうした雑踏のなかでの上演も高森のにわかの一つの特徴といえる。

五 高森のにわかの特徴

以上、高森のにわかの特徴について述べてきた。その特徴は定型的な演技演出様式の枠組みのなかで、時事性に富んだ内容の演目を作り上げるといふ点であろう。第一項で述べたように、口上から始まり、道行きを挟み、最後に落としで終わるといふ一連の流れは各向上会、各演目に共通している。こうした規定の枠組みのなかで、演目や落としの選定、登場人物、話の展開や台詞のやり取りといった点で工夫を凝らし、観客を楽しませる。とくに、演目や題材の選定では、世相や流行を反映したものを意識して選ばれてきた。これは、上演される演目がその年かぎりであることを前提としていることにも通底し、「一回性」というにわかの特徴が表れている面でもある。定型的な演技様式を守りつつ、それ以外の部分でどれほど観客を驚かせ、意表を突いたものを作り演じることができなのか。それがにわかの魅力に繋がっているのではないだろうか。

また、自らの言葉である高森弁で演じるといふことも特徴の一つである。高森弁で演じることの重要性や高森弁へのこだわりについては数多

くの意見が聞かれた。にわかでは方言の演技にくわえ、高森の住民でなければわからない題材や場所、「高森」という地名の多用もみられる。

このような方言での演技は、高森に限らず、博多仁和加（福岡県福岡市）、美濃流しにわか（岐阜県美濃市）など全国のにわかに共通する点である。例えば美濃では、祭りという場を用いて普段抱えている政治への皮肉や不満をにわかで表現しているのだと説明される。方言という自分たちの言語で演じること、演者も観客も「自分たちの話」として感じ取ることができる。にわかには、生活者からの目線から見た「高森のいま」が描き出されており、だからこそそなた々が楽しみ笑うことができるのではないだろうか。

最後に、「通り物」としてのにわかについて述べたい。第四項で述べたように、高森のにわかには移動舞台の上で演じられる。上演場所まで舞台を曳いていき、場所を変えながら一晩のうち十数力所で演じる。このような上演形態をとるにわかには全国でも高森のみであり、非常に特徴的である。

その一方で、囃子（屋台）を伴いながらにわかの一団が通りを練り歩く、いわゆる流しにわか形態は高森以外にも、美濃や博多、長崎県新上五島町有川など広くみられる。例えば美濃ではかつて通りからの「所望、所望」という声に応じて、その場でにわかに演じたと言われるが、いつの頃からか上演場所が固定化していき、臨時での上演は見られなくなっている。高森では臨時の上演について聞くことはできなかったが、もしかしたらかつてはそうした光景も見られたのかもしれない。

福原敏男が指摘するように近世の京都や大坂では祭礼の練り物とにわかとは不可分のものであり、古くは祭礼の練り物と共ににわかの一団が通

りを流して歩き、辻々でちよつとしたパフォーマンスを披露することをにわかと称した⁷⁾。今日の高森にて、移動舞台やお囃子のトラックとともに、にわか扮装をした人々が練り歩く光景は、「練り物」や「通り物」と呼ばれる仮装の風流行列との共通性も指摘できる。高森では、「にわか・造り物（山引き）・仮装行列（通しもん）」の三つが揃って風鎮祭⁸⁾と言われてきた。いずれにも共通するのは、世相を反映した造形物やパフォーマンスが、囃子（音楽）を伴いながら町内を練り歩くという点である。にわか・造り物・仮装行列のそれぞれ表現方法は異なるものの、その時々流行りの趣向で、見る者を驚かせ楽しませるといふ一回性・当座性という特徴は、風流の精神性、つまり風流の美意識が強く反映されているといえる。

これまで移動舞台の巡行についてはあまり言及されることはなかったが、通り物（練り物）として捉え直したとき、町内を巡行するということはじつは重要な要素ではないかと考える。

第二節 高森のにわかの変遷

高森のにわかはいつ頃からどのように演じられてきたのだろうか。風鎮祭の始まりは宝暦二年（一七五二）とされているが⁸⁾、現在この伝承の根拠となる史料の所在ははっきりしていない。また、本報告書でも述べているように、高森では上演台本などを書き残すということをしてこなかったため、時代ごとにどのようなにわか演じられてきたのかについては判然としないところが多い。そこで、本節では町内に伝わる祭礼文書群である「横町文書」および町民への聞き取り調査をもとに、これ

までのにわかの様子について若干の復元を試みたい。

一 江戸期

「横町文書」において「にわか」の文字が最初に確認できるのは、文化一三年（一八一六）七月、盆用品の購入として記された「にわか入用之うちわ式本」⁹⁾である。この時のにわかがどのようなものであったのかは不明だが、団扇を使い何かしらの芸を披露したのだと思われる。実はこの七年前の文化六年（一八〇九）には浄瑠璃本を三冊購入した記録も残っており¹⁰⁾、この頃にはすでに浄瑠璃など都市の芝居文化に親しむ土壌が醸成していたのではないかと推察される。さらに、盆の時期には「盆踊」¹¹⁾「俄并に踊」¹²⁾と称して芝居の一場面を模した踊り（ないし仮装行列のようなもの）を披露していたことが読み取れる。このほかに「盆俄」¹³⁾「俄踊」¹⁴⁾という記述も確認できる。

こうしたことから、江戸時代後期にはすでに盆の時期ににわかや踊りを上演する習俗が高森にはあり、おそらくそれは当時流行の芝居をパロディ化したものであったのではないかと考えられる。祭りのなかで浄瑠璃や歌舞伎の演目をもとにした仮装行列（練り物）を行い、これを「にわか」と称することは同時期の京都などでも確認でき¹⁵⁾、広く一般的に見られた庶民の娯楽であった。つまり、江戸後期には都市の庶民文化が南郷谷の一集落まで浸透していたということであり、言い換えると都市文化を受容するだけの素地がすでに醸成していたと言えるだろう。

二 明治期と戦前

明治以降も、俄は風鎮祭（山引き）における重要な出し物の一つであった。それは「俄山引」として「横町文書」のなかに数多く記載されることから読み取れる。しかしながら、造り物や仮装行列については題材等の記載がある年もある一方で⁽¹⁶⁾、にわかについては具体的にどのような演目が、どのように演じられていたのか、その詳細に関する記載はほとんど確認できない。また台本などが残されておらず、当時の様子を知る者もないため、現在では判然としない点が多に多い。

江戸期における高森のにわかには浄瑠璃や歌舞伎の演目を下地としたにわかであったことは前項にて述べたとおりであるが、戦後のにわか落語などをもとにした笑いの芸となつていくことから、この時期に大きく芸態が変化したと考えられる。しかしながら、どのような変遷を経て現行のような笑劇となつたのかという点については関係する史料がないため、現在では不明である。

三 戦後以降

第二次世界大戦の影響により中止されていた風鎮祭も、終戦の翌年昭和二年より再開された⁽¹⁷⁾。では、昭和二〇年代以降のにわかはそのように演じられてきたのだろうか。当時の様子を知る人々の聞き取り調査の内容をもとに記述していく。

昭和二〇年代頃のにわかには、例えば水戸黄門の諸国漫遊記を題材にして、移動舞台上で上演場所が変わることに水戸黄門が各地を周遊するといった内容のにわかで、最後の落としの部分だけ上演場所ごとに変更するといったものであった⁽¹⁸⁾。当時は古典落語やことわざを落としの題材

とすることも多かったという。このほか、近所の人の名前を出したり、夫婦喧嘩など本当に地元であった話をにわかネタにしたという話も聞かれた。

また、上町の七〇代男性の話によると、この男性が二〇代の頃に当時七〇歳くらいの高齢男性がかつてのにわかを披露してくれたことがあり、それは二人の演者が浴衣を着て、うちわを持ちながら立って会話をするというものであったという。今のようなコント調のものではなく、演者二人の会話のやり取りのなかに風刺を入れながら、観客を笑わせるものであったようである。落語の二人羽織もよく行った定番のネタであった。かつては浴衣を着ていたという話は別の住民からも聞くことができ、浴衣から役に応じた衣装に変化したのは肥後にわかのはつてん組の影響だともいう。

化粧についても、昭和五〇年代頃までは化粧をするのも女役のみで、男役は化粧をしなかったという。女役の化粧も、肥後にわか「おてもやん」のような、顔に白粉を塗って頬紅や口紅を付けるといった程度のものであった。現在のよう化粧に変わったのはその後で、テレビで志村けんなどテレビタレントの化粧を当時の青年たちが真似たのが始まりだったという。白塗りに派手なペイントを施す化粧について、始めた当初は「ピエロのようだ」と否定的な意見も見られたが、現在では各自が思い思いの化粧を施すことが定着し、高森にわかの一つの特徴となっている。

その後、高森のにわかに大きな影響を与えたのは、平成期におけるにわかコンクールの開始と対外公演活動であろう。コンクール開始直後からの「上町優勝一〇連覇」は、にわかコンクールの話題になると必ず話

題にあがる偉業であった。町民のにわかに対する意識向上や旧来のにわか改革を目指して、新たなにわかを作ろうと試みた当時の青年たちの活躍によって、にわか作風や化粧、衣装などが大きく変わり、その演技や精神は現在の向上会員たちに引き継がれている。

第三節 演者組織「向上会」

ここまで述べてきたように、にわかを演じるのは「向上会」と呼ばれる演者組織の人々である。向上会は風鎮祭の中心的な担い手であり、彼らの存在なしに祭りを行うことはできない。では、向上会とはどのような組織であり、どのような人々によって担われているのか。本節では、にわかを支えてきた伝承組織である向上会について整理する。

一 向上会の歴史

高森では、一九世紀半ば頃には既に、向上会の前身となる若者組が組織された⁽¹⁹⁾。昭和期に入り、昭和区が新たに設けられるまで、高森の若者組は上町、下町、横町の三町から構成されていた。各若者組はそれぞれの町内の頭文字をつけ、上若、下若、横若と呼ばれた。「横町文書」にも「横若」と彫られた公印が残る。

大正四年（一九一五）二月、高森町の若者組は高森青年会として一つにまとめられ、上若、下若、横若は高森青年会の下部組織にあたる分団にそれぞれ再編された⁽²⁰⁾。高森青年会は、「道徳心を涵養し旧来の悪慣習を打破し風俗を矯正し且つ知能を磨き勤勉の美風を養成し以て地方事業の発展を計る」ことを会の目的として結成され、入会年齢は「一六歳

以上四〇歳以下の男子」と定められた⁽²¹⁾。その後、大正六年（一九一七）に「満一六歳より三十五歳迄⁽²²⁾」と入会年齢を改正した。さらに、大正一一年（一九二二）には「三十歳迄⁽²³⁾」と、青年会に所属する青年の年齢が変更されていった。

そして、大正一五年（一九二六）八月に「向上会⁽²⁴⁾」が結成された。向上会結成について、『九日』では次のように報じている。なお、以下の史料に登場する高森青年団とは高森青年会のことである。

「高森町の向上会 自治を基調に青年団の改革

熊本県阿蘇郡高森青年団は十三日午後八時から有志会を開き同問題の研究討議をなし従来の制度を改正し先ず満二十歳以下を純真な修養方面の青年団とし二十一歳以上三十五歳以下の団員を自治的事業方面に活動する団体とし其名を高森町向上会と称し万事自治を基礎として自治の発展を図ると共に大に事業方面にも奉仕的活動は勿論修養に於ても各種の施設機関を設け更始所の実を挙ぐる事に決定し同会は当分会長を置かず之を合議制となし各部落に分会長以下の幹部を設くる筈であると⁽²⁵⁾」

記事によると、この時作られた向上会は「二十一歳以上三十五歳以下」の青年が加入する、「自治的事業方面に活動する団体」であった。向上会の年齢規定に関して、『高森町史 二』にも「戦前の向上会は二十歳から三十五歳迄を入会資格者とした⁽²⁶⁾」と記されている。このことから、「二〇歳から三五歳まで」という向上会の年齢規定は、向上会設立以後も有効だったことがわかる。なお、現在向上会員の退会時期が

慣例的に三五歳前後となつてゐることも、この時期に作られた年齢規則が影響してゐると考えられる。

向上会結成の背景には、大正一五年前後における高森町および風鎮祭が置かれていた状況がある。大正一〇年頃より交通インフラの整備が進み、風鎮祭へ広域からの集客が可能となつたことで、町外からの見物客を意識した祭りへと変わつていった。こうした状況と重なるように、昭和三年（一九二八）には国鉄高森線高森駅が開業し、更なる町の発展へと機運が高まつていった時期でもあつた。⁽²⁷⁾ 向上会結成の理由として、有志の青年たちが「青年団の改革」として従来の制度を改正し、既存の青年会とは別に向上会を新たに結成したことを挙げている点は、こうした当時の時代状況が大きく影響してゐると考えられる。高森青年会は、町部の上町、下町、横町と、農村部の上在、南在、津留、村上を一つの団体として結成されたのに対し、向上会は上町、下町、横町の三町に限られていたということも、町部である「高森」の発展に寄与する団体として向上会が位置づけられていたことの証左であろう。

じじつ、昭和二〇、三〇年代頃まで高森では青年団と向上会が併存する状況が続いていた。当時のことを知る話者によると、青年団は二五歳頃までの未婚の男性が入り、主に地域の清掃活動等の公共活動を行い、女性が入る処女会もあつた。一方で、向上会は一八歳から三五歳までの男性が入り、高森阿蘇神社夏祭りでの馬追い、風鎮祭、地藏祭りが主な仕事であつたという。⁽²⁸⁾ このように、青年団は主に公共に関わる活動、向上会は主に祭礼行事と大きく棲み分けられていた。その後、青年団が徐々に機能を失つていった一方で、高森の五町における祭りを運営する組織としての向上会が今日まで続いてきたと考えられる。

二 今日の向上会

では、今日の向上会はどのような人々によつて担われているのか。おもに二〇一〇年代以降の状況に即して述べていきたい。

第Ⅰ部第一章で述べたとおり、現在、各向上会とも一〜一五名ほどの人数で向上会の活動を行っている。かつては三五歳頃で退会という規則を設けていたが、近年は町の人口減少等の影響により会員不足が続いており、四〇代以上の会員もみられるようになってきている。くわえて、会長職経験者であつても引き続き向上会に残り、活動に関わり続けるメンバーもみられるようになってきた。本報告書でも述べているとおり、風鎮祭において向上会が担っている役割は大きく、十数名ほどの人数は必要である。そのため、向上会の退会年齢が上昇してきてゐるとみられる。

また、会員の出身・居住地に関しては、会員全員が町内出身もしくは在住者である向上会と、町内出身者はごく少数で、近隣地域に住む者の協力を仰ぎながら活動している向上会が存在する。向上会への町外出身・在住者の参加については、町民も理解を示しており、受け入れられている。町外の者が入る場合は、すでに加入している会員からの勧誘によることが多いという。

こうした会員の出身・居住地の変化は、会員の職業の変化にも現れる。高森の発展に寄与する組織として作られた向上会は主に商工業者の子弟たちによつて担われてきた。とくに高森商店街にて商売を営む者たちにとつて風鎮祭への関与や支援は重要であり、様々な形で関与してきた。筆者が平成二四年（二〇一二）にある向上会にて行った調査データによると、会員一三名のうち自営業者は一〇名（約七五パーセント）で

あった。また、親やその前の代から高森町内で商売を営む者は九名（約七〇パーセント）おり、高いジャンルは新聞販売、米穀・ガス販売、酒造業、石材業、自動車整備業、工務店など商工業者の子弟によって向上会が担われてきたことがわかる⁽²⁹⁾。しかしながら、高森商店街で商売を営む者が減少している近年では商工業者の子弟に加え、高森町役場職員などの公務員や福祉施設職員が多くなってきた。とくに町外出身者には高森町役場職員の者が多くみられる。他方で農業従事者はごく少数である。

また、向上会員の減少により、近年は女性を向上会員として受け入れるかどうかという議論も起こりつつある。これまで、向上会は男性のみで運営されてきた。お囃子や祭り当日のまかない係として女性が関わることはあったが、基本的には会員は男性のみとし、にわかを演じるのも男性のみであった。

以前は、「にわか」に入りたくても入れないということがあったとい、長男のみに限っていたわけではないが、次男三男などで入らない者もいた。とくに入会儀礼のようなものはなかったが、焼酎一升、豆腐、揚げを持って挨拶に行ったという。現在は、小屋入りで挨拶をすることで正式に入会したとみなす場合が多い。このように、以前は住民も多く、男性のみでも向上会の活動が維持できていた。しかしながら近年はすでに加入している会員からの勧誘によるものが多く、また、子供にわかをしていたので、自然に入ったという話も聞かれた。つまり、入会に至る動機や経緯が変化していることがみえる。

さらに、令和二年（二〇二〇）から高森町で活動する096k熊本歌劇団のメンバーが向上会員としてにわかに出演するということも見られ

るようになった。歌劇団のメンバー以外にも、女性がにわかをしている向上会もある。女性が舞台にあがりになわかを披露することについては様々な意見があるようだが、近年の動きとして指摘しておきたい。

三 向上会の活動

向上会がどのようににわかを作り、演じているのかについてはこれまで述べてきたとおりである。本項では、風鎮祭での関与および風鎮祭以外の活動について整理する。

(一) 風鎮祭における向上会の関わり

本報告書でも述べているように、風鎮祭において向上会が関わっているものは①にわか、②目覚し、③子供手踊り、④五穀豊穣祈願祭、⑤節刀渡しである。これにくわえ、二〇一五年までは仮装行列も向上会が担当していた。それぞれの活動の詳細については、各報告のとおりであるが、ここでは向上会が風鎮祭にあたって自町や風鎮祭実行委員会とどのように関わっているのかについて述べる。

まず、風鎮祭にあたって向上会がとくに気を配ることは出銭である。かつては、町内の商店を中心に出銭を集め、不足している金額分を各戸から集めたという。現在は、その年に必要な金額を区助成金として各戸から徴収している。徴収額は全戸均等とする町内が多いようである⁽³⁰⁾。

また、向上会の活動方針や出銭を含めた予算計画に対し、町内での監査機関として中老会がある。中老会とは、向上会経験者である年長者が加入している組織で、各町内にある。かつては区長経験者や議員経験者が務めたといい、厳しく怖い存在であったという。現在でも小屋入り前後

の時期に中老会が設けられ、そこで前年度の会計報告および今年度の予算書が承認される。

また、向上会は風鎮祭実行委員会ともその年の風鎮祭運営をめぐって様々にやり取りをする。実行委員会とのやり取りは主に各向上会の会長が行い、年番向上会が五町会として向上会の意見を取りまとめる。各向上会の意見をまとめ、実行委員会と調整・交渉するのも年番向上会の大きな務めである。

(二) 風鎮祭以外の活動

向上会は風鎮祭以外の祭りにも自町や高森町の祭礼行事に関わる。とくに向上会が関わる祭りとして地蔵祭りと高森阿蘇神社秋祭りがある。このほか、かつて関わっていたものとして高森阿蘇神社夏祭りでの馬追い行事がある。とくに、馬追い行事を行っていた頃は高森阿蘇神社夏祭りから風鎮祭、地蔵祭りとひと月近く祭りが続き、「夏の間はずっと祭りをしていくような感覚だった」と語る向上会員もいた。ここでは、地蔵祭りと高森阿蘇神社馬追い行事における向上会の関与について述べる。

地蔵祭り 風鎮祭の一週間後にあたる八月二四日に行われてきた。現

在は、風鎮祭の日程が変更になったこともあり、八月二四日に神事を、風鎮祭から一週間後の土曜日に縁日を行っている。これは、明治三四年(一九〇一)に高森で大火が起こったことを契機に祀られた、横町の勝軍地蔵の祭りで、その祭祀は向上会が順番で担当している。地蔵祭りの年番は、風鎮祭の年番向上会が兼ねることになっている。まず、年番向上会は地蔵祭りに先立ち、町内各戸に火伏せの御札を配布する。御札を刷るための木版も向上会で回しており、向上会員が御札をあらかじめ用

意する。御札を配布した際に住民からいただく寄付は、地蔵祭りの執行等に当てられる。神事当日、含蔵寺の住職による読経がある。これには五町向上会の三役が参列する。以前はその後に交流センターにて縁日が行われていたが、現在は風鎮祭の一週間後に行われている。内容はその年々で異なるが、町内の飲食店や商工会青年部による屋台や抽選会、向上会による出し物(にわか)などで大いに盛り上がる。こうした縁日の企画運営も年番向上会の役割である。

高森阿蘇神社馬追い行事 かつての向上会の青年達にとって風鎮祭と並んで重要であった行事が高森阿蘇神社夏祭りの馬追い行事(別称「馬とばせ」)である。高森阿蘇神社は高森地区の氏神社であり、七月三〇、三十一日に夏祭りが行われる。この祭りにおいて、高森商店街にて飾り馬(シャンシャン馬)を走らせる馬追い行事が二〇〇〇年頃まで行われていた。向上会の法被を着た青年たちが、興奮した馬の間近で手綱を持って馬を走らせる様子は、青年たちの勇敢さを見物客に示すもので、祭りの華でもあった。馬追い行事がなくなった現在では、高森阿蘇神社夏祭りと向上会の関わりは希薄になっている。

このように、向上会とは高森の五町独自に作られた組織であり、その実態は町内の祭礼行事を主に担ってきた組織であるといえる。結成の背景として高森町の発展への寄与が期待されていたように、祭礼の実施を一つの地域振興として捉え、経済効果も狙っていたと考えられる。その最たるものが風鎮祭であるといえるだろう。風鎮祭の中心的担い手である向上会が高森商店街を含む五町にのみ結成され、商工業者の子弟たちを中心に活動してきたことも決して偶然ではなく、高森商店街の発展が

町の発展に直結していたからといえよう。

しかしながら、地域経済の基盤が大きく変わった現代、向上会の会員も大きく変化している。今後、向上会をどのように運営、維持していくのかについては、様々な議論が出ているとも聞く。これからの風鎮祭のあり方、継承方法とも大きく関わることだが、大きな転換点にきているのかもしれない。

第四節 高森のにわか継承にむけて

平成三十一年（二〇一九）三月、「高森のにわか」が文化庁により記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択された。「にわか」としては全国で三件目の国選択無形民俗文化財となった。しかしながら、高森ではこれまで安定的に継承されてきたわけではなく、その時々で様々な試みが行われてきた。また、前節で述べたように担い手の確保といった課題もある。本節では、にわか継承にむけた様々な試みについて整理する。

一 にわかコンクール

にわかコンクール【写真7】は、風鎮祭二日日夜に行われている行事である。中央四つ角に設けられた特設ステージにおいて五町の向上会がにわかを披露し、審査員による採点を経てその年一番のにわかを表彰するものである。祭りの最後に行われるにわかコンクールは、風鎮祭一日目に行われる打ち上げ花火と並んで風鎮祭の目玉になっており、最も多くの見物客を集める。向上会もコンクールで優勝することは名誉なこと

と認識しており、優勝を目指して演目作りや稽古に励んでいる。

高森でにわかコンクールが始まったのは昭和六十二年（一九八七）であった。当時、高森では向上会のメンバーが少なくなるなどにわかへの関心が薄れており、技術力不足といった課題もあった。そこで、当時の向上会が中心となって、各向上会のにわかを評価するコンクールの開催を企画した。コンクールの実施は、風鎮祭への集客という面だけでなく、にわかを行う向上会にとっても効果があった。それまで、高森では各々が町内を巡回するため、向上会同士が互いの演技を見る機会はなかった。しかしながら、コンクールという場を通じてどのようなにわかを演じているのかをお互いに知ることができ、より切磋琢磨するようになった。

二〇二二年現在、にわかコンクールは次のような審査方法によって採点されている。

コンクールの審査基準（二〇二二年度）

- ・「落ち」は上品に面白く落としているか
- ・シナリオも大事である
- ・方言を生かし、下品な言葉は避ける
- ・特定の固有名詞は避ける（特に名指しで悪く言うこと）
- ・持ち時間は各向上会一〇分以内とする（基準）。一〇分を超過した場合



写真7 にわかコンクール

合は、一〇秒ごとに一点減点

・高森の「にわか」の個性、伝統が生きているか（道行き、口上の型、間の取り方）

採点方法

審査基準に従って、①筋書き・シナリオ（落ちを含む）、②演技・風刺、③個性・伝統、の三項目についてそれぞれ一〇点満点で採点する。

審査員

各町から推薦されたにわか経験者、および高森町教育長や高森警察署長など町内の有識者が採点する。

二 高森にわか保存会（高森社中）

にわかコンクールを始めた頃と同じ時期（平成初頭）、高森にわかの大外的な公演活動を行う団体として、高森にわか保存会（通称「高森社中」）が結成された。にわかコンクールを始めたことで町内のにわか自慢の人たちで集まり、公演依頼が来た時に出演する団体として結成した。ちよūdこの頃、にわか学術的な団体としてにわか学会が組織され、全国のにわか伝承地において全国大会が開かれていた。高森社中もこうした会にて高森にわかを披露し、高森にわか普及に貢献した⁽³¹⁾。

高森社中の公演は他町向上会の演者と組むため、演技を合わせるのが非常に難しかったという。

現在、高森にわか保存会は解散している。

三 子供にわか【写真8】

高森では、昭和六〇年より子供による子供にわかも行われるように

なった。子供にわかを行うかどうかは、その時々の上会会の判断による。現在は、昭和向上会、旭向上会が子供にわかを行っている。

子供にわかには、大人のにわかと同じように化粧をして移動舞台に上がり、にわかを演じる。にわか演目作りや指導は向上会が行う。子供がにわかを行うことについて否定的な声もあるが、子供の頃のにわかを経験しておくとして将来大人になった時に向上会に入る動機に繋がるとして子供にわかを積極的に行う向上会もある。じじつ、現役の向上会員の中には子供の頃のにわかを経験したことが、向上会への入会へ繋がったと語る向上会員もいる。こうした地道な取り組みが、にわか継承に繋がっているといえる。

四 高森高校・096k・吉本コラボ

最後に、高森のにわかをめぐる近年の取り組みについて触れたい。

高森高校の生徒による取り組み

二〇二一年度、県立高森高校二年生を対象とした「総合的探究の時間」において、高森高校生二名が高森にわかについて調査し、その成果をポスターにまとめ発表した。彼らはいずれも風鎮祭を行う五町在住ではないが、子供の頃から風鎮祭やにわかに親しんでいたこと、にわか国選無形民俗文化財となったことでのにわかに興味を持ち、調べることにした。具体的には、まず校内でにわか認知度についてのアンケートを行い、その



写真8 子供にわか

結果をまとめた。アンケート結果から、にわかを見たり、理解している人は半数ほどで、全く知らないと答えた人も約一七パーセントいることがわかった。また、にわかに興味があると答えた人は約二八パーセントで、約七二パーセントの人は興味がないと答えた。このような認知度の結果を受けて、高森高校生ににわかを知ってもらうため、高森町役場職員の協力のもと実際ににわかを習い、成果報告会で披露した⁽³²⁾。

調査を行った高森高校生は、高森町や南阿蘇村の人たちにはにわかのことを知っているが、それ以外の地域の人にはまだまだ認知度が低いため、にわかを知ってもらう機会を増やすことが大事と話す。風鎮祭は高森町の一大イベントで、祭りが無くなったら活気が無くなってしまふ。にわかについて知ってもらうことで、にわかを継承に繋げたいと希望を語った。

096k 熊本歌劇団・吉本興業の芸人との共演

二〇二二年・二〇二三年と、プロのタレントとの共演機会がみられるようになってきている。例えば、二〇二二年は風鎮祭実行委員会によるものとして、吉本興業の芸人と向上会と一緒ににわかを演じるという特別企画が行われた【写真9】。また、二〇二二年から旭向上会では096k熊本歌劇団の劇団員も交じってにわかを演じている【写真10】。このような外部者との共演については、とくに方言の問題（高森弁ではないこと）やにわか独特の演技や間の取り方について難しい部分があるものの、外部にも開いていきつつ継承していくという新たな動きを指摘しておきたい。



写真9 吉本芸人との共演



写真10
096k熊本歌劇団とのにわか

註

(1)宮田繁幸二〇一〇「にわか」神田より子・俵木悟編『民俗小辞典 神事と芸能』吉川弘文館。

(2)にわかコンクルールの規定でも、一演目一〇分を上演時間と定めている。

(3)例えば、高知県室戸市佐喜浜の佐喜浜にわかではその年の上演台本を神社に奉納するという慣習があり、明和年間（一七六四～一七七二）からのにわか上演台本が残されている。

(4)岐阜県美濃市の美濃流しにわかでは、市長など実在の人物を具体的に誰を真似ているのかわかるような容姿や声色で、にわかの中に登場させる。

(5)例えば、博多にわかでは同音異義語のルールが厳守される。

(6)西岡陽子二〇一七「祭礼俄の諸相と実際」植木行宣・樋口昭編『民俗文化の伝播と変容』岩田書院、四七九頁。

(7)福原敏男二〇二〇「遊郭と臨時祭における練物と俄」『仮装と俄の祭礼絵巻』岩田書院。

(8)高森町史編さん委員会編一九七九『高森町史』高森町、四六九頁。

(9)「盆諸人目日記調方之覚」（文化一三年・「横町文書」箱（大）一三二四）。

- (10) 「盆入目之事」(文化六年・「横町文書」箱(大)一三一六)。
- (11) 「盆踊諸入目扣」(文久三年・「横町文書」箱(大)一六一六八)。
- (12) 「俄并に踊目録扣」(慶応四年・「横町文書」箱(大)一一三二)。
- (13) 「祭礼初仕候事諸造用改附」(文政一〇年・「横町文書」箱(大)一三二七五)。
- (14) 「俄踊興行」(安政四年・「横町文書」箱(大)一六一二〇)。
- (15) 例えば、江戸時代末期に京都祇園の太鼓持ちであった富本繁太夫は自身が記した日記のなかで、天保六年(一八三五)の祇園祭の練り物において俄を披露し、そのなかで浄瑠璃の文句と節付けを頼まれたと記している(「筆まかせ」天保六年(一八三五)六月七日条・(竹内利美校訂一九六九「筆まかせ」宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成二』三一書房)。
- (16) 例えば、造り物については昭和九年の風鎮祭において蘇鉄や朝顔等の造り物が作られたこと(「風鎮祭々典記」(昭和九年・「横町文書」箱(小)一一二二)、仮装行列については昭和八年の風鎮祭において横町処女会による「非常時に起つ皇国女子軍」という題材の仮装行列が行われたこと(「風鎮祭々典記」(昭和八年・「横町文書」箱(小)一一一七)が記録簿に記載されている。
- (17) 「風鎮祭記」(昭和二年・「横町文書」箱(小)一一五九)。この時の記録には「拾年振りの復活」とあり、久しぶりの祭りの完全復活に町内の意見を聴取しながら祭りが挙行された様子がわかる。
- (18) 上町男性(昭和八年生)の話による。
- (19) 『管内実態調査書 阿蘇篇』(熊本県警察本部警務部教養課編、一九五九年)や『高森町郷土誌』(今村武彦編、稲本報徳舎、一九一五年)には、江戸期には既に若者組があったと記されている。また、「横町文書」を収める木箱の蓋に「嘉永四年 高森町 若者中」と記されていることや、「嘉永七年寅十月十日 若者組各口」と書かれた文書の存在が確認されていることから、少なくとも一九世紀半ばには高森町において若者組が結成されていたといえる。
- (20) 横若組の「記録簿」の末尾には「大正四年二月ヲ以テ横町若者組ヲ高森青年第五分会に改称シ新二記録簿ヲ製作ス」とあり、旧来の若者組を引き継ぐ形で、高森青年会へと改められたことがわかる。
- (21) 「高森町青年会規則」(大正四年七月)による(「横町文書」箱(中)一二七)。
- (22) 「初寄」(大正六年二月七日)による(「横町文書」箱(中)一二七)。
- (23) 「初寄」(大正二年旧一月一六日)による(「横町文書」箱(中)一二七)。
- (24) 「向上会」という名称を考案したのは、山村乙次郎氏だといわれている。彼は高森で造り酒屋を代々営む豊後屋に生まれ、向上会結成時は高森町議会議員を務め、後年、高森町長を務めた。町の名士として活躍した人物であった「高森町史編さん委員会編一九七九」。
- (25) 「高森町の向上会 自治を基調に青年団の改革」『九日』大正一五年八月二六日。
- (26) 高森町史編さん委員会編一九八〇『高森町史 二』高森町、七〇頁。
- (27) 松岡薫二〇二一『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社、一一〇頁。
- (28) 松岡薫二〇二一『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社、一一一頁。
- (29) 松岡薫二〇二一『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社、一四一―一四四頁。
- (30) 松岡薫二〇二一『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社、一三六頁。
- (31) 例えば高森社中として、福岡県八女市黒木町で開催されたにわか学会黒木大会に出演したことがあつた。他地域のにわかを見る機会を得て、勉強になったという。
- (32) 工藤勇哉・首藤蒼一郎二〇二一「高森町の「にわか」―継承していくためにできること―」(熊本県立高森高等学校 にわか研究班ポスター)

参考文献

松岡薫 二〇二一『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社。

第二章 熊本県内のにわかの特徴と分布

はじめに

高森のにわかの特徴を検討するため、県内のにわかを現状を確認するアンケート調査【表1】を実施し、それを基に文献調査や現地聞き取り調査ができた一三地区について、過去から現在に至るにわかをまとめた。最後に現時点の把握を基に県内のにわかの特徴を検討、高森のにわかを占める位置を考察した。

第一節 アンケート調査の結果から

令和三年（二〇二一）七月、高森町教育委員会を通じ県内四五市町村教育委員会と各商工会に調査票を送付してにわかの有無などについてアンケートを実施し、六三件の回答を得た。その結果、今も玉名市伊倉、熊本市、南阿蘇村（吉田新町、両併）、芦北町の五地区（高森を加えると六地区）でにわかが存在し、ほかに山鹿市など一一地区でかつてあったと報告され、県内一七地区でのにわか存在が確認された【図1】。

回答によると、現存するにわかとしては、玉名市では伊倉地区の「伊倉仁○加保存会」が敬老会など地区の各種イベントに出演し、指導する伊倉小、玉南中の生徒・児童らが学習発表で披露している。熊本市では「キンキラ劇団」「劇団きゃあ」「劇団肥後仁○加」の三つのプロ劇団が活動するほか、素人による「劇団U」「辛崎にわか」「砂原劇団」「けんちゃん劇団」の四劇団が祭礼、イベントなどで上演している。また、認

表 1 2021年に県内自治体・商工会を対象に実施したアンケートの調査票

●熊本県内「にわか」アンケート

2021年7月
高森町教育委員会
高森のにわか調査委員会

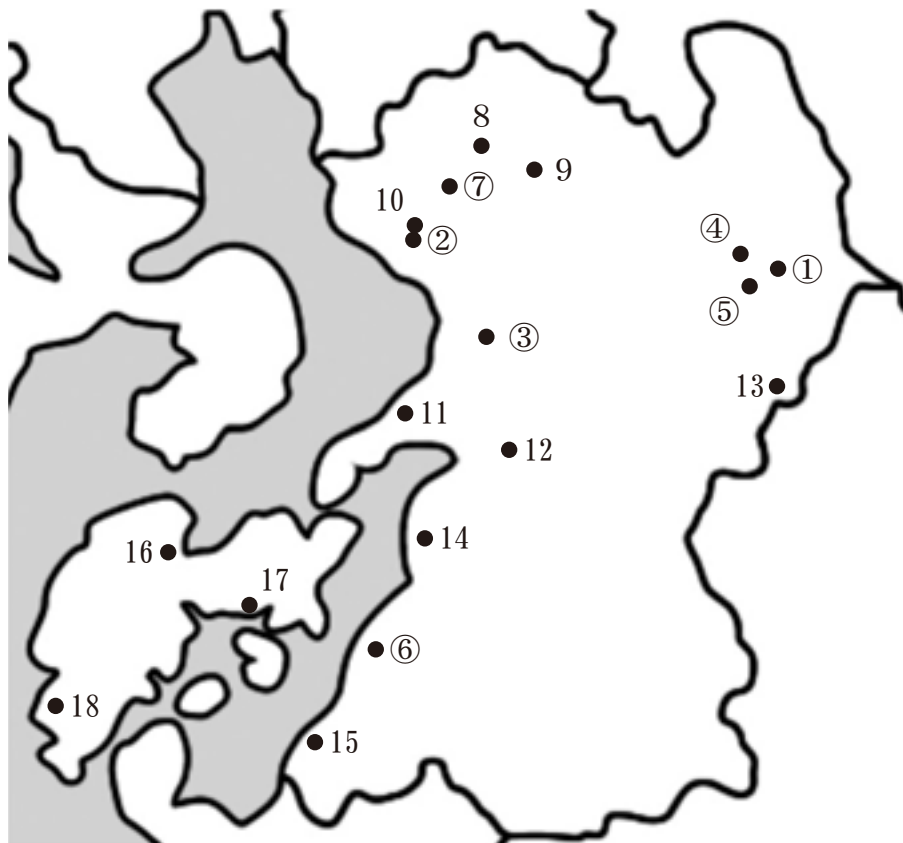
「高森のにわか」の調査に関して、県内で類似のにわか（俄）や造り物などが見られるか、その有無について調査しております。恐れ入りますが、管内の祭事につきまして、8月盆前までの返送をお願いします。該当箇所丸印をつけ、記入願います。

	(A)現在見られる	(B)かつて見られた	(A)それは、いつ、どこで、だれが行います(ました)か? どのようなもの(にわか例:笑いの寸劇、仮装、まつり、行列)でしょうか? (B)途絶えたのはいつ頃で、どう理由で途絶えたのでしょうか	活動の主体(団体等)は誰ですか	このことに詳しい方を教えて下さい(できれば連絡先も)
にわか	有り 無し 不明	有り 無し 不明			
造り物	有り 無し 不明	有り 無し 不明			
仮装行列	有り 無し 不明	有り 無し 不明			
その他笑いの出し物	有り 無し 不明	有り 無し 不明			

調査自治体名 () 担当部署ご担当者 () 連絡先電話番号 ()

知症啓発などを目的に医療、介護施設関連職員もにわかを活用している。南阿蘇村では吉田新町と両併の二地区でにわかが見られ、吉田新町では鎮火祭（八月二三日）、両併では両併夏まつり（八月一四日）で、それぞれ地区の若者らが地区の話題を基に毎年新作にわかを披露している。また、芦北町では百木地区の百木のさなぶり（七月第一日曜）で地区住民による「百木さなぶり保存会」が農作業を芸能化した笑いの寸劇を披露しているという。

かつてにわかが見られたとの回答は、山鹿市、菊池市、玉名市高瀬、宇土市、美里町、山都町馬見原、八代市、水俣市、天草市（本渡、倉岳、高浜）の十一地区から寄せられた。このうち山鹿市では旧菊鹿町松尾神社で毎年七月二十九日、地元住民らによる笑いの寸劇「本分にわか」が披露されていたが、高齢化などで数年前に途絶えたという。また、平成二七年（二〇一五）の「かほく祭」で、以前からのにわか復活公演があったが、現在は見られないようだ。菊池市は昭和の中頃まで町中で行われていたにわか記録が残っているという。宇土市では明治期には各地の祝賀・慶事で住民らの俄踊りが見られ、網田神社では毎年八月に雨乞い行事の一環として俄祭りが開かれていたが詳細は不明とされた。美里町は雨乞いの際ににわか披露された記録が旧砥用町史にある。山都町では馬見原の火伏地蔵祭のステージ出し物として地区青年部によって四、五〇年前までにわか披露されていたという。八代市では住吉神社で昭和一八、一九年まで例祭に博多にわか博多淡海らと呼んでいたほか、各神社で舞台をかけて地元住民らにわかを披露したりしていた。水俣市では祝賀行事などに三味線、太鼓のお囃子とともに笑いの劇、男性の女装、仮装行列などが見られたが、三、四〇年ほど前に途絶



にわか現存する地域	
①	高森町
②	玉名市伊倉
③	熊本市
④	南阿蘇村吉田新町
⑤	南阿蘇村両併
⑥	芦北町百木
⑦	和水町（注：アンケート外）
かつてにわか存在した地域	
8	山鹿市菊鹿町
9	菊池市
10	玉名市高瀬
11	宇土市網田
12	美里町
13	山都町馬見原
14	八代市
15	水俣市
16	天草市本渡
17	天草市倉岳
18	天草市高浜

図1 アンケート結果に基づく熊本県内のにわか所在図と一覧表（和水町はアンケート外）

えたという。天草市では昭和一二、一三年ごろ本渡の招魂祭の舞台で演じたにわか映像が残されている。また倉岳町宮田地区で寸劇のにわかがおこなわれ、天草町高浜では明治期にけんか神輿のような形態のにわかがあり、けんか騒動まで起こったという記録が残されている。

アンケートの結果、にわかが存在が報告された地区は一七地区と必ずしも多くはなかったが、一部地域に集中しているわけではなく、かつては県内全域でにわか普通存在したことをうかがわせた。また、俄踊りのほか仮装行列（水俣）やけんか神輿類似の催し（天草高浜）などにもわかと呼ばれていたとする回答は、にわか現在の一般的な認識である笑いの寸劇とどまらず、より広い概念でとらえられていたことを示唆するように受け止められた。

このほかアンケートでは、祭礼などで造り物や仮装行列の有無も尋ねた。風鎮祭ではにわか（笑劇）、造り物、仮装行列が同時に見られ（仮装行列は近年中断）、いずれも毎年新たな趣向で笑わせる「風流の精神」あふれるところが共通するとされている^①。そこで、同様の催しが見られる祭礼には、少なくともにわか存在できる土壌がある、とみなすことができるのではないかと考えた。

各地からの回答では、造り物について、南関町の南関夏まつり（大蛇山）、南阿蘇村吉田新町の鎮火祭、山都町馬見原の火伏地蔵祭、同町矢部の八朔祭（大造り物）、美里町砥用地区やまびこ祭、宇土市うと地蔵まつり、宇城市小川阿蘇神社祭礼、八代市鏡町の十八夜、球磨郡湯前町潮神社おっぱい祭り、天草市宮地岳かかし祭りの一〇地区で現存し、甲佐町あゆまつりでもかつて見られたことがわかった。

また、仮装行列は、山鹿市（地区運動会）、大津町、南関町（南関夏

祭り大行列）の三地区で今もあると回答。かつて見られた地区としては吉田新町（鎮火祭）、山都町（馬見原火伏地蔵祭・二瀬元地区水道祭）、美里町（三溪地区大行列）、宇土市（各地運動会）、芦北町（仮装行列もにわかのひとつ）、水俣市（同）、湯前町（運動会ほか各種イベント）、相良村（運動会）、天草市（牛深樽開き、洲本夏祭り、嫁もらい）など九地区から回答があった。

これらの回答からは高森同様の類似三種の催しが現存する地域は見られなかったが、隣接する吉田新町、山都町馬見原では昭和四〇年頃まで高森同様に行われていたことが確認された。また、各地の類似催しの存在は、にわか存在する可能性の広がりを示すものとも思われた。

なお、今回のアンケートに先行して県内のにわかを調査したものとして（１）平成一四年（二〇〇二）のにわか学会の全国調査^②、（２）平成二六年（二〇一四）同学会全国メール調査（３）平成一五年（二〇〇三）の県文化課のにわかと流鏝馬の所在確認データの三種が存在している【表２】。

このうち（１）のにわか学会の全国調査では熊本市、高森町、玉名市（伊倉、高瀬）の四地区でにわか存在していることを確認、（２）の同学会全国メール調査では玉名、山鹿、長洲、芦北の四地区の現存と、八代、氷川の二地区での断絶が確認されている。

このうちにわか確認数は、平成一五年（二〇〇三）の県文化課の確認データがもつとも多い。この調査では熊本市のプロ肥後にわか劇団はカウントされず、高森町の記載もない（未回答）が、今回のアンケートより数多く確認されており、両調査結果の違いはこの二〇年間にわかの衰微をうかがわせるものともいえそうだ。

なお、今回のアンケートには現れなかったが、和水町でも地区の青年団が戦国肥後国衆まつりでにわかを披露していることが現地調査で確認された。それを加えると、県内でにわかが発見される地域は七カ所ということになる。

一方、戦前の新聞記事によると、相良村、錦町以外の全県下で招魂祭、祝勝会、開校式などの祝いの場で俄踊りなどが広く行われていたことが確認できる。つまり、各種アンケートには現れないものの、戦前、特に明治・大正期にはほぼ全県で熊本や博多などのプロにわか劇団を招くほか、地域住民によるにわか盛んに行われていたことがわかる。にわかには明治期には行政調査の各種芸能の項目にカウントされず、「たかにわか」と軽く見られてきたこともあって、行政機関などを通じた把握には限界があることを念頭に置く必要があるだろう。

表2 各種調査で確認された、にわかが見られる地域の比較（在は現存、失は途絶）

調査年	調査主体	認識数	自治体・地名
2002年	にわか学会	在4	熊本市、高森町、玉名市伊倉、玉名市高瀬
2003年	熊本県文化課	在10	玉名市伊倉、富合町、玉東町、菊鹿町、波野村、白水村（吉田新町、両併）、坂本村、芦北町、あさぎり町
		失7	玉名市高瀬、水俣市、本渡市、牛深市、蘇陽町馬見原、久木野村、天草高浜
2014年	にわか学会 (自治体数)	在4	玉名市、山鹿市、長洲町、芦北町
		失2	八代市、氷川町
2021年	高森町教育委員会	在6	玉名市伊倉、熊本市、南阿蘇村（吉田新町、両併）、芦北町、※高森町
		失11	山鹿市菊鹿町、菊池市、玉名市高瀬、山都町馬見原、美里町砥用、宇土市網田、八代市、水俣市、天草市（本渡、倉岳、高浜）
2023年	別途調査委員確認	在1	和水町

これらを総合すると、明治・大正期には県内で広く、俄踊りや笑劇としてのにわかが見られたが、現在では高森などわずか七地区（和水町を含む）だけに減少したことがわかる。各地のにわかが多くが消滅したのは、主な担い手である若者が地域から奪われた昭和一〇年代の戦乱期や昭和三〇年代からの高度成長期とみられ、その後も娯楽の多様化など時代の変遷につれて消えていったようだ。そうした中で、今なお熊本市、高森町などに残るにわかには、身近な笑いを自ら作り続けた庶民の姿を伝える貴重な存在といえるだろう。

第二節 県内各地のにわか

一 プロが発見される熊本市のにわか

熊本市には「キンキラ劇団」（キンキラ陽子団長）、「劇団きやあ」（大田黒浩一座長）、「劇団肥後仁〇伽」（森都かおる座長）、「砂原劇団」（吉田武座長）、「劇団U」（黒木奈桜子会長）、「けんちゃん劇団」（浦上健二座長）などの劇団が、現在にもにわかを上演（劇団U以外はにわか専門）している。

このうち「キンキラ劇団」「劇団きやあ」「劇団肥後仁〇伽」の三劇団が、いわゆる「肥後にわか」の名で知られるプロの劇団である。九州では昭和二〇〜四〇年代に、博多や佐賀などのプロにわか劇団が人気を競った歴史があるが、今なおプロ劇団が存続するのは熊本のみとみられる。そのことが熊本のにわかをめぐり最大の特徴ともいえる。

ただ、かつて月に三〇回以上も舞台に立ったという全盛期の人気にはほど遠く、各劇団とも会館等で上演する大きな公演は年に一、二度程度

にとどまる。演者の高齢化や後継者不足が叫ばれて久しく、存続が危ぶまれているのが現状である。とはいえ、にわか衣装のままにタレントとしてテレビで活躍する姿も見られ、公演時には開演前からシニア層が行列を作ることも珍しくないなど、肥後にわかは今なお一定の存在感を示し続けている。

熊本にも江戸時代末にはにわかが存在したとみられるが、肥後にわかと呼ばれるようになったのは太平洋戦争後、熊本市の蓑田又男が結成した素人にわかが目ざされたところからと思われる³⁾。蓑田は元水飴職人だったが、戦地の演芸会で披露したにわか忘れられずに昭和二三年

(一九四八)、戦友と「ばってん組

(後に劇団)」を結

成。昭和二八年

(一九五三)から

地元ラジオで毎週

新作が放送された

ことをきっかけに、

県内外の祭りや農

協、青年団など各

種団体のイベント

で引っ張りだこに

なった【写真1】。

その中からばあさん姿の熊本弁で全



写真1 熊本市の琴平神社大祭での肥後にわか「ばってん組」(1957年10月(熊本日日新聞社提供))

国に知られたばってん荒川も登場。昭和三八年(一九六三)には浅草松竹演芸場に進出して人気のダンス劇団と笑いを競うまでになった。

蓑田が目指したのは、松竹新喜劇のような人情喜劇だった。とはいえ、台本はあっても稽古は昔ながらの口立て中心。使う言葉は熊本の下町言葉で、会場の雰囲気合わせたアドリブと最後のオトシ(オチ)で笑わせることを信条に、下ネタも厭わなかった。観客に向かって威勢よく説教もすれば、裾をめくってお色気も見せたばってん荒川の姿こそが、肥後にわかの特徴を体現していたといえるだろう【写真2】。

こうして人気を誇った肥後にわか活気を失ったのは昭和四〇年代後半、高度経済成長が地域の若者を都会に吸い上げ、祭りや伝統が失われた頃である。このため、ばらばらに活動してきた各劇団が合同で公演を開いたり、若手による劇団が生まれたりもしたが、盛り返すには至らなかった。

いわゆる肥後にわか戦後の新しいにわかといえるが、さかのばれば雨



写真2 ばってん荒川(左)とキンキラ陽子のにわか舞台

乞いの場や加藤清正の城下町づくりで生まれたとされる盆後踊や細川期の殿様祭りなどでもにわかが見られたようだ⁽⁴⁾。

明治期には、戦没者を慰霊する目的で開かれた招魂祭が素人が繰り出すにわか最大の舞台となっていたことが当時の新聞で見取れる【図2】。その俄踊りは「髭男の妙踊」「年増の若作りせる武士姿」など仮装した一団が「艶麗花を欺く少女」たちと共に踊り歩くようなものだったらしい⁽⁵⁾。そこに大阪や博多から訪れたにわか芝居の影響で、笑いの芝居へと発展。やがて運船利平や利幸商などプロのにわか師が現れ、県内の祭り・催事を巡るようになって戦後に劣らぬ人気を誇ったようだ。

運船のにわかにはSPレコードに録音されて残されている。ゆったりした語り口やオツペケペー節の歌声は一世代前の熊本のにわかを忍ばせる。蓑田によると、戦前のにわかには街角の仮設舞台に立つこともあれば、荷車を舞台に町を巡ったりもしていたようだ。

今では肥後にわか全盛期を支えた世代のほとんど亡くなっている。しかし、現在の劇団はいずれも往時の劇団に連なる人脈で構成され、熊本のにわか伝説は今につながっていると見える。このほか熊本各地の素人にわか劇団は、かつてばってん荒川らにあこがれたシニア層が懐かしさとともに往年の肥後にわか姿を再現しているように見える。



図2 『熊本新聞』に掲載された明治期の熊本招魂祭でのにわか一行の図（1902年5月10日）

二 『嶋屋日記』にみる菊池（隈府）のにわか

菊池地方の中心である隈府には、江戸時代の一〇〇年間にわたって代々の有力商人が書き継いだ日記『嶋屋日記』、寛文一二年（一六七二）～文久二年（一八六二）、昭和六二年（一九八七）翻刻刊行・菊池市史編纂委員会）が残されている。その中で、地域に伝わる松囃子の余興として町民らが繰り出した「通しもの」のことが詳しく記され、当事のにわか（俄）の姿も描かれている。

松囃子は室町時代に盛んに行われたとされる初春を祝う芸能のことである。菊池の松囃子は、風流系とされる博多の松囃子に対し、古い能の形を残すものとして一九七三年に国の無形民俗文化財に指定されている。『嶋屋日記』によると、一四世紀に懐良親王を迎えた菊池武光によつて年頭の祝儀としておこなわれたのを始まりとし、その後開催時期は七月に移行した。明和九年（一七七二）には、通しものを出す順番などを巡って町同士が争うなど熱気をはらんで盛大におこなわれていたようだ。

通しものは基本的に七月一日から一五日まで連夜あり、上町、下町、横町、中町などの町民が踊山や花山、狂言山など山車のほか造り物などを仕立てて練り歩き、町をにぎわせていたらしい。その中で安永四年（一七七五）に「裏ぼん中は双方より加勢いたし、俄相勤」とあるのが俄表記の初出とみられ、天明期には連日一〇組以上の俄が出るなどその後数多く登場してくる。

俄と呼ぶものの内容には時代による変化が見られる。松囃子の歴史を説明した寛政六年（一七九四）の文書（伺達写）によると、当初は「種々俄踊」「奉祝戯れ踊」などとして、踊りと記されているが、後に

「落斬之俄」が登場。これは高森にわか同様の才子のある笑いの寸劇のことと思われる。さらに寛政六年には「歌舞伎段物」のにわかが登場。やがて文久元年（一八六一）には横町の「山崎三佐の馬子唄の俄」が東の大関、切明迎町の「お半帯屋の俄」が西の大関と紹介され、ほかに「川中島」「布引」「先臺秋」「二つ蝶々」など浄瑠璃や歌舞伎に題をとつたとみられるものが記されている。そのころには段物にわかを禁じる触れが出されるほど盛んになっていったようで、歌舞伎のパロディーがほとんどだったとされる幕末の大坂俄と同様の姿が菊池でも見られたものと思われる。

江戸後期の通しものは俄、行列、山臺踊りの三つで構成されていたようだ。行列は仮装行列、山臺踊りは山台の上で子供が踊つたものとみられる。俄はもともと「通り俄」と呼ばれて町中を歩き巡りながら一定の場所（町内九カ所の山立場など）で演じられたようだ。やがて「山の上にて芸」（明和八年（一七七二）、「置き座にて俄」（寛政三年（一七九二）、「俄山作らせ」「置座山二而興行仕候」（安政六年（一八五九）など、山の上で演じたり、別に舞台が掛けられたりして大型化していったものと思われる。

なお、宝暦以前の山台は、雨乞いのどらの台ほどの大きさで子供二人乗せて人夫八人がかつぐものだったが、明和（一七六四～一七七二）の頃には子供七人を人夫二人がかつぐ大山になっている。天明八年（一七八六）（同六年の表記もあり）に筑後三池の祇園祭で車付きの山を見て初めて菊池に車山台が導入され、その後広がっていったという。山の数は多いときには三〇基以上あったが、通行に伴う町の混雑と大型化で通行に不便が出たため、明和九年（一七七二）より以前に八基に減った

ようだ。

隈府のにわかには藩内にも広く知られていたとみられ、熊本の役人や惣庄屋などが祭り前に内見物することもあったが「惣躰俄か昔しる内所物二而」として、ほかは見せてもにわかは本番前の見物を断つた（安政六年・一八五九）ことが記されている。この事は「そのとき、その場」だけに生まれる機転や笑いを重んじるといわれる「にわか精神」が当事から大切にされていた例として興味深い。

にわかには享保（一七一六～三五年）のころに大坂の祭りの往来で生まれ、全国に広がったとする説が有力とみられている⁶⁾。『嶋屋日記』には安永四年（一七七五）に初めて俄の記述が見えることから、菊池にはそのころ伝わったとみられることもできる。しかし、日記の記述からは俄という新しい芸が伝わったというより、従来からあった奉祝戯れ踊りや物真似がにわかと新たに呼ばれたようにも見える。

現在、菊池の御松囃子御能は、菊池武光らを祭神として明治三年（一八七〇）に創建された菊池神社の秋の大祭中の一〇月一三日に市内の能場で披露されているが、余興のにわかは見られない。しかし、明治期には菊池神社祭典や菊池郡戦勝会でのわかがおこなわれてい



写真3
武光公墓前祭での正観寺青年団
のにわか（1996年）

たことが新聞記事に残る。大正期には運船や利幸商、マチャンといった熊本の人気にわかも呼ばれている。一方で町民による素人にわかも学校の落成式や他の神社祭礼などでおこなわれ、昭和九年（一九三四）の大祭にも素人にわか出演の記事が見られる。戦後、昭和三十一年（一九五六）の武満公墓前祭で地区青年団による「正観寺にわか」の様子を撮影した画像【写真3】が残っており、素人にわかには昭和三〇年代にはまだ健在だったようだ。その後高度経済成長期に姿を消したと思われる。平成になっても商工会青年部による劇団が祭りとは別に各種イベント等に出ている。それを披露していたが、平成三〇年（二〇一八）頃に活動を停止している。それ以降、菊池の市民による本格的なわか舞台は見られなくなったようだ。

三 招魂祭を賑わせた「高瀬仁わか」

県北の玉名地方では、有明海にそそぐ菊池川を挟んで南北に隣接する高瀬、伊倉の二つの地区で盛んにわかがおこなわれてきた。それぞれ「高瀬仁わか」「伊倉仁〇加」と名乗り、競い合った歴史をうかがわせる。高瀬のわかには姿を消したが、伊倉では保存会が結成されて健在である。玉名は県内では南阿蘇の高森、吉田新町と並んで伝統のわかは今も根付く貴重な場所といえる。

高瀬のわかには起源は不明だが、明治一八年（一八八五）九月一七日の熊本新聞に地域の保田木神社の祭りに俄踊りが出ることを知らせる記事が見える。わかには祝勝会などにも出たが、主な舞台となったのは毎年七月におこわれていた高瀬町の招魂祭のようだ。「町内二十余ヶ所の舞台へは俄踊り始まり近郷近在より参観人雲霞の如く集り幾千万なるを

知らず夜に入りては殊の雑沓を極めたり」（『九日』明治四三年七月二一日）など、わかを中心としたにぎわいの様子が紙面にたびたび登場する。演じたのは町内の若者が中心だが、久留米、柳川、熊本、筑後などからも雇い入れている（『九日』大正六年七月二六日）。さらに、春に開かれていた熊本の招魂祭にも出演する（『九日』大正五年五月一日）など他地区との交流も盛んだったとみられる。同年の熊本招魂祭での玉名郡高瀬座石川梅昇列の演題は「世渡の川瀬二人者」「早野勘平鎌腹の場」「手踊オドケ段物」と紹介され、歌舞伎などに取材した笑劇を演じていたことがわかる。

玉名市観光課長を務めた野間和夫氏が『高瀬歳時記』（一九九六年）に小学生のころ見た招魂祭の思い出を寄せている。それによると、招魂祭は七月二五、二六の両日に開かれ、各町内は仮設舞台（間口三間、奥行き二間、高さ三尺の同一規格）を設けてにわかを出すのが決まりで、出せない町内は熊本などからプロを雇ったという。各家庭から資金（日貫）を集めて稽古（小屋入り）や打ち上げの経費に当て、各町にはわかのお囃子が「おっちゃんな、どけ行くノーエ」といったノーエ節の替え歌と「ボンチ可愛や寝んねしな」の博多どんたくの歌を交互に町内を一巡。いよいよ本番を迎えると、開口一番「わあー、人出ん多さー。今日はまた高瀬の町は何ごつじやろうか」といった文句でわかが始まる。各町のわかには次々と舞台を巡り、子どもたちは人気の出し物を追いかけたものだという。

招魂祭では町民自らにわかを演じたが、九月一七、一八日にある保田木神社の例祭では他地区からにわかを雇っていたようだ。保田木神社祭

典係豫算決算記録簿（昭和一一～三五年）には、戦前は運船組、戦後は森都組、おても組、ぼってん組など熊本のプロ劇団や伊倉のにわかの名前が記録されている。昭和十二年（一九三七）には、数年にわたって熊本運船組と出演料五〇円で特約してきたが、組が分裂したため新たに組織された組と契約したという趣旨の記載も見える。

そのにわかも太平洋戦争末期には途絶え、元玉名市文化財保護委員の小川治雄氏によると昭和二三、四年ごろに復興したという。戦前の招魂祭に代わる新たな舞台となったのは春祭り。青年団が中心になってわかを演じた。米軍占領下の当時はにわかもGHQ（連合国軍総司令部）の検閲を受けたため、青年団長だった小川氏は熊本市内まで台本を届けに行ったという。演目は歌舞伎の段物や昔の出し物のほか、自分たちで新作も考えた。例えば、国道に新しい橋を設けるように訴えたにわかのおトシは「高瀬の町は箸（橋）の二本なかつしゃがな飯の食われん」というものだったとか。団員たちは戦前さながら白塗りの化粧で、検番芸者の三味線太鼓を従えて舞台から舞台を巡ったものだという。

しかし、復興したにわかも昭和三〇年代始めには姿を消したようだ。一方でにわか復興を目指す動きが昭和五〇年代から見られる。昭和五四年（一九七九）には保存会結成を目指して玉名青年会議所（玉名JC）が「交通安全にわか」を披露したという記事が『熊日』に掲載されている。このほかにわか復興を訴える声はたびたび上がったようだが、本格的な復興には至っていないようだ。

四 保存会で活動続ける「伊倉仁〇加」

伊倉のにわかには伊倉南北両八幡宮の春・秋の大祭の余興としておこな

われてきた。伊倉町誌（一九五〇年、伊倉町役場）には「昔から『両八幡宮』と『仁わか』は伊倉名物の双璧と稱せられていただけに『仁わか』界には名優珍優雲の如しである」と誇らしげに記されている。

にわか歴史は、伊倉まちづくり委員会、まつり衆仁〇加衆部会が平成一六年（二〇〇四）にまとめた冊子「伊倉まつり仁〇加読本」に詳しい。それによると、伊倉にわかのはじめは江戸時代中期以降のことで、中世は港町、江戸時代には商業の町として交流があった上方文化の影響で生まれたという。その後、八幡宮の祭りとともに発展、明治末から大正初期に伊倉の行事として本格的に始動したと説明されている。

大正始めには熊本の運船組、沢田組、マチヤン組などが伊倉に泊まり込んで各町内のにわかを指導していたことも記されている。明治四二年（一九〇九）四月一日の『九日』にも「来る十五、十六の両日は玉名郡伊倉町春季祭典にて町民一同俄踊奉納に付運船組は手を分ちて右練習の為昨今出張中なり」という記事が見られ、伊倉にわかには熊本のにわかの影響を受けてきたことがうかがえる。

戦前の伊倉にわか最盛期は昭和初期とみられ、上町仁〇加組、上中町仁〇加組、鍛冶屋町仁〇加組、下中町仁〇加組などが町内八カ所の舞台をめぐり、演者の名前をもじった言い回しや実在の人物のまね、おかしな動作などで喝采を浴びたという。中でも下中町仁〇加組の松本重太郎氏は久島氏との掛け合いが天下第一品で、伊倉にわか基礎を築いた先駆者と紹介されている。

戦時の混乱で伊倉のにわかも昭和一五年（一九四〇）頃に姿を消したが、戦後の同二年（一九四六）には青年団の結成とともに復活。翌二二年の八幡宮の大祭には各町内の仁〇加組が決起、復員者も加わって戦

前の姿を取り戻したようだ。町内には六つの舞台が生まれ、各仁○加組が昼夜二回のにわかを披露したという。やがて松本重太郎氏らの指導で腕を上げて自前のにわかを作るようになったようだ。その中から、熊本のプロにわか劇団に参加する人物も現れている。

しかし、長くは続かず昭和三四年（一九五九）には消えた。その後、同四三年に青年団が復活すると、にわかも復活してテレビ、ラジオに出演するなど嬉しいが、それも同五〇年に青年団が消滅すると再び姿を消すなど、消滅と復活を繰り返す歴史だったようだ。

そうした中で、青年団OBらが平成七年（一九九五）、伊倉仁○加保存会を結成して再びにわかに取り組み始めたことが、地域ぐるみの運動に発展していった。保存会は翌年から伊倉南北八幡宮の大祭、繁根木八幡宮の大祭に出るようになる。同一三年からは、地区の玉南中・伊倉小の子どもたちになわかを指導。同一五年には県内一五団体が出演した「第一回肥後になわかアマチュアコンクール」で保存会が優勝し、伊倉小六年生も特別賞に輝いた。さらに同一六年には美濃や博多など全国から八団体を招いて「全国になわか交流大会」を開き、昔のにぎわいを再現してみせた。伊倉のにわかを読本もこうした運動の中でつくられたものだ。

令和元年（二〇一九）九月、伊倉小体育館であった伊倉校区敬老会で保存会のにわかを見ることができた。オリンピックを題材にした子供にわかが続いて大人が登場。カード詐欺をテーマに、じいさん、ばあさん、警察官、詐欺師夫婦の五人が息もぴったり、最後は「笑うカードには福来たる」と落として、お年寄りたちを大いに笑わせていた。演者は最高齢八〇歳とベテランぞろいとあって伊倉弁の台詞回しや間合いも

しつかり、若者の元気あふれる高森のにわかとはまた違う手慣れた舞台という印象だった。

保存会によると、高瀬のにわかには珍妙な動きで笑わせるのに対し、伊倉のにわかには言葉で笑わせるのが特徴という。また、読本には、下ネタを使わない、差別用語は使わない、客席に話しかけない、の三原則があるとされているが、確かに他地区のにわかにありがちな下世話な表現はみられず、安心して見ていられるにわかだった。

伊倉のにわかには（一）県内で唯一保存会が作られている（二）にわかの伝来について、上方から伝わったとする言い伝えが残る（三）古くから熊本のにわかの影響を受けてきた芝居形式のにわかといった特徴を上げることができそうだ。現在の保存会メンバーは六〇〜八〇代の一〇人。コロナ禍のため、近年はにわかへの指導や舞台はできずにいたが、当面、消滅の危機はないと話している。

五 農村ならではの宇土・網田のにわか

現在、宇土地方ではにわかは見られない。しかし、かつては祭礼や祝賀の席でにわかを披露されていたことが明治一〇年代の新聞などで紹介されている。中でも珍しいのは農村地区の網田神社で豊作を祝うニワカ祭が開かれていたことである。

宇土市の網田神社は、天草につながる宇土半島の半ばほどの農村地区に位置し、昭和四〇年代後半まで毎年秋にニワカ祭がおこなわれていた。令和五年（二〇二三）一月に網田神社に残る古い祝詞と祭事記録、会議記録を閲覧する機会に恵まれ、詳しい実態が見えてきた。

祝詞は一〇月の網田神社大祭でコロナ禍前まで奏上されていたもの

で、古くからの内容を平成二二年（二〇〇〇）に書き継いだものとみられる。それによると文化一一年（一八一四）に、日照りが続き稲田の水も枯れて困窮した住民が神に祈ると雨にめぐまれたことから、感謝の思いでニワカ祭（俄祭）が始まったとある。

祭事記録は分厚い二冊に分かれ、大正三年（一九一四）から昭和三二（一九五七）年にかけて行われた祭事について代々の宮司が簡潔に記している。その中でニワカ祭は、昭和五年（一九三〇）九月三〇日に「五穀成就奉賽祭（ニワカ祭）」とカツコ書きで出てくるのが初出とみられる。五穀成就奉賽祭は豊作を祝うものだが、「式後十二部落ヨリ俄躍ヲナシテ社殿に参集ス」（大正一二年）とあり、余興として各部落からにわかが出ていたことがわかる。五穀成就奉賽祭という表記はしばらく続き、ニワカ祭の表記が定着するのは昭和二二年（一九四七）からだが、一般にはニワカ祭という呼び方が早くから広がっていたものと思われる。

網田神社の祭りの余興は基本的に、九月一日の八朔には相撲、九月九日のニワカ祭にはにわかをすることに決まっていた、一〇月の大祭には芝居興行もあったようだ。昭和二五年（一九五〇）にはニワカ祭の余興の演題が記載されている。そこには「道踊」「豊年仁輪加女子踊」「少年少女子供道踊」といった踊りもののほか、「仮装行列かかし藝」などの仮装もの、「橋弁慶」「新版高田の馬場」「やきもち夫婦」など講談、歌舞伎などに題をとったと思われる芝居風の演題が並んでいる。にわかのごとは俄躍か俄踊と表記されているが、実際は踊りだけでなく芝居や仮装など多彩な内容が含まれていたと思われる。昭和三〇年（一九五五）には「落とし躍」という表記が見えるが、これは現代一般的なオチのあ

る笑劇のことと理解してよさそうだ。

ただ、ニワカ祭の記録では余興の記載がない年が多く、にわか代わりに相撲があったり、にわかになかったりしたこともあったようだ。昭和一三年（一九三八）から同二二年に祭りの記載がないのは戦争の影響だろう。同二三年から三〇年までは欠かさず余興について記されており、そのころは祭りにもわかも盛んだったことがうかがわれる。

役員会議関係帳簿は昭和三〇年（一九五五）三月から同四六年まで会議で協議された内容が記されている。それによると、ニワカ祭は八朔と一緒に予算が生まれ、余興のあるなしも検討されている。ニワカ祭の予算自体は昭和四五年まで組まれていたが、各年ににわかがあったかどうかはわからない。同四六年に、それまで祭事ごとに組まれていた予算が年度一括して組むよう改められ、その後は記録も書かれなくなっている。そのため、その後の様子はわからない。昭和四八年九月一日の熊日にニワカ祭の記事が出ていることから、祭りが途絶えたのは同四九年以降とみられる。

ニワカ祭が盛り上がっていた昭和二〇年代後半から三〇年代にかけての様子を、女装姿でにわかに出た経験があるという森田義満さん（昭和一一年生まれ、西原地区在住）に話を聞くことができた。

それによると、一一の地区から白塗り化粧に舞台衣装を着込んだ若い男性ばかり七、一〇人ほどがサトイモなど自慢の作物をカゴいっぱいに入れ二人一組でかつぎ、鉦をたたいて神社を目指し、菅笠をかぶった女性たちも道踊りをしながら続いたという【写真4】。先の祭時記録大正一一年の姿がほとんどそのままに行われていたことがうかがえる。

神社に集まった若者たちは、当時あった常設舞台に次々上がってにわ

かを演じた。にわかは笑いの寸劇で、毎年自分たちで筋を考えたという。

特徴的なのは、どれもオチが同じものに決まっていたこと。それは「何かと思えば五穀の種、之さえ手に入る上からは、五穀は実る。万に喜べ、豊年満作」というものだったという。いかにも農村らしい文句だが、祭がもともと五穀成就奉賽祭と呼ばれていた歴史にふさわしく思える。森田さんの手元に一冊だけ残されていた「親父の道楽」と題した手書きの台本（西原小部落四三年度）もオチは同じだった。

網田神社がある宇土地方は各地に雨乞い太鼓が残され、雨乞いが盛んに行われていた歴史を今に伝えている。その雨乞いでは雨乞い踊りがみられたという。一方で、網田神社のニワカ祭も祝詞にみられるように雨乞いと深い関係がうかがわれる。そこで見られる俄踊りは他地区の雨乞い踊りに相当するとも思われる。また、宇土市の中心街で行われている地蔵祭りには、にわかと縁が深いといわれる造り物が今も多数出る。現在、宇土市街ににわかは見られないが、宇土はにわかに通じる精神の色濃い地域だということはできそうだ。



写真4
ニワカ祭でにわかを披露した西原青年団の一行（1959年）

六 女性が中心の芦北のにわか

戦前の新聞記事を見ると、明治三八年（一九〇五）一月一四日の九日に佐敷神社で二四組のにわか披露されたことをはじめ、芦北地区のほぼ全域でにわか盛んにおこなわれていたことがわかる。さらに令和二年（二〇二〇）九月、芦北町の町史編纂に合わせて旧佐敷地区と湯浦地区で聞き取り調査を実施し、各地のにわか具体的な姿が見えてきた。聞き取り調査では、町内五地区のうち旧佐敷、湯浦地区の住民（八〇歳から九二歳）から話を聞くことができた。それによると、にわかには町内各地で戦後すぐから昭和三〇年代を中心におこなわれていたが、昭和四七年を最後に姿を消し、現在は米田百木地区のさなぶりで農作業を模した滑稽な所作として見られるだけという。

かつてのにわか形態は、ほとんどが「ひよげ踊り」という滑稽な踊りだったという。一方で、踊りの練り込みや嫁取りを滑稽に告げながら往来を歩く行列物、漫才のような即興的な掛け合い、新派ものなどの演劇形式も見られたという。建築物の基礎を築く地突き（石棒突き）では、作業を景気づける滑稽な踊りが繰り出し、にわか落成式や運動会、敬老会、祭り、初盆などには欠かせないものだったようだ。

石棒突きでは、歌に合わせて踊るほか、「合わせてにわかだ、見てほしい、見せられぬ」と二人の踊り手が背中に荷物を背負い、「合わせてにわかだ。益々栄えろにわかじゃ」（マスと益々をかけている・米田百木地区）といった、だじゃれの文句を伴ったようだ。

女性がにわか主体だったとみられることが芦北の特徴といえる。祝事などの手伝いの延長として女性が場を和ませ、盛り上げるためににわかを演じたらしい。「棟上げの時、式が始まるうとする時、手伝いに

来ているおばさんたちがにわかに立ち上がり歌と踊りで盛り上げ、近所を回って棟上げを祝った」（計石地区）、「母は婦人会の部長を務め、三味線に踊りと何でもこなし、地区のにわかの中心的存在だった」（諏訪地区）、「初盆の時、部落の女性（婦人会）七人ぐらいで回って簡単な所作で踊っていた」（宮崎地区）、「特に記憶に残っているのが女性二人による即興的な掛け合い漫才。身近な話題で笑いを取る絶妙なやりとりが素晴らしかった」（白岩地区）など多くの証言を得た。

湯町（下組）の湯治清さん宅には昭和三三年（一九五八）に自宅を建設したときの石棒突きの様子を撮影した写真が残されている【写真5】。そこには、仮装や頬被りをした女性たちが櫓を囲んで楽しげに踊るにわか姿が記録されている。にわかには地突き作業を景気付けるものだったようで、湯町の各地区のうち、地突きに参加しない地区から列をなして繰り出すものだったようだ。写真では「湯町中組二〇加」と書かれた旗を竹竿に掲げて建築現場まで練り込んで来た様子がわかる。「私たちは地突き作業をするので踊りは女性ばかり。三味線と鉦のお囃子で面白おかしく踊った」（湯治さん）という。そのほかにも、各地に七福神やちんどん屋に扮した写真が残されていたが、やはりにわかを中心は女性だったようだ。

こうしてみると、芦北でにわかと呼ばれたものに芝居的なものは少なく、ほとんどが滑稽踊りを中心に練り物、漫才など笑いを伴う雑多なにぎやかしの芸を指し、祝い事を手伝う女性たちが中心を担ってきたといえそうだ。このほか、旧田浦町には町文化財の「俵踊り」の前芸に狂言のような、にわかのような出し物があったことが『田浦町史』に記されている。



写真5 湯治さん撮影のにわかの様子

七 台本が残る水俣のにわか

今回のアンケートによると、水俣でもにわかには三、四〇年前に途絶えたという。しかし、かつて盛んに行われていたことは明治、大正期の新聞を見るとよくわかる。

例えば明治四四年（一九一一）十一月二日の九日には、豊年踊りと称して「各部落とも殆ど競争的に熱狂し各々業務を休みて各種俄踊りの稽古をなしたることとて踊りは何レも面白く」と競うように熱心に取り組んだ様子が記され、俄踊りの数は五四組にも上ったという。このほか、浜八幡宮の祭典、県道や鉄道、橋の開通式、学校新築落成式など、祝賀行事の余興としてにわかはなくはない出し物で、行事のあと町中の旦那衆の家々を遅くまで踊り歩いたという。そうした、かつて

の水俣のにわか姿をしのばせる「鎌倉踊り七段目」と「新地琵琶」と題した二つのにわかの本本が、『新水俣市史』（一九九七年）に記録されている。

「鎌倉踊り七段目」は大正元年の町制施行の祝賀の中で月浦の住民が繰り出した俄踊りで、隣の鹿児島出水の人から教わったものという。その俄踊りを小学生時代に見て、踊りに入る前のチヨボクレ坊主の仕草がおもしろく、セリフまで覚えていたという古老の記憶を基にやり取りが記録されている。能の一曲「鉢の木」に設定を借りながら、本来と違って旅の僧ならぬチヨボクレ坊主を家から追い出そうとドタバタするという筋書き。にわか踊りの踊りに入る前に、こうした滑稽なやり取りで観客を楽しませることがわかる。そこから掛け合いのにわかや現在の笑劇にわかも生まれたのだろうと想像させる。

「新地琵琶」は新地村（現水俣市山手町）で昔から祝いの席の即興に演じられ、出席者を喜ばせてきたという笑劇のにわかである。目の不自由な七ちゃんとおちやんの二人の琵琶師が一方は天草、もう一方は博多から久方振りに戻ってばったり出会ったという設定で始まる。三味線・太鼓の囃子に乗って舞台右から七ちゃん、左から八ちゃんが登場し、中央でぶつかる。話の内容は二人が連れ立って一方の家に行くというだけだが、にわか眼目は濃厚な水俣弁による頓智に富んだ言葉の応酬だろう。どこへ行ったか問われていきなり腕を噛んで歯型を残し「ああ博多か」と気づかせる、といったやり取りもにわからしく、最後に「庭かにわか」も思った」とおとしみせる。いつから演じられたか不明というが、現代でも十分通用しそうな内容といえそうだ。

今では水俣からにわか失われてしまったが、最近まで水俣市文化会

館で開かれていたという市民参加の「ひよげ踊り大会」は興味深い存在と思われる。「ひよげ」という言葉は滑稽を意味し、隣の芦北町で「ひよげ踊り」とはにわかそのものを指す言葉として使われていた。そうした踊りが、近年まで大掛かりに行われてきたという。にわか消えても、にわかを作ってきた精神は今なお地域に生きていることを示す事例といえるのかもしれない。

八 招魂祭の映像が残る天草・本渡のにわか

天草地域では現在、にわかは見られないが、記録や伝承はいくつか残っている。天草市立本渡歴史民俗資料館には昭和十二年（一九三七）頃とみられる本渡の招魂祭の模様を収めた映像「映像にみる昭和初期の天草」（同館制作）が保管されている。この中に「とおしもん」と呼ばれる大掛かりな造り物の姿などとともに、大勢の見物客に囲まれて屋外の仮設舞台上で演じるにわかの様子が一瞬だが写っている。このにわか芝居仕立てのようで、本格的な扮装に見えることから、熊本などから浦口のにわかを招いたものと思われる。この映像には天草中学校建設に伴う地突きの様子も写っており、終日賑わったという余興の中で住民らによるにわかも演じられたとみられる。

九 御大師様祭りに出た天草・倉岳宮田地区のにわか

天草市倉岳町の宮田地区コミュニティセンターには一九六六年（昭和四一）の御大師様祭りで演じられた青年団にわかの写真が展示されている。祭りを紹介した『熊日』の記事（一九八〇年五月七日）によると、御大師様祭りは毎年旧暦三月二日に地区をあげて行う祭りで、地

区別に五つの踊り手たちがタイや牛舞いなどの造り物を先頭に繰り出し、幟を押し立てて商店街など家から家にお囃子付きで即興の踊りをして周り、お花（祝儀）をもらったという。

ここのにわかには即興的な踊りを指すようだ。地区住民によると、踊り手は男ばかりで顔に灰を塗り、ボロを着るなどの扮装で自由勝手に踊り回り、芝居形式のようなものではなかったという。当時を知る婦人は「えらいな格好して若かおなごば追いかけて回して騒動しよった」と話した。女性たちも別に踊りを披露したようで、菅笠に着物姿の女性たちの写真（一九八六年）も残っている。祭りはその後途絶えたようだ。

一〇 けんか神輿のような天草・高浜のにわか

天草民俗研究会が昭和五六年（一九八一）に発行した『西海辺記（第二集）』に、「諏訪の若者（ニシヤ）と仁和賀騒動」と題して、当事八八歳の川原政平氏が、明治三八年（一九〇五）三月の高浜のにわかをめぐる騒動のことを書いた報告が掲載されている【図3】。



図3 『西海辺記』より、高浜にわかの図

て、台の上には四方に松竹を立て、七五三縄と幕を張り、中央には手作りの人形を立て、太鼓を据えて叩く。かつぐ者は三〇人以上で、裸にフンドシを締め、前房を付けて足には草履を履いて、頭には鉢巻をする。いかにも戦いに行く様な出立で威勢のよい姿であった」という。

その仁和賀は三月一日に始まる高浜の氏神八幡宮の祭礼で見られた。三日に渡る神輿の渡御の間は、各部落から出た仁和賀の一行が村中の有志家を回ってお花（祝儀）をもらったりごちそうにあずかったりする。四日には様相が一変。「競い合い」といって、干潮の白鶴浜で数部落ずつ敵味方に分かれ「セーラエンカ」「セーラユツゾー」と大声を上げながら角突き合わせる催しが繰り広げられる。けんかにならないよう大人たちが采配をふるったようで、村中の人たちが小高い場所で重箱を広げて、その勇壮な様を見物しながら酒を飲んで楽しんだという。

明治三八年の祭礼も近隣からも見物客が訪れる賑わいだったようだが、その帰りに騒動が起こった。松下地区の仁和賀の連中が白木河内の連中を待ち伏せて大げんかを起こし、駆けつけた警察官によって軒並み拘置所に送り込まれた。裁判で警察署長らが免官になるほどの事態となり、それ以来高浜の仁和賀は出す許可が得られなくなったという。ちなみにニシヤ（二才）というのは一五歳から三〇歳までの青年のことで、諏訪には五軒の二才宿（若衆宿）があったといい、そこに集った若者たちが仁和賀も繰り出したようだ。

以来にわかには地域から姿を消したというが、令和四年（二〇二二）、七五歳になるという住民男性から「親父から聞いたことがある。確かににわかて言いよった」という証言を得ることができた。およそ、現在のにわかとは結びつかない姿だが、これもまたにわかと呼ばれていたこと

は間違いないようだ。

一 一 祭りにもわかと呼んだ馬見原のにわか

山都町馬見原では平成初期まで火伏地藏祭で、造り物、仮装行列とともに地元の若者によるにわかが見られた。ここでは、笑劇だけでなく祭りそのものにもわかと呼ぶのが他では見られない特徴である。商店街に残る地藏堂には江戸末期からの祭りの記録『地藏祭新若記録』が保管され、かつてのにわか姿をうかがうことができる。

馬見原は高森町の南に隣接し、宮崎県境に接する日向往還の要衝として古くからの商店街を形成している。山都町は矢部八朔祭の大造り物、人形浄瑠璃の清和文楽などでも知られ、貴重な伝統芸能が今も息づく地域といえる。

『地藏祭新若記録』は毎年八月（現在は二三、二四日に近い土日開催）に地藏堂を中心に行われる火伏地藏祭を担う若者組のひとつによる安政五年（一八五八）から昭和十五年（一九四〇）までの一冊綴りの記録である。初期数年分は紙片の下半分が破損して失われているが、造り物の材料や作り方、担当者などが図入りで詳細に描かれているほか、仮装行列やにわかなどの出し物についても記され、当時の祭りの様子を知ることができる。

現在の祭りは二日にわたり、各地域から地藏堂に参る「よど参り」に始まり、仮装パレード（目覚し）や見立て細工による造り物のパレード（通しもん）、地藏を載せた御輿を担いで川に入る裸御輿などが行われている。新若記録では多くの項目が通物（通しもん）、つまり造り物パレードの次第として紹介されている。その中でにわか（俄）について

は、「記俄道具類焼合：」（安政五）、「正銭新俄通宝」（明治三）、「俄新聞ヲ拵物也」（明治九）、「俄鏡山三段目又助住かノ段」（明治一六）などの表記が見られる。

このうち「記俄道具類焼合」との記載は、続く文章が欠落しているが、安政五年の大火で祭りの道具類が消失したことを指すとみられ、当時から祭りそのものを俄と呼んだ例と思われる。「正銭新俄通宝」は造り物の風鈴に書き入れた表記を指す。「俄新聞」は実際に刷って配られたようで、「俄日々新聞 明治九年 第千二号」と新聞記事の体裁で地藏祭りの若者の競い合いを紹介し、「二羽テハナイ 二ハカト 手ウチ：」と落とし噺のような文で締めくくる。「俄鏡山」では配役名が記され「舞台掛ケ致シ 大勢ニテ引行興行：大二当り」と、造り物ではなく実際に歌舞伎を模して演じられたものであることがわかる。

また、明治十一年（一八七八）の造り物は前年の西南戦争を題材に「田原坂ニテ拾ひ取たる生首」を作り、その影に隠れて見物人の問いに返答する興行で大当たりを取ったとある。同一年は、実際にあった「支那国ノ水平ら日本長崎区ノ査公トノ喧嘩」を「紫溟新報ニ見エル丈ケヲ目覚ニ致」したとあり、大阪で流行した新聞俄が馬見原でもほぼ同時期に見られたことがわかる（紫溟新報は明治一五年に熊本で発刊された新聞）。同二〇年には「通し物之間々ニは 数芸ヲ為シタル中ニ目覚トシテ 女人学校ノ体ソウ」の仮装を交えている。こうした様子を見ると、初期のにわか姿といわれる一発芸的な笑いの芸が、造り物や仮装行列と渾然一体となって繰り広げられていたことが想像できる。

馬見原のにわかには明治の新聞記事でも多く紹介されている。明治二九年（一八九六）八月の九日には幣立神社であった招魂祭及び凱旋祝賀会

の余興として相撲、花火などとともに俄が出たとある。以後、新聞記事でのにわか表記は、俄踊り、俄芝居、俄手踊り、俄狂言などとさまざまになる。大正八年（一九一九）の俄手踊りは町内を回ったが、同一三年の若者組の仁輪加は広場三か所に設けた舞台で披露されている。当初、路上で行われていた一発芸的なにわかだが、このころには舞台で演じる笑劇に発展していたとみることができそうだ。

近年のにわかについて数名の経験者から聞き取り調査を実施した。その中で、太平洋戦争で途絶えていたにわかを昭和四〇年（一九六五）頃に復活して十数年続いたものの同四二年頃に再び消え、それを商工会青年部が同五八年に再度復活させたが、平成八年（一九九六）頃を最後に見られなくなったことがわかった。昭和四〇年に復活させた理由は「祭りが寂しくなったから」、平成八年を最後に消えたのは「する人がいなくなつたから」という説明だった。

昭和四〇年の復活組（当時二〇代）はいずれも戦前の馬見原のにわかを見た人はなく、演じたのは馬見原に移り住んだ大衆演劇経験者を「先生」に、大衆演劇の筋を拝借して馬見原方言に作り変えたものだったという。このため、戦後のにわかには戦前の歴史を受け継いだものではないかと思われる。ただ、大正生まれの先輩に習ったという漫才類似的の掛け合い芸「にわとり買い」がにわかの前座としておこなわれており、その中にかつてのにわか精神が色濃く生きていたと思われる。

数年にわたって「にわとり買い」を披露したという年配コンビによると、その内容は、非行に走って町を出た男が改心して町に戻り、恩返しににわとり汁をふるまおうとにわとりを探し回る筋という。出会った旧知の男が「なんばしよるか」と尋ねると「にわかとりば見つけてさる

き（歩き）よる」と答える。それから「何ば」と「何羽」が混線した展開で笑わせ、最後に「一羽か二羽か」と落とす。毎年筋は同じだが、探す場所を変えたり新たな話題を折り込んでアドリブたっぷり毎年新鮮な笑いを呼んだという。にわかと名乗らずとも、まさににわからしい芸といえるのではないだろうか。

馬見原でにわか話を聞こうとすると「にわか芝居のことか、祭りのことか」と聞き返されることがあった。今でも、祭りも笑わせる芸も同じにわかという認識は生きていくようだ。こうした認識は県内他地区では見られず、馬見原独自のものと思われる。諸芸の頭に俄の一字を加えて笑いの芸と明示する例は珍しくないが、祭りそのものまで「にわか」と呼ぶ例は、にわかという言葉が包括する世界の広さをうかがわせるものといえるかもしれない。

現地調査の中で、造り物・仮装行列・にわかが出る高森の風鎮祭や矢部の八朔祭りは、馬見原の地蔵祭りを見て真似たものという声を何度か耳にした。祭りにもわか馬見原が本家という認識があるようだ。火伏地蔵祭に出る男たちの祭り法被の襟元には、にわか印とされる輪違いの紋が染められていることも興味深い。

なお、本稿における『地蔵祭新若記録』の記述は、にわか学会発行の『俄研究』創刊号（二〇〇四年）で紹介された佐藤恵里高知県立大名誉教授による翻刻に基づいている。

一二 高森と似た吉田新町のにわか

南阿蘇村の吉田新町は、今回のアンケートでもにわか現存が確認された地域である。高森の西に隣接し、毎年八月二三、二四日の地蔵盆に

開かれる鎮火祭で、高森とよく似た雰囲気の伝統的なにわか地域は、吉田新町は現行政区の南阿蘇村吉田一区（旧白水村）に当たる。今では人口も減少してひっそりとした雰囲気だが、宮崎、大分へ向かう往還の分かれ道に当たることから、かつては造り酒屋や映画館もある商店街として栄えた。江戸時代には高森町の西半分と共に同じ高森手永（当時の行政区）に属し、両地域は古くから交流が盛んだつたとみられる。

鎮火祭は、商店が密集して火事に悩まされたため西安寺に火伏せ地蔵を移設したのが始まりともいわれ、周辺農家をもてなす意味もあるという。かつては、にわか、造り物、仮装行列の三つの出し物を住民総出で繰り出し、近隣の客を迎えて大いに賑わつたとされる。

コロナ禍のため鎮火祭は令和四年（二〇二二）までは神事と奉納にわかしかおこなわれなかったが、コロナ禍前の平成三〇年（二〇一八）に本来の祭りに近い形で見られる機会があった。雨天で会場は屋外から白水総合センターに移されていた。ステージでは午後六時から九時まで仮面ショーやエイサーなどに混じって新町青年にわか三回、子供にわかと両併にわか各一回披露された。両併は近隣の地区で、近年になってにわかを始めたという。ごちんまりとした会場に観光客の姿はなく、観客は宴席を囲みながらの住民ばかりと思われた。にわかには住民の名前など地域の固有名詞が次々飛び出し部外者には理解が困難な内輪ネタが多かったが、会場には笑顔があふれ和気あいあいとした雰囲気だった。

吉田新町のにわか歴史などに触れた文書に、『白水村史』（二〇〇七年）と冊子『鎮火祭―南阿蘇村吉田新町に伝わる伝統文化』（鎮火祭実行委員会、二〇一一年）などがある。それらによると、鎮火祭は別名

「山引き」とも言い、樹皮や日用品を使った造り物と仮装行列、にわか三つが主な出し物として祭りを賑わせてきた。にわかは今では仮設舞台で披露されるが、かつては上若、下若の二つのにわか組に分かれ、地域を貫く通りを荷車舞台で移動しながら各所で演じ、芸の優劣、祝儀の多寡を競つたという。

『白水村史』によると、祭りは太平洋戦争で途絶えた後に戦後の昭和二四年（一九四九）に復活、同三六年頃まで大いに盛り上がったというが、若者が減つたため同四五年頃に中断。「あまりに寂しい」ということで同六〇年代ににわかだけが復活したという。しかし、その時にはかつての上若、下若の別はなくなつて一つになり、移動舞台も辞めて仮設の固定舞台で演じるようになったという。仮装行列も二、三度行われたものの長くは続かず、造り物は近年になって一つだけ老人会の手で復活したという。

新聞を見ると、古くは明治四一年（一九〇八）の『九日』に鎮火祭の開催を伝える記事がある。同四四年の鎮火祭には、地元若者に加えて熊本の運船組も町を練り歩いている。造り物は戦後、一二の組が各一つ出したというが、大正一五年（一九二六）には五五基、昭和一〇年（一九三五）にも三〇余りと数多く出されていたことがわかる。祭りの別名とされる「山引き」の名の由来は、にわか行列を指すという認識もあつたようだが、同年の九日には造り物の大行列が見られたことが記されており、やはり高森同様、造り物行列が「山引き」の名の元になったと思われる。

調査では祭りの最盛期という昭和三〇年代の様子を知る複数の住民から話を聞くことができた。それによると、当時は荷車舞台で通りを移

動しながらほぼ一〇メートルごとににわかを演じ、上若、下若が通りをすれ違うときには互いのお囃子や掛け声も大きくなって盛り上がったという。お囃子は熊本から芸者衆を雇うのが恒例で、祭り前日にはトラツクを仕立てて高森や戸下、垂玉といった温泉地などに宣伝隊を繰り出し、にわかを演じたという。祭りの復活については白水村史より古く昭和五二年（一九七七）頃ではないかという話も聞いた。

吉田新町のにわかを高森と比較すると、かつては移動舞台でおこなわれ、白塗りの化粧、三味線のお囃子、言葉使いなど共通点が多いことがわかる。特に、他所では見られない高森のにわかの特徴といえる「道行」の所作が、吉田新町のにわかにもあることが注目される。道行は、三味線のお囃子に合わせてにわかが始まりや登場人物の移動を表す独特のステップで、県内では両町（両町を真似た両併も）以外には見られない。高森では、オチの後で両手を下に広げて足を引き、にわかを終了を示すポーズがあるが、吉田新町でもかつては同様の仕草をしたという。

ただ、にわかの内容は世相ネタ、時事ネタ中心の高森と違い、吉田新町では町内の出来事を住民の実名入りで作る内輪ネタが主のようだ。このため、住民らは祭りが近づくとネタにされないようにおとなしくしているという。しかし、高森でも古くは内輪の出来事をにわかに仕組むことが多く、日頃の言動に注意したという話が『高森町史Ⅱ』（一九八〇年）でも紹介されている。

こうしてみると、吉田新町と高森のにわかほとんど同じものだったといえそうだ。にわかだけでなく、祭りの形態、内容も風鎮祭と吉田新町鎮火祭、さらには山都町馬見原の火伏地蔵祭もほぼ同様のものだった

ように見える。それが時代を経るうちに、高森のにわかには内輪ネタから世相ネタに変わったのだろう。高森の人たちが観光資源として風鎮祭に力を入れた結果、にわかも観光客が理解できる内容に変化することを促されたためと思われる⁹⁾。逆に、吉田新町には身近な話題を基にした古くからのにわかのお囃子が残っているともいえそうだ。

ただ、風鎮祭と賑わいを競ったという鎮火祭も近年の住民の減少で地区住民だけの静かな祭りへと変貌している。かつては上若、下若という二つの組織それぞれ数十人はいたというにわかのお囃子も年々減って今ではわずか七人しかいないという。このため、久々に余興がおこなわれた令和五年（二〇二三）の鎮火祭には壮年組による壮年にわかが始めて登場して祭りを盛り上げていた。その姿は、地域あげてにわかのお囃子を守っていきこうとしているように見えた。

一三 高森、吉田新町を真似た両併のにわか

吉田新町の南東に位置し、高森町に接する農村地域である南阿蘇村両併地区でも毎年八月一四日の両併夏まつりで地元青年らによるにわか披露されている。

住民によると、このにわかには高森や吉田新町のにわかを真似て始めたという。昭和五〇年代には見られたようで、中断を経て平成になってから毎年、夏祭りで披露されているという。コロナ禍で四年ぶりに旧両平小学校校庭でおこなわれた令和五年（二〇二三）の祭りにも音楽演奏などまじって二組のにわかが登場した。

一組は青年というより、祭りの設営、進行役も務めた壮年組で、「久しぶりでいまいちの出来だった」と話しながらも、祭り開催がうれしそ

うだった。初めて演じたというもう一組の高校生たちは、特に指導者もなく自分たちでにわかの中身を考えたという。それでも、高森のにわかにある道行や締めポーズもしっかりと取り入れていた。「決まりの動作も小さい頃から見てきたので自然にできた」と話すように、にわか伝統はまだ若い世代にも生きていくようだった

第三節 調査から見えるにわか姿

今回の調査では、県内のにわかには昭和四〇年代のはじめ頃まで各地で広く見られ、今も高森町を含む七地区で現存していることが確認できた。中でも熊本市に肥後にわかの名で活動する複数のプロ劇団が現存することは、にわか存在の厚さを示すものといえるだろう。

現在見られるにわかには、農作業を模した芦北のさなぶりを除けば、「方言を使うオチのある笑いの劇」という共通点があった。しかも、ほとんどは各種イベントの余興として登場し、演技時間が比較的長い喜劇的な形態だった。それは戦後いち早く喜劇的に発展した肥後にわかの影響が広く及んだものと思われる。その中で、祭りに伴っておこなわれる高森と南阿蘇村のにわかには他と趣を異にしていた。

また、かつてにわかと呼ばれたものは、芝居形式だけでなく多彩な姿をしていたことが明らかになった【表3】。代表的なものは、踊りとしてのにわかである。明治期には仮装した男たちが滑稽な所作をしながら娘踊りなどと共に練り歩く俄踊りが各地で盛んに見られ、芦北では地突き作業に伴って踊る昭和三〇年代の写真も残されていた。

さらに、馬見原では、笑いの劇だけでなく祭りそのものものにわかと呼

表3 各地で「にわか」と呼ばれたものの時代変化

	江戸後期	幕末	明治	大正	昭和・平成	令和
大阪（参考）	一発芸	歌舞伎 段物	歌舞伎段物、 新聞俄、改良 俄→喜劇			
高森	俄踊り	歌舞伎 段物	俄踊り	笑劇	笑劇	笑劇
熊本	盆後踊、 俄踊り	踊り、歌 舞伎段 物	俄踊り、笑劇	俄踊り、笑劇	笑劇→喜劇的（戦後）	喜劇的
菊池	奉祝戯れ 踊、落 之俄、歌 舞伎段 物	歌舞伎 段物	俄踊り	笑劇	笑劇	
玉名市高瀬			俄踊り、歌舞 伎段物	笑劇	笑劇	
玉名市伊倉			俄踊り、笑劇	笑劇	笑劇	喜劇的
宇土市網田	俄祭		俄踊り	笑劇	笑劇	
芦北町			俄踊り		ひよげ踊り、嫁入り行列、掛け合い、芝居、さなぶり、仮装行列、笑劇	
水俣市			俄踊り		ひよげ踊り、笑劇、仮装行列	ひよげ踊り
天草市本渡			俄踊り		笑劇	
天草市倉岳			俄踊り、田舎 歌舞伎		笑劇	
天草市高浜			俄踊り、けん か神輿			
山都町馬見原		祭り	俄踊り、歌舞 伎段物、新聞 俄、祭り	笑劇、祭り	笑劇、にわとり買い（掛け合い）、祭り	祭り
南阿蘇村吉田新町			俄踊り	笑劇	笑劇	笑劇
南阿蘇村両併					笑劇	笑劇

踊りと表現されたものを灰色にした

び、かけあい漫才のようなにわか類似の芸もあった。芦北では仮装行列をにわかと呼び、婚礼を手伝う主婦らが「嫁ごぞ、嫁ごぞ」と囃しながら嫁入り行列をするにわかもあった。天草高浜では浜辺で簡易な神輿を担いで競い合うけんか神輿のようなものを、同じ天草の倉岳では、若者が顔に墨を塗って騒ぎ回る冗談騒ぎのような行事をにわかと呼んでいた。また、俄踊りも、実態は踊りだけでなく仮装や笑いの所作などを含む総称のようなものだったと考えられた。

この多彩なにわかの存在を、どう理解すべきだろうか。まず、考えられるのはにわか伝来時期の違いである。にわか伝来（一七一一〜三五年）のころに大坂の祭りの往来で生まれ、全国に広がったといわれる。その当初の姿は、雷雨の後に「先程はおやかましゅうございまして」と雷様の格好で往来を走ってみせるといった趣向の一発芸的なもので、やがて歌舞伎などを取り入れて笑わせる笑劇に変化している。にわか伝来し定着した時期が違えば、おのずとその姿も違うはずだ。

加えて、県内のにわか伝来後姿を変えている。明治の招魂祭で見られた熊本の俄踊りは、大阪、博多などの影響で芝居形式に変わったことが当時の新聞でわかる。また、江戸期の菊池のにわか伝来は奉祝戯れ踊から落瀬之俄、さらに歌舞伎段物のにわかへと時代を追って変化したことが『嶋屋日記』から見て取れる。県内各地にあった様々な姿は、にわか変化する過程の一形態だったのかもしれない。

ただ、嫁入り行列やけんか神輿がにわかと呼ばれたことまで、時代による変化という見方では説明できそうにない。『嶋屋日記』で、当初俄とされた奉祝戯れ踊りは、以前から存在したものだ。また従来あった物真似の記載が俄の登場以降は日記から消え、物真似が俄と呼ばれるようになったかに見えた。つまり、元々あった種々の芸をにわかと呼ぶようになったように見えるのである。そもそも決まった型がないとされるにわか「広まった」と言う時、一体何が広まったのだろうか。にわか、人を笑わせようという衝動によって発動される「演劇のもっとも本質的な、もしくは初原的な要素」⁸⁾ともいわれ、その本質は「思いつき」や「見立て」による笑いと思われる。上方で生まれたにわかはその本質が際立っていたに違いない。にわか伝来各地に伝わった当初、

自分たちが親しんできた地元の笑いに同種の精神を見だし、「これにもわかだ」と思えたのではないか。それがやがて踊りから芝居へと変わっていった。そうした見方が許されるならば、多彩な芸が各地でにわかと呼ばれたことも不思議ではなくなる。

笑劇化した県内のにわか伝来は太平洋戦争の混乱で途切れたが、戦後多くが復活したようだ。しかし、それも昭和四〇年（一九六五）前後の高度成長期にほとんど姿を消す。熊本のプロ劇団も同三〇年代後半に絶頂期を迎えたが、やがて下火になる。やはり高度成長期ににわか伝来の担い手である若者が都会に奪われ、旅行やカラオケなど庶民の娯楽が多様化したためとみられる。そうした中、高森でにわか伝来が大きく途切れることなく維持されてきたのは珍しいことといえる。また、伊倉や吉田新町などでは一旦消えたにわか伝来が復活された。廃れたとはいえ、にわか伝来の求むる動きは今なお消えてはいないといえるだろう。

ただ、にわか伝来の担い手には変化がみられる。戦前は若者組や町内単位で青年たちが祭りや催事に繰り出す例が多かった。にわか伝来を出すことは町民の義務ともされ、出せない場合はプロを雇ったりしたようだ。戦後ににわか伝来が復活した際には青年団が中心になり、商工会青年部の活動も見られた。それらがほとんど途絶えた現在は、プロを除けば一部の福祉団体や、かつてにわか伝来に親しんだ人たちがシニア層を主な対象に男女交えて演じる例がほとんどで、演者も高齢化している。シニア層には方言による訴えが有効として、特殊詐欺などの犯罪防止を呼びかける際ににわか伝来が活用されることが少なくないようだ。

第四節 高森のにわか的位置

全国のにわかに通ずる姿については佐藤恵里高知県立大名誉教授が平成一四年(二〇〇二)、にわか学会の調査を基に(1)ほとんどが才子のある笑劇(2)地元の若者が管掌し演者はほぼ男性(3)方言で演じ、観客も地元民(4)常に内容の「新しさ」が求められ、再演しないことなどを挙げている⁹⁾。高森と吉田新町のにわかもこうした特徴を備えた典型的なにわかといえる。

ただ、前述したように、現在熊本で見られるにわかのはほとんどは肥後になわかの影響で、喜劇的なものの変わっている。そうした中で、高森(吉田新町も)のにわかには、十分程度の短い寸劇で、毎年各向上会員が自分たちで新たに数本の演目を作り、基本的に台本はなく仲間が見守る立ち稽古を重ねる中で個々の演者が演技を組み上げる―など喜劇化した肥後になわかにはほとんど見られない、あるいは失われた特徴があり、伝統的なにわか作り方が守られてきたものと思われる。

さらに、にわか形式にも①祭りの町中を巡る移動舞台の上で演じる②演技には道行き、締めポーズ、観客への呼びかけが必ず見られる③にわかと精神性が共通するとされる造り物、仮装行列(近年途絶えた)の三種が祭りの場で共にあるなどの特徴を上げることができる。

このうち三味線のお囃子で繰り出す道行きの動作や締めのポーズは、踊りの所作にも見え、移動舞台は他の祭りにある「踊り山」の一種と解釈することもできそうだ。「横町文書」の昭和一〇年度風鎮祭典記にも「倉庫より大山道具及び踊り屋台の材料を倶楽館前に運搬なし」として「踊り屋台」の記述が見える。つまり、①と②の特徴は、かつての俄踊

りの名残とみることできるだろう。

③については、近隣の吉田新町と馬見原でも昭和三〇年代ごろまでは完全な形が見られた。今では三地区ともその形は失われたが、高森が最も後年まで維持してきたようだ。ただ、にわかの内容は、高森では内輪ネタから世相ネタに変化している。風鎮祭を観光客誘致に活用する中で外部の目にも理解できることが優先されたためとみられる。

こうした点を総合すると、高森のにわかには、にわか踊りから芝居に変わる過程の、かつての俄踊りの痕跡を残す存在だといえるのではないだろうか。にわか一般の演劇と違う点は、役になりきらずに素の姿をさらしながら演じて笑いを誘う「半身の姿」にあるともいう¹⁰⁾。その意味でも、演者の職業をネタにするなど素をさらし、観客とのやりとりもよく見られるに高森のにわかには、演劇以前の演技の空気を感じさせる貴重な存在といえそうだ。また、毎年新たににわかを作る作業が青年たちの絆を深め、にわかを核に祭りを担うことが地域を支える担い手を育てることに繋がっているように見える。風鎮祭のにわかには、地域社会を維持する装置としての祭りの意義も再認識させてくれるようだ。

さいごに

県内のにわかについて、新たに実施したアンケートなどを基に調査を進めたが、手がかりを得ながらもなお未着手の地域が残った。また、にわか類似の笑いの芸能として猿狂言(多良木)、雷狂言(芦北)など狂言の存在も興味深かったが、そこまで手が及ばなかった。さらなる調査・検討が必要と思われる。

註

- (1) 松尾正一 二〇二一 『肥後にわか―笑いの来た道』 熊本日日新聞社、九八頁
- (2) 佐藤恵里 二〇〇二 『歌舞伎・俄研究』 新典社、五八八頁
- (3) 松尾正一 二〇二一 『肥後にわか―笑いの来た道』 熊本日日新聞社、三四頁
- (4) 松尾正一 二〇二一 『肥後にわか―笑いの来た道』 熊本日日新聞社、九一頁
- (5) 九州日日新聞 一八九九年五月七日 「招魂祭概況」
- (6) 「古今俄選」 一九九八 『新日本古典文学体系』 八二 岩波書店、一三五頁
- (7) 松岡薫 二〇二一 『俄を演じる人々』 森話社、九五頁
- (8) 郡司正勝 一九七七 『地芝居と民俗』 岩崎美術社、七四頁
- (9) 佐藤恵里 二〇〇二 『歌舞伎・俄研究』 新典社、五九一～六〇五頁
- (10) 鶴見俊輔 一九七九 『太夫才藏伝』 平凡社、五二頁

参考文献

- 郡司正勝 一九七七 『地芝居と民俗』 岩崎美術社
- 佐藤恵里 二〇〇二 『歌舞伎・俄研究』 新典社
- 松尾正一 二〇二一 『肥後にわか―笑いの来た道』 熊本日日新聞社
- 松岡薫 二〇二一 『俄を演じる人々』 森話社
- 安田宗生 二〇〇九 『熊本の俄とつくり物―明治・大正期新聞記事―』 龍田民俗学会

第三章 造り物

はじめに

風鎮祭において、にわか移動舞台が夜に行われるのに対し、造り物^①の大集合や山引きは二日目の日中に行われる。国の記録選択無形民俗文化財となったことで、にわか注目が集まる一方で、造り物の出品は減少傾向にあり、大集合や山引きの間にも観光交流センターでは別の舞台やイベントが行われ、造り物を観に来たという見物客は決して多いとはいえない。しかし、かつては現在の数倍もの造り物が出、風鎮祭のメインイベントとなっていた様子が記録からうかがえる。本章では、風鎮祭における造り物の変遷とその位置付けについて考察する。

第一節 記録に見る風鎮祭の「造り物」

「横町文書」によると、山引き（文書中では「ヤマ引き」と表記）の語は寛保二年（一七四二）が初出となっている。また、造り物（文書中では「作物」と表記）の語は、文政四年（一八二一）である。これは「七月盆入用」と題した支出記録の一つに確認でき、「作物代」として「喜代八」へ銭一〇匁が支払われている。後述するが、ここで記された「ヤマ」や「作物」が現在の造り物と同義かは不明である。

明治以降の新聞記事における風鎮祭の造り物の記述は、明治三〇年代から確認できる。なお、明治・大正期は、旭町と昭和町が誕生していないため^②、長らく上町・下町・横町の三町内の各組が出品していた。以

下では新聞記事等の記録を手がかりに、特に①山引きの変遷、②造り物の製作期間・題材・材料・台数の変遷、③造り物の振興（審査と投票）について整理する。

① 山引きの変遷

明治三一年（一八九八）九月九日付『九州』の「阿蘇郡高森町短信」では、「旧盆の景況」として「俄踊り諸作り物を各町に陳列し観客の総覧に供したる後互に各町に運搬し且つ所を移して交換的観覧に供するを例とす」と伝える。「交換的観覧」は山引きを意味すると思われるが、詳細を読み取ることできない。次に明治三四年（一九〇一）九月六日付『九日』に掲載された「高森町の風鎮祭《同町通信》」は、造り物の様子を次のように伝えている。

阿蘇郡高森町は毎年旧七月十六日より十八日まで三日間風鎮祭と称して夜間は手踊り昼間は諸種の作り物をして三味太鼓其他の囃しを入れて町内を昇ぎ廻るの習慣なるが本年は格別の競争にて各丁共其技術の他に選抜せんことに勉め（中略）昼間の造り物は上町は富士の巻狩、下町は日本名誉伝、横町は宮本武勇伝にして各町何れも三十四名の多き造り物なれば近郷より数百加勢人あるに拘らず人不足を訴るを以て牛車又馬車に搭載したるもの数十名ありし而も其作り物中にて好評を得たるは上町にては富士の雲龍、裾野の猪及鹿、鷹にして下町の製作に係るものは桜樹、猛虎、横町の昇り籠等なりしが其の他にも充分見るべきもの少なからざりし（後略）

夜間は手踊りをし、昼間は造り物に三味線や太鼓などお囃子を加えて町内を担いで巡行する（文中では「昇ぎ廻る」と表記）ことが「習慣」となっていたことがわかる。近隣からの加勢だけでは足りず、牛車や馬車に造り物を搭載したのもあったと伝え、当時は現在より台数が多く、大型のものが出たようである。現在の造り物は三・五メートル以内という規定があり^③、軽トラックに載せて山引きが行われるが、昭和四〇

年代末頃までは青年たち^④を中心に担いで移動したことがうかがえる^⑤。

ところで、二〇二三年度の風鎮祭では、二日目の午後一時から「造りもん大集合」があり、午後三時から山引きが行われた。近年はほとんど同様のスケジュールとなっている。明治から昭和にかけての新聞記事でも山引きはほとんど祭りの二日目に行われているが、その様子は現在とはやや異なっている。たとえば、明治三十七年（一九〇四）八月二七日付『九日』には、「日暮れに至り全町内の技巧を極めたる造り物は一斉に火を点ぜられ高空に装飾せられたる電灯と相映じ美観を極め造り物はそれぞれ青年達に担がれ三味太鼓面白く全町内を打廻り」とあり、日暮れから造り物を点灯し、お囃子を伴って山引きをしていた様子が報じられている。大正六年（一九一七）には、「新趣向を凝らせる高森独特の六十余の造り物午後六時一斉に点火空中高く装飾せる数千燭の電灯と相映じ町内は火の町、人の海となり」と報じ（九月七日付『九日』）、その後の記事でも年によって変動があるものの、午後四時、五時、六時、七時から山引きが行われ^⑥、造り物を点灯したり町内を電飾で彩るなどしていた様子が毎年伝えられている。これを楽しみに町内外、県内外から多い時には数万人の見物客が押し寄せ、山引きは風鎮祭一の盛り上がりを見せた。その様子は時に「不夜城」と表され^⑦、しばしば山鹿灯笼祭など

と比較された^⑧。昭和四二年（一九六七）頃になると、山引きは現在と同様午後三時頃からとなっている。

②造り物の製作期間・題材・材料・台数の変遷

風鎮祭の造り物は「一夜作り」であったとしばしば語られる。大正一〇年（一九二一）八月一三日付『九州』では、「如何なる趣向の作物も其の当日早朝より製作に従事し午後三時頃迄には仕上げ之れを町内に排列し一般の観覧に供し最も短時間に其の精巧を極むる美術的作物を仕上げ終る」と報じ、祭り当日の早朝から同日午後三時までの完成が通例であったことを伝える。時代は下って昭和四〇年（一九六五）八月一八日付『熊日』の記事では「祭りは午前零時を期してカネ、太鼓のはやしに乗って目ざましが行なわれ、祭りの開始を告げた。町内の各組ではそれを合図にいつせいに名物の造り物製作に取りかかり、同日夕刻には目抜き通りに約三十台が並んで通りは花やかな小旗と造り物でいろどられた」とあり、ここでは目撃しと同時に造り物の製作が始まり、祭りの初日夕方までに並べられたと伝える。現在は製作期間の制限は特に設けられておらず、製作者それぞれの生活や事情に合わせて作られるが、かつては短時間のうちに技巧や趣向を凝らし、造り物を完成させるという決まりがあったことが記事から確認できる。

では、造り物の題材はどう変遷してきたのだろうか。現在の風鎮祭では製作者ごとに個別に造り物の題材を設定するが、明治から昭和初期の新聞記事が報じる限りでは、上町・下町・横町の各町ごとに主題が設けられ、その内容に沿って町内の各組が題材を決めて作っていた様子がうかがえる。たとえば、先に引用した明治三四年（一九〇一）の造り物

は、上町「富士の巻狩」、下町「日本名誉伝」、横町「宮本武勇伝」で、特に「好評を得たる」ものとして、上町の「富士の雲龍」などが挙げられている。また明治三十九年（一九〇六）には、上町「四季の景」、下町「土農工商」、横町「博物館」という主題が確認できる（九月一三日付『九日』）。さらに大正十一年（一九二二）には、上町「我が領土の発展」、下町「桃太郎一代記」、横町「山海の巻」といった主題があり、「授賞組」として一等に横町の「花に蝶」、二等に下町の「宝車」と上町の「蘇鉄」、三等に上町の「根子岳の猫」と横町の「梅」、下町の「雉」などが続く（九月一二日付『九州』）。各町のどのグループが製作したかは不明で、各授賞作品が各町の主題とどう繋がるのか解釈が難しい題材もあるが、下町の「宝車」などは桃太郎が鬼退治で獲得した宝物を持ち帰る場面からきているのだろう。ほかに、大正十二年（一九二三）八月三一日付『九州』には、「上町は技術くらべ、横町は自然のめぐみ、下町のは時節が最もはずんで国立公園大阿蘇の頭一つ、つ取って鯉、蜘蛛、龍、鶏、などを作って人気に閉じた」とあり、一等が横町の「とんぼ」、二等が上町の「鷺」と下町の「蜘蛛」、三等が下町の「鶴」などとなっている。大正十五年（一九二六）には、上町「大阿蘇国立公園案内」、下町「阿蘇博物館の一部」、横町「四季の色々」という主題で五五の造り物が出た（八月二七日付『九州』）。

各町で設けられた主題に沿って造り物が作られたことを伝えるこうした記事は昭和五年（一九三〇）までは確認できるが⁹⁾、詳細が不明なものも多い。以降はしばらく入賞作品名と町名の表記のみだが、昭和二十五年（一九五〇）には一等に上町十組「蝶」（熊日賞）、二等に下町五組「チャボ」と横町十七組「孔雀」、三等に下町四組「白藤」と横町十八組

「伊勢海老」、横町十六組「カタツムリ」と発表されており（九月一日付『熊日』）、製作グループの組まで表記したのも見られる。その後の造り物の題材については、高森町商工会に保存されている風鎮祭の記録や新聞記事等から作成した【表1】を参照されたい。

材料については、主題と同じく毎回各町で統一があったと考えられるが、造り物を報じる記事でも毎回記載されておらず、その詳細はつまみにくい。わずかに、昭和八年（一九三三）九月一〇日付『九州』では、「竹の皮で作った横町では鯪鏝、下町では雀貝其他で意匠した藤棚、上町ではアルミの匙や皿で全身を掩ふた孔雀など」と伝えるほか、次節で述べるように材料を統一した「一式飾り」が戦後にもあったという証言が得られており、長らく材料の統一があったと考えられる。

現在でも風鎮祭の造り物は、祭りが終わった後は全て元通りに復すことができるように加工を施さないことが「審査規定」にも記され、材料選びや製作工程の基本となっている。大正十二年（一九二三）八月三一日付『九州』では、「作り物と云ふのが最も速く費用を省きそして見事なものを作らうといふのであるから材料は廃物に非ずんば箸、椀等の日用品ばかりでそれを寄せ集めて斯くも巧みに出来るものかと見物は只感嘆の声を発するばかり」と伝え、現在に至るまで廃材ではなく箸や椀といった日用品を使用することが鉄則となってきたことが確認できる。この「日用品」の概念は時代や生活様式の変化に伴って移り変わる。他の年の記事では、竹皮や貝、アルミ製の食器のほか、シヨケ（シヨウケ。竹籠¹⁰⁾）、割り箸やストロー、スリッパやホウキ¹¹⁾などが使われたことが伝えられている。現在使用される材料については第Ⅰ部第三章を参照されたいが、ホームセンターや一〇〇円均一ショップなどの普及によ

り、材料は一層多様化している。

今度は造り物の台数の変動を見てみよう。まず、明治三十九年（一九〇六）時点では約八〇基あったことが確認できる（九月一三日付『九日』）。以降、大正五年（一九一六）は約六〇基（八月一九日付『九日』）、大正八年（一九一九）は四〇基余（八月一七日付『九州』）、大正九年（一九二〇）は六〇基余（九月六日付『九州』）、大正一〇年（一九二一）は五〇基余（八月一九日付『九州』）、大正一一年（一九二二）は六〇基余（九月六日付『九州』）となり、以降は増減しながら五〇基程度で推移している。昭和十二年（一九三七）から昭和二十二年（一九四七）までは風鎮祭が休止となるため造り物も中断している。昭和二〇年代後半から四〇年代は四〇、三〇基程度で推移し、その後、昭和四九年（一九七四）には二三基（八月一八日付『熊日』）、昭和五〇年（一九七五）には二二基となっている（八月二二日付『熊日』）。新聞記事で確認できる範囲では、造り物の数は、明治三十九年（一九〇六）の約八〇基をピークとするなら、昭和五〇年代までの約七〇年の間にゆるやかに減少し四分の一近くにまでなっている。そして、現在は一〇基前後とさらに減少している。

③造り物の振興（審査と投票）

新聞記事を見ると、造り物は高森を象徴するものとしてさまざまに評されている。たとえば「造物の美術的に至りては近年長足の進歩にて」（明治四〇年八月一六日付『九日』）、「短時間に其の精巧を極むる美術的作物を仕上げ終る」（大正一〇年八月二三日付『九州』）、「短時日の間に作られる見立て細工の造りものは郷土の民芸品として高く評価されてい

る」（昭和三二年八月四日付『熊日』）、「高森町独特のものとして知られ、日用品や家財道具などを使ってつくる見立て細工で父子代々伝わる『民の芸術』（昭和三六年八月一七日付『熊日』）など、「美術」「芸術」といった語が見える。造り物を見物客が見て楽しむだけに留まらず、美術・芸術的観点から優劣を評価することで製作者の競争心をかき立てその振興を図り、造り物を観光の目玉とするため、こうした審査と見物客による順位予想投票という取り組みが生まれたのだろう¹²⁾。

この造り物の審査と順位予想投票は、大正四年（一九一五）に構想があった、あるいはこの年から始まったようである。同年八月二〇日付『九日』によると、近年の造り物は技を競い、より一層「精巧華麗」となり、熊本のみならず福岡、宮崎、大分からも見物客があると伝え、「本年は更に新趣向により多数の見物を呼ばんものと同地青年会は十七日午後六時より青年会事務所にて幹部の協議会を開き準備に着手せしが本年よりは造物の奨励法として審査部を設け造物に対して公平なる審査を遂げ等級を定めて一より三等迄に相当の賞品を与へ又一般来観者は入賞造物の予想投票を募りの中者には相当の賞品を呈する計画あり」と報じている。その結果についての続報は確認できないため実施されたかは不明だが、その後の大正九年（一九二〇）以降、造り物審査や順位予想投票の準備や結果が定期的に報じられるようになる。同年八月二七日付『九州』では、高森商工会主催で各町の造り物審査をし、一から三等まで賞を授与した後、入賞した造り物は一定の場所で一般に観覧し、入賞の予想投票を行って抽選で入賞者を決め、それにも賞を贈呈する計画をしたという。風鎮祭終了後の九月六日付の同紙では、「技巧卓絶せるもの多く等級の審査に大に困難」を生じたが、結局「秋山専売局技手

外嘱托委員の公平なる審査に依り」、順位が決定したことを伝えてい
る。以下はその総評と順位である。

審査員の総評に依れば、上町組の意匠技工共群を抜き殊に加藤清正の
虎の如き又鷹の如き実に驚くべき意匠と技工を示し又下町組は意匠は
極めて新しく此の点に於ては敢て上町に劣らずと雖も技巧に尚工夫を
加ふべき点あるを認めぬ横町組も意匠、技工共に大いに見るべきもの
少からざるも尚大体に於て其足らざるものあるを遺憾となすと云ふが
等級成績は左の如しと言ふ

上町 一等(鷹) 二等(虎) 三等(猪)
下町 一等(トオロウ) 二等(三月ヒイナ) 三等(稲荷利社)
横町 一等(鶴) 二等(ガマ) 三等(梅)

三町ごとに分け、町内で一等から三等の順位がつけられている。総評
からは、意匠と技工に着目して審査が行われたことがわかる。翌大正一
〇年(一九二一)には、造り物審査の順位ではなく、予想投票者の順位
が発表されている(八月二十五日付『九州』)。同記事中では、「当日の大
呼物たりし商工会主催造り物予想投票は非常の人気で予定の締め切午後
十時迄で投票者実に三千五百七十三人の多数に達し十余名の事務員はて
んでこ舞で活動した」と伝え、特に予想投票が祭の呼び物になっていた
ことがうかがえる。一等賞を当てた当選者には「金拾円」が贈呈され、
以下三等まで当選者に賞金が授与されている。大正一一年(一九二二)
には入賞した造り物、予想投票受賞者の両方が掲載されている⁽¹³⁾。大正
一二年(一九三六)八月三十一日付『九州』では、八月二十九日に開催され

る風鎮祭に向けて、同月二〇日から祭りの当日まで高森町内の商店で大
売り出しをし、二円以上買い物をした客に造り物一等賞の予想投票券を
配布し、一〇日間で一万枚以上が出たことを伝えている。祭り当日は午
後九時に予想投票が締め切られ、午後十一時に審査結果と予想投票の当
選者が発表され、祭りは深夜までに終わったという。

造り物の審査と予想投票が盛り上がりを見せる中、公平な審査を行う
ため、新聞社社員や商工会職員の立ち合いなどが行われたほか⁽¹⁴⁾、審査
員もさまざまな役職の人物が務めている。たとえば、大正一二年(一九
三六)八月二六日付『九日』では、「熊本専売局高森出張所 長嶋常喜
▲九州日日新聞記者 甲斐友比古 九州新聞 豊福一喜▲高森町長 高
崎得三▲高森尋常高等小学校長 宮川経沖 外に石田高森分署長には目
下交渉中であるから之亦快諾を得べく以上の諸氏が公平な審査を行ひ其
の結果は当夜十一時事務所前に掲示する由である」と伝えている。

現在の風鎮祭では造り物審査のみが残っている。昭和一二年(一九三
七)から昭和二二年(一九四七)まで戦局や戦後復興などを背景に風鎮
祭は中断しており、昭和一一年(一九三六)まで見られた順位予想投票
は、戦後に風鎮祭が再開した昭和二三年(一九四八)には実施された様
子がなく、その後も行われなかったようである。

第二節 風鎮祭の「造り物」今昔―聞き取り調査を加えて―

二〇二二年度の風鎮祭の造り物は、コロナ禍の影響もあつて全八基の
出品となり、今後も製作者の減少が懸念される。だが、前節で見たとお
り、以前は各町から合わせて何十基もの造り物が出、風鎮祭最大の盛り



【写真1】昭和八組による「熱帯魚」
(高森町商工会蔵)

前は陶器のみや掃除用具のみといった一種類の材料を使用し、他と混ぜて使用しないいわゆる「一式飾り」の決まりがあったという。たしかに、昭和三八年(一九六三)に出品された昭和八組の造り物の写真には、木札に「材料納涼用具」の文字が見える【写真1】。

しかし、少子高齢化で隣組の人

上がりを見せるメインイベントであった。

造り物製作を担う基盤となってきたのは、江戸期の五人組や十人組に由来する隣組(あるいは隣保組)であった。つまり、職人ではなく地域の住民、素人が担い手である。隣組は、従来の組織編成を元に昭和一五年(一九四〇)九月に「部落会町内会等整備要領」のもと制度化された。各近隣一〇戸前後を一単位とした相互扶助的役割を担う一方で、国家総動員体制下の相互監視の役割も果たした。大戦後から近年まで、造り物の製作は基本的にこの隣組を単位として行われてきた。三〇〜四〇歳でわかの上上会を卒業すると⁽¹⁵⁾、今度は隣組で造り物の製作を担うという一つのサイクルがあった。昭和五〇年代に高森に戻ってきた昭和七組の井和幸氏(昭和一七年生)と強子氏(昭和二一年生)によると、当時は一四、五戸の家があり、各家から一人は造り物に出、全部で一、二、三人で造り物を作ったという⁽¹⁶⁾。

横町六組の豊前屋本店会長・吉良禎人氏(昭和九年生)によると、以



【写真2】持ち主の名前を書いた椀
(報告者撮影)

借りたものには名前を書き、必ず返却した。現在の造り物にも以前材料として借りられた椀がそのまま使用されている様子も見られる【写真2】。隣組の戸数が減り、造り物の参加者が減少する中、近年は材料を借りることはほとんどない。しかし、道具や製作場所の提供など、未だ隣組単位での連携が見られる地区もある。

数や隣組を構成する戸数が減り、勤めによって造り物に不参加となる人が増える中、こうした決まりが足かせになり、次第に材料を混ぜ合わせで作るようになっていったという⁽¹⁷⁾。材料の制約が緩やかになった今日、かつてよりも材料の選択肢が増え、造り物は以前よりもカラフルになっている。

風鎮祭の造り物は、着色せず、解体でき、全て元に戻すことが出来ることが原則である。材料をさまざまに組み合わせることで、素材からは想像がつかないものを作り上げる「見立て」の手法である。製作にあたってどんな材料が手元にあるかを把握し、どの材料をどこにどう当てはめるかを共に相談・検討でき、完成まで協働で作業ができる、日頃から気心知れた関係性であることが重要である。また、造り物に使用する材料の保管場所の確保や、不足した材料の借入先なども想定できねばならない⁽¹⁸⁾。こうした製作時のメンバーシップや材料の調達協力といった点においても、隣組という単位が重要な役割を果たしてきた。近所から

第一節で見たとおり、風鎮祭の造り物は「一夜作り」を基本としてきた。かつては祭礼日が八月一七・一八日に固定されていたため、一六日の朝から作り、初日一七日の一七時までに出陳するのが通例であった⁽¹⁹⁾。製作の開始時間は時代ごとにズレが見られるが、少なくとも短期間で作り上げるといふ決まりは共通していた。昭和三〇〜四〇年代頃、吉良氏の代になると隣組三〜四軒から男性二名ほどが出、前もって構想を練り、数日で作り上げたという。時に、町内には造り物製作に長く携わった棟梁のような存在が居り、造り物の講習会などを開いて指導してもらったこともあるという⁽²⁰⁾。

第一節で見たとおり、現在の山引きは造り物を軽トラに載せて行こう。吉良氏や井氏によると、以前は担いだり、リヤカーで引くなどしたが、道路が未舗装であったため隣組の人手が多く必要であったという。また、お囃子は、現在と同様各町のわか囃子方が付き、造り物を先導した。山引きの時に特別に仮装をすることはなく、仮装と造り物は別物であった。隣組の人数が多い時期は、材料を借りに行く人や女性たちがお茶出しや手伝いをするなど、役割分担ができていたという⁽²¹⁾。

吉良氏は、風鎮祭は町なかの商家が近隣の農家を慰安する意味もあったと語る⁽²²⁾。風を鎮め、五穀豊穡を祈願し、農家が豊かになることで町中の商店も潤う。高森町の人口は一万数千人を有し、造り物の山引きには近隣だけでなく野尻や草部などの山東部からも歩いて祭に訪れ、町中の飲食店が賑わうなど経済効果もあった。造り物やにわか、仮装行列などで見物に来た農家をもてなし、楽しませるものであった。にわか、造り物、仮装行列に参加している知り合いを探すのも楽しみの一つであった。ゆえに、「下手なことではできない」という意識が、にわか演者や

造り物の作り手の競争心を支えてきたのである。

第三節 風鎮祭における「造り物」の役割

前節で見た「風鎮祭が近郷農家の慰安であった」という語りは、大正・昭和の新聞でも確認できる。たとえば、「風鎮祭は風祭りの余興に農家の老若男女が集まって夜を徹して盆踊りをなす年に一度の慰安日である」（大正一四年八月二四日付『九州』）、「是れは商家が農家に対する報恩感謝の意味から起こったもので元禄時代から開始された。初めは盆前、村芝居を催し、農村の慰安に供したが、何時の間にか商戸は各自の商品を利用して見立て細工を作り出したのである」（小堀周二。昭和一五年七月一四日付『九日』）、「とくに二日目に行われる名物の見立て細工造り物の山引きは同祭典の余興として古くから伝わる南郷地方農民唯一の慰安であり」（昭和三一年八月一七日付『熊日』）という具合である。

風鎮祭そのものの起源と風鎮祭における造り物の始まりを検証することは困難だが、南郷一帯で最大級の祭りであったことに変わりない。さらに明治から昭和にかけては鉄道の開通もあり、町外からの見物客が一層増加した。第一節で見たとおり、大正期から始まった造り物の審査会と順位予想投票は、見物客の祭りへの参加意欲を刺激し、話題性がある祭りとしてその準備から新聞報道等で周知されていた。つまり、造り物が観光の起爆剤として売り出されていったのである。

ところで、造り物の審査会と順位予想投票が始まる以前から、山引きには三味線や太鼓などのお囃子がつき、造り物の巡行を盛り上げた。祭

りの二日目に山引きを行うことを基本としつつ、初日・二日目ともにわかや手踊りが町内を練り歩き、浄瑠璃、劇、手踊り、仮装などの余興が間断なく催された。特に仮装は大正末期からどのようなものが出たかが度々報じられ、造り物に劣らぬ人気を博していたことがうかがえる。⁽²³⁾

新聞記事や聞き取り調査からも、造り物と仮装行列はその内容において特に関連させることはなかったようである。たとえば、昭和二年（一九二七）の仮装行列は上町「二人つれづれ」、下町「赤穂義士銘々伝」、横町「幼稚園」としている一方、造り物の各町の主題は上町「昭和第一回的美術展覧会」、下町「郷土の誇り」、横町「大阿蘇の里」という内容である。そして、山引きが終わると屋台が繰り出され、にわかや手踊りが祭りのエンドロールを飾っている（八月一六日付『九日』）。

風鎮祭において造り物が最大の呼び物となっていたことはこれまでに確認したが、現在は造り物が巡行することを意味する「山引き」の「山」（ヤマ）が元来何をさすかという問題がある。昭和八年（一九三三）九月九日付『九州』に「潮倭文」というペンネームの人物が寄せた文章では、「この頃では風鎮祭と云へば「山引」のみを想はせる。又「山引」を指して風鎮祭と云ふ。これは誤想である」とし、『山引』は山を引くから『山引』と云ふのであるが、山とは何故に呼ぶか詳しいことは分らない。山とは『うづたかきもの』の意であるが『大きなもの』の意に用ひられてゐるのではあるまいか、屋台の一種であらう。この『山』を『作り物』の最後へ付けて引くのである。昔はこの山へ仮装した子供を乗せたが、近年は乗せない様になった」と述べる。また、本田秀行『信仰風土記―南阿蘇高森』（一九八二）には、「この祭は高森阿蘇神社（旧矢村社）の風鎮めの神事に始まる。そして各町内の造り物数十

台が造られ、それが町を巡行する。曾っては神霊を奉じた。『山』が先頭に立ったが今は廃れ、単なる造り物のみとなった」と記されている。⁽²⁴⁾

以上の記述は、「山」（ヤマ）が造り物をさす語ではないと説明する。昭和四年（一九二九）の新聞では「造り物及び山の引立て」と記しており、書き分けがあつたようにもうかがえるが、そのほかの記事ではほとんどが造り物をさす語として定着している。現在の山引きではお囃子も造り物の搭載も軽トラックが主流となり、今や潮や本田がいう「山」が何であつたか判然としない。ただ、下町の某商店にはかつて「大山」と呼ばれていた唐破風のついた山車が解体保存され【写真3】、平成六年（一九九四）に昭和八組が出品した「幻の大山」という造り物も唐破風がついた山車であつた【写真4】。今日ではほとんど記憶されておらず、本稿でも解明できなかったが、「山」（ヤマ）という語と造り物の関係性については今後も検証すべき課題である。



【写真3】「大山」を組み立てた際の写真
（豊前屋蔵）



【写真4】昭和八組の「幻の大山」
（豊前屋蔵）

第四節 熊本県内における「造り物」と風鎮祭の「造り物」

安田宗生編著『熊本の俄とつくり物―明治・大正期新聞記事―』（龍田民俗学会、二〇〇九年）を参照するに、県内の新聞における造り物の記事は明治九年（一八七六）一〇月九日付『熊本』に掲載されたのが最も早く、阿蘇神社小祭田実神事に際して出たものようである。祭礼終了後、「飾り山」を馬場筋へ引き、町内各所に「忠臣蔵十二段の見立細工」を飾り、中には「両国橋杯八大仕掛にて殊の外能く出来おり飾り山に八従来三味太鼓のはやしに小女の手踊り杯も有しが本年ハ敬神の五趣意を奉じ是等ハ止めおりとの事」と記されている⁶⁶。また、明治一三年（一八八三）に花岡山で始まり、のちに山崎練兵場、藤崎台で開催された招魂祭では、明治一七年（一八八四）頃から造り物が²⁷、明治二〇年頃からわかか盛んに登場するようになる²⁸。

新聞が登場する以前にも祭礼における造り物は確認され、たとえば現在の菊池市隈府の商家が代々書き継いだ『嶋屋日記』には、北宮阿蘇神社の祭礼に伴う出し物（通し物）が細かに記録され、造り物の様子も見られる。たとえば、天明四年（一七八四）七月の「（前略）十四日御出立後より、俄二作りもの、行列なと取立、下町・中町より者出、上町・よこ町方ハ、例年之通、不相替狂言山四ツほと出ル、よこ町ハ妹背山之道行、菅原之四段目、上町ハ布つと双蝶々揚屋之場、俄事ニハ能ク出来ル（後略）」との記述を確認することができる。狂言の場面に基づいた造り物が「俄事」つまり急ごしらえで作られ、行列を成した様子が記されている²⁹。造り物を含む近世期の風鎮祭の様子は不明だが、この『嶋屋日記』の記述からは、本章第一節で見た町ごとの主題に沿った造

り物が短期間で作られた様子を想像することができる。

本稿では、熊本県内の造り物がどのように展開してきたのかについて考察する紙幅は無いが、少なくとも風鎮祭の造り物が宇土の地蔵祭りや矢部の八朔祭りと共に県内を代表する造り物として知られていることは確かだろう。ほかに県内他地域の祭礼で現在も造り物が出るのは、天草市本渡の「とおしもん」、八代市鏡町の「十八夜祭」、美里町の「地蔵祭り」（現在の「やまびこ祭り」）、氷川町宮原の「地蔵祭り」、大津町の「地蔵祭り」、山都町馬見原の「火伏地蔵祭り」、御船町の「地蔵祭り」（現在の「があーっぱ祭」）などである。多くの先行研究で紹介されているとおり、熊本では特に地蔵祭りで多数の造り物が確認されている。また、造り物の一種として、山鹿灯笼祭りも加えることができるだろう。造り物を伴う祭礼は現在県内で一〇カ所有余で、風鎮祭を含む多くの地域の造り物では、生き物や建物、キャラクターなどが作られる。一方、本渡の「とおしもん」は熊本や地域ゆかりの物語の一場面を表し、また大津町の「地蔵祭り」は梅の造花のみが残っているなどや趣向が異なる。

かつて熊本市にあった大洋デパートでは、昭和三〇年代に「造り物競作展」（以下、競作展）として県内の造り物を一堂に集めたコンテストが開催された。この競作展のアルバムが高森町商工会議所に残されており、かつては今よりも多くの地域で造り物が行われていたことがわかる。たとえば、昭和三三年（一九五八）の「第二回造り物競作展」（太平洋美術振興会・熊本日日新聞社主催）のアルバムには、高森町のほかに矢部町、甲佐町、宇土町、城南町、小川町、川尻町、砥用町、松橋町、大津町、阿蘇町、段山町、河原町、迎町、迎宝町（町名はアルバム内の



【写真5】高森町出品のカニの造り物
(高森町商工会蔵)

表記)の計一五町の造り物の写真が掲載されている【写真5】。同年八月一日付『熊日』は「今年は本社、太平洋共催の競作展に出品したのが刺激して作品も向上、審査も難航した」と、競作展への参加が風鎮祭造り物のさらなる向上を促したと伝える。井氏や吉良氏によると、以前は風鎮祭終了後に熊本県内外から造り物を借りたり、購入に来ることもあったという。

全部で二回ほど開かれたと思われる競作展のアルバムからは、ほかに御船町、新町、東陽町、山鹿市、中央町、山鹿市、中央村堅志田、菊池市、蘇陽町馬見原などの造り物も確認でき、いずれも豊後・日向・薩摩・豊前といった街道筋に造り物を伴う祭礼があったことがわかる⁽³⁰⁾。現在、高森、矢部、大津、馬見原などを除き、競作展に造り物を出品したほとんどの地域で造り物は失われており、かつての熊本県内の造り物の様相を知る上で、同アルバムは貴重な資料となっている。

同アルバム内には確認できないが、旧白水村(現・南阿蘇村)の吉田新町の鎮火祭も「山引き」と呼ぶ。高森・吉田新町・馬見原については、造り物・わか・仮装行列がセットで登場する祭として知られ、本報告書でも言及されている。造り物やわか、狂歌などは近世後期の同時期に庶民の間に急速に広まり、大都市圏の臨時的祭礼で風流の趣向として導入された一方、地方でもさまざまな形で受容され、定着したと考

えられている⁽³¹⁾。風鎮祭も同様の歴史的展開の中に位置付けられ、地方における風流の展開を今も残す祭りの一つといえよう。現在では、仮装行列は無くなり、かつてよりも造り物とわかとの密接性は薄れつつあるものの、風鎮祭全体を構成する要素として現在も造り物とわかには不可分の関係にあるといえよう。

おわりに

本稿では、風鎮祭における造り物の変遷と位置付け、県内の造り物文化における風鎮祭の造り物の意味について、確認可能な資料・情報をもとに概観した。その起源や近世期の様子については不明な点が多く詳述することはできなかったが、近代以降、造り物ひいては風鎮祭の活性化をめぐって多種多様な取り組みが今日まで行われてきたことが垣間見えた。現行でわかと造り物が一体となった風鎮祭のような祭礼のかたちは、県内でも少数となっている。風流の地方展開の古い形態を残す事例として、にわかと造り物は今後も一体的に記録する必要があるだろう。

註

(1)「つくりもの」の表記については、「造り物」「作り物」「作物」といった表記があるが、本章では引用文以外、現在風鎮祭で使用されている「造り物」で統一した。

(2)昭和町は昭和八年(一九三三)から、旭通は昭和四〇年(一九六五)から造り物に参加している(昭和八年九月一〇日付『九州』および昭和四〇年八月一九日付『熊日』より)。

(3)高森町商工会所蔵の風鎮祭関係資料を確認する限り、昭和五年(一九八〇)以降は三・五メートル以内と定められている。それ以前、少なくとも昭和五〇年(一九七五)～五四年

(二九七九)は四・五メートル以内となつてゐる。なお、昭和九年(一九三四)八月九日付『九州』では、高森の「井上空山」というペンネームの人物が「おらが郷土 高森の山引」という文章を寄せ、以前は「大江山」とか「忠臣蔵」乃至「奉天会戦」さては「浪さん武さん」まで飛び出す時代物が、あり合せの見立細工で奇想天外を競ふものであったが、電線が張り廻されたので高いものが絶対に駄目となつたのと、経済本位となつたため其の作品が細くなつた計りでなく、大方指先きの器用を見する細工物が多くなつたのも時代相と見れば見られぬ事もない」と述べており、他地域と同様電線の登場による小型化を指摘している。

(4)昭和二年(一九二七)八月一六日付『九日』では、「その趣向をこらせる名物の作り物五十余点はいよいよ町内に配列され、各山は各担当の向上会員にかつがれ かけ声勇ましく全町をねりまはり大賑はひを呈した」とあり、造り物の担ぎ手を青年を中心とした向上会が担つていた様子がうかがえる。

(5)昭和四八年(一九七三)頃から、「車にしつらえた「やま」(八月一九日付『熊日』ほか)という表現が多々見られるようになるため、この頃から車による山引きとなつていったと思われる。

(6)大正一一年(一九二二)には、午後七時から三味線太鼓の拍子を伴つて、上町、下町、横町の各組の造り物の行列が町内の隅々を練り廻り、午後九時に解散したと報じられている(九月一二日付『九州』)。

(7)たとえば、大正九年(一九二〇)九月六日付『九州』では、「高森独得の造り物は配列を終りその数六十余に達しその技工を競ひ大に衆目を惹き一同之に点火すれば全町火の海と化し美観壯観言語に絶え不夜城を現出し、造り物は青年等により各町を担ぎ三味太鼓の音面白く打廻り此時町内鮎詰の群集の喝采歓呼湧くが如き中に有名なる山引の行事は終はりを告げ」と報じている。

(8)たとえば、明治四〇年(一九〇七)八月一六日付『九日』では、「造物の美術的に至りては近年長足の進歩にて当日に至れば近郷近村は固より遠く福岡、大分の地方より參觀するもの

実に数万に達し其壯観は山鹿灯籠祭をも圧せんとす勢なる」と伝える。また「肥後の三馬鹿騒ぎの一つ」という文脈でも山鹿灯籠祭が登場する。

(9)主題は上町「高森動植物園」、下町「大阿蘇美術展覧会」、横町「蘇南の新風景」と各町設定され、一等が横町の「松に鶴」、二等が下町の「伊勢海老」と横町の「鯉の漉上り」、上町の「梅に鶯」といった順位で入賞している(昭和五年九月一二日付『九日』)。

(10)総和八年(一九三三)九月一二日付『九州』では、「味噌漉シヨケ五個で 梅花の五弁を作り、鶯も大小のシヨケで巧に意匠した横町の梅に鶯が第一等の栄冠を占め」と伝える。

(11)昭和四七年(一九七二)八月一九日付『熊日』では、「割りばし、ストロー、アルミざらなどを使つた三厨余りの「高原の孔雀」、スリッパやホウキで作られた「金鷄島、おワンのふた、皿などの食器による「キジ」、話題になつた「祖母のカモシカ」、など趣向をこらした十三基が、夕方五時半から町内三ヶ所を風鎮太鼓の音に合わせてパレードした」と伝える。

(12)大正年間には、宇土の地藏祭りでも優秀作品に対して賞金を出したという「安田 二〇〇九・一三」。

(13)以下、大正一一年(一九二二)九月一二日付『九州』より一部を引用。

「造り物の題並に授賞組及び予想投票受賞者左の如し

▲題 上町(我が領土の発展) 下町(桃太郎一代記) 横町(山海の巻)

▲授賞組 一等花に蝶(横町) 二等宝車(下町) 同蘇鉄(上町) 三等根子岳の猫

(上町) 同梅(横町) 同雉(下町) 四等軍鶏(上町) 同猪(横町) 同葡萄(横町) 同御料地の鶴(上町)

△予想投票受賞者 一等(阿蘇郡柏村甲斐亭) 二等(高森町弥永タツ) 三等(高森町栗屋又彦)

(14)大正一一年(一九二二)九月七日付および九月一二日付『九州』より。

(15)長らく町外へ働きに出た後に高森町に戻るなど、向上会を経ずに造り物を製作する人もいる。

- (16) 二〇二二年一月二二日開取り。
- (17) 井和幸氏・強子氏からの開取り調査（二〇二二年一月二二日）および本田禎人氏からの聞き取り調査（二〇二三年六月一日）。
- (18) 二〇二三年六月一日、本田禎人氏への聞き取りによる。
- (19) 同前。
- (20) 同前。
- (21) 同前。
- (22) 同前。
- (23) たとえば、大正一五年（一九二六）八月二七日付『九州』では、造り物の成績と順位予想投票の当選者のほかに、商工会と青年会が実施した仮装についても詳しく報じている。「高森伊予守の面影」と題した甲冑姿の町民、大阿蘇に足跡を残した名士たちの姿などが見られたという。この仮装行列の後に山引きが三時間かけて町内を巡行した。
- (24) 本田 一九八二・四三。
- (25) 昭和四年（一九二九）八月一九日付『九日』および同年八月二四日付『九州』より。
- (26) 安田 二〇〇九・二三。
- (27) 安田 二〇〇九・一一。
- (28) 安田 二〇〇九・四。
- (29) 『嶋屋日記』四一三頁。
- (30) 灯火の風流について考察した三田村佳子は、送り盆・地藏盆にその源を発する灯籠風流に代わるものとして造り物があるとし、素材を日用品に変え一式飾りが誕生していったとする。特にこれらは大坂を中心とした海陸諸街道沿いの町々に分布し、陶器などの商人の行商によって伝播していったと推察している「三田村 二〇二一・一四三―一四五」。
- (31) 西岡 二〇一四・二七。

主要参考文献

- 西岡陽子 二〇一四「造り物概観―西日本を中心に―」（福原敏男・笹原亮二編『造り物の文化史 歴史・民俗・多様性』 勉誠出版、三〇三―三二二頁所収）
- 花岡興輝編輯・校訂 一九八七『嶋屋日記』 菊池市史編纂委員会
- 本田秀行 一九八二『信仰風土記―南阿蘇高森』
- 三田村佳子 二〇二一「灯火の風流」（植木行宣監修『山・鉾・屋台の祭り研究事典』 思文閣出版、一三八―一四九頁所収）
- 安田宗生編 二〇〇九『熊本の俄とつくり物―明治・大正期新聞記事―』 龍田民俗学会

表1 造り物順位年表（昭和50年度～令和元年度）

【凡例】・昭和50年度～昭和63年度（昭和53・57年度を除く）および平成12年度～平成30年度（平成18・19年度を除く）については、高森町商工会が所蔵する風鎮祭関係資料のうち、現在確認できるもののみを反映した。なお、昭和53・57年度および平成元年度～平成11年度、平成18・19年度については、『熊本日日新聞』および『広報たかもり』の記事を参照した。
 ・平成元年度～平成5年度については、安田宗生委員長より新聞記事の情報を提供いただいた。
 ・令和元年度については、記録写真（筆者撮影）による情報を反映した。
 ・町・組・作品名・順位の表記は基本的に高森町商工会所蔵資料および『熊本日日新聞』に掲載された表記に従った。

年度	町	組	作品名	順位
令和元年度	旭通	旭通下組	風鎮カサゴ	特賞
	下町	下町中組（資）大塚商店	風鎮火山	金賞一席
	天神	天神区	ハクトウワシ	金賞二席
	下町	下町上組	阿蘇五岳の護り豚【雲海龍】	金賞三席
	昭和	昭和6組	令和を駆ける猪	銀賞一席
	下町	下町下組ひめゆり	癒しタイ	銀賞二席
	旭通	旭区向上会	高森田楽いただきます	銀賞二席
	昭和	昭和向上会 OB	神龍	銀賞四席
	昭和	41 会	（東峰ルート登山中の）ノコギリクワガタ	銅賞一席
	横町	造物愛好会	オオルリシジミ	銅賞二席
平成30年度	上町	上町向上会	とんぼ	銅賞三席
	横町	横町向上会 OB	アシナガクモ	銅賞四席
	下町	下町中組（資）大塚商店	ティラノザウルス	特賞
	天神	天神区	クマゼミ	金賞一席
	下町	下町上組	下町玄武	金賞二席
	昭和	昭和6組	柴犬	金賞三席
	下町	下町下組	平成最後の下町錦	銀賞一席
	昭和	41 会	TAKARA MORI の空を飛ぶダンボ	銀賞二席
	横町	造物愛好会	バッタ	銀賞三席
	横町	横町向上会 OB	D51	銀賞四席
平成29年度	旭通	旭通区	風鎮バンダシャンシャン	銅賞一席
	上町	上町向上会	イルカに乗ったひよっこりはん	銅賞二席
	旭区	旭通下組	風鎮の大カマキリ	特賞、高森町賞
	上町区	上町上組	亀	金賞一席、高森町議会賞
	下町区	下町（資）大塚商店	イケメン ゴリラ	金賞二席、高森町商工会賞
	天神区	天神区	ガマガエル	金賞三席、高森町観光協会賞
	下町区	下町楽友会	あっぱれ！めで鯛！	銀賞一席、JA 阿蘇高森中央支所賞
	下町区	下町第3隣組	何を造ろうかなあ？閃いた！ひらめ	銀賞二席、阿蘇森林組合高森支所賞
	昭和区	昭和6組	折り鶴	銀賞三席、肥後銀行高森支店賞
	上町区	上町向上会	キャプテンディヴィ・ジョーンズ	銀賞四席、熊本県信用組合高森支店賞
平成28年度	昭和区	41 会	暑か～夏行水始めた人魚姫（マーメイド）	銅賞一席、阿蘇南部地区交通安全協会賞
	横町区	横町造物愛好会	大発見！ツチノコ	銅賞二席、南阿蘇安全運転管理者等協議会賞
	昭和区	昭和向上会	招きねこ	銅賞三席
	旭通り区	旭通下組	復興熊本不死鳥	特賞、高森町賞
	昭和区	昭和区梅香苑デイケアセンター	静衛門と予知ナマズ参上	金賞一席、高森町議会賞
	旭通り区	旭通三山片愛好会	ウルトラマンガイアシリーズミズノエノリュウ	金賞二席、高森町商工会賞
	下町区	下町区（資）大塚商店	カンガルー	金賞三席、高森町観光協会賞
	昭和区	昭和第6組	復興ねがいざる	銀賞一席、JA 阿蘇高森中央支所賞
	上町区	上町上組	復興イルカ	銀賞二席、阿蘇森林組合高森支所賞
	下町区	下町3組	ファインディング・ドリー	銀賞三席、肥後銀行高森支店賞
平成27年度	天神区	天神区	コオニヤンマ	銀賞四席、熊本県信用組合高森支店賞
	昭和区	41 組	ピノキオ	銅賞一席、阿蘇南部地区交通安全協会賞
	上町区	高森町商工会青年部	オウム	銅賞二席、南阿蘇安全運転管理者等協議会賞
	昭和区	昭和向上会	ピカチュウ	銅賞三席
	横町区	横町七組 A なかよし会	がんばれ、くまもん	銅賞四席
	横町区	横町造物愛好会	キハダマグロ	銅賞五席
	上町区	上町向上会	ト根性復興蛙	奨励賞
	旭通り区	下組	都会の果造り	特賞
	上町区	上組	蟹	金賞一席
	下町区	3 組	ファインディング ニモ	金賞二席
平成26年度	昭和区	6 組	羊	金賞三席
	下町区	有志一同	密林の王者 バンダ	銀賞一席
	下町区	向上会	磯の王者 石鯛	銀賞二席
	昭和区	向上会	トトロ	銀賞三席
	横町区	造物物愛好会	風鎮アメンボ	銀賞四席
	上町区	向上会	納涼！！クリオネ	銅賞
	旭通り	下組	狩りをする鷲	特賞
	旭通り	上組	山鹿の川がに	金賞一席
平成25年度	下町	3 組	エンゼルフィッシュ	金賞二席
	上町	上組	アリとキリギリス	金賞三席
	昭和	昭和41 会同期会	幸せを運ぶブルービー	銀賞一席
	昭和	6 組	馬	銀賞二席
	横町	7・A 組	あげはちよう	銀賞三席
	下町	向上会	ラオウを探す黒王子	銀賞三席
	横町	造物物愛好会	風鎮大トカゲ	銅賞一席
	昭和	向上会	ふなっしー	銅賞二席
平成25年度	横町	7・A 組	ペンギン	銅賞三席
	上町	向上会	ウイスパー	銅賞四席
	旭通	下組	ハイヤを踊る鯉	1
旭通	上組	風鎮祭で天草観光を招くシオマネキ	2	
上町	上組	じえ、じえ、じえ、かまきり	3	

第Ⅱ部 第三章 造り物

年度	町	組	作品名	順位
平成 25 年度	下町	2 組	天草名物 天空まぐる	4
	下町	3 組	牛深ハイヤを踊るガラカブ	5
	昭和	41 会	山山河豚	6
	昭和	6 組	キングコブラ	7
	横町	横町造り物愛好会	こりゃ何じゃ海蛇ジャ	8
	昭和	向上会	武将 くまモン	9
下町	5 組	天草の太刀魚	10	
平成 24 年度	下町	2 組	ワイルドだぜー 麒麟	1
	旭通	下組	羽を休めるタカ	2
	旭通	上組	大阿蘇の空に飛び舞うトンボ	3
	昭和	第 6 組	大海馬	4
	上町	上組	カニ	5
	下組	3 組	ロンドンフィッシュ	6
	横町	造り物愛好会	風鎮海老	7
	下町	5 組	狸のドジョウすくい	7
	昭和	向上会	昭和のしゃんしゃん馬	9
	天神	天神区	てんとう虫	10
平成 23 年度	旭通り	中組	亀の田がめちゃん	特賞
	下町	2 組	なでしこ鷲	金賞一席
	旭通り	下組	フクロウとねずみ	金賞二席
	昭和	6 組	日本雪兎	金賞三席
	上町	下組	別所のガメラ	銀賞一席
	下町	3 組	がんばろう日本 不死鳥	銀賞二席
	上町	上組	猫だけ	銀賞三席
	横町	七組 A	くまもん	銀賞四席
	上町	上町向上会	叶うネコ	銅賞一席
	下町	5 組	風鎮ガッパ	銅賞二席
昭和	向上会	お父さんに成り損ねた白熊	銅賞三席	
横町	横町造り物愛好会	鯉	銅賞四席	
平成 21 年度	上町	上組 1, 2, 3, 4, 9	ベガサス	特賞
	旭通	下組	風鎮孔雀	金賞一席
	昭和	6 組	肥後の赤牛	金賞二席
	旭通	中組	祝築城 400 年熊本城平成の鯨	金賞三席
	下町	高森サッカークラブ	イワトビペンギン	銀賞一席
	昭和	向上会	縄と綱で急いで造りました。横綱土佐っ犬	銀賞二席
	下組	第 5 組	風鎮ガンダム	銀賞三席
	下組	第 3 組	きやりこちようび (金魚)	銀賞四席
	下組	第 2 組	アシカも見上げる皆既日食	銅賞一席
	昭和	7 組	孔雀	銅賞二席
	横町	横町造り物愛好会	海老ちゃん	銅賞三席
	旭通	上組	キアゲハ蝶	銅賞四席
	天神	野球部	ブテラノドン	銅賞五席
	横町	横町第七 A 組	カラスアゲハ	奨励賞
昭和	高森高校生徒会	ハローキティ	奨励賞	
平成 20 年度	上町	1, 2, 3, 4, 9 組	ごすワクド	
	上町	カーニバルズ	ヤッターマン	順位不明
	横町	造り物愛好会	精霊カマキリ	
	横町	7, A 組	幻の蛇つちのこ	
	下町	二組	レッサーパンダ風鎮くん	特賞
	下町	三組	北京山猫	
	下町	五組	風神	
	下町	向上会	キリン	
	下町	サッカークラブ	鯨	
	高森ベースボールクラブ		金剛力士象	
	高森ソフトボール協会		バボチャン	
	昭和	六組	俵の大ねずみ	順位不明
	昭和	7 組	ゴジラ	
	昭和	向上会	OH!! かぶと虫	
昭和	高森高校生徒会	空に飛びたて! Dragonfly!		
旭通り	上組	熊本の赤牛		
旭通り	中組	聖火をもつ霸王龍 (ティラノサウルス)		
旭通り	下組	ミサゴ	特賞	
平成 19 年度	旭通り	中組	樽獅子	特賞
	下町向上会		別所の主アロワナ	
	昭和	第 6 組	山の守り神白イノシシ	
	昭和	第 7 組	軍鶏	
	昭和向上会		威勢のいい風鎮祭にヒトデがありますように	
	上町	1, 2, 3, 4, 9 組	スズメバチ	
	上町	カーニバルズ	ドラえもん	
	横町	7 組 A	女郎蜘蛛	順位不明
	横町	造り物愛好会	羽黒とんぼ	※「広報たかもり」(2007 年 9 月号) より
	下町	第 2 組	風鎮摩利支天	
	下町	第 3 組	クマノミ	
	下町	第 5 組	シーサー	
	社会人サッカークラブ		さっかーな?	
	高森高校生徒会		機動戦士ガンダム	
旭通り	上組	魔除けの虎	順位不明	
旭通り	下組	風風	※「広報たかもり」(2007 年 9 月号) より	

年度	町	組	作品名	順位
平成18年度	下町	2組	犬猿の仲(パンくんとジェームス)	特賞
	上町	上組	サッカーする象	※その他順位不明。「広報たかもり」(2006年9月号より)
平成17年度	旭通り	旭下組	風鎮鷹	特賞
	旭通り	旭中組	ムウロン山羊	金賞一席
	上町	上町1, 2, 3, 4, 9組	カマキリ	金賞二席
	旭通り	旭上組	風風	金賞三席
	昭和	昭和7組	蝶	銀賞一席
	昭和	昭和8組	高森コーチン	銀賞二席
	昭和	昭和6組	レッサーパンダ風太くん	銀賞三席
	下町	下町第3組	アメリカンコッカスバニエル	銀賞四席
	下町	下町第5組	蝶	銅賞一席
	天神	天神区	カツラチャボ	銅賞二席
	横町	造り物作ろう会	ムシキング ヘラクレスオオカブト	銅賞三席
	横町	横町頑張ろう会	オオヤマトンボ	銅賞四席
	上町	上町向上会	くわがた	銅賞五席
平成16年度	旭通区	下組	鯰鉾	特賞
	旭通区	中組	マンドリル(猿) 原産地アフリカ	金賞一席
	上町区	1, 2, 3, 4, 9組	くもとトンボ	金賞二席
	旭通区	上組	大海カメ	金賞三席
	下町区	楽友会	ガンダム フーチン	銀賞一席
	昭和区	7組	蟬ツクツクボウシ	銀賞二席
	昭和区	8組	インド孔雀	銀賞三席
	下町区	3組	チャボ	銀賞四席
	横町区	横町がんばろう会	湧水アゲハ	銅賞一席
	天神区	天神区	河豚	銅賞二席
	横町区	第7, A組	伊勢エビ	銅賞二席
	下町区	5組	大黒さん	銅賞四席
	昭和区	6組	風鎮猿アテネへ参上	銅賞五席
横町区	横町造り物愛好会新鮮組	えっ、トンボ?こりゃあチョンボ!	奨励賞	
上町区	向上会	鶴	奨励賞	
平成15年度	下町	2組	ゴジラ55	特賞
	旭	中組	キリンビール	金賞一席
	旭	下組青年部	タマチャン	金賞二席
	旭	上組	沖縄のシーサー	金賞三席
	上町(天神)	天神	ワニ	銀賞一席
	上町	1, 2, 3, 4, 9組	クロコダイル	銀賞二席
	昭和	6組	イリエワニ	銀賞三席
	昭和	7組	オオルリシジミ	銀賞四席
	下町	6組	虎がほほえむタイガース	銅賞一席
	下町	3組	多摩川のたまちゃん	銅賞二席
	旭	下組婦人部	ダチョウ	銅賞三席
	昭和	8組	ヤツガシラ	銅賞四席
	上町	カーニバルズ	桃太郎 猿	奨励賞
上町	向上会OB	金魚	奨励賞	
横町	横町がんばろう会	くわがた	奨励賞	
横町	横町造り物愛好会	くるまえび	奨励賞	
下町	5組	コブラの踊り	奨励賞	
下町	下町老人会集友会	瀬戸の花嫁	奨励賞	
平成14年	下町	第2組	風鎮伊豫之守	特賞
	旭通	下組	風鎮鷹	金賞一席
	下組	第5組	豹突進景気奪還	金賞二席
	旭通	中組	白頭鷲	金賞三席
	旭通	上組	山ねこ	銀賞一席
	昭和	第6組	雀蜂	銀賞二席
	昭和	第7組	風鎮龍	銀賞三席
	上町天神	上町上組	バッタ	銀賞四席
	下町	第3組	紅こんごいんこ	銅賞一席
	上町天神	天神区	ツバメ	銅賞二席
	上町天神	上町第7組	こがねぐも	銅賞三席
	横町	造り物ガンパロー会	高森かんむり鷲	銅賞四席
	上町天神	上町向上会	たぬき	銅賞五席
上町天神	上カーニバルズ	竜宮の亀	奨励賞	
昭和	第8組	ふくろう	奨励賞	
横町	造り物愛好会	トキのつもりが鳩じゃった	奨励賞	
横町	第9組	ブーさん	奨励賞	
下町	第7組	チャボ	奨励賞	
平成13年度	旭通	下組	おふくろさん	特賞
	下町	2組	風鎮弁財天	金賞一席
	旭通	上組	2001年の顔ライオン	金賞二席
	旭通	中組	総体に舞う火の鳥	金賞三席
	下町	5組	有明のむつごろう	銀賞一席
	昭和	7組	風鎮チャボ	銀賞二席
	昭和	6組	ハシロキツツキ	銀賞三席
	上町	1, 2, 3, 4, 9組	肥後コーチン	銀賞四席
	昭和	8組	火くい鳥	銅賞一席
下町	3組	水鳥	銅賞二席	
上町	天神区	ペンギン	銅賞三席	

第Ⅱ部 第三章 造り物

年度	町	組	作品名	順位
平成13年度	横町	造り物愛好会	えっこれがエビこりゃーダメラ	銅賞四席
	横町	がんばろう会	がんこ鳥	努力賞
	下町	7組	カマキリ	努力賞
	横町	がんばろう会	盆ガエル	努力賞
平成12年度	昭和	高森高校	とんぼ	努力賞
	旭通	下組	風鎮を舞うワシ	特賞
	下町	2組	21世紀をカンガルー	金賞一席
	旭通	中組	わに	金賞二席
	旭通	上組	大鷹の若鳥	金賞三席
	昭和	6組	キンメフクロウ	銀賞一席
	下町	3組	しあわせを呼ぶ招き猫	銀賞二席
	上町	1, 2, 3, 4, 9組	リス	銀賞三席
	昭和	7組	闘鶏	銀賞四席
	昭和	8組	ホホジロカンムリヅル	銅賞一席
	上町	向上会	ヘラクレスおおかぶと	銅賞二席
	横町	6組	千年龍	銅賞三席
	天神	全区	孔雀	銅賞四席
横町	造り物愛好会	大吟チョウとカンカン虫	銅賞五席	
下町	7組	ランチュウー	奨励賞	
昭和	高森高校	ロケット	奨励賞	
平成11年度	下町	5組	龍虎雲海に相い撃つ	特賞 ※その他の順位は不明。全20基が出品。ほかに、待望のヒナ誕生に沸いたトキや大ヒットした映画「スターウォーズ」など。(1999年8月19日付『熊日』より)
平成10年度	下町	5組	密林の死闘	特賞 ※その他の順位は不明。ほかに、皿を重ねて制作した金魚、靴下を羽根に見立てたツル、軍手などを使ったチャボなど。(1998年8月19日付『熊日』より)
平成9年度	下町	2組	風鎮龍	特賞 ※その他の順位は不明。ほかに、「殿様バツタ」「トトロ」「白雪姫」など20基が出た。(1997年8月19日付『熊日』より)
平成8年度	下町	2組	招福恵比寿	特賞 ※その他の順位は不明。ほかに、「のど赤はちどり」「ゴジラ」「スズメバチ」「玉獅子」など19基が出た。(1996年8月19日付『熊日』より)
平成7年度	下町	2組	魔除獅子シーサー	特賞 ※その他の順位は不明。ほかに、青や赤のスリッパを使った「べにこんごういんこ」、バドミントンのラケットでできた「はった」など18基が出た。(1995年8月19日付『熊日』より)
平成6年度	順位不明。「ブルドッグ」「松の木」など16基が出た。(1994年8月19日付『熊日』より)			
平成5年度	下町	2組	オオワシ	特賞
	上町	ジャガーズ	そうジャガー	金賞
	旭通	中組	虎	金賞
	旭通	下組	新生狸	金賞
	旭通	上組	恐竜	銀賞
	上町	1, 2, 3, 4組	こうもり	銀賞
	上町	5, 6組	くも	銀賞
平成4年度 ※台風のため山引き中止	下町	3組	しゃも	銀賞
	昭和	6組	唐獅子	特賞
	上町	ジャガーズ	さるかに合戦	金賞
	下町	2組	ざりがに	金賞
	旭通	中組	ふくろう	金賞
	下町	5組	七面鳥	銀賞
	昭和	7組	アシナガ蜂	銀賞
	旭通	下組	旭鷹	銀賞
	上町	5組	おにやんま	銀賞
	昭和	8組	風鎮龍	銅賞
	旭通	上組	猿回し	銅賞
平成3年度	上町	1, 2, 3, 4組	とんぼ	銅賞
	横町	6組	げんじぼたる	銅賞
	上町	7組	反省ざる	銅賞
	下町	2組	イグアナドン	特賞
	上町	5・6組	伊勢エビ	金賞
	昭和	6組	河童	金賞
	旭通	中組	土佐犬	金賞
平成2年度 ※高森駅前 に造り物展 示館完成	上町	1~4組	かわせみ	銀賞
	上町	ジャガーズ	風神	銀賞
	横町	6組	アメリカざりがに	銀賞
	下町	2組	麒麟	特賞
平成元年度	旭通	上組	加藤清正公	金賞
	上町	ジャガーズ	ティラノサウルス	金賞
	旭通	中組	飛龍	金賞
	上町	ジャガーズ	闘鶏	特賞
昭和63年度	昭和	6組	風鎮風鈴	金賞
	旭通	中組	唐獅子	金賞
	上町	5・6組	バツタ	金賞
	上町天神	ジャガーズ	やまたのおろち	特賞
	昭和	6組	風鎮太鼓	金賞
	下町	2組	根子岳ヤマネコ	金賞
昭和63年度	上町天神	5, 6組	昇る龍	金賞
	旭通	中組	兜	銀賞
	昭和	7組	すずめ鷹	銀賞
	下町	3組	わに	銀賞

年度	町	組	作品名	順位
昭和63年度	昭和	9組	やどかり	銀賞
	旭通	上組	旭龍	銅賞
	旭通	下組	北海の熊	銅賞
	下町	4組	風鎮魚	銅賞
	下町	6組	禿鷲	銅賞
	横町	6組	金龍	銅賞
	下町	5組	熱帯魚	
	昭和	8組	熱帯魚	
	上町天神	1, 3組	丹頂づる	
	上町天神	7組	金魚	
	横町	4組	フラミンゴ	
下町	7組	ダッコチャン人形		
横町	11組	別所の鯉		
昭和61年度	昭和	6組	武蔵坊弁慶	特賞
	旭通	下組	虎	1-1 1等一席
	昭和	7組	すずめ鷹	1-2 1等二席
	横町	9組	牛若丸と弁慶	2-1 2等一席
	上町	5, 6組	蟻	2-2 2等二席
	下町	3組	かめ	2-3 2等三席
	下町	5組	恐竜	3-1 3等一席
			百獣の王ライオン	3等一席相当
	旭通	中組	矮鶏	3-2 3等二席
	昭和	9組	花と蝶	3-3 3等三席
	下町	2組	峠のためき	3-4 3等四席
	上町	1, 3組	えび	3-5 3等五席
	昭和	8組	はにわ土偶(武人)	努力1
	旭通	上組	えび	努力2
	横町	6組	虎蜂	努力3
	上町	5, 6乙組	黄金蜘蛛	努力4
	下町	6組	つる	努力5
上町	7組	小猫	努力	
昭和	4組	かき氷	努力	
横町	10組	かぶとむし	努力	
昭和60年度	昭和	6組	御縁みこし	特賞、町長賞
	旭通	下組	龍	1-1、町議会議長賞
	下町	2組	カンガルー	1-2、商工会長賞
	下町	5組	イグアナ	2-1、農協長賞
	昭和	9組	くじゃく	2-2、肥後銀行賞
	高森町役場		印度くじゃく	2-2相当
	上町	1, 3組	鷲	2-3、森林組合賞
	昭和	7組	かっこう	3-1
	横町	9組	阿蘇の赤牛	3-2
	旭通	上組	こい	3-3
	上町	5, 6組(2)	虎	3-4
	横町	10組	くわがた	3-4
	昭和	8組	魚ギョ	3-5
	上町	5, 6組(1)	山鳥	努力賞1
	横町	6組	鬼やどかり	努力賞2
	旭通	中組	狸のドジョウすくい	努力賞3
	下町	6組	ライオン	努力賞4
	横町	11組	ヘリコプター電々号	努力賞5
	上町	7組	あまご	敢闘賞
下町	8組	やどかり	敢闘賞	
昭和59年度	旭通	下組	荒鷲	特賞
	昭和	9組	わし	1等-1
	下町	2組	ふくろう	1等-2
	昭和	7組	あげは蝶	2等-1
	下町	3組	エリマキトカゲ	2等-2
	天神	1, 2組	えりまきとかげ	2等-3
	横町	9組	エリマキトカゲ	3等-1
	昭和	6組	イーグル・サム	3等-2
	上町	5, 6組	骸骨	3等-3
	下町	5組	キリン	3等-4
	旭通	中組	たから船	3等-5
	横町	6組	おにおこぜ	努力賞-1
	上町	1, 2, 3組	蝶	努力賞-2
	昭和	8組	ふぐ	努力賞-3
	横町	8組	かぶと虫	努力賞-4
	下町	8組	エリマキトカゲ	努力賞-5
	上町	7組	らくだ(シルクロードを行く)	敢闘賞
横町	10組	えりまきとかげ	敢闘賞	
昭和58年度	上町	5, 6組	蜂	特賞、高森町長賞
	昭和	9組	鯉	1等-1、高森町議会議長賞
	昭和	7組	軍鶏	1等-2、商工会長賞
	昭和	6組	祇園山鉾	2等-1、農協長賞
	下町	5組	たつのおとしご	2等-2、肥後銀行賞
	旭通	下組	牡鹿	2等-3、森林組合長賞
	下組	2組	雉子	3等-1
天神	1, 2組	山鳥	3等-2	

第Ⅱ部 第三章 造り物

年度	町	組	作品名	順位
昭和58年度	昭和	8組	さそり	3等-3
	横町	9組	南郷の虎	3等-4
	下町	3組	パンダ	3等-4
	上町	1, 2, 3組	イリエ・ワニ	努力賞-1
	下町	4組	ロボット	努力賞-2
	下町	8組	蜘蛛	努力賞-3
	下町	6組	たんちょうづる	努力賞-4
	旭通	中組	かめ	努力賞-5
	横町	6組	とんぼ	敢闘賞
	旭通	上組	えび	敢闘賞
	上町	7組	ワシ	敢闘賞
	横町	8組	北海道の熊	敢闘賞
	横町	10組	いのしし	敢闘賞
	高森町役場		みつ峰	審査外(特別参加)
天神・上町向上会		がま		
昭和57年度	昭和	8組	孔雀	特賞
	横町	9組	横綱土佐犬	※その他順位不明。全23基出品。「広報たかもり」(第277号より)
昭和56年度	旭通	下組	玉獅子	特賞
	昭和	6組	1, 906年製ベンツ	1等-1
	昭和	9組	ちゃぼ	1等-2
	上町	5, 6組	キリン	2等-1
	昭和	7組	やまどり	2等-2
	下町	5組	ちょうちょうお熱帯魚	2等-3
	上町	7組	かじき	3等-1
	横町	9組	風鎮虎	3等-2
	下町	2組	軍鶏	3等-3
	上町	1, 2, 3組	獅子の灰皿	3等-4
	横町	6組	たかあしがに	努力賞-1
	横町	4組	げんじほたる	努力賞-2
	横町	10組	コンゴウ・インコ	努力賞-3
	昭和	8組	陶器のためぎ	努力賞-4
	下町	6組	つる	努力賞-5
	横町	8組	肥後かつらチャボ	敢闘賞
	旭通	上組	風鎮チャボ	敢闘賞
	旭通	中組	二見浦夫婦岩	敢闘賞
天神	3組	猪	敢闘賞	
昭和55年度	上町	6組	さそり	特賞
	昭和	7組	あげは蝶	1等-1
	下町	3組	虎	1等-2
	下町	2組	鯛	2等-1
	横町	9組	百獣の王	2等-2
	上町	7組	龍	2等-3
	昭和	8組	コブラ	3等-1
	旭通	上組	鯉	3等-2
	横町	6組	かっぱ	3等-3
	昭和	6組	ウルトラマン	3等-4
	旭通	下組	鯛の塩焼	3等-5
	昭和	9組	大カブト	努力賞-1
	下町	5組	銀鶏	努力賞-2
	横町	4組	すゞ虫	努力賞-3
	旭通	中組	くわがた	努力賞-4
	下町	6組	かめ	努力賞-5
	横町	1組	黄金の鯉	努力賞-6
	昭和54年度	下町	3組	恐竜
横町		9組	出陣	1等-1
昭和		9組	鷹	1等-2
下町		5組	きんけい	2等-1
下組		2組	尾長鳥	2等-2
旭通		1, 6, 7, 14, 15組	麒麟	2等-3
昭和		6組	恐竜	3等-1
旭通		2, 4, 8, 9, 16組	ばった	3等-2
上町		1, 3組	わし	3等-3
昭和		7組	虎	3等-4
上町		5, 6組	鶴の一声	3等-5
横町		6組	鯨鯨	努力賞-1
横町		4組	孔雀	努力賞-2
天神		3組	天神丸	努力賞-3
旭通		3, 5, 10, 11, 12組	ひつじ	努力賞-4
昭和		8組	がちょう	努力賞-5
下町		6組	いのふた	
下町		4組	口さけ女	
上町	7組	トンボとすゞき		
上町	4組	いしわくど		
昭和53年度	町・組不明		ゴジラ 黒ダイ 伊勢エビ レーシングカー	順位不明 ※「広報たかもり」(第229号)より
昭和52年度	上町	1, 3組	放れ駒	特賞
	上町	5, 6組	梅に鶯	1等-1

年度	町	組	作品名	順位
昭和52年度	昭和	7組	コンゴロー・インコ	1等-2
	下町	2組	虎	2等-1
		ライオンズクラブL.C	トンボ	2等-1 特別参加
	横町	4組	軍鶏	2等-2
	下町	5組	カブト	2等-3
	昭和	6組	ベンケイ・ガニ	3等-1
	下町	3組	宿借(ヤドカリ)	3等-2
	旭通	3, 5, 10, 11, 12, 13組	鯉	3等-3
	天神	1, 2組	あねはづる	3等-4
	天神	4組	蝶と花	3等-4
	昭和	9組	錦鯉	努力賞-1
	横町	6組	アリマン	努力賞-2
	上町	4組	若猪	努力賞-3
	上町	7組	かめ	努力賞-4
	旭通	2, 4, 8, 9組	つむし	努力賞-5
	昭和	8組	七面鳥	
	横町	1組	北海の白熊	
	下町	6, 11組	わし	
	横町	8組	くも	
	旭通	1, 6, 7, 14, 15組	蝶	
下町	4組	優賞楯		
昭和	5組	ちょう		
昭和51年度	下町	2組	金魚科 獅子頭	特賞
	上町	5, 6組	いせえび	1等-1
	昭和	7組	油ぜみ	1等-2
	昭和	6組	雲のじゅうたん利根号	2等-1
	横町	4組	竜の落とし子	2等-2
	上町	1, 3組	風鎮ばやし	2等-3
	横町	9組	鷹	3等-1
	下町	5組	きじ	3等-2
	昭和	8組	ヒクイドリ	3等-3
	昭和	9組	でんでん虫	3等-4
	天神	5組	はりねずみ	3等-5
	上町	7組	キリン	努力賞-1
	旭通	2, 4, 8, 9組	雲りゅう	努力賞-2
	下町	3, 8組	軍鶏	努力賞-3
	下町	4組	フーチンロボット	努力賞-4
	天神	3, 4, 8組	蝶と花	努力賞-5
	横町	8組	かのこぼと	努力賞-6
	横町	6組	おうむ	
	旭通	3, 5, 10, 11, 12組	いしかぶと	
	横町	1組	たいやき君	
旭通	1, 6, 7, 14組	七星てんとう虫		
下町	6, 11組	恐竜		
昭和	5組	一夜刀		
昭和50年度	上町	5, 6組	わし	特賞
	昭和	9組	蝶	1等-1
	下町	2組	こんごうインコ	1等-2
	昭和	7組	くじゃく	1等-3
	下町	3組	ちょうちょう魚	2等-1
	下町	6組	ひおう	2等-2
	上町	7組	かっぱ天国	2等-3
	昭和	6組	戦車	3等-1
	横町	4組	赤むかで	3等-2
	天神	3, 4組	公害の鯛	3等-3
	横町	3組	がま	3等-4
	天神	5, 6, 7組	丹頂づる	3等-5
	上町	5, 6組	河童	努力賞-1
	旭通		旭号(うし)	努力賞-2
	横町	6組	グレート・マジンガー	努力賞-3
	下町	5組	始祖鳥	努力賞-4
	旭通		孔雀	努力賞-5
	横町	1組	松に鶴	
	横町	8組	羅漢山の足長蜂	
	横町	10組	豊年だるま	
昭和	8組	ロボット		
旭通		うさぎ		
下町	9組	東京タワー		

第四章 風鎮祭における仮装行列とにわか

第一節 通し物―仮装行列とは

通し物とは、本来は狂言や歌舞伎の出し物そのものを指す言葉であるが、博多どんたくや長崎くんちにみられる「通りもの」であり、自由気ままに仮装し、行列を組んで、太鼓や三味線を演奏しながら、歌ったり踊ったり、練り歩く集団を指す。「通りもの」は風流系祭祀行列の用語として、西日本の祭礼で見られるが、東日本では、「練りもの」と呼ばれる^①。なお、「通し物」という名称は、熊本県菊池市隈府の「松囃子」にもみられる。

風鎮祭における「通し物」という表現は、明治二八年（一八九五）横町文書に「旧十七日通し物壱つ十八日は雨天にて三丁共通し物不致候事」とある。また、今村武彦『高森郷土史』（大正四年）にも「俄踊造り物、通し物」とあるが、果たしてどのような内容であったのか、仮装をともなっていたのかは不明である。昭和八年（一九三三）九月九日『九州』『高森の風鎮祭』に、「通しもの」は「行列行進であつて、普通一年間の重なる事件をモデルとして取材する。これを三町で競争的に仮装するのである。」と仮装して練り歩く集団、仮装行列そのものを指し、町の重要事件を取り上げ、仮装してそれを伝えるメディア的な役割を果たしていたことがわかる。

一般に仮装とは性別や年齢、社会的地位などその人が本来もつ属性や立場とは異なる人やモノに扮装するものである。現代ではハロウィンなど日常とは異なる自分を演出するものすべてに対していわれる。仮装行

列は文字通りそのような人やモノに扮して練り歩くものを指す。民俗学的には風流として災厄をもたらす神霊（悪霊）を招き入れ、地域を巡り送り流すものとされるもののなかにみられる。①つくりもの―博多山笠にみられるような華やかな山車に災厄をもたらす神霊を招き入れ地域内を回り送り出すもの、②踊り―念仏踊り、太鼓踊り、腰輪踊りなど太鼓を叩き、被り物など仮装して踊るもの、③練り歩き―神輿などに伴い華やかな衣装を着飾って練り歩くものの三分類がある^②。

仮装行列は、一般に祭りの場における山車や屋台などとともに神幸行列につき、三味線・太鼓の囃子に合わせ、異様な出で立ちの華やかな仮装と練り歩きあるいは踊りという身体表現をともない、本来は集団で舞踊をおこなうものとされる。

安田宗生によれば、仮装行列は「異様な化粧と奇抜な衣装という俄の伝統の上に成立」したものであり、にわかと同様に「意思や感情を表明する」集団の公開場所であったとする^③。

現在仮装行列そのものは行われていないが、仮装そのものは目覚し行事および各向上会の「にわか」や五町競演会におけるパフォーマンス、「総踊り」や「ごども手踊」、あるいは「造り物」の山引の際に造り物の一部として人が扮装するものなど、風鎮祭の主要行事の様々な場面で見られる。

そこで、まずは風鎮祭において、仮装あるいは仮装行列がどのように認識されていたのか、考えてみたい。

阿蘇高森神社宮司岩下八束が記した『昭和参四年八月風鎮祭に就いて』の記録には宝暦四年（一七五四）「神事相済まざるに余興相始め候不都合に付使差立差止候事」と神事が終わっていないのに余興を始めたの

で差し止めにしたとあり、神社側には神事以外は余興として認識されていたことがわかる。

明治三四年（一九〇一）九月六日『九州』には、「毎年旧七月十六日より十八日まで三日間風鎮祭と称し」、「夜間は手踊り昼間は諸種の作り物をして三味太鼓其他の囃しを入れて町内を昇ぎ廻るの習慣なる（略）」と、夜間の「手踊り」と昼間の「作り物」が祭の中心だったことがわかる。また「手踊り」も、「上町は時代劇、横町は壮士劇、下町は手踊り」とあり、踊りの他に芝居仕立ての演芸が実施されている。

大正中期以降には、鉄道などの交通の整備を背景に、祭りを観光資源化として活用する動きが全国的に活発化するが⁽⁴⁾、風鎮祭そのものにも大きな影響を与える。

「風祭の余興として（中略）老若男女が打寄り盆踊りをなし地方農民の唯一の楽しみ⁽⁵⁾」や「風鎮めの為め盆の時期に町民が打寄って祭典を行ふ。祭典は旧七月十六日に始まり余興として老若男女盛んに舞ひ踊るのに起り（略）」⁽⁶⁾あるいは「阿蘇高森町の風鎮祭は風祭りの余興に農家の老若男女が集まって夜を徹して盆踊りをなす年に一度の慰安日⁽⁷⁾」【傍点筆者】等、風鎮祭が盆におこなう盆踊りであったことを示唆する。

風鎮祭は「ボンアガリにおこなう祭り」で、町方が祭りをおこなって周辺の農家の人達にゆつくりしてもらい、楽しんでもらおうという思いでおこなっていた⁽⁸⁾といわれるように商家が農家に対する報恩感謝から起ったものとされ、盆が済んだ後の農業者や他地域の人達が、買い物をおこなう場、町と周辺農村地域の交流の場であった。それは心と体を癒す娯楽と実用品を消費、散財する場でもあった。

風鎮祭における「仮装」「仮装行列」に関する名称の初出は、管見の

限り、大正一二年（一九二三）八月三十一日付『九州』で、「風鎮見事な作り物五十余は人波にもまれもまれて練り歩き、一方には仁輪加や仮装行列」とあり、それ以前は「俄手踊」「俄踊」との表現があるだけである。また同紙には「商工会や青年団（略）去る二十日からお祭り当日まで大売出し（略）青年団員等は当日の呼物の一たる余興の仮装行列や仁輪加の稽古に数日前から（略）前日二十八日には既に景気つけのため之等の仮装行列等は町内を練り歩き（略）」と仮装行列はにわかと同様、すでに商店の大売り出しでの人集めを行うための、余興という位置づけであったことがわかる。

大正一四年の記事には、一日目に風鎮祭の神事が高森阿蘇神社でおこなわれ、神事後「各組競つての俄手踊奉納お宮から町々を練り廻り」、二日目には「俄組が廻り出し更に仮装隊が思ひ思ひの扮装に人々の腹を捻らせて練り歩く」【傍点筆者】と、「俄手踊」とは別に「仮装隊」があり、「俄手踊」は神事奉納芸能であり、その余興としての仮装行列（仮装隊）という区分が出来ていたものと思われる。

翌一五年には、自治を基調にした青年団の改革がおこなわれ、「二十歳以上三十五歳以下の青年団員を自治的事業方面に活動する団体」として、従来の青年団とは異なる「高森町向上会」が組織される⁽⁹⁾。「俄踊りの練り出し仮装行列の行進」、「ドドン、ドドン、ドドン、ドンドンと太鼓の音に和して三味の音が聞へ聴て奇妙奇天烈な仮装行列の一隊」⁽¹¹⁾【傍点筆者】と、「仮装隊」は「仮装行列隊」と名称が変更、太鼓と三味を奏して集団による行列が行われており、この頃には、現代に繋がる仮装行列の姿ができあがっていることがわかる。

昭和一〇年（一九三五）八月一六日および八月二〇日『九日』には、

風鎮祭は旧盆の一五、六両日に施行。初日の午前八時に「町内一同思ひ思ひの仮装行列で阿蘇神社に参拝神事、その後町内練り回し、夜仁輪加、花火」が実施され、翌一六日「仮装行列二〇加、余興隊が町内を練り廻る」と仮装行列はにわかと同様に二日間実施されている。仮装行列をして高森阿蘇神社に奉納している点は留意される。

昭和一二年の日中事変から第二次大戦終結までは風鎮祭は実施されておらず、後述するように戦後復興期の昭和二〇年代には、「商工会主催の全町合同の大仮装行列」、「仮装行列コンクール大会」など風鎮祭における仮装行列が造り物やにわかと同じような位置づけを担うようになる。

さらに、昭和三〇年（一九五五）高森町合併時には「旧三ヶ町村、町内官公署、婦人会などからは二十組にのぼる仮装行列がつぎつぎに繰り出し奇想天外の変装で町内をねり歩き」と、仮装行列は旧高森町外や各種団体への広がりをもせる。昭和三三年（一九五八）には祭日が旧暦から新暦八月一七、八日に変更、「仮装行列や（仮装）舞踊隊が各町内からくり出す」【（一）筆者】⁽¹³⁾、仮装行列や仮装舞踊隊、演芸競演会等も実施され、イベント的な出し物が増え、より華やかな祭りの演出としての仮装行列へと変化していることがわかる。また、「肥後銀行高森支店、専売公社高森出張所などの公官庁仮装行列」や「（略）早朝から官公署、向上会、一般の仮装行列とが奇想天外の姿でくり出して見物人を喜ばせ」⁽¹⁴⁾と高度経済成長期を経て最盛期には、向上会、商工会、役場等官公署、企業、一般参加も可能となり、「見る」仮装から「参加する」仮装と大きな転換期を迎える。

しかし、高森町・高森町商工会主催で実施された「昭和三十四年度風

鎮祭行事日程表」【表1】には、上町、下町、横町、昭和の四つの向上会と役場で実施、果たして一般参加があったのかどうか判断としない。この年の仮装行列は、各向上会が初日の目覚し後、午前から午後にかけて二時間、二日目の阿蘇神社での豊穰祈願祭後に同様に手踊りを挟んで仮装行列が実施されている。役場仮装行列は両日とも三時間、山引き前に仮装行列をおこなっている。ここには、単なる余興としての仮装行列ではなく、ヤマの先祓的な役割の仮装行列の姿が見いだされるのではなからうか。

表1 昭和34年風鎮祭

十七日（一日目）		
時間	行事名	
	目覚し	昭和向上会
11:00~13:00	仮装行列	昭和向上会
11:00~13:00	手踊	下町向上会・横町向上会
12:00~14:00	仮装行列	役場
	造り物審査	
	仮装行列	
	山引	
	町民総踊	
	演芸	
十八日（二日目）		
時間	行事名	
	●●豊穰祈願	横町向上会・下町向上会
11:00~13:00	仮装行列	昭和向上会
	手踊	上町向上会・昭和向上会
12:00~14:00	仮装行列	役場
11:00~14:00	仮装行列	造り物移動
	山車引き	
	節刀渡しの儀	
	造り物表彰	
	演芸	商工会
	演芸	向上会
	演芸団	

表2 昭和51年風鎮祭

十七日（一日目）		
時間	行事名	
AM0:00	目覚し	
10:00	道中子供手踊り	
14:00~16:00	RKK歌のチャンピオン大会	
17:00	造り物（出陣）	
18:00	造り物（審査）	
18:00~19:00	風鎮太鼓	
19:00~20:00	高森音頭山引踊り	
20:00~21:00	風鎮祭花火大会	
20:00~23:00	演芸（にわか、舞踊、その他）	
十八日（二日目）		
時間	行事名	
8:00	風鎮祭五穀豊穰じょう祈願祭	
10:00	（奉納）風鎮太鼓	
11:00	仮装行列（手踊り）	
14:00	樽みこし	
14:00~15:00	自衛隊音楽隊	
15:30	風鎮太鼓	
16:45	山（造り物）の引立て（集合）	
17:00	山（造り物）の引立て（出発）	
19:00~20:00	節刀渡し	
20:00~23:00	演芸（にわか舞踊その他）	

昭和四十年以降も商工会と町が共催する祭りとして、観光資源としての風鎮祭がクローズアップされる。それを反映してか、後述するように仮装行列も商工会と役場が競うように実施している様相がみられる。仮装行列が風鎮祭のなかで重要な要素として認識されている。

その後、昭和五十一年（一九七六）の風鎮祭【表2】にみられるように、この時期には、仮装行列が二日目の午前中のみとなり、代わりに様々なイベントが実施されている。昭和五十七年（一九八〇）には熊本県では観光関連業界と行政が一体となった大型観光キャンペーンが実施され、風鎮祭もその一つとして多彩なイベントが繰り込まれるようになる。

表3 平成15年

十七日（一日目）		
時間	行事名	場所
AM0:00	目覚し	町内
10:00	子ども手踊り	各区町内
12:00	高森商店会抽選会	中央舞台
13:00	マーチングドリル（ファイアーステイツ）	中央舞台
13:00	オープニングセレモニー	中央四つ角
14:00	開会式	
14:30	風鎮太鼓	
15:30	熊本県警プラスバンド	中央四つ角
16:00	役場仮装行列	各区町内
18:00	風鎮総踊り 唄・演奏（高森中および高校吹奏学部・ヤングノーブルズ）	町内
19:00	にわか（移動舞台）	町内
20:10	花火大会	
20:30	県立大学バンド演奏	中央舞台
21:00	あつくんバンド	中央舞台
十八日（二日目）		
時間	行事名	
8:00	五穀豊穡祈願祭 奉納風鎮太鼓	高森阿蘇神社
10:00	樽神輿・高森幼稚園子ども神輿	町内・子ども広場
	五町向上会競演	町内
	中学校プラスバンド	中央四つ角
12:00	学園広場（高森高校です）	町内
14:00	陸上自衛隊プラスバンド （海上自衛隊佐世保音楽隊）	中央四つ角
14:50	人吉ねぶか太鼓	中央四つ角
15:20	山引き集合	中央四つ角
15:30	山の引立て	町内
18:00	造り物表彰式	中央四つ角
18:30	節頭渡し	中央四つ角
19:00	にわか（移動舞台）	町内
19:00	日本舞踊（新舞踊）	
19:30	民謡競演	中央舞台
21:00	にわかコンクール	中央舞台

り、「見る」、「参加する」仮装から「魅せる」仮装の傾向が強くなり、単なる余興でなく、観光イベントの一つとして重要な位置となる。しかし、平成期には、観光交流センターにおける様々なイベントが増え、商工会の仮装行列は姿を消し、役場の仮装行列も町民総踊り（風鎮総踊り）と変化していく。

例えば、平成十五年（二〇〇三）は【表3】に示すように初日午前中が役場仮装行列、二日目が五町競演と変化し、向上会での仮装行列は次第に実施されないようになっていく。代わりに町民総踊りが主流になってくる。この年の役場仮装行列の場合、仮装行列が終了するとそのまま町民総踊りに移行、仮装したまま踊りに参加するといった状況であったという。また、風鎮サンバ・山引き音頭のなかで、そのまま練り歩いて

踊っていたといわれる。そして、平成二十三年（二〇〇三）を最後に役場仮装行列は終了する。現在では次節で示すように、各向上会による五町競演会としての子ども手踊りのパフォーマンス、目覚し行事のなかに仮装行列の残影が見いだされるのみとなった。

第二節 仮装行列の歴史的変遷―内容および組織―

一 仮装行列の内容

では、具体的にどのような仮装行列がおこなわれていたのだろうか。新聞資料、高森町商工会関係資料、役場広報関係資料および聞き書きで確認できた主な仮装行列の内容は、【表4】仮装行列内容一覧のとおりである【以降（ ）内のアラビア数字は表番号に対応する】。

具体的な仮装行列としての内容がわかるものは、大正一五年（一九二六）の「横町分団は「安来節、木曾踊りなど妙技」、下町分団は、「高森伊予守面影」、上町分団は「アインスタイン、賀川豊彦、田村博士（田村剛）、ナポレオン、九日特派員、伝書鳩、大西郷、乃木大将などの仮装人物四十有余名」（11）とあり、踊りや演芸と歴史的に有名な人物、当時流行っていた地域に関連する人物に扮装して練り歩くものと分類される。

昭和二年（一九二七）には、「料亭南壽券紅裾連の仮装「マラソン選手」、下町組の「田村博士（田村剛）大阿蘇国立公園基礎調査」、上町組「大早魁と百姓の水争ひ」、横町組「人生一代の厄」等」（12）とあり、各町向上会以外の者も仮装している。また「上町二人づれ」「下町赤穂義士銘々伝」「横町幼稚園を始め数十組の珍奇をこらした仮装行列

は三味線、太鼓のはやしを先頭に(13)とあり、様々な団体が三味線、太鼓の囃子を先頭に仮装行列を実施していたことがわかる。なお、翌年には高森線が開通することになる。

昭和七年(一九三四)には、「仮装行列は競技で観衆を喜ばせ」(20)と仮装行列には競技を伴い、多彩な趣向が見いだされる。以降、例えば横町向上会では、町内芸奴連の「最新流行大島おけき踊り」、爆弾三勇士の軍装による横町処女会員総出動「〇〇時に起つ皇国皇子軍」(22)、「サーカス団や娘子護国軍」(21)「若衆組娘子軍」(23)といった競技、サーカスなどの娯楽性と、一方で未婚の女性軍隊を模すなど軍事色の強い、満州事変や国際連盟脱退などの時世を反映したものが混在化して実施されている。

昭和十一年(一九三六)「町当局者の時代もの、仮装行列も計画され」(29)、町も仮装行列に関わったと思われるが、これを最後に戦時体制のなかで、風鎮祭の仮装行列は終戦を迎えるまで実施されていない。

戦後、昭和十三年(一九四八)には「商工会主催の全町合同の大仮装行列」(33)がおこなわれ、初日に横町向上会では「本日の放送番組」として「一素人候自慢 二二十の扉 三スポーツショー 四鏡の鳴る丘」が実施され、単なる仮装行列でなく、演芸的要素をもったストーリー構成で実施されている。昭和二五年(一九五〇)には「密造酒狩り」など二日間のうち三回仮装行列が実施され、そのうち一回は小学生による山引音頭・高森音頭で踊る(37)といった、現在おこなわれている子ども手踊りの原型と思われるものが始まっている。昭和二十七年(一九五二)には風鎮祭二日目に「仮装行列コンクール大会」も催され、下町向上会の「海底のロマンス」が一位をとる(39)など、この頃にはに

わかや造り物と同様、仮装行列もコンクール大会が実施されていたことがわかる。

昭和三〇年(一九五五)高森町合併時には「殊に仮装行列は大名行列が圧倒的な人気を呼び今村高森町長も一役かい大名の変装よろしく巨体をジープに乗せニコニコ顔だった。」(44)、翌年も「高森町役場職員五十人の町発展史が圧倒的な人気で奇想天外な仮装」(45)と風鎮祭の多彩な行事のなかで、役場職員による仮装行列が非常に人気だったことを伝えている。

昭和三三年(一九五八)、祭日が旧暦から新暦に変わった年には、官公署(肥後銀行高森支店、専売公社高森出張所など)、向上会、一般の仮装行列隊が出され、「(略)なかでも町役場オール出演の町政運営をもじった『高森丸』の行列は今村町長を船長に仕立てて大した人気だった。」(51)、前年には商工会共催の「仮装舞踊隊」、「演芸競演会」(47)など、行政が積極的に関わり、イベント的な出し物が増え、より華やかな行列へと変化していることがわかる。

昭和三五年(一九六〇)には「今年初の町民総出盆おどり」が仮装行列とは別に余興として実施され、「岩下高森町助役、長野町教育長らが扮する『町役場少年隊』を先頭に、時代を風刺した岸元首相、三池争議、下笠騒動、オリンピックの花田中嬢など趣向をこらした仮装十数組が練り歩き沿道の観衆をわかせた。」(54)と、事件や世相を反映したものが、より明確に仮装行列に取り入れられ、定型化していく時期ともいえるよう。

この時期、各向上会での仮装行列も様々な工夫が行われるようになる。高度経済成長期、東京の大学や企業で働いていた人達が高森に帰郷

表4 仮装行列内容一覧

番号	年代	青年会・向上会	商工会	役場	その他	出典
1	明治28年 1895	横町 旧十七日通し物まつ十八日は雨天にて三丁共通し物不致候事				横町文書 113 箱(大) - 2
2	明治31年 1898				盆会として例年の通り俄踊	『九州』 9月4日
3					俄踊/俄踊浄瑠璃の催し	『九州』 9月9日
4	明治34年 1901	上町は時代劇/横町は壮士劇/下町は手踊り			夜間は手踊り	『九日』 9月6日
5	明治39年 1906	夜間は手踊りの町廻り 舞台にて各町の壮士劇/幕間に手踊り 手踊りは筑紫楼、三好屋、宝来亭よりの催なり			俄踊/筑紫楼が元禄模様にて楼名を染抜きたる対の衣裳	『九日』 9月13日
6	大正10年 1921	老若男女が打寄り盆踊り			町内中央に新設の高森阿蘇神社遙拝所	『九州』 8月13日
7	大正11年 1922	余興として老若男女盛んに舞ひ踊る 各町各組の二輪加手踊芝居の余興				『九州』 8月19日
8	大正12年 1923	青年団員等は余興の仮装行列や仁輪加の稽古 仁輪加や仮装行列で町内は湧き返る賑合ひ				『九州』 8月31日
9					16日通物青年団分取止	横町文書 29 箱(中) - 27
10	大正14年 1925	「仮装隊」が思ひ思ひの扮装(商工会・青年会)			俄手踊奉納夜を徹して手踊りや仁輪加を練歩き	『九州』 9月8日
11	大正15年 1926	横町分団「安来節、木曾踊りなど」 下町分団「高森伊予守面影を仮装した高森独特の一隊」、「太鼓のハヤシ」 上町分団「太阿蘇に足跡を印した諸名士の題下に仮装の一隊」、「アインスタイン、賀川豊彦、田村博士、ナポレオン、九日特派員、伝書鳩、大西郷、乃木大将などの仮装人物四十有余名」			高森町向上会を結成、自治の発展を図る(会長を置かず、各部落に分会長/合議制)	『九日』 8月27日
12	昭和2年 1927	下町組「田村博士太阿蘇国立公園基礎調査」 上町組「大旱魃と百姓の水争ひ」 横町組「人生一代の厄」等の仮装行列			料亭南壽券紅裾連の仮装「マラソン選手」	『九日』 8月15日
13		上町二人づれ/下町赤穂義士銘々伝/横町幼稚園数十組の珍奇をこらした仮装行列				『九日』 8月16日
14	昭和3年 1928				高森線開通最初の風鎮祭御大典の年 舞台には各種の俄手踊が一斉に幕を明ける	『九州』 9月2日
15	昭和4年 1929	各町よりは俄、仮装行列が繰出し				『九日』 8月24日
16		各町思ひ思ひの 仮装行列が全町を練り歩き太鼓の音笛の音三味線のさんざめき				『九州』 8月24日
17	昭和5年 1930	向上会を中心とする若衆たちは揃ひの衣裳美々しく娘子軍や芸者を交えて引切りなしに手踊や俄を囃入で練り廻った			鳥追姿の男衆と娘達が三味太鼓で囃立て懸声勇ましく練り廻す	『九州』 9月13日
18	昭和6年 1931	横町組/九州新聞社発表の火の国小唄を踊る				『九州』 9月3日
19		17日夜間佐渡おけさの踊り 18日向上会総出演の「火の国小唄」の踊り				横町文書 12 箱(小) - 1
20	昭和7年 1932	仮装行列は競技で観衆を喜ばせ			若衆連と娘子軍との手踊や俄	『九州』 8月23日
21	昭和8年 1933	サーカス団や娘子護国軍と銘打った仮装行列			昭和町に向上会の産声	『九州』 9月10日
22		横町向上会総動員仮装行列 町内芸奴連8名参加による「最新流行大島おけさ踊り」 熊本当局より軍装(爆弾三勇士)を借り受け横町処女会員総出動「〇〇時に起つ皇国娘子軍」				横町文書 17 箱(小) - 1
23	昭和9年 1934	若衆組娘子軍等の仮装行列				『九州』 8月26日
24		仮装行列人探し				『九州』 8月31日
25		17日仮装行列は目覚し?? 18日総動員仮装行列一回以上 18日各町中老組の仮装行列			桃太郎凱旋、世は逆虫	横町文書 21 箱(小) - 1
26	昭和10年 1935	町内一円思ひ思ひの仮装行列				『九州』 8月16日
27		仮装行列二〇加、余興隊			歎声爆笑の内町内練り廻る	『九日』 8月20日
28		旧暦7月18日横町向上会 日本満蒙進出宣伝隊 第1回目仮装行列「大衆よ国家主義に帰れ」 第2回目仮装行列「高森日本音楽隊」				横町文書 24 箱(小) - 1
29	昭和11年 1936			町当局者時代もの仮装行列の計画		『九州』 9月3日
30		若衆連と娘子軍のコンビ「押した押した」の掛声面白く全町をねり廻りその前後は二輪加、手踊の余興 昭和12~20年実施せず。				『九州』 9月6日
31	昭和21年 1946	十年振りの復活 新曆実施 17日通し物一回 18日通し物二回			十年振りの復活 新曆実施 17日通し物一回 18日通し物二回	横町文書 59 箱(小) - 1
32	昭和22年 1947	横町向上会 9月1日 午前中「終戦二ヶ年」午後「子供の国」 9月2日 午後 仮装行列「風鎮祭」			9月2日 四町合同大囃子	横町文書 63 箱(小) - 1
33	昭和23年 1948	各町趣向とりどりの仮装行列	全町合同の大仮装行列			『熊日』 7月14日
34		横町向上会 8月21日 午前中 本日の放送番組 一素人候自慢 二二十の扉 三スポーツショー 四鏡の鳴る丘 8月22日 午前10時 四町合同仮装行列			通し物 17日 午前午後各一回 18日 四町合同 一回 (最低20名以上)	横町文書 70 箱(小) - 1
35	昭和24年 1949	8月11日 午前中 不明 午後 昭和維新 8月22日 午前10時 四町合同仮装行列			通し物17日 午前午後各一回 道順自由 時間随意 18日 各町一回 時間自由	横町文書 75 箱(小) - 1
36	昭和25年 1950	昼夜を通して二日間仮装行列			十三年振りにした造り物復活	『熊日』 8月23日

第Ⅱ部 第四章 風鎮祭における仮装行列とにわか

番号	年代	青年会・向上会	商工会	役場	その他	出典
37		17日 第一回仮装行列 密造酒狩り 第二回仮装行列 山引音頭・高森音頭 (踊り子9名 小学生20名)				横町文書 80 箱(小) - 1
38	昭和26年 1951	18日 午前第一回仮装行列 二人連 第1日目 仮装行列 一回以上午前中出発 (11時前後) 第2日目 一回 午前中仮装行列にかわり (山引音頭) 小女会				横町文書 85 箱(小) - 1
39	昭和27年 1952	下町組向上会 海底のロマンス (コンクール1位)			仮装行列のコンクール大会・四町競演会の実施/一等 熊日賞	『熊日』 9月8日
40	昭和28年 1953	仮装行列隊			美しく着飾った踊り子たちの手踊り/山引音頭	『熊日』 8月28日
41	昭和29年 1954	仮装行列隊			スリーボーイズの歌謡漫談熊本博覧会宣伝隊	『熊日』 8月16日
42	昭和30年 1955				青年団、婦人会の仮装行列	『熊日』 7月31日
43					高森町合併 旧三ヶ町村、町内官公署、婦人会など二十組の仮装行列	『熊日』 9月4日
44				大名行列 今村高森町長が大名の変装/巨体をジブに乗せニコニコ顔		『熊日』 9月5日夕刊
45	昭和31年 1956			町発展史	高森町職員50数人/官公庁・一般・青年団	『熊日』 8月24日
46	昭和32年 1957	横町 映画撮影風景 (西遊記ほか) 上町 清水の次郎長				聞書
47					演芸競演会が二日間にわたって催される	『熊日』 8月11日夕刊
48					専売公社高森出張所オール出演による煙草宣伝舞踊	『熊日』 8月13日
49	昭和33年 1958	下町 河童の仮装行列 向上会の仮装行列コンクール				聞書
50					郷土にわか、民芸舞踊、名物造り物コンクールやオンパレードなど盛沢山の行事	『熊日』 8月15日
51				高森丸の行列 今村町長を船長、町役場オール出演による町政運営を航海に見立てて実施	官公署 (肥後銀行高森支店、専売公社高森出張所など)、向上会、一般の仮装行列隊	『熊日』 8月19日
52	昭和34年 1959				町内向上会、官公署、一般の仮装行列	『熊日』 8月18日
53	昭和35年 1960				各官庁や町内会の仮装行列	『熊日』 8月18日
54				町役場少年隊 時代を風刺 岸元首相、三池争議、下笠騒動、オリンピックの花田中嬢 仮装十数組	夜は町民総出の盆踊り	『熊日』 8月19日
55	昭和36年 1961	上町向上会 世が世であれば 下町向上会 月の砂漠 不明? 皇太子殿下御成婚パレード 横町向上会 あいちゃんは太郎の嫁になる?			「高森町建設推進隊」(四十七士) 国県の所得倍増計画に対し、赤穂浪士に見立てて実施	聞書『熊日』 8月18日
56	昭和37年 1962	横町 夏だ海に行こう	歴史上の人物		今村町長 新選組隊長近藤勇	聞書『熊日』 8月16日
57	昭和38年 1963	上町 唐人サーカス 昭和 民謡の旅相撲の土俵入り				『熊日』 8月19日
58		上町区 時の人オンパレード 昭和区 九州民謡巡り (黒田節、おはら節、ひえつき節、刈干切歌、五十四万石)				個人映像資料
59	昭和39年 1964	1964年 OLYMPIAD TAKAMORI 宝暦拾二年商工会 (当時の服装) 横町区 鳥追道中 笠に着物? 豊年満作 (案山子の衣装) 下町区 おはなはん (NHKTV)	ハワイへご招待行進	高森町役場 人の一生		個人映像資料
60	昭和42年 1967		現代人気録	高森の夜明け (八百万の神)		『熊日』 8月19日
61	昭和43年 1968		大久保彦左/乃木大将等時代の人気者	人間一生 (赤ちゃんから老人まで)		『熊日』 8月19日
62	昭和44年 1969		アポロ11号の三飛行士ラッパトロール		高森町役場女子職員の手踊り	『熊日』 8月19日
63	昭和45年 1970			おとぎの国		『熊日』 8月19日
64	昭和46年 1971		歌謡大行進	高森町役場瀧井助役以下総出演の仮装行列「風鎮太鼓登場」		『熊日』 8月19日
65	昭和47年 1972		戦後二十五年史	高森町役場の瀧井助役ら職員による仮装行列「あゝ熊本城」(西南の役)	町役場と農協の女子職員達の「田原坂」踊り	『熊日』 8月19日
66	昭和48年 1973		名コンビバラエティショー			
67	昭和49年 1974	「一本刀土俵入り」「怪獣集団」				『熊日』 8月17日
68			世界の民族衣装			商工会資料
69	昭和50年 1975		世界の民族ショー			商工会資料
70	昭和51年 1976		東西英雄豪傑伝			商工会資料

第Ⅱ部 第四章 風鎮祭における仮装行列とにわか

番号	年代	青年会・向上会	商工会	役場	その他	出典
71	昭和52年 1977	不明 学ラン 下町向上会 猿の惑星/ライオン丸/山引き音頭	古今東西警官づくし	日本の夜明け		『広報たかもり』 217号
72	昭和54年 1979	下町 さとうきび畑の扮装			議員総出演「山引き場所」 (相撲甚句や横綱の土俵入りの演出)	『広報たかもり』 241号
73	昭和55年 1980				風鎮太鼓(ほんなこつ踊り)実施	『広報たかもり』 253号
74	昭和56年 1981		阿蘇のあばれ神	高森線の今昔 (役場造り物「蒸気機関車C12」に合わせて実施)		『広報たかもり』 265号
75	昭和57年 1982	横町向上会「蛇踊り」				『広報たかもり』 277号
76	昭和59年 1984				役場、商工会、向上会などの手踊り・仮装行列	
77	昭和60年 1985	連合向上会「大名行列」		各国民族衣装	役場、向上会、商工会、高森農協の仮装行列	『広報たかもり』 313号
78	平成元年 1989			(激動の昭和史) 敗戦そして復興		『広報たかもり』 361号
79	平成2年 1990	旭町向上会「世界の彫刻と絵画展」(落穂拾い)			町民総踊り	『広報たかもり』 373号
80	平成8年 1996	下町 暴れん坊將軍			町民総踊り/和太鼓フェスティバル(風鎮太鼓・宮崎市橋太鼓・自衛隊八特太鼓)	『広報たかもり』 445号
81	平成9年 1997				子ども手踊り、町民総踊り 野尻村合併40周年	『広報たかもり』 457号
82	平成10年 1998					『広報たかもり』 469号
83	平成11年 1999	向上会 パフォーマンス		手踊り		『広報たかもり』 481号
84	平成12年 2000			20世紀回顧 風まる子ちゃん・ドラえもん・ルパン三世等	にわかや子ども手踊り、800人参加の町民総踊り	役場資料および『広報たかもり』 493号
85	平成14年 2002			千と千尋の神隠し・2002FIFAワールドカップ他局		役場資料および『広報たかもり』 517号
86	平成15年 2003			高森映画祭 ハリポッター・SF映画のヒーロー他	各向上会の写真では目覚しの際に仮装(目覚しの際には裸と奇抜な衣装/昼間はパフォーマンスを伴う演芸化)	役場資料および『広報たかもり』 529号
87	平成17年 2005			2005話題の人物 妖怪大戦争!!・国連・平和維持活動他	子ども手踊り・風鎮総踊り	役場資料および『広報たかもり』 553号
88	平成18年 2006			えほんの国 ふじぎの国のアリス他	子ども手踊り・風鎮総踊り	役場資料および『広報たかもり』 565号
89	平成19年 2007			メインテーマ 世界人物伝 仮装行列7課・踊り1課		役場資料
90	平成20年 2008			北京オリンピック選手等	子ども手踊り・風鎮総踊り 町民より勤務時間での準備に対する批判があり、本年度までの参加とすると意見が出る。退職者増により参加可能者が減少する	役場資料および『広報たかもり』 577号
91	平成21年 2009			ヤッターマン・ゲゲゲの鬼太郎等 TV映画のキャラクター	子ども手踊り・風鎮総踊り	役場資料および『広報たかもり』 589号
92	平成23年 2011			町長 星の王子様 他 TV映画のキャラクター	子ども手踊り・風鎮総踊り	役場資料および『広報たかもり』 625号
93	平成24年 2012				総踊りに代わって風鎮ダンス	『広報たかもり』 637号
94	平成25年 2013	五町向上会競演 下町 必殺仕事人			天草との交流	『広報たかもり』 649号
95	平成26年 2014	五町向上会競演 下町 北斗の拳			子ども手踊り (横町:SKG副産物とよばないで/下町:ようかい体操第一)	『広報たかもり』 661号
96	平成27年 2015	各向上会の仮装行列				『広報たかもり』 673号
97	令和2年 2020				新型コロナ感染拡大防止のため開催されず	
98	令和3年 2021				新型コロナ感染拡大防止のため開催されず	
99	令和4年 2022	目覚し行事 子ども手踊りは開催されず			3年振の風鎮祭開催	

※『広報たかもり』はいずれも9月号

※横町文書番号は「横町祭礼関係文書目録」備考の最後尾の番号に対応している。

し、都会的なセンスと地域の伝統を融合したようなものを仮装行列のテーマとして実施している。

例えば、昭和三二年（一九五七）横町向上会では映画撮影風景と西遊記ほか、上町向上会では清水の次郎長、昭和三十三年下町向上会の河童天国、昭和三六年（一九六一）皇太子殿下御成婚パレード、昭和三八年（一九六二）昭和向上会の九州民謡巡りなど映画や漫画、事件、伝統芸能など様々なテーマの仮装行列が催されている。（46～48）

商工会では、山村酒造の山村一郎氏が商工会会長になった昭和四十年から昭和五十年代にかけて、風鎮祭をもっと盛り上げるように当時人気があった仮装行列を、向上会を卒業した商工会メンバーにより、向上会とは別に実施するようになる。昭和

和四九年（一九七四）「世界の民族衣装」、昭和五〇年（一九七五）「世界の民族ショー」【写真1】、昭和五一年（一九七六）「東西英雄豪傑伝」、昭和五二年（一九七七）「古今東西警官づくし」（68～71）と世界を対象にしたパレード化が進んでいく。

役場の仮装行列も、昭和四七年（一九七二）「町役場と農協の女子職員達の「田原坂」踊り、高森町役場の瀧井助役ら職員の仮装行列「あゝ熊本城」（西南の役）、同



写真1 商工会仮装行列 世界の民族衣装 昭和49年

商工会員による「戦後二十五周年」（65）、昭和五二年「町役場職員の手踊りと仮装行列「日本の夜明け」（71）と歴史をテーマにした豪勢で盛大なものが実施されている。しかし、昭和五四年（一九七九）には「期待された商工会員の仮装行列は見られず、代わり議員さん総出演の仮装行列「山引き場所」が登場。相撲甚句や横綱の土俵入りの演出」（72）と、この時期からは商工会の仮装行列が難しくなり、代わりに中央舞台でのイベントが盛大に実施されるようになる。例えば、昭和五五年（一九八〇）には風鎮太鼓「ほんなこつ節」を仮装して披露し、風鎮太鼓を囲んで踊るようなパフォーマンスが実施される。男は「ひよつとこ」の面をつけ、浴衣にステテコ姿。女は「おかめ」の面で、浴衣に裃掛け、赤腰巻を出すという男女差による仮面・衣装の統一化が図られている（73）。なお、「風鎮太鼓」は平成一五年（二〇〇三）の風鎮祭ではオープニングイベントとして実施、神社奉納芸能としても実施されている。令和五年（二〇二三）には096k熊本歌劇団（高森町地域おこし協力隊）によって、演奏者が代わりながら実施されている。

役場仮装行列は、その後も昭和五六年（一九八一）「役場が出陣したSLの二分の一の造り物」と「高森線の今昔」（74）という造り物と連動した仮装行列や平成元年（一九八九）の「激動の昭和史―敗戦そして復興」（78）といった歴史を回顧する様々な趣向を凝らした仮装行列が実施される。

一方、各向上会では昭和六〇年（一九九〇）には連合同向上会による「大名行列」（77）の仮装行列が実施される。上町向上会が年番向上会で各向上会で行列のどのパートを演じるか決めて実施している。その後向上会でいつ、どのような内容の仮装行列がおこなわれたか、不明の部分が多い。

平成十二年には商工会による仮装行列が実施されなくなり、向上会の仮装行列も五町競演会となり、仮装だけでなく様々なパフォーマンスが繰り広げられるようになる。例えば下町向上会では「北斗の拳」や「必殺仕事人」といったTVで有名なキャラクターの仮装行列を実施している(94・95)。また、役場の仮装行列も「20世紀回顧」、「高森映画祭」 「世界人物伝」 「北京オリンピック」等々映画、TVなどのキャラクターや事件などを取り上げて実施している(84・92)。しかし、仮装行列は総踊りや子ども手踊りが中心となるなかで、平成二十七年(二〇一五)をもって風鎮祭から姿を消すことになる。しかし、向上会での仮装は目覚し行事にその姿を僅かに垣間見ることができる。

目覚し行事での仮装

目覚し行事の際にも異様な扮装で、町内を三味や太鼓の演奏とともに練り歩く仮装行列がある。【写真2】

祭りの始まりを周知する目覚し行事の際には「裸になる、ともかく目立つ際立った格好をする。人の目を覚ます目的、にわかの予行練習のようなもの」といい、各向上会とも奇抜な衣装と行為を伴った目覚し行事が行われていた。

また、にわか演者も「すぐに着替えられる。爺や婆など役がすぐわかり、面白いもの、笑いを誘うような化粧と服装を自分で考えて工夫しておこなう。」あるいは「化粧をすると自分ではない人物



写真2 目覚し行事 平成3年

になるので、恥ずかしくなく人前でやれる。」というように仮装を通して、別人格になるといわれる。また「葬式の通夜のことをメサマシ(目覚まし)」といって、笑って死者を送り出すことからこのような名前がついた。」という話も伝わり、目覚しには死者儀礼との関わりをも示唆する。しかし、現在では踊りを中心にしたパフォーマンスが主流となり、かつてのような異形で奇抜な姿はほとんど姿を消す。

二 仮装行列の実施組織

仮装行列の実施組織は、大きく分けて①各向上会において組織される仮装行列、②商工会による仮装行列、③高森役場職員等官公庁等職員による仮装行列の三つがあった。

仮装行列は各町から出され、青年組織(青年団)がその任にあたった。前述のように「高森町向上会」が組織されると、それ以降は向上会が中心となって実施される。昭和二五年(一九五〇)には高森阿蘇神社宮司と聯合向上会会長による協議が行われ、風鎮祭の規約がつけられている⁽⁴⁵⁾。そこには「第二条 風鎮祭諸行事ハ商工会主催テ之ヲ行フ(太文字部分は後に「氏子奉仕ノモト阿蘇高森神社宮司」に墨字修正)」、「第三条 風鎮祭ニ於テ行フ余興ハ凡テ高森町聯合向上會之ヲ担ス」(太文字部分は同様に「高森町商工会之ヲ主宰」に墨字修正)と風鎮祭の主催やそれに関連する諸行事の担い手の変化が見て取れる。先述のとおり、昭和三〇年高森町合併を機に、昭和三十一年には町と商工会の主催となり、各向上会と役場職員による仮装行列が実施されるようになる。合併から十年経過した昭和四十年代頃からは向上会を卒業した商工会の会員(各店主)による盛大な仮装行列が実施されるようになる。そして

昭和五十年代には町・商工会主催から風鎮祭委員会という委員会組織で実施されるようになる。例えば昭和五十年「高森町風鎮祭委員会 風鎮祭業務分担表」には、仮装行列部として役場仮装行列（踊り）／商工会仮装行列／向上会仮装行列と三つの大きな組織による仮装行列が行われている。

しかし平成一三年「風鎮祭委員会委員構成表」には総踊りの部会はあるが、仮装行列に関連するものは見いだせない。さらに平成二九年には町自体も従来の風鎮祭において、共催から後援の立場となり、前述のように平成二十三年以降役場仮装行列そのものも実施されなくなる。

三 各実施組織による仮装行列の実態

(一) 向上会における仮装行列の構成と内容

現在聞き調査からわかる、昭和四〇～五〇年代頃の向上会は、二〇～三〇歳代の青年で構成され、風鎮祭では目覚し行事、にわか（子どもにわか含）と仮装行列、子ども手踊りを担っていた。壮年（三〇～五〇歳代）には向上会を脱会し、商工会の仮装行列と風鎮祭の運営をおこなう、中老（六〇歳代以上）となつてからは、向上会、商工会も引退した人達が造り物をするというように年齢階梯的に各々分担が決まっていたという。

子ども手踊りの参加で、祭りの初顔見せになり、子どもにわかを経験し、向上会に入会、本格的ににわかを行う。脱会後は商店会で風鎮祭全体の運営に携わり、その後造り物、裏方という形で関わっていた。

しかし、向上会の人数も減少するなか、商売等日常業務に加え、にわか練習、準備も大変な状況下にあつて、子ども手踊りの練習や世話も

加わり、一人で何役も仕事をこなすようになる、仮装行列に人員と時間を配分するのが難しくなってきたという。また、行列の道路使用の交通規制、風鎮祭における多彩なプログラム実施への対応等、祭りそのものが複雑化してきたことも要因の一つという。さらに仮装行列にあがるオハナ（御花・投げ銭）も、にわかや子ども手踊りより少額になり、財政的にも準備と時間がかかる割に費用対効果が少ない仮装行列をやめざるを得ないという苦渋の選択をしたという。

向上会にとつては、あくまでもにわかに重点がおかれ、仮装行列はその空いた時間を利用して実施するものという。各向上会でどのような仮装が行われていたのか不明な部分も多く、判然としないが、おおよそ次のように実施されていた⁽¹⁶⁾。

向上会仮装行列の内容

昔は向上会は商店主がほとんどで、家の後継ぎ、長男のみに限られ、入れない人もあつた。女性は入れなかった。そのため、向上会員になることは一つのステータスであつた。だいたい二七、八歳位までには退会し、三〇歳過ぎの人はいなかった。

仮装行列は、元来向上会ではなく、各町全体でおこなうもので、仮装行列は年齢関係なく、にわかに出られない人（向上会に入っていない人）、女性も参加できるような形で行っていたという。例えば下町区では昔は一五、六組あり、各組から二人ずつ出して実施していた。

また向上会に入っていない人も、にわか上手でない人が仮装行列に出ていたというところもある。

三味太鼓の音で先導し、その後についてバラバラ練り歩いていくが、かつては山引きの前に仮装行列があり、そのまま仮装してヤマ（造り

物)に付き、ヤマを動かすのが向上会の仮装行列であったという。

かつては仮装行列もコンテストがあり、女装する者が多かったが、仮装して、芝居仕立ての寸劇を見せるようなことを以前はおこなっていたところもあり、その意味ではにわかに近いものだったが、にわかのように練習とかは別段しなかったという。

向上会の三役でテーマを決めていたところもあれば、行き当たりばったりで行っていた、というところもある。役が決まったら、衣装や道具類を準備する。にわかで使用するものを、そのまま使ったり、古着屋に買いに行ったり、自分の家の古着を使用したり、家にあるもので道具を作ったり、各自で創意工夫しながら用意していた。【写真3】

横町向上会ではドリフターズが流行った時にはドリフの恰好、ジュリアナ東京が流行った時には、普通の腹巻を上下に伸ばして、ボディコンのようなぴっちり体に合わせた衣装を自分達で作って女装していた。特に西部警察の恰好をした仮装行列が印象に残っているという。スーツポンポンになって、裸で色々なものをつけて、ともかくキテレツな恰好をして騒いでいたという。

上町向上会では、ナポレオン、山本リンダや木遣り(消防の火消し)、闘牛士や白波五人男などをおこなった。例えば、闘牛士の時は闘牛士と牛に分かれ、牛の上半身を張りぼてで作り、なかに二人



写真3
向上会仮装行列 昭和33年

が入って、前足と後足になって歩いた。四、五人に女性の恰好をさせてフラメンコをさせる。白波五人男の時には、歌舞伎のような口上を披露していたという。

下町向上会では、当時の流行を取り入れていたもので昭和四〇年頃にインディアンの恰好をしたものがあつた。昔は仮装して芝居仕立ての寸劇を見せるようなことを行っていた。また、山引きの時には仮装してヤマ(造り物)を動かすのが、向上会の仮装行列であつた。

昭和向上会では、萩本欽一のテレビ「欽ちゃんのどこまでやるの」に登場するのぞみ、かなえ、たまえの三姉妹の恰好をして、歌に合わせて踊るなど、その年々にテレビなどで話題になったものを題材にしていた。

旭向上会では、「世界の童話」では白雪姫と七人の小人といった恰好をするなど子どもでもわかるものを題材にしていたという。

五町連合向上会で実施した時には、「アンパンマン」をテーマに五町各々でアンパンマンの恰好をしたこともあつた。また「大名行列」のテーマの際には各向上会でパートを割り当てて実施、「世界の絵画」の時には、例えば「落穂拾い」の仮装をして大きな額縁を持ち歩き、にわかと同様に所々で、額縁のなかで絵画を表現するというパフォーマンスを取り入れたこともあつたという。

五町連合向上会の仮装行列の場合、どこの向上会かがわかるため、各向上会でクオリティーの高いものを披露し、対抗したが、オハナは五町で均等分配するため、各向上会で回るほうが努力が報われるというので、長続きしなかったという。

仮装行列の音楽は、以前はにわかと同様に、向上会のOBによる三味

表5 商工会仮装行列

シーザー	山村一郎	山村酒造
クレオパトラ	飯干純男	吉田屋呉服店
聖徳太子	桐原市喜	桐原薬局
仁徳天皇	黒田啓介	豊後屋商店
平 将門	馬原伸男	中萬屋呉服店
楠 正成	野脇頼介	野脇商店
源義経(牛若丸)	吉良偵人	豊前屋本店
武蔵坊弁慶	荒木明	荒木鉄工所
上杉謙信	岩下昭生	新えびす堂
織田信長	中川清澄	中川本店
豊臣秀吉	志柿末吉	日向屋
徳川家康	相馬増己	西角屋
伊達政宗	田代新祐	高森石油
ナポレオン	中村敏久	中村時計店
日蓮上人	秋山信一	秋山食堂
天草四郎	色見屋呉服店	色見屋呉服店
宮本武蔵	塚本保雄	塚本商店
佐々木小次郎	後藤忠	ヤクルト販売店
荒木又右衛門	杉田富男	杉田酒店
大石内蔵之助	大塚光生	大塚商店
大石主税	日置久仁友	日置商店
中山安兵衛	佐藤光男	佐藤整備工場
近藤勇	岩下寛一	三善屋呉服店
月形半平太	田代広一	スポーツ用品店
祇園の名妓(ひな菊)	小林重男	小林家具店
ヒットラー	三井和己	スーパー三井
西郷隆盛	草村照	草村企業
明治天皇	長山吉彦	洋服のなかやま
乃木希典	宇藤幸喜	宇藤竹宗本店
広瀬中佐	桐原勢紀	桐原商店
東郷元帥	津留光喜	津留農機具店
マッカーサー元帥	大谷正開	なべ屋食堂
西住戦車隊長	佐藤守一	錦万高森店
シドニー攻撃松尾中佐	加藤文凡	加藤自動車
毛沢東	田上来	田上商店
昭和天皇	武田義広	武田造花店

昭和51年風鎮祭 8月18日実施
 「東西英雄豪傑伝」(商工会資料より)
 参加者36名 男→男(34/36)=約94%、男→女(2/36)=約6%
 となっており、性別変更には重点はみられない。

線・太鼓といった囃子の伴奏を先頭に歩いてきた。その後流行った音楽をカセットテープに録音、ラジカセで流して踊りながら歩いてきた。最初にジチョウ(自町)、それから他の町内も回る。昔はそれで喧嘩になることもあった。今は年番向上会がどこをどのよう回るのか調整を行い、行列が重なり合わないようになっている。

(二) 商工会における仮装行列

商工会における仮装行列は、前述のように当初向上会を卒業した商店主によって構成される。いかに風鎮祭を盛り上げ、町内外からの多くの人々を迎え入れ、商店の販売拡大等地域の活性化を図るものとして実施されるようになった。

ちなみに一番盛大なものが出せた時期とされる昭和五十一年の仮装行列は、「表5」商工会仮装行列構成のとおりであり、男性のみで構成され、世界を対象にしたテーマの仮装行列が特徴的である。しかし、中央四つ角以外でおこなわれる中央舞台(現交流ステージ)でイベントの開催の方に力点が置かれるようになると、商工会の仮装行列を行う人数

が少なくなり、かつてのような見栄えがするものが出せなくなったため、平成一二年以降には実施しなくなったという。

(三) 役場仮装行列の構成と内容¹⁷⁾

役場仮装行列は、高森町合併時を契機として実施される。町長みずから役場職員と共に参加、議員も参加して始まったという。当時は地域の祭りを主催しながら、観光資源による町おこしを実施するようになる。

風鎮祭の主催が風鎮祭実行委員会になつてからも、企画委員会には属さず、役場職員のなかで企画され実施されている。

仮装行列で町内を回ると町民に非常に喜ばれ、町民の要望も強くあつたという。日頃真面目な堅いイメージの役場職員が女装や化粧をして、おどけた格好で出場するので、「あの人がこぎゃんな格好する。」と人気もあり、非常に親しみが湧き、行政サービスの面でもメリットがあつたという。

商工観光課(以前は企画課)は風鎮祭全体に関わり、役場の仮装行列は総務課が中心となつて実施していた。各課で仮装行列の内容、出場者を決め、各課で代表を出し、会議をおこない、総務課が取りまとめ毎年テーマ(タイトル)を決めていた。だいたい七月頃からそのテーマに合わせて準備を始めていた。

役場仮装行列の内容

テーマはだいたい時代劇やTVや映画で流行つたもの、時世にあつたもの、例えばオリンピックの年には、オリンピック選手の恰好をするなど誰もが見てわかる恰好をしていた。

役場仮装行列のテーマは、前出表4仮装行列関係内容一覧にみられるように「大名行列」、「高森町今昔」、「昔話」、「20世紀回顧」【写真4】



写真4 役場仮装行列 平成12年(2000年)

など歴史をテーマにしたものが多いのが特徴的である。しかし、二〇〇〇年以降は、いわゆるキャラクターを模倣したものに变化している。

「昭和三十六年風鎮祭合同会議資料」には「国県等の所得倍増計画に対し、町として高森町建設推進隊を結成」、これを赤穂浪士四十七士になぞらえ、「四十七士の「君に忠」の心と

団結を以つて町民の所得倍増をはかることに身を挺して尽力する」。仮装行列の題は「高森町建設推進隊」(四十七士)として次のように実施されている。

編成 鼓笛隊 大太鼓二ヶ、小太鼓二、笛十
象 三頭 (役場職員のとくりものと思われる)

推進隊
村造り

仮装 野球帽子にタレつける(又は向う鉢巻)

タスキ袴 各自準備

長ジバン(又はシャツ) 購入

カケ及草履 一括購入し後は各自作る

竹ヤリ 借用

カケヤ 木ケン

練り歩く道順 例年通り 役場↓天神↓上町↓駅通り↓旭通り↓駅前↓警察通り↓下町通り↓下町↓横町↓住吉商店↓役場通り↓役場となつており、役所がおこなう業務やその年の町政方針などを、プラカードで示すなど視覚的にわかりやすく宣伝する場であった点は興味深い。

平成一五年は、全体のメインテーマが「高森映画祭」で、次のように各課で構成されている。

総務課	ハリーポッター	八名
保険福祉課	SF映画のヒーロー	八名
住民生活課・出張所	ハムちゃんずの仲間たち	六名
税務課・収入役室	仮面ライダー	七名
農林振興課・農委	ホラー映画のヒーロー	六名
建設課	水戸黄門	七名
企画財政課・議会	霊幻道士	六名
教委・水対・学校	高森の星	一二名
保育園	極道の妻たち	九名

計六九名の参加
各課別々の内容のTVや映画のキャラクターに仮装して練り歩く形になっている。

これら行列に参加する役場職員は勤務扱いになるが、五町内居住の役場職員は年休を取って五町内のにわかや仮装行列に参加していた。当初は女性の参加はなく、男性ばかりで行っていたが、女性職員が化粧を手伝ったり、役場職員同志の連帯感醸成の場でもあった。

役場仮装行列の変遷

仮装行列に女性が参加できないのは問題があるということで、昭和五

十一年頃に女性は手踊・男は仮装行列という役割分担を行って風鎮祭を盛り上げようという話になった。

当初は手踊りと仮装を一年交代で行っていたが、仮装が非常に人気となってきたために、仮装と手踊りの両方を実施するようになった。その後二日間やるのは、職員の負担が大きくなるというので、昭和六十三年から役場職員だけの手踊りから町民すべて参加できるよう、町民総踊り（風鎮総踊り）に変化した。

風鎮総踊りは高森音頭、風鎮サンバなど風鎮祭の実行委員会が企画して町内各事業所（工業団地、農協、郵便局、保育園等々）の人達に集まって実施された踊りである。最初の町民総踊りには約千人が参加しており、当時の人口（八、六八八人）からすると約九人に一人（一／八・七）が参加していた。

その後しばらく仮装行列と町民総踊りが実施されるが、平成二〇年北京オリンピックをテーマに仮装行列を実施した際に、町民より勤務時間での準備に対する批判があり、また、退職者増により参加可能者そのものも減少が予測されるなか、平成二三年を最後にその幕を閉じることになる。

役場仮装行列の音楽と衣装

先導車に拡声器をつけて、その年の流行歌などテーマに合った音楽を自分達で選曲して流していた。仮装をした各役の説明と、それに扮した役場職員を紹介しながら練り歩いていた。役場職員の仮装は非常に人気があり、観客に好評であったため、風鎮祭以外でも地域の運動会などにリクエストがあつて披露していた。

衣装は配役が決まると自分で材料を用意し、作っていたという。

これら行列にかかる経費は、観客と商工会（実行委員会）からのオハナによっている。ちなみに平成一五年実施の役場仮装「高森映画祭」には六九名参加、仮装の経費補助として、出場者各一人に対し、千円が補助され、不足分は各自の手出しとなる。

第三節 にわかと仮装行列の関連性

風鎮祭における仮装行列は、その形態から、

- 第一類 仮装して踊るもの
- 第二類 仮装して踊り以外のパフォーマンス（芸）を行うもの
- 第三類 仮装して練り歩くもの。
- 第四類 これらが複合的に構成されるもの

の四つのタイプに分類できるものと思われ、また、その内容から次の【二】、【六】の六つの時期に大きく分類されよう。

【一】大正一五年以前、風鎮祭の余興という形で、踊りと仮装、にわかというのが明確に区分出来ない、踊り（第一類）と演芸（第二類）という形で実施。

明治期に実施された「俄手踊」、「俄踊」等が、どのようなものだったか、判然としない。阿蘇郡宮原町では例年旧暦盆一五日に行われる風鎮祭或は五穀成就祭に「俄踊り」を奉納、「老若男女孰れも異類異形の出立」と仮装をして踊ることを伝える⁽¹⁸⁾、熊本市域では招魂祭において「二〇加踊」（「俄踊」）として各町から踊り屋台が出され、「競商場の唐子打扮の軍歌踊り」、「職人町若者列の地震の落し踊り」、「大工町小児の三夷子三大黒の踊り」をはじめとした男女あるいは子どもが仮装した

種々異様な踊りや俄歌が演じられている⁽¹⁹⁾。それは踊り（身体）とにわか（言語・歌）が混在化した、恐らくは仮装した踊りとにわか未分化の状態で、三味線太鼓の伴奏で歌って練り歩く、あるいは屋台で踊って歌っていたものと思われる。現在の高森にわか舞台に役者が登場する最初に、ミチユキ（道行き）といい、舞台上を右周りに三步進んで二歩下がり、軽妙に歩く独特の所作がある。一種の踊りとも連なるような所作に、その一端を垣間見ることができよう。

明治二三年（一九八〇）、熊本市域においては「旧藩のころより十年の戦乱（西南戦争）前ごろまでは盆踊りなる者大に行はれ例年旧七月の盆会の節には其所の街此所の町、男女異様の扮装にて踊り廻はる事ありしが戦乱後に至りて右の盆踊りは中絶したり尋て招魂祭の始まりしより中絶したる盆踊りは一変して今の俄踊りとなりし由⁽²⁰⁾」と招魂祭を契機として盆踊りから俄踊りへの変化を解く。この内容の真偽については検証の必要があるが、第一節で示したように風鎮祭が盆会であり、盆踊りとしての俄踊りがあったと考えられよう。

【二】大正一五年、向上会が組織された以降、歴史上の人物を仮装したものがみられ、踊りや演芸と明確に区分されて仮装行列が実施。高森線の開通により地域外からの見学者も増える。

大正一二年に「仮装行列」の名が新聞で確認できるように、大正期になると、いわゆる「手踊」でなく「仮装隊」や「仮装行列」の名称が表出する。先述したように、向上会が結成された大正一五年には、横町分団では「踊り」（第一類）、下町分団は「劇（歴史）」（第二類）、「仮装人物」（第三類）と三つの向上会が各々で異なる内容のものを実施している。特に向上会成立以降「踊り」と「にわか」さらには「仮装行列」

が、より尖鋭化、峻別化していく。

昭和二年の下町組「田村博士大阿蘇国立公園基礎調査」、上町組「大早魃と百姓の水争ひ」、横町組「人生二代の厄」といったにわかにみられるような演題をもった、第四類のものに変化している。仮装行列の内容をみると、地域や産業、人生に関わるような、地域の発展や改善を伝える場となる。そこには単なる「娯楽性」だけでなく青年からみた現在の「社会的問題」を外在化し、他者とを繋げるメディアとしての役割も担う。

【三】昭和八年以降 国家主義や軍国主義の色合い濃くなっていく時代、皇国史観「国体の本義」や「我は何をなすべきか」といった尽忠報国の思想が徹底される時期にはその世相を反映した「娘子護国軍」（皇国女子軍）や「爆裂三銃士」など恐らく第三類に属した、戦争色の強いものと同時にプロパガンダ的な仮装行列が実施される。

【四】戦後、四町合同による大仮装行列や二日間の祭りの間に三回の仮装行列、山引音頭・高森音頭という踊り、四町競演会でコンクール大会が実施。第四類の複合的な仮装行列が行われるようになる。

【五】昭和三十年以降、高森町合併を契機に旧三ヶ町村、町内官公署、各婦人会、一般参加と各団体に門戸が開かれ、町・商工会主導で拡大化して実施。地域の統合と発展を願うように、向上会が担っていたものより、より盛大なものが実施されるようになる。特に町役場職員による仮装行列は「大名行列」、「赤穂浪士」や「町発展史」など歴史上の人物、地域の歴史などをテーマに行っている。いずれも第三類に相当するものに変化、高度経済成長期とともに繰り返し行われているところに特徴がある。

またこの時期には商工会で、向上会を卒業した商工会OBによる、より盛大で華美な仮装行列が、向上会の仮装行列に対抗するような形で実施されるようになる。この時期の仮装行列には、文化の再生（歴史の再構築）と自己の存在の再認識の場として、よりメッセージ性の高いものとして機能していたように思われる。

【六】昭和後期から平成期以降、仮装行列に大きな変化が生じる。仮装行列のキャラクター化が進み、同時に、仮装行列そのものが実施されなくなる時期。

変化の一つはかつての手踊の発展した町民総出による風鎮総踊りの創出である。博多どんたくにみられるような、「通りもん」パレード化がおこる。近年ではうちわ、Tシャツにズボンなど、誰でも参加できるような総踊り（手踊り）も実施されるようになった。しかし、各グループの参加者の間では、自分が所属する組織が他との差別化を意識した衣装で参加するように、そこには仮装の意識の一端が反映されているように思われる。

もう一つはTVや映画などの登場人物を模倣した仮装が従来にも増して強くなり、キャラクター化、架空の人物になる時代の到来を迎え、第四類に属するような練り歩きとパフォーマンスの仮装行列が複合的に実施される。しかし、風鎮祭そのものの規模が拡大し、商工会や町との共催、さらには実行委員会形式での実施が採られるようになっていくなかで、五町以外の他地域、あるいは町域を越えての交流そのものが推進され、かつての四角を中心としたものからステージイベントなど、色々な催しが重層的に新たなイベントとして実施されるなかで、仮装行列が担っていた奇抜性、創造性、革新性をもって、笑いと歓喜を人々にもた

らす娯楽性を追求すること、それ自体が難しい時代になってきた。そして、商工会、役場仮装行列も終了、向上会も五町競演会のなかで、様々なパフォーマンスの一つとしての位置づけに変化し、仮装行列そのものは実施されなくなった。

かつてはにわかに参加できるのは、その家の長男だけという厳しい条件があり、一つの社会的地位を有していたという。そして長男以外の青年が仮装行列に参加するという話も残っているように、かつてのにわかに参加できない青年にとっては、仮装行列でにわかや造り物と同様あるいはそれ以上に目立つこと、自己発現の場として重要な意味を持つていたものとも考えられる。また、前述したように造り物やにわかが行われる前に仮装の者が出るのには、そこには、先祓いとして、場を祓い清める意味があつたのかもしれない。

現在でも目覚し行事には、仮装行列の残影が見いだせる。コロナ禍以降初めて実施された令和五年の目覚しには、かつてのような裸や奇抜な独創的なものではなかったが、年番向上会である上町向上会が「新しい学校のリーダーズ」の格好でダンスパフォーマンスが披露された。そこには日常とは異なるモノに変わるといふ仮装が見いだされる。真夜中に髪を振り乱して踊る姿には、「笑い」と同時にある種の「恐さ」さえ筆者には感じられた。そこには「目覚し」が死者を送り出す意味があつたことを想起させる。

風鎮祭では「かつては「山」を「作り物」の最後へ付けて引き、昔はこの山へ仮装した子供を乗せたが、近年は乗せない様になった。」⁽²¹⁾とあり、これがいつの時代かは判然としないものの、この「山」⁽²²⁾が、恐らくは「大山」とよばれる「踊り屋台」のようなもの

で、何らかの神霊を招く依童としての存在があつたことを窺わせる。この「ヤマ」を中心に「作り物」が構成され、それらを囃子、場を清める存在として異様の扮装にて踊り廻っていたのが、古い形であつたのではなからうか。

ここには、盆踊りにみられる祖霊の送り儀礼と同様に災いをなす死霊や精霊を慰撫し、送り出す儀礼としての風鎮祭が認められよう。化粧をし、常とは異なる装束を身に纏い、町内を巡る仮装行列は、祓いをその身体の表現としての宗教性の意味を失い、娯楽性を重視するなかで、現在のように変化してきたとも考えられるのではなからうか。

註

(1) 山路興造 二〇一八「博多松ばやしの「通りもの」」『博多松ばやし調査報告書』福岡市文化財叢書第六集

(2) 山路興造 一九七二「風流」大間篤三他編『民俗の事典』

(3) 安田宗生 二〇〇九『熊本の俄とつくり物—明治大正期新聞記事』

(4) 前掲書(3)

(5) 『九州新聞』大正一〇年（一九二二）八月二三日

(6) 『九州新聞』大正一一年（一九二二）八月一九日

(7) 『九州新聞』大正一四年（一九二五）八月二四日

(8) 下町山村酒造山村唯夫氏のご教示による。

(9) 『九州新聞』大正一四年（一九二五）九月八日

(10) 『九州日日新聞』大正一五年（一九二六）八月一六日

(11) 『九州日日新聞』大正一五年（一九二六）八月二五日

(12) 『熊本日日新聞』昭和三〇年（一九五五）九月四日

(13) 『熊本日日新聞』昭和三三年（一九五八）八月一九日

(14) (13)と同じ

(15) 「昭和式拾五年 風鎮祭規約 高森町聯合向上會」

(16) 各向上会経験者からの聞き調査

(17) 高森町役場元職員からの聞き調査

(18) 『紫溟新報』明治一六年（一八八三）九月二日

(19) 『九州日日新聞』明治三三年（一八九〇）五月九日 なお、俄踊り歌については「淫醜にして聞くに忍びざる事」だったが、「昨年より今年にかけ、淫猥の者殆どと絶えて「君の

為め」、「国の為め」と忠君愛国精神を称える文言のもの代わったという。

(20) 『九州日日新聞』明治三三年（一八九〇）五月八日

(21) 『九州新聞』昭和八年九月九日

(22) 令和四年の風鎮祭において復元展示された。

史料 横町祭礼関係文書

はじめに

本稿で紹介する横町祭礼関係文書（以下、横町文書）とは、熊本県阿蘇郡高森町横町区に所在する個人宅で保管されていた文書群である。横町文書については、『高森町史』（高森町、一九八〇）や同町が発行した文化財報告書でも紹介されていない。その中でこの文書群について触れているのは岩下八束著『風鎮祭に就いて』（私家版、一九五五）と松岡薫著『俄を演じる人々』（森話社、二〇二二）の二冊のみが確認できた。まず、岩下がまとめた『風鎮祭に就いて』の冒頭では、風鎮祭の起源や沿革について書かれ、そこには「横町（中略）に有る記録は年代不明で断片的で虫喰い多く判読できない^①」と個人宅で保管されている史料の状態が悪く、判読ができないことが書かれ、具体的な内容については扱っていない。唯一、当該文書群の史料を分析したのが松岡による『俄を演じる人々』である。松岡は、本文書群の中にある明治時代から作成された活動記録簿を分析している^②。しかし、文書群の全体像や活動記録簿以外の史料について、一部言及はあるものの具体的な扱っていない。そのため、本稿では、横町文書全体についての分析を行い、この文書群に収納されている史料の性格・特徴をまとめつつ、横町文書中から「高森のにわか」に関連する語句を抽出した上で解説することを目的とする。

第一節 調査までの経緯と方法

まず、横町文書の調査までの経緯と方法について触れておきたい。

「高森のにわか」は、二〇一九年（平成三一）三月二十八日に、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択され、記録作成に伴う調査委員会が組織された。すでに横町文書を調査していた松岡委員によつて本文書群が紹介され、さらなる調査が必要との意見がだされた。その後、全体像の把握のため確認調査を行うこととなり、二〇二一年（令和二）八月一九日に行つた確認調査の中で調査の方法については、個人宅に保管されている文書群のため、まずは、史料整理をおこなないがら史料撮影を行い、その画像をもとに目録の作成を行うこととした。

史料整理にあたり最初に実施したのは、親番号と枝番号の付与である。横町文書は、三つの木箱に収納されていたため、その大きさに「箱（大）」、「箱（中）」、「箱（小）」と設定した。それから、原秩序を尊重しながら、各史料の一括状況に従い、親番号や枝番号を付与、撮影をしながら、資料保存容器へ収納した。整理・撮影自体は二〇二一年一〇月から開始し、二〇二二年（令和三）一二月に冊子物がすべて終了。残りが最終的に終了したのは二〇二三年（令和四）三月であった。一部についてはすでに松岡によつて撮影された画像を使用し、撮影した画像は、番号ごとにフォルダに分けて高森町教育委員会で保管することとなった。

次に、撮影画像をもとに目録を作成した。目録の内容は、①整理番号（見出し番号）②史料名（見出し名）③作成年（記載年）④差出・作成者⑤宛先⑥備考の六項目とし、法量については画像撮影を優先するため省略した。整理の結果、箱（大）に六点、箱（中）に四三五点、箱

(小)に一九点の合計四六〇点の史料が確認できた。



写真1 箱(大) 収納状況



写真2 箱(中) 収納状況



写真3 箱(小) 収納状況

第二節 収納箱について

先に設定した「箱(大)」、「箱(中)」、「箱(小)」の各収納箱は、すべて木製で、史料整理を行う中で、箱書があるものが確認できた。

まず、箱(大)については、箱書はなく、作成・購入時期は不明であるが、他の収納箱と較べると新しい。中には、江戸時代から明治三十年代までの範囲を記録した帳面六冊が収納されている。次に箱(中)だが、この箱には、上部に冊子類がまとめられ、下部に一定のまとまりはあるものの一紙や帳面類が無秩序に入れられていた。そして、この箱蓋や内側などに多くの墨書が確認できた。墨書を見ると、「高森横町若伊物中」や「徳平」といった語句のほか、「安政四巳六月十三日」、「万延元申五月」などの年号もあった。また、底部には、木箱の購入日と収納物を記録したものと見られる墨書もあり、「高森横町若者中」や「嘉永三戌八月求也」とあることから横町若者中によって一八五〇年(嘉永

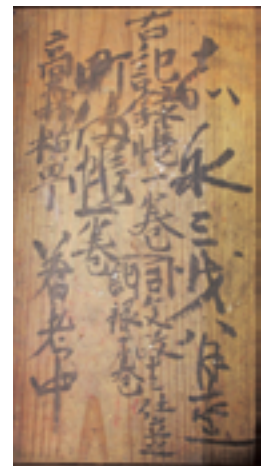


写真4 箱(中)
底部墨書

明治三十年代から昭和初期までの記録類が収納されており、どこかで文書の入替えが行われたと考えられる。

最後に箱(小)だが、蓋裏に「横若諸要証書箱」と「大正元年一月十六日求」の墨書がある。これは横若組によって大正元年に購入された物であることを意味し、現在収納されている文書は、古くても一九一九年(大正八)以降であり、収納されている文書との関係を見ると、一九一八年(大正四)に横若組から高森町青年会第五分会に改組していることから箱の購入時期と合致しない。

現在収納されている文書の時代順は、箱(大)↓箱(中)↓箱(小)の順番となるが、箱書による時代順では、箱(中)↓箱(小)↓箱(大)となる。おそらくすべての箱において、購入時期に入れられていた文書から現在収納されている文書への入れ替えがあったと考えられる。

第三節 横町祭礼関係文書の性格と特徴

横町祭礼関係文書は、阿蘇郡高森町横町区に存在する青年組織によって作成・保管されてきた文書群である。この青年組織は、時代の変遷の中で横若組↓高森町青年会第五分会↓横町向上会と改組していき、当該

三) 八月に箱が購入され、「古記録一巻」、「文政十三仕立之」の「記録一巻」、そして「町備帳一巻」の計三巻が収納されていたようである。しかし、現在は、

文書群はその移り変わりの中で伝わってきた。各史料を時代別に大別すると左記のような分類設定となる

- A 江戸時代（横若組）
 - ①活動・会計記録
- B 明治時代（横若組）
 - ①活動・会計記録
 - ②会計帳面
 - ③その他（印章）
- C 大正時代（横若↓第五分会↓横町向上会）
 - ①活動記録
 - ②会計記録
 - ③その他（領収証や封筒など）
- D 昭和時代（横町向上会）
 - ①活動記録
 - ②会計記録
 - ③その他（領収証や封筒など）

A～D群までで共通しているのは①活動・会計記録もしくは①活動記録②会計記録である。江戸時代の横若の頃から大正時代に青年会第五分会が設立するまでは、活動記録と会計記録と一緒に記入されていたが、のちに横町向上会となつてからは、活動記録と会計記録は別々に作成さ

れるようになった。しかし、会計記録以外にも通帳や各種寄附帳などといった会計記録を作成するために使用したと思われる帳面が数多く残され、③その他では多くの領収証も含んでいる。それでは、順を追って各特色を述べてみたい。

A・B群は横若の頃に作成・保管されていた文書である。まず、A群の分類では、箱（大）に収納されている「諸綴」（番号一、三、五、六）となっている。記載範囲は、一八〇六年（文化三）～一八六八年（慶応四・明治元年）までで、形態は四冊すべて横帳である。次にB群は、箱（大）や箱（中）に収納されている文書で、箱（大）だと「諸綴」（二）や「財」政記録帳（番号四）が該当し、一八七一年（明治四）～一九〇一年（明治三四）までの記載がある。そして、箱（中）では、「記録簿」（番号二六）があり、一九〇二年（明治三五）～一九一四年（大正三）までが記載されている。そして、他に共有金に関する帳面二冊（番号一二、一三）が確認できる。このA・B群で共通しているのは、C・D群では確認できる一紙物がなく、帳面のみという点である。

B群でその他に分類したのは、印章である。この印章は「横若印章」と彫られ、「記録簿」（箱（中）二六）にも同じ印影が確認できるこ



写真5 印影部分拡大

とからも横若組で使用されてきた公印である。しかし、印章の持ち手部分に「明治四■■■■」の墨書が見られるもの、四以下の文字が不鮮明で明治四年なのか明治四〇年代なのかの判別ができないため具体的な作成年代については不明である。

次に、C群とD群について見ていこう。この両群に含まれている文書の系統は、ほとんど変わらないが、A・B群で活動・会計記録と一緒に記載されていたものが、活動記録会計記録に分けて書かれている。そして、この他に会計記録を作成するための会計帳面とその他の四分類となっている。

C群には、活動記録である「記録簿」(番号二七)があり、一九一五年(大正四)～一九二六年(大正一五)までの記載がある。そして、会計記録として「会計簿」(番号二八、二九)がある。この二冊の記載範囲は、先の記録簿の範囲と同じである。活動記録と会計簿を分けて記載することになった理由はそれぞれの記述から読み取ることにはできない。

D群では、昭和以降である「記録帳」(箱(小)一一)や「会計簿」(箱(小)一二、三、五、六)が確認されている。この活動記録や会計簿以外に会計帳面が多くあった。数は少ないがB群でも共有金や基本金の帳面が確認できた。C・D群の場合は、その多くが、「通帳」と呼ばれる掛け買いに使用される帳面と寄附帳で、寄附の理由には、「夏祭」や「矢村社祭典」といった風鎮祭以外の祭礼も見られた。

最後にC・D類でその他として分類した資料についてだが、ここに分類



写真6 箱(中) - 30収納状況

した資料の多くが「箱(中)一三十一」に含まれている一紙物である。そのほとんどは、物品及び税金の領収証または請求書で、年代は大正時代から昭和初期にかけてだが、一括されてきたものと考えられる。これ以外に特筆すべきものとしては、「高森町青年会規則」(箱(中)一四八)や「風鎮祭規約」(箱(小)一四)といった規約や昭和一〇年と思われるマチャン組本部より向上会長宛に祭礼余興の照

会について書かれた「葉書」(箱(小)一六)が確認できた。

第四節 横町祭礼関係文書における関連語句の抽出

横町祭礼関係文書における「風鎮祭」の関連語句の抽出の目的は、「横町祭礼関係文書」(以下、横町文書)から「風鎮祭」、「にわか」、「造物」、「仮装行列」、「手踊」などの『風鎮祭』に関連するもの抽出した上で特に重要なものを目録に示す。」とある通り、ここでは、目録の解説を行う。

まず、本目録では、①活動記録②会計記録③その他で三分類し、それぞれ年代順に並べ直しを行った。その結果、①記録簿九点②会計簿六点③その他三九点の合計五四点で、記録簿や会計簿の見出し分も含めると延べ二五三点となった。

①活動記録の中で一番古い記録は、一八一六年(文化一三)付「盆諸入目日記調方之覚」(箱(大)一一二四)にある「にわか入用之うちわ式本」である。そして、一八二七年(文政一〇)付「祭礼初仕候事諸造用改附」では、「盆俄」の語句も確認できる。そして、一八八二年(明治一五)には、「風鎮祭入費」(箱(大)一四一一二六)として風鎮祭の語句を見ることができ、このようにすべてではないが、断片的に関連の語句が登場するか見出しに含まれているのが活動・会計記録の大きな特徴といえる。大正時代となり、活動記録が分かれると、見出しも「風鎮祭典記」などのようになり、祭礼の記録のみが書かれている。

②会計記録は、一九一五(大正四)～一九五八年(昭和三三)までの範囲となっている。ほとんどの記録では、「収入」や「支出」といった

項目が立てられ、金額と「大山改築費」(箱(中)―二八―八)などのような品目があった。

③その他では、活動記録や会計記録に当てはまらない文書類を分類している。ここでも、大正時代以降の文書が主で断片的に確認できる印象である。この中で特筆されるのは、「風鎮祭規約」(箱(小)―四)の存在である。この規約の第一条目には、「風鎮祭ハ遠ク文政五年ノ昔矢村神社ニ於テ風鎮メノ為行ハレタルヲ其ノ源トナス。」とし、一八二二年(文政五)における風鎮めをその起源としている。

以上、本目録の①活動記録②会計記録③その他の三分類の文書類を見ていったが、その多くが断片的な記述であるものの、大正四年以降の活動記録の記述により祭の様子だけでなく、余興の詳細な様子を知ることが出来る。

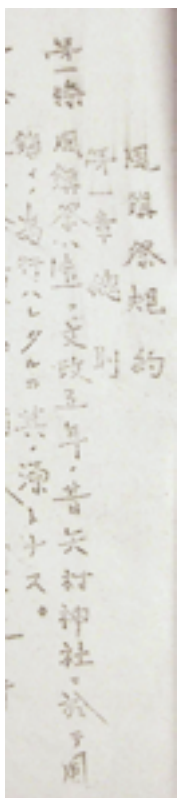


写真7
風鎮祭規約
第一条目

おわりに

横町祭礼関係文書の整理及び文書群の性格・特徴を概括した。本文書群の大きな特徴は、やはり、広い範囲で記載された活動記録と会計記録だろう。その内容も祭礼記録だけでなく、行事や役付に関することなど多岐に及び、その資料的価値も極めて高い。

しかし、横町文書がなぜ、個人宅で保管されていたのかについては、

「詳しくは知らないが、ずっと家にあった。おそらく、先代や先々代の頃に預けられ、そこに預けておけば大丈夫だろうということで預けられたのではないか」と保管者は述べている^③。

最後に、各向上会への聞き取り^④によって、横町区以外の活動記録や会計記録などについては、そもそも残っていない上に現在では活動記録もとっておらず、残っているとしても会計関係の平成時代から現在にかけての通帳や出納帳、会計記録については中老会への報告のためにデータ管理をしているなど各会で保管状態がばらばらの状態であった。また、過去の俄の下題やネタ帳、向上会の段取りの説明記録なども確認できたが、このような平成時代以降に作成された記録類を今回確認できた横町文書の様子どのよう守っていくのかも今後の課題として考えていく必要がある。

註

- (1) 岩下八束 一九五五『風鎮祭に就いて』私家版
- (2) 松岡薫 二〇二二『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社、一〇五―一〇八頁。
- (3) 吉良禎人氏から電話で聞き取り(二〇二三年八月二〇日)
- (4) 下町向上会から対面で聞き取り(二〇二三年八月四日)、上町向上会から電話で聞き取り(二〇二三年八月二三日) 横町向上会・旭向上会・昭和向上会から対面で聞き取り(二〇二三年八月二三日)

参考文献

- 岩下八束 一九五五 『風鎮祭に就いて』私家版
- 高森町史編さん委員会編 一九八〇 『高森町史』高森町
- 松岡薫 二〇二二 『俄を演じる人々―娯楽と即興の民俗芸能』森話社

翻刻

【近世期】

(一) 文化六年巳七月盆入目之事

外二 十匁 清心方稽古場

礼代

同 三匁八分 浄瑠理本

三 ■ : : ■

(二) 子七月盆諸入目日記調方之覚

一、七分八厘

但、にわか入用之うちわ

式本(後略)

(二) 亥六月廿九日祭礼初仕候事諸造用改附

右八近年諸祭礼

盆俄等之節、若者共

打寄候節、諸入目分

算用雇兼居候二付、

今度横丁中申談、

先年方所々払二も分

且取立分夫々相得候付

申候事、依之当亥

閏六月二日方後何か方

申来候共不 ■ 何品

決取揚不申筈二申談候事

(三) 安政六未九月廿四日若者打寄之節俄道具屋間作事打立相段

相決申候事一切諸雜用控座

一、錢五百目 大工請取

此請百工

一、同八拾式匁五分 山師請取

此請拾七工

一、錢三百目 大工割増

此請六拾工

但し、六拾工二而五匁金二

シテ三百目二而候得共、大工

江そん懸申候得者無理

二相見申候二付、三拾工若者

請取大工江百五拾目丈

割増差加へ算用相済

申候事

(三) 文久三亥七月盆踊諸入目扣

一、拾壹匁九分 浄瑠理本三冊買入

但、五匁八渡方

(略)

踊連面附

一、忠臣蔵七段目 友吉

一、大近源氏五段目 亀太郎

嘉十郎

徳太

久吉

虎記

久治郎

八熊

平又

(略) 竹迫

一、役者耆人 関十郎

此者六月廿日

雇入やしないの「儀」、

哲右衛門殿方江七月

廿日迄泊置申候

然処礼として

上酒二本

(四) 若連扣

右ハ慶応二年春

長州相働二付、小倉出夫二

相被連竈取致し候、俄

不繁栄二付、辨才天祭

前夜若者中打寄

俄仕、少し之賑合と

勘定致候事

■り

右長州相働二付、ヤマ引も相止メ

申候二付、矢村社矢物参詣迄相済

置申候二付

(四) 慶応四年辰七月俄并に踊目録扣置申候

慶応四年

辰七月俄并二

踊目録扣置申候

忠臣蔵 五段目

近江源氏 六段目

一ノ谷瀬軍記 三段目

一

踊子面附

利助

寅喜

友吉

多平

嘉十郎

右之者二而十七日

【近代期】

(五) 盆踊之面附

(略)

右之人数ニ而ひらかな五段

鎌倉山五段

外ニ 安達原式段目入事

拾壹段相勤申候事

(五)

明治十二年

酉旧八月二十二日山引

旧八月廿日より俄興行

例年は旧七月十八日之興行

之「処」、虎例刺病ニ而願ニテ可成

不申候延引に被成候事

一、例年三町之処当年者

下町之儀ハ内輪不和合ニ付、

俄山引無し、尤右ニ付

下町迄者二十二日山引丈者

返し不申「候」、上町・横町丈

引返し申候事(後略)

(七)

明治三十七年旧八月二日遼陽陥落ニ付祝勝会ニ付、

八月一日ハ提灯行列ニ付、矢村社参詣盛大ノ賑合

横町作物ハ明治桃太郎作物壮士踊リハ露国

タン偵横井貞雄ノ伝諸入費左ニ記載ス(後略)

(八)

大正四年三月ヲ以テ在来ノ若者組ヲ

高森青年会第五分会ト改称シ左ノ青

年会規則並ニ第五分会規則ヲ設ク

高森町青年会規則

第一章 総則

第一条 本会ハ高森町青年会ト称シ高森町ニ在住スル年令十六歳

以上四十歳以下男子ヲ以テ組織シ地方重立ツ有識者ハ特

別会員トシテ本会ニ参与スルモノトス

但シ、在学中ノ者ハ此限りニアラス

第二条 本会ノ事務所ハ高森町尋常高等小学校内ニ置ク

第三条 本会ノ目的ハ道徳心ヲ涵養シ旧来ノ悪慣習ヲ打破シ

風俗ヲ矯正シ且ツ知能ヲ磨キ勤勉ノ美風ヲ養成シ以テ地

方事業ノ発展ヲ計ルモノトス

第四条 前条ノ目的ヲ達センガ為メ右ノ事項ヲ実践躬行ス

一、春秋ノ二季ニ於テ毎年二回以上会長指定スル場所ニ集合

シ宗教家其他有識者ノ講演ヲ聞クコト

第五条 本会ニ右ノ分会ヲ設置ス

第一分会 村山 第二分会 上在 第三分会 上町

第四分会 下町 第五分会 横町 第六分会 南在

第七分会 津留

第六条 各分会ハ本会ノ趣旨ニ従ヒ規則ヲ定メ独立シテ其部ノ

発達ヲ計リ財産ヲ所有スルコトヲ得
但シ、其規則ハ評議員会ノ承認ヲ要ス

第二章 会員ノ義務

第七條 本会員ハ本会ノ目的ヲ達スル為メ左ノ業務ヲ負フモノトス

- 一、自然性ニ基キ良心ニ背ク行為ヲナサ、ル事
- 二、旧来ノ悪慣習ヲ打破シ勤儉ノ美風ヲ養成スル事
- 三、智能ヲ啓発シ地方事業ノ発展ヲ設ル事
- 四、法律規則ヲ遵守スルコト
- 五、風紀ノ改善ヲ計ル事
- 六、会員タルノ名誉ヲ毀損セサル事
- 七、会員ノ非行ハ正ニ忠告シ矯正ヲ計ル事
- 八、会長ノ指揮命令ニ従フ事
- 九、宗教觀念ヲ厚ツクスル事
- 十、金銭ヲ浪費セザル事
- 一一、時間ヲ励行スル事

(中略)

附則

本則ハ大正四年二月 日ヨリ実施ス

本則施行始メニ於ケル第九条ノ役員組織会ニ於テ之レヲ選挙ス
本会ノ組織ト共ニ従来ノ若者組ヲ廃止スルト同時ニ権利義務ヲ
繼承ス

(九) 昭和八年度風鎮祭々典記

本年八町商工会の意向に従ひ風鎮祭

をして一層の盛大さを期するため旧十七日

まで造物の完成を見一入の前人気を呼び

先づ幸先よしと意気強増す旧十八日

天気快晴町を挙げて祭気分■

す、当年より初めて昭和町に向上会の産

聲を聞き我が風鎮祭の輪廓拡大

と相俟前人気亦言はずもがな

午前八時半会員集合直前各部落に着く

即前一は大山組立て■屋根障子張り一は

屋台の整備、余興部員ハ矢継ぎ早や

の仮装行列、緊張の極致、即前文字通り

の猫の手の借りたさと誰やら言ふ言下に

又側よりそれでは今年ハ本当に猫の手を借り

やうぢやないかとの発議によし⇒可⇒讚成⇒

とばかり衆議一決直前に町内各料理屋へ

交援の上会員総動員仮装行列にハ

町内芸奴達八名の参加の承諾を得早速

「最新流行大島おけさ踊」の振付けに

取りかゝれば一時間余にして上達、一方に於てハ

熊本当局より軍装(爆弾三勇士)

を借り受け横町処女会員総出動の

「非常時に起つ皇国姫子軍」の題下に

全會員合廻々に長蛇の列をなす

出来栄え正二百パーセントやんやの拍子を

浴び午後四時半終了、それよりいざ造

物と全町弥が上二ざわめき立つ、午後

七時爆竹の合図に各町すわと動揺め

けば高張り出し物先陣を競ふ

拵げられたるハ之さながらの■物、

観景ひしめき立鐘の余地とてなし唯

前景気の熊本放送局員出張の風鎮祭実

況放送の中心となつた事の落胆はけだ

し大であつた、かくて九時頃より余興

二輪加始まり又再び観景二酔ひしれる

然るに上町向上会が自町のみを先に踊り

容易に他町繰り出さず花に於て他三町

は直前に自町に帰り最後に上町に及ぶ

上町に乗り込みたる正二午前三時二乗んとす
かくて本年度風鎮祭も滞りなく終了す

横町中老会議決議事項

一、造物八十七日夕刻迄是非共成就する事

一、下町万代橋迄作物通す事中止す

一、電灯八各町に於て中老より世話す

但し個処ハ電気会社と會員立会にて定む

一、造物出不足一日壹円五十銭と定む

昭和町創立に関する四町会議

一、名称は昭和町向上会と称す

一、昭和町作物を六個とす

一、昭和町の踊り場所

住吉、岩下喜覚、田代、本部前

一、年中行事年次ハ向後下町の次年よりとす

一、昭和町ハ他各町の踊り場所全部を踊る事

作り物組割当

一丁目 甲乙 四個

二丁目 二個

三丁目 甲乙 四個

作物審査員 谷川俊氏、田尻今朝蔵氏
松岡茂氏

松岡茂氏

(九) 昭和九年度風鎮祭々典記

旧曆七月五日向上会四町会議を

本年は昭和区恵美須屋に於て開催

決議する事左之通り

一、十七日目覚しは例年通り

一、十七日仮装行列は目覚以外二回以上

一、十七日二輪加は他町より先にし道順

は左廻りとし踊り場所は一町二付き

七ヶ所の事

一、十七日午後一時障害物取除きに各

町一名宛電気諸所前に集合

一、十八日は総動員仮装行列一回以上
一、十八日午後六時半各町会長外一名宛立会

の下に抽籤により造物出発順位を

定め午後七時の煙火を合図として出

発する事

一、十八日二輪加は自町のみとし他町は決して踊らぬ事

一、各町より造物審査員三名宛選定

し十六日中に商工会に通告する事

踊り場所 横町 玉津屋、南寿軒、東屋、豊前屋、

松岡茂、菅原ワキ、松田今朝熊

上町 西角屋、中村茶店、鶴屋、中川、

新市街、篠田、飯塚

下町 豊後屋、原、梅木、塚本、飯干、

中村 牧大之■、安貞

昭和町 吉田庄平、大谷、田代、大里屋、

恵美須屋、南郷自動車、住吉

旧暦六日夜中老会を公会堂に開くに出

席者少きも四町会議の決議事項を告げ

各丁毎に造物に関する協議を遂ぐる事

を決定し散会す

本年度は会員中に踊子少き為め

熊本より備ひ入るゝ事ニし山村保

君に依頼しマチヤン組を招ず十七日

午前零時を合図として風鎮祭のスタート

は切らる、夜間は二輪加を午後七時半より
開始せしも劇の長かりし為め意

外に遅く午前二時半漸く終了す

十八日八朝来の雲足あしく少なからず

気使ひても次第に良好となり正午

頃は全く快晴となる、さて年来の宿望

たる熊本中央放送局の実況放送も

漸く其の曙光を見、枝ノ師以下五名出

張試験放送をなす、当■県下十二郡

の指導農村協議会の開催なり一行七

十名参集す、か之商工会主催にて盆

裁大会の催しありて喝采を博す

風鎮祭も逐年盛況を呈し来り各町

共も万事二■■を致し横町、下町、昭和

各町八中老組の仮装行列を繰り出し

風鎮祭二層の拍車をかく、午後六時

半の抽籤にて順位決定、七時の煙火を合図

に先づ上町組より繰出したり然るに

本年ハ非常なる人出にて全く立錫の余

地なき状態にて前古未曾有盛況なり

而して時と共に人出は増すのみなり、

かゝる時大津町商工会より八名視察団

来る。午後九時過ぎ二輪加二移りた

るに屋台の周囲ハ全く身動き不可能

なり流石に芸良きため観衆飽
きず横町内の雑踏前例なし午前

一時半無事終了す

追加 造物の成績は絶対優良にて

にて一等 蘇鉄、二等 朝顔、二等

ガマ、五等 菊、ボタン、五等 龍、

造物審査委員

松岡嘉六、田尻今朝蔵、

松岡茂、以上

中老組、少女組の仮装行列並二

舞踊出演八本年を以て嚆矢

とす

(九) 昭和拾年度風鎮祭典記

八月十六日旧暦七月十八日午前八時倶楽館前に

集合なし仮装行列なし者六名は向上会

館にて思ひくの仮装をなし正名に(日本商人

満蒙進出宝伝隊)返送面白く進発す

旧暦七月四日四丁会議を下町写真真屋にて

なす例年通りにて特に記す事なし

七月十六日午前八時一同向上会館に集合な

し倉庫より大山道具及び踊り屋台の材料

を倶楽館前も運搬なし約半分の屋台組をなし

それより十七日の役割を会館にて決定す

七月十七日午前八時倶楽館前に一同参集な

し仮装行列なす者七人の外残り全部にて

大山、屋台組立をなす此の日の第一回仮装

行列(大衆よ国家主義に帰れ)をなし午前拾

時出発す二回目は(高森日本音楽隊)を組

識なし午后三時出発す四町幹部山村

保氏宅にて二〇加組分けの抽選をなした

結果横町は勘太郎ハ決定す他は上町マアチ

ヤン下町澤田駅組はマアチャン組なり例年に

ならぬ午后七時二〇加屋台自町出発最初に下町

豊後屋前より始める拾七日なれど可成りの人

出なり

(九) 昭和拾壹年度風鎮祭典記

本年は商工会の評議委員会に全町の会長

ハ案内なかりし為西角屋にて四丁会議を

聞きたれど決議なす事項まとまらず一時

商工会より通知を受け四丁の会長全部出席

なし例年通り変りなく行ふ事になる

八月二十四日市下屋にて再度の四丁会議を

開く横町は新入会員多く会員より二〇加をなす

意孝なりしが外三町よりの意件が熊本より

雇ふ事なりしたため我町もやむを得ず雇ふ事に

するのだが後にて山村保に依頼なして熊本に二〇加の雇銭を取合

せたが余りにも

雇銭の差がある故又もや他町ハ相談致したる上我町は

会員より二〇加をなす事ハ決す熊本より二〇加組を雇フし町は下町に昭和町の式町上町及び我が町は会員中よりなす其の後は例年通りにて此ハ特筆すべき事もなき故畧す

(九) 昭和二十一年度風鎮祭記

拾年振りの復活である挙行するに当り先づ与論の調査を行い結果如何によつて改めて協議する事にきまり然して与論調査の結果上町横町下町ハ絶対多数の賛成を得たるも昭和町に於てハ過半数以上の不賛成者を見たり依つて四町会議を食糧品組合の二階に於て開催せり

三町より昭和区に対し再考の余地を与へて回答を待てり然るに翌日に至り書類を以つて回答せり

区長始め全隣保組長連判の下に時期早々^(ママ)生産の^(マ)止障、食糧の危機、盗難の予防等を並べり強いて三町行ふとすれば昭和区は是をさまたげる者に不有専門家を雇ふて三町に協力しよと言ふ向上会はやる腹なるも中老是を抑へり

再び三町会議を開き三町によつて飽迄も挙行する事に一致せり依つて昭和区は本年度だけ不参加を表明せり右様の結果を会員に報告せり

今年風鎮祭を復活するの意味に於て向上会

主催の下に行い今年度丈ハ新八月拾八日に行い行事ノ一つである目覚ハ各町随意なるも十七日より行いたり目覚ハ今迄になく一部二部と繰り出し本当ノ気分を出させり十七日通し物一回にして夜間八自町だけの二〇加すでに在部山東部からの見物多く腰辨風影多々であつた作り物ハ資材困難ノ為め見合せとなり大山は三町引き廻す所に話ハ有りたるも横町ノ大山大半なく組立も出来ざる由申出でければ各町其儘据置きとなれり

俄然十七日の午後十二時頃に至り昭和区よりは是非とも参加させて欲しいと申し出たり昭和町向上会員の熱意抑えへ難く会長直クの申出依つて三町合議の上下町に於て四町会議を開きすでに時日なく通し物丈は免じて来れ其代りに二〇加丈ハ夜通し稽古して各町廻るとの熱意にほだされ昭和区の参加を認めたり 十八日朝から 雨性の空模様でこゝ二三日東風強く風雨と思はれたが天は吾に幸して雨止みぬ本日通し物二回午後になると人では増すばかり四ツ角ハ立錐の地なく迄に至れり六時半四ツ角集合くじ引きにより繰り出順序を決め四町立合の上年番節刀の渡しを無事に終了せり 途中上在区の二〇加飛入りありたるも意に介せず十九日午前零時無事他町二〇加を終了せり時すでに雨八量を増せり本年度より寄附の所として申受くる様にせり

食糧不足の事と「■」踊子連中に対し何一つとして
 できなかつた事を悔むのみ然して黙々として
 不平言わずに最後迄やりどげて呉れた事
 が一番嬉しかつた

(九) 昭和二十三年度風鎮祭記

肥後名物風鎮祭を挙行するに当り上町松田会長

宅に於て各町幹部集合せり

先づやるかやらぬかの問題となり、先づやる事として各町経

費の予算を立てたり、出銭取立及び各所との交渉

など、商工会より連絡してもらふ様商工会に交渉する事

ときまされり、結果何始によつて改めて協議する事

きまり散会せり。与論調査の結果横町上町昭

和は多数の賛成を得たるも下町中老に於て会長

並に経費に過半数以上の不賛成ものを見たり依つて四町会議を横

町右同会長宅に於て開催せり与論の結果

下町がもしやらんとしても三町に於て之を挙行する

事となり先づ下町会長解職運動にあたり

出向者 石田会長 上林副会長

与論の結果下町会長交代前会長桐原実

氏が下町向上会長として再び立てり

よつて各町共同上会は風鎮祭をやる事に決定

之を商工会をあたり各町会長出席商工会幹

部連中集合上町向上会に於て決議す

与論の結果六、三、貯金などありたるを以て経費

問題となり花を持って祭りをやってくれ出銭は全部不

加能との商工会の申出により再び上町向上会

に於て各町幹部及び会員数名集合の共に

協議せり、与論の結果商工会より出銭

がなからねば今年は祭一際向上会は立べらぬ事

に決定今年は風鎮祭に向上会として立べらぬ事

に決定し、又商工会に之を以て幹部各町を以て

あたり

横町向上会は各町中止せるも仁○加を劇場を以て

(かつらきさん)の応援の共に行ふ事と決定し散会せり

しかるに再びこんどは商工会より各町へ一万円の出銭

を出す事となり石田会長宅にて各町幹部集合

再び各町共又本祭を行ふ事に決定せり

四町決定事項

一、三味系代 一番 十五本 二番 十本 三番 五本 三〇〇円

一、電線電灯代 二五〇円

一、御神酒代 五〇円

一、看板紙代 (四町合同) 二五円

合計 六二五円(年番迄届ケラレ度)

一、大山八作ラヌ事

一、通し物 十七日 午前 午後各一回

十八日 四町合同 一回 十時四角集合

最低 二〇名以上

一、十七日ノ自町の仁〇加 午後五時以降

一、看板持各町一名宛 年番迄出ス事（各町）

一、目覚 十二時以降（十七日）

一、十八日 午後四時四角集合 四時半開始

矢村社行 商工会ヨリ一升包銭出ス二付き各向

上会一名宛人円丈出ス事

一、各町二時 内内外 端々は必ず廻る事

仁〇加の道順

横町 上町

一番くじ 下町昭和上町 一番くじ 下町昭和横町

二〃 昭和和下町上町 二〃 昭和和下町横町

三〃 上町昭和和下町 三〃 横町昭和和下町

昭和 下町

一番くじ 上町横町下町 一番くじ 上町横町下町

二〃 横町上町下町 二〃 横町上町昭和

三〃 下町上町横町 三〃 昭和と上町横町

一、年番渡際踊り子五名で人垣を作り残りは屋台の上

上に立てる事

一、芸者代 二日 五〇〇円

一、十七日通し物 昭和 第一工場迄 横町 学校前 下町

杉永様方前 上町 飯塚様方迄

八月二十一日

前夜からの疲れもなんのその待望の風鎮祭は愈々やって来た。

午前一時半より（演芸部）会長副会長会長幹部

全員出発す。

午前八時向上海総員集合仮装行列の準備にかゝる

午前中 本日の放送番組 一、素人仮自慢 二、二十の扉

四、鏡の鳴る丘 三、スポーツシヨ

午後 山引音頭全員

さすが横町向上海だけあって町の人気は横町向上海にさらってしまつた。

横町が一番と言ふ声を聞いて本当うに何人とも言へぬ、唯嬉しさに疲もどこえやらさつてしまつて、

商工会の運動宜敷きを得て昼夜送電を確約され夜内の

仁輪加も非常ナル賑はひを呈し名物風鎮祭を異彩あ

らしめた。

自町巡回演芸場所

安楽、津留サエ、古木重利、池田久信、松岡茂

豊前屋、佐伯善市、後藤末久、白石源九郎、喜久屋

後藤下駄屋、後藤義輝、東商店、岩本床屋、武田■

玉津屋、渡辺、石田、財津

第一日 囃子

第一日 囃子

〇太鼓 堀泰憲 古木義男 〇三味線 若弁さん きさ恵さん

第二日

各地より風鎮祭を見んものと押しかけて町は大賑ひ一時は雨とて

心配だったが運よくて雨もすぐやんでかへって雲かちにてあつからず

通行も身動きならぬ状態であつた九産バスは下は長陽

上は柳谷迄で午後七時より一時間事に折返し運転をして

他町村から人の便利をはかれり

町には造り物も出来より芸術を誇こつた

第二日 行事

午前

午前十時 四町合同仮装行列

午後 四時 舞台は四角に引出され年番渡し横町より

昭和町へ渡す

引出抽籤ありて各町指定場所にて観衆の拍手を浴びて

今日は最後の仁輪加を行ふ

仁輪加初めると同時に小雨となるもほんのひとときにて雨は心配の程はなかつた

配の程はなかつた

順当する仁輪加も進み一時半終了二日間に亘る行事を

どゝこほりなく済ませり

第三日

町は大風のあとの様にしずかになつた

午前十時向上会へ全員集合 舞台くづし、御礼廻り、打上準備

右の仕事を終り向上会員の労をねぎらひ酒宴を催す

実に各自の自覚により此の最大行事の風鎮祭も此処に

とゝこほりなく終了す

各方面の御好意に対し深甚の謝意を表す

女子青年団員、化粧、着付奉仕

(九) 昭和廿四年度風鎮祭記

風鎮祭り挙行に關し商工会と打合せあり栗屋氏

宅にて商工会長、各町向上会長と協議せり

予算を先づ商工会側へ提出せり

予算及造物の打合せの為五日午後八時三〇分より

中老会議をなせり出席者 区長沖広海氏

各隣保組長商工会側より吉良恒氏葛城氏

中老 松田武熊氏馬原千尋氏後藤末久氏久米梅太郎

氏出席向上会長及会計之に出席す

出銭割一戸平均一〇〇円 一旦一六日迄集めて

向上会迄届出す事

造物はなるべく一隣保一つは造る事

造物審査員 久米梅太郎氏 後藤末久氏

六日 四町会議 決議事項

17日

目覚 午前〇時以後 随意

通し物 午前 午後 各一回

道順 自由 時間随意

各町ノ端 上町 天神(飯塚) 下町 石や

横町 上村ラジオ店 昭和 第一工場

仁〇加開始 (自町) 七時頃ヨリ

18日

通し物 各町一回 時間 自由

仁〇加 四町集合 時間 四角四時 時間厳守

白線引 各町一名立会ノ事午後 三時厳守

年番渡 清酒一合 各町ヨリ

年番渡 立会(会長副会長) 踊子五名二テ人垣ヲナス

法被着用ノ事、高張会長横

時間(仁〇加) 一町二時間以内トス

八月十一日

愈々待望の山引は来た、昨夜よりの疲れもわずれて

午前一時より目覚に出発(演芸部)に会長

副会長会計幹部宮岡馬原藤沢菅原

出発

八、三〇全員、集合 仮装行列ノ準備ニカ、ル

午前中

午後 昭和維新

右ノ題ノ下二出発町ノ人気ヲ横町向上会へ集メタ

第一日は夜間の仁輪加も非常ナル賑はひを呈し名物

風鎮祭を異彩あらしめた

太鼓 古木義男 堀泰憲 三味線 若龍 キサエ

第二日目は各方面から見物人が押しかけて大賑ひ通行

も身動きならぬ状態であつた

仮装行列、山引音頭 出発すぎわるなつて俄雨にたゝ

られて出発がおくれたり此の山引音頭はさすがに町の人気

を集めて三十余内のお花あり全員ますく張切れり

俄雨の為舞台十字路集合が一時間後れたり

愈々五時舞台には四角に引出され年番渡し引出抽籤あり

て各町指定場所に向つた横町は下町へ向つて出発

観衆の拍手を浴びて仁〇加を行ふ

之又第一日目の仁〇加より俄雨にあひ前途を危ぶ

まれたがどうやら指定の仁輪加を二時半に終了二日
内に亘る行事をとこほりなく終了せり

八月十三日

舞台くづしを終り向上会員の労をねぎらひ酒宴

を催す各自の自覚に依り此の最大行事をとこ

こほりなく終了

女子青年団員化粧着付奉仕

終

(九) 昭和廿五年度風鎮祭典記

八月二十二日連合会々儀決定

一、十七日 各町競演集合時刻八午後四時

一、屋台八豊後屋東側

一、十八日 作り物ノ四角集合時刻 一六〇〇

商工会 連合会 事務所―下町渡辺氏宅

一、連絡先 各町高張持迄

一、馬車借貨 五〇〇 一、芸者 三味持 一〇〇〇 否 八〇〇

一、三味線借貨 二〇〇 糸 各町持

一、救護班 十七、十八 小林 藤岡

一、作り物行列ノミノ場合 三〇〇

一、寄附金 壱万弍千円也 各戸平均八十円也

一、商工会寄附金 弍千円也 自町お花大拾円也とみて

合計弍万円也 一、二十六日迄 集金の事

役割

踊子

演芸部長 谷川今朝次

部員 後藤幸光

松本飛士

沖 博春

市原常康

女 松本幸夫

岩下利夫

工藤辰夫 女

石田太助

囃子方

古木義男

葛城次男

三味線 若龍、浦子、早苗、武田、今村、佐伯

造物移動

午後四時半迄各町先頭ノ位置四角トシテ配置ス

出発、十七時

十七日 ○時 花火 一発 目覚開始

十八日 一九時 節刀渡

造物 末端

横町 津留商店 上町 飯塚商店

下町 石や 昭和 第一工場

大山 各町据置

十七日 午後四時半 集合 五時 仁○加開始

盆 十ヶ 御神酒 年番出シ(連合会長立合)

白線引 前日の午後一時

十七日 第一回 仮装行列 第二回 仮装行列

密造酒狩り

山引音頭、高森音頭

(踊子九名 小学生二十名)

十八日 午前一回 仮装行列

二人 連

好天に恵まれて十七日の愈第一日は来た午前○時花火

一発我が町は目覚の第一歩をふみ出した

四角にさしかゝるや残念にして規約を破り昭和向上会

あり文句ありたるも上町向上会の仲裁のもとに納まり

たり之ふかく幹部の連絡不行届の為なり、残念なり

夜間の仁○加も非常なる人出二て賑はひを呈し、

名物風鎮祭を異彩あらしめた、踊子、各町全員四角

集合午後五時竟演の上自町へ帰れり

自町の演芸場所

津留商店、谷川又喜、古木重利、渡辺初彦、

安楽、葛城、岩下、佐々木、高田、石田製材所、工藤忠久、

玉津屋、岩本とこや、中川精肉店、きくや、後藤義輝、

馬原千尋、市下や、小林病院、豊前や、甲斐幸春

第二日の今日各地より押しかけ通行も見動きならぬ状態

で大賑ひを呈し九産むバスは折返運転をして

他町村の人を喜ばせたり

一時中止になつてゐた造物も今年は復活して昔の通り各町

かつぎ廻る事となり一その賑ひを加へたり

午後と十九時舞台は十字路に引出され年番渡し引出抽

籤ありて各町指定場所に向つた

横町一番くじにて下町に向へり観衆の拍手を浴び

て今日最後の仁○加を行ふ

途中一、二の意見ありたるも会長掌握のもとに午前三時半
終了三日に渡つて行事とこほりなく終了せり

第三日

午前十時向上会へ全員集合舞台くづし御礼廻り打上順

備昼に大雨になれりほんとうに昨日迄は天候に恵まれて

本当に何よりだった

右の仕事を終り向上会員の労をねぎらひ酒宴を催

せり各自の自覚により此の大行事を終了す

終

(五四)

昭和貳拾五年

風鎮祭規約

横町向上会

高森町連合同上会

第一章 総則

第一条 風鎮祭ハ遠ク文政五年ノ昔矢村神社ニ於テ風

鎮メノ為行ハレタルヲ其ノ源トナス。

第二条 風鎮祭ノ諸行事ハ商工会主催デ之ヲ行フ

第三条 風鎮祭ニ於テ行フ余興ハ凡テ高森町連合同上

会内各町向上会之ヲ分担ス。

第四条 節刀ヲ有スル向上会ヲ年番向上会ト称ス。

第五条 各向上会ノ余興ハ旧曆七月十七日十八日ノ両日之ヲ行フ

第六条 年番渡シハ旧曆七月十八日町中央部ニ於テ之

ヲ行フ詳細ニ関シテハ項ヲ改メ之ヲ記ス。

第七条 年番向上会ハ風鎮祭ニ関スル凡テノ行事ニ対シ

各町向上会ヲ主導ス。

第八条 各町向上会ハ年番向上会ノ主導ニ従ヒ円満裡ニ

行事ヲ終ル如ク協力ス。

第二章 構成

第九条 高森町各向上会ノ構成左ノ如シ

(イ) 年令十八才ヨリ三十五才迄ノ其ノ区ニ居住スル男子

(ロ) 役員ハ会長副会長会計ノ三役ノ他幹部若

干名ヲ設ク其ノ他ノ役員ニ関シテ各向上会ノ随意

トス。

第十条 高森町連合同上会ノ構成左ノ如シ。

(イ) 横町区 横町向上会

(ロ) 上町区 上町向上会

(ハ) 下町区 下町向上会

(ニ) 昭和区 昭和向上会

第十一条 高森町連合同上会ニ関スル規約ハ別ニ之ヲ定ム。

第三章 議決

第十二条 風鎮祭余興ノ打合せ事項ハ凡テ連合同上会役

員会ニ於テ之ヲ決定スル。

第十三条 年番向上会ハ風鎮祭約二週間前二連合会議

ヲ召集シ大凡ノ事項ヲ決定スル。

第十四条 年番向上会ハ必要ニ応ジ隨時連合会議ヲ召

集シ行事二万遺憾無キヲ期スルコト。

第十五条 連合会議ノ決定ハ凡テ之ヲ合議制トスルコト。

第四章 余興

第十五条 仮装行列目覚シ仁輪加ノ順路並ニ末端ニ付キ

左ノ通り之ヲ定ム。

(イ) 末端

横町 住吉一商店前

上町 天神飯塚商店前

下町 杉永石屋前

昭和 第一製材所前

(ロ) 目覚シ

旧拾七日午前零時以降各向上会随意ニ之ヲ繰出

ス必ズ高張提灯を先頭ニ立テ小提灯三個以上

ヲ同意スル事途中ニ於テ行キ会ヒタル場合ハ右側

通行ノ原則ニ則リ不測ノ事態起ラザル様努ム

ルコト。

目覚仮装票列ガ行キ会ヒノ場合ニ於テハ「ハヤシ方」

ハ相手方トノ距離約十米ニナリタル場合一応中止シ

約十米行キ過ギタル後「ハヤシ」ヲ復活サセル。

第十七条 仮装行列

十七日十八日ノ仮装行列ノ時間及回数ニ関シテ

ハ別ニ定ムル(連合会議)モ大凡左記ノ如キナリ。

一、十七日 午前 一回

” 午後 一回

一、十八日 午前 一回

第十八条 十七日午後四時年番向上会ノ屋台(四角)ニ於テくじ

引ニ依リ各町約十分間宛余興ヲ行ヒタル後自

町ヲ廻ル

第十九条 年番(節刀)渡シ

(イ) 期日 旧十八日午後□時(時間ハ連合会議ノ決定ニ依ル)

(ロ) 場所 四角

(註) 年番(節刀)渡シハ矢村社宮司ヲ招キ連合向上

会長立会ノ下ニ之ヲ行フ。

(ハ) 準備

A 御神酒 四合(各向上会一合宛負担)

B 三宝 一個

C 高机 一個 商工会代表者一名

D 盃 十二個(内二個ハ宮司連合向上会長用)

(註) 以上ノ品物ハ年版向上会ニ於テ之ヲ準備ス。

(二) 概略図面左ノ如シ

(図面省略)

(A) 各向上会長

(B) 各副会長

(C) 高張持

(D) 宮司

(E) 連合向上会長

(F) 各町踊子各五名

註 各町屋台ハ中央部ニ集合シタル後「はやし」ノ競演

ヲ行ヒ年番（節刀）渡シノ神事行ハレル直前ノ火花ニ依リ一斉ニ停止サセル

「はやし」停止シ神事始マルヤ屋台ノ踊リ子ハ一斉ニ起立シ静粛ニス。

- ・各向上会長副会長ハ提灯持参ノコト。
- ・高張持ハ会長副会長中間後方ニ位置ス。
- ・会長副会長ハ自町ノ屋台ヲ背ニシテ位置ス。
- ・各町屋台ハ梶棒ノ先端ガ白線上ニツク如ク位置ス。
- ・白線ハ前日各会長立会ノモトニ距離ヲ測定シ年番向上会長白線ヲ引ク。
- ・当日年番（節刀）渡シ開始一時間前ニ新シク白線ヲ引キ直ス。

（ホ） 式典

準備出来次第年番向上会ハ準備完了ヲ宮司ニ告

ゲ宮司年番（節刀）渡シノ神事ヲ行フ。

神事始マルヤ周囲ニ取巻ク踊子モ静粛ニスルコト。

（ハ） 年番（節刀）渡シノ要領左ノ如シ

神事終了ト同時ニ節刀渡シニ移シ各自定位置ニツキタル

後

一、年番向上会長ハ左ノ如ク次番会長ニ申告ス

「昭和何年度風鎮祭々典一切ノ行事ヲ〇町向上会長

ヨリ〇町向上会長ニ滞リ無ク申シ送りマス。」

一、次年番会長ハ左ノ如ク応答ス

「昭和 年度風鎮祭々典一切ノ行事ヲ連合向上会長

〇町向上会長〇町向上会長立会ノ下ニ〇町向上会長ヨリ異議ナク申シ受ケマシタ。」

一、次二年番会長ハ左ノ如ク申告ス

「〇町向上会長確ニ見届ケマシタ。」

一、最終年番会長ハ左ノ如ク申告ス

「〇町向上会長確ニ見届ケマシタ。」

一、以上接刀渡シ終了ト同時ニ宮司ハ左ノ如ク在籍総員ニ伝ヘル

「節刀渡シモ滞リ無クスミマシタ誰方モ（サラリ）ヲ才願ヒシマス」

以上ニテ一同（サラリ）ヲ行ヒ神酒ヲ飲ミ（年番副会長接待）節刀渡シヲ終了ス。

（ト） 節刀渡シ終了後連合向上会長商工会長ノ挨拶

ヲ行フ。

（チ） くじ引

挨拶終了スルヤ宮司ハ年番向上会長ハ予メ作製シ置キ

シ「くじ」ヲ各向上会長ニ引カセ年番会長ハ最後ニ之ヲ引ク。

（リ） 「くじ」ハ四本作リ先順番向上会ヨリ希望スル順路ニ入ル

其ノ場合自町ニ入ル先番向上会ノ屋台ガ完全ニ通レル位置迄後退ス。

（ス） 仁輪加始マリテ他町ノ屋台ト行キ会ヒタル場合ハ会長同

士連絡シ行キ会ヒヨ円滑ナラセル此ノ場合「はやし」ハ約三十米位ノ距離ヨリ一時中止シ静粛ニ行キ会ヒヲ終ルコト

行キ会ヒ終ルト同時ニ「はやし」モ復活サセル。
第二十条 年番向上会長ハ旧十七日矢村社ニ御神酒一升（清酒）持

参シ旧十八日ノ節刀渡シニ付キ指示ヲ仰ゲコト。

旧十八日午前十時連合向上会長各向上会長ハ神酒二升持参の

上矢村社

ニ集リ風祭りノ式典ニ参列スル。

第二十一条 年番向上会方準備スベキ道具

(イ) 年番（節刀） 渡シノ一切ノ準備

(ロ) 宮司ニ対スル礼錢（連合会議ニテ決定）

(ハ) 御神酒二升（各町五合宛） イリコ又ハスルメ

(ニ) 石灰 若干

(ホ) 其ノ他必要ニ応ジ依頼サレタル物品

(終)

写送附先

一、矢村神社宮司

一、横町向上会長

一、商工会長

一、連合向上会長

一、昭和向上会長

一、下町向上会長

一、上町向上会長

横町祭礼関係文書目録

史料目録凡例

- 一、本目録は、「横町祭礼関係文書」(以下、横町文書)から「風鎮祭」、「にわか」、「造物」、「仮装行列」、「手踊」などの『風鎮祭』に関連するものを抽出した上で特に重要なものを目録に示し、「記録類」「会計簿」「その他」に大別した。
- 二、収録史料は編年で配列し、作成年次、史料名、内容、作成者(差出人)、宛先、備考の順に収録し、一部の冊子史料については中に記載されている記事を記載年次、見出し名、内容、備考の順に情報を加えた。
- 三、作成年次もしくは記載年次を欠く史料でも内容から年代を明らかにできるものは「[]」で示し、作成時期を推定できるものは、凡その時期を記した。
- 四、史料名は原題を尊重し、内容などから仮題として付けたものは、「[]」内に表記した。また、内容を補記した場合は「()」を用いた。
- 五、特記事項または一括情報や整理時に付けた番号などは備考にまとめて記した。

記録簿

番号	作成年次(記載年次)	史料名(見出し名)	内容	作成者・差出	宛先	備考
1	[文化3年~文政11年]	[諸綴](文化3年~)	できごとや祭りの活動・会計記録85項目を記載。	なし	なし	箱(大)-3
	[文化13年]子7月	盆諸入目日記調方之覚	品目と金額 「にわか入用之うち武本」とあり	なし	なし	箱(大)-3-24
	文政4年巳7月	盆入用	品目と金額 「作物代喜代八二渡ス」とあり	なし	なし	箱(大)-3-46
	[文政10年]亥6月29日	祭礼初仕候事諸造用改附	品目と金額 末尾に「文政十年亥閏六月二日付諸祭礼盆儀等之節」	なし	なし	箱(大)-3-75
2	[天保7年~安政元年]	[諸綴](江戸後期)	できごとや祭りの活動・会計記録127項目を記載	なし	なし	箱(大)-5
	[天保6年]未6月29日	[祭礼入費]	品目と金額、貫銭 「一、拾匁 山作品々トシテ いつミ 屋払」とあり	なし	なし	箱(大)-5-33
	[天保13年]6月29日	御祭礼諸入目	品目と金額 「一、式匁九分 山師手間賃」とあり	なし	なし	箱(大)-5-66
	[弘化3年]午7月18日	[祭礼]入用	品目と金額 「十八日 一、天神山引 一、俄色々 取組之事」とあり	なし	なし	箱(大)-5-88
	[嘉永2年]酉7月18日	山引[入費記録]	品目と金額、出銭	なし	なし	箱(大)-5-100
	[嘉永4年]亥7月18日	山引造用	品目と金額、貫銭	なし	なし	箱(大)-5-106
3	[嘉永7年~慶応2年]	[諸綴](高森手永横町若者中)	できごとや祭りの活動・会計記録91項目を記載	なし	なし	箱(大)-6
	[安政4年]ミ7月16日・18日	俄踊興行	品目と金額、貫銭、若物面附	なし	なし	箱(大)-6-20
	安政6年末9月24日	[俄道具屋間作事諸雑用]	俄道具屋間作事の品目と金額、横町備銭請取座、貫銭 品目に「ヤマ入用」、「大工請取」、「山師請取」とあり	なし	なし	箱(大)-6-46
	文久2年戊7月18日	屋間引初目控	品目と金額、一丁・二丁・三丁貫銭、若者面附 品目に「屋間加勢人」、「蛇細工」、「屋間天井はりかへ入用」、「屋間幕并張物」などあり	なし	なし	箱(大)-6-61
	文久3年亥7月	盆踊諸入目扣	品目と金額、一丁・三丁貫銭、踊連面附、「忠臣蔵」、「大近源氏」などの演目名あり	なし	なし	箱(大)-6-68
	元治元年甲子7月14日~18日	俄雑用扣	品目と金額、一丁・二丁・三丁貫銭、若者面附	なし	なし	箱(大)-6-76
	元治元年子7月10日~18日、8月1日~2日夕	[盆踊]諸雑用扣	品目と金額、「千木梅」、「大切記」などの子供演目名あり	なし	なし	箱(大)-6-78
	慶応元年丑7月18日、14日~17日	山引并俄諸雑用扣座根扣	品目と金額、品目に「大蛇忝死」、「十八日やま入用」などあり	なし	なし	箱(大)-6-83
4	[慶応2年~慶応4年]	[諸綴](金銭明細、火事)	できごとや祭りの活動・会計記録35項目を記載。	なし	なし	箱(大)-1
	[江戸末期カ]	[金銭算用]	本郷宮内より金銭預分など	なし	なし	箱(大)-1-3 後半部に「慶応四辰七月十八日俄屋間引躍諸入目」とあり
	[江戸末期カ]	[金銭算用]	金額と品目が書かれ、「酒五升、但俄中」とあり	なし	なし	箱(大)-1-4
	[慶応2年春]	若連扣	若連出銭控及び長州相働に付小倉出府に相連られ籠取致し候により不繁榮に付、弁才天祭前夜若者中打寄俄仕、少々之賑合と勘定致候事とあり	なし	なし	箱(大)-1-6
	慶応2年寅7月24日	六地藏祭に付入目覚	六地藏祭に於ける入目 他に丑七月俄相働に付き、燈籠式張分失及び横町不繁榮に付、山の張物高瀬屋に歩入仕置候などあり	なし	なし	箱(大)-1-7
	慶応3年卯7月14日より18日	俄屋間諸雑用扣	金額と品目と一丁目~三丁目までの貫銭及び若者面附	なし	なし	箱(大)-1-21
	慶応3年卯8月10日	[慶応3年卯7月14日より18日迄俄大に繁榮に付、塩屋亀太郎殿の儀について]	7月17日における塩屋亀太郎の顔末とその後の対応について	なし	なし	箱(大)-1-24
	慶応4年辰7月	[俄并に踊目録扣]	俄・踊目録と踊子面附	なし	なし	箱(大)-1-32
5	[明治4年~明治19年]	[財]政記録帳	できごとや祭りの活動・入目記録168項目を記載	なし	なし	箱(大)-4
	明治4年末7月18日	[祭礼入費・記録]	品目と金額 他に「右者例歳通家摩引後子供連二幕大連老幕興行相濟悪病除并風立願と而矢村社二おゐて子供大連共都合七幕内せいすき相語り宿屋迄子供連廿四孝通五段首尾能興行相濟依■」とあり	なし	なし	箱(大)-4-2
	[明治4年7月]	俄家摩引踊一切入目控	品目と金額、諸入目控、大幕入用分	なし	なし	箱(大)-4-3
	[明治4年]7月26日	ぶたい入用之品新調に付入目控	舞台用品目と金額 一丁目出銭控、若者面附	なし	なし	箱(大)-4-4
	明治5年申7月18日	屋満引并盆中諸雑入目	品目と金額 三丁目・式丁目・忝丁目貫銭、若者面附	なし	なし	箱(大)-4-14

番号	作成年次 (記載年次)	史料名 (見出し名)	内容	作成者・差出	宛先	備考
	明治6年西旧7月15日	俄屋間引雑用	品目と金額 一丁目・二丁目・三丁目貫銭	なし	なし	箱(大) - 4-25
	[明治6年] 西9月10日	[火災記録]	見出しに「九日夕山引に火おこり」とあり	なし	なし	箱(大) - 4-26
	明治8年亥旧7月	盆俄屋摩引入目	品目と金額、三丁目貫銭、若者面附、祭礼記録	なし	なし	箱(大) - 4-48
	明治11年寅第8月16日 旧7月18日	山引俄仕候入用記	品目と金額、一丁目出銭	なし	なし	箱(大) - 4-69
	明治12年西旧8月22日	[山引・俄入費]	見出しに「明治12年西旧8月22日山引旧8月20日より俄興行例年は旧7月18日の興行之處虎例刺病に而願には可成不申延引に被成候事」とあり他に祭礼記録、品目と金額、貫銭、若者面附	なし	なし	箱(大) - 4-86
	明治13年旧7月18日	山引入目	品目と金額、貫銭記、若者面附	なし	なし	箱(大) - 4-98
	[明治13年旧7月]	[若者面附・役方・規則改正]	若者面附及び役方他に山道具一式を頭支配とすることや役方に「俄大隊長」とあり	なし	なし	箱(大) - 4-99
	明治14年旧7月19日	山引之節雨天に付通し物迄にて相済申候事尤入費金	品目と金額、貫銭	なし	なし	箱(大) - 4-114
	明治15年8月31日旧7月18日	風鎮祭入費	品目と金額、貫銭	なし	なし	箱(大) - 4-126
	明治16年陽8月22日旧7月20日	[俄家間引興行入費記]	品目と金額、貫銭	なし	なし	箱(大) - 4-136
	明治17年旧7月16日より18日	俄山飾興行入費	品目と金額、貫銭、若者備前残金	なし	なし	箱(大) - 4-145
	明治17年旧10月10日	矢村宮角力入費	品目と金額、角力備利子金、若者面附末尾に「一、同老門式銭八厘五毛本年七月俄入用栄屋払」とあり	なし	なし	箱(大) - 4-149
	明治18年旧7月18日	俄山引入費分	品目と金額、利金入分、若者面附	なし	なし	箱(大) - 4-154
	明治19年旧10月18日	[諸入費]	見出しに「南在上総宮■…■平宅にて矢村宮祭典以来の意趣一切和睦として手踊致候也」とあり他に品目と金額、御花記	なし	なし	箱(大) - 4-168
6	[明治20年~明治34年]	[諸綴](明治20年)	できごとや祭りの活動・入目記録183項目を記載	なし	なし	箱(大) - 2
	[明治] 20年旧7月15日~18日	入費附込記	金額、品目、貫銭などの算用と若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-8
	明治21年旧7月15日~18日	俄山引諸入目記	俄・山引の金額、品目、貫銭などの算用	なし	なし	箱(大) - 2-23
	明治22年旧7月15日~18日	俄山引入目	俄・山引の金額、品目、貫銭算用、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-36
	明治23年旧7月	[俄山引入費]	俄・山引の金額、品目、貫銭算用、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-46
	[明治23年旧7月]	[首藤新吾祭礼記録]	首藤新吾による明治23年旧7月の算用祝いや作物について	なし	なし	箱(大) - 2-47
	[明治23年旧7月24日]	勝軍地蔵祭典に附踊奉納	勝軍地蔵祭典に附踊奉納目録、「十三通シ物」とあり	なし	なし	箱(大) - 2-49
	明治24年旧7月	俄山引に付諸入目	俄・山引の金額、品目、貫銭算用、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-64
	明治25年旧7月20日	[山引記録]	山引記録、貫銭記、利金入控、若者面附、入札品	なし	なし	箱(大) - 2-77
	明治26年旧7月18日	屋間引俄入費	俄・山引の金額、品目、貫銭算用	なし	なし	箱(大) - 2-87
	明治27年旧7月大陽8月18日 大陰7月18日	風鎮祭典	風鎮祭記録、入費	なし	なし	箱(大) - 2-96 消去線あり
	明治27年旧7月18日陽8月18日	風鎮祭典	風鎮祭記録、備金利子、町内貫立、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-98
	明治28年旧7月	風鎮祭執行に付諸入費	風鎮祭記録、貫銭記、共有金利子入、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-113
	明治29年旧7月	俄諸入費并に山引	貫銭、共有金	なし	なし	箱(大) - 2-125
	明治30年旧7月18日	俄諸入費	貫銭記、町備利子金、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-136
	明治31年旧7月18日	俄諸入費	出銭控、寄附控、備金利子、若い物過退金控	なし	なし	箱(大) - 2-148
	[明治31年7月16日~18日]	山引日記	7月16日~18日までの山引の様子	なし	なし	箱(大) - 2-149
	明治32年7月18日	風鎮祭諸入費	風鎮祭記録、品目明細	なし	なし	箱(大) - 2-160
	明治33年旧7月	俄諸入費	貫銭記、備金利子受取分、若者面附	なし	なし	箱(大) - 2-171
	明治33年旧8月15日	[高森町分署落成祝賀会諸入費]	寄附金、若者面附「三丁目共同手踊」とあり	なし	なし	箱(大) - 2-175
	明治34年旧7月	俄山引諸入費	備金利子、若者一時除退金、貫銭	なし	なし	箱(大) - 2-183
7	[明治35年~大正3年]	[記録簿]	できごとや祭りの活動・会計記録118項目を記載	[横町若者組]	なし	箱(中) - 26 一丁目に「両表紙除 四百葉 若長松田今朝方調製ス」とあり
	明治35年旧3月4日	[赤十字社惣会諸入費]	金額と支払先名、貫銭、見出しに「屋間ヨリ手踊等ヲ致タル」とあり	なし	なし	箱(中) - 26-5
	明治35年旧7月18日	風鎮祭入費	品目と金額、若者面附	なし	なし	箱(中) - 26-11
	明治36年旧7月18日	俄諸入費	品目と金額	なし	なし	箱(中) - 26-23 先年記載のため消去線あり
	明治36年旧7月18日 太陽暦9月11日	俄山引諸入費	品目と金額、若者面附	なし	なし	箱(中) - 26-24
	明治37年旧4月4日	[日露戦争祝勝会入費]	品目と金額、貫立銭人名、見出しに「造物等をなしたる」とあり	なし	なし	箱(中) - 26-31
	明治37年旧7月16日~18日	[風鎮祭入費]	品目と金額、若者寄附、若者人名 見出しに「明治三拾七年旧七月十六日ヨリ十八日迄三日間風鎮祭ノ為メ俄山引等ヲ致ス等之處本年日露交戦ニ付三丁協議ノ旅順陥落の節祝勝会トシテ俄山引等ヲ致ス管ノ事十八日ハ参丁一同二大旗ヲ立矢村社工参拝致シ一丁二引取西連寺ニテ大宴会ヲ致シ無事ニテ解散至シ」とあり	なし	なし	箱(中) - 26-34 造物・大山・二輪加に関する「決議」を挟み込み

番号	作成年次 (記載年次)	史料名 (見出し名)	内容	作成者・差出	宛先	備考
	明治37年旧8月2日	[遠隔陥落祝勝会諸入費]	品目と金額、若者面附 見出しに「明治三十七年旧八月二日遠隔陥落二付祝勝会二付八月一日八提灯行列二付欠村社参詣盛大ノ賑合横町作物ハ明治桃太郎作物壮士踊リハ露国タノ偵横井真雄ノ伝」とあり	なし	なし	箱(中) -26-35
	明治38年旧7月18日	風鎮祭諸入費計算	品目と金額、貫銭入金、若者面附	なし	なし	箱(中) -26-43
	明治38年旧7月24日	六地藏尊祭典入費	品目と金額 他に「節当受取人名」あり	なし	なし	箱(中) -26-44
	明治39年4月18日	日露戦争招魂祭并二祝悦念諸入費・徴兵検査機具代寄附共二	品目と金額、入銭寄附、若者面附、祭礼記録 「手踊手附」や「夜ハ三丁ノ俄手踊」あり	なし	なし	箱(中) -26-49
	明治39年旧7月18日	風鎮祭施行入費	品目と金額、貫銭入金、若者面附	なし	なし	箱(中) -26-53
	明治40年旧7月18日	風鎮祭諸入費	品目と金額、共有金利息取立、貫立金、寄附金	なし	なし	箱(中) -26-61
	明治41年旧7月18日	俄山引諸入費	品目と金額、貫銭、利子金、除退金	なし	なし	箱(中) -26-70
	明治42年旧7月18日	俄山引諸入費	品目と金額、貫銭・寄附、利金、俄踊の花、除退金・不足	なし	なし	箱(中) -26-79
	明治43年8月21日～23日	風鎮祭に係る諸入費	品目と金額、貫立金、寄附金、花、利子金、祭礼記録	なし	なし	箱(中) -26-87
	明治44年旧7月	風鎮祭記事	祭礼記録、入費、貫立金、利子金、寄附人名	なし	なし	箱(中) -26-94
	大正元年8月30日	[風鎮祭入費]	祭礼記録、入費	なし	なし	箱(中) -26-102
	大正2年旧7月	風鎮祭諸入費	品目と金額、貫立金、寄附人名附、貸付利子金	なし	なし	箱(中) -26-106 不足金算用書を貼付け
	大正3年旧7月18日	[風鎮祭記録]	祭礼記録、参拝人名	なし	なし	箱(中) -26-114
8	大正4年7月 [大正4～大正15年]	記録簿	できごとや祭りの活動記録38項目を記載	高森青年会第五分会	なし	箱(中) -27
	大正4年8月18日	風鎮祭ヲ行フ	報告のみ	なし	なし	箱(中) -27-5
	大正4年11月16日	御大典奉祝大運動会	記録のみ 「商店より変装行列の催し等あり」とあり	なし	なし	箱(中) -27-10
	大正5年旧7月18日	風鎮祭記録	祭礼記録	なし	なし	箱(中) -27-14
	大正6年8月(旧7月18日)	風鎮祭記録	祭礼記録、出勤会員	なし	なし	箱(中) -27-17
	[大正10年]	[風鎮祭横町造り物審査級]	大正10年度風鎮祭横町造り物審査及び審査結果	なし	なし	箱(中) -27-1 箱(中) -27-26
	大正10年旧7月18日	風鎮祭	祭礼記録	なし	なし	箱(中) -27-26 1～2を挟み込み
	大正12年旧7月18日	風鎮祭	祭礼記録(横町組受賞作物)	なし	なし	箱(中) -27-29
	大正13年	風鎮祭二関スル三町会議々決事項	議決事項、経緯記録、決議(本文写)、出銭調査委員選定の件、大正13年度風鎮祭々典記	なし	なし	箱(中) -27-34
9	大正15年8月起 [昭和3年～昭和26年]	記録帳	できごとや祭りの活動記録84項目を記載	横町向上会	なし	箱(小) -1
	[昭和3年7月]	御届	横町向上会新市街組よりの作物調製に関する届書と決議書の写し	なし	なし	箱(小) -1-2
	[昭和3年7月]	新市街部落民届書に関する件	横町向上会新市街組よりの作物調製に関する届書受取からその後の経緯	なし	なし	箱(小) -1-3
	昭和3年	風鎮祭に関する三町会議	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-4
	昭和6年	風鎮祭々典記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-12
	昭和6年9月4日	臨時総会記録	決議事項4項目、風鎮祭での仁輪加及び作り物について	なし	なし	箱(小) -1-14
	昭和8年	風鎮祭々典記	祭礼記録、横町中老会議決議事項に昭和町向上会設立に関する記録を含む	なし	なし	箱(小) -1-17
	昭和9年	風鎮祭々典記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-21
	昭和10年	風鎮祭典記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-24
	昭和11年	風鎮祭典記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-27
	昭和12年	風鎮祭	祭礼記録、日支事変による国家総動員の非常時により余興取止め、式典のみ行う	なし	なし	箱(小) -1-29
	昭和13年	風鎮祭	祭礼記録、式典のみ行う	なし	なし	箱(小) -1-32
	昭和16年9月9日(旧7月17日)	風鎮祭記	祭礼記録、風鎮祭を廃し余興を止め式典のみ行う	なし	なし	箱(小) -1-40
	昭和17年	招魂祭典記	祭礼記録、「目さまし」や、「山」や「輪加」の記述あり	なし	なし	箱(小) -1-44
	昭和17年	風鎮祭記	祭礼記録、式典のみ行う	なし	なし	箱(小) -1-45
	昭和17年	将軍地藏尊祭典記	祭礼記録、「余興として芝居輪加が有り」との記述あり	なし	なし	箱(小) -1-46
	昭和18年	風鎮祭	祭礼記録、式典のみ行う	なし	なし	箱(小) -1-49
	昭和20年	風鎮祭	祭礼記録、「戦は終わり終戦直後として何の張合もなく有哉無哉に済ませり」	なし	なし	箱(小) -1-53
	昭和21年	風鎮祭記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-57
	昭和22年	風鎮祭記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-60
	[昭和22年]	[風鎮祭記録]	祭礼記録、決議、芳名録	なし	なし	箱(小) -1-61 「昭和二十三年七月起 記録帳 横町向上会」の内表紙あり
	昭和23年	風鎮祭記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-68
	昭和24年	風鎮祭記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-73
	昭和25年	風鎮祭典記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-70
	昭和25年9月6日	地藏祭典記	祭礼記録、余興として「一、音頭 仁〇加」とあり	なし	なし	箱(小) -1-79
	昭和26年8月22日	風鎮祭典記	祭礼記録	なし	なし	箱(小) -1-83
会計簿						
10	大正4年 [大正4年～大正9年]	会計簿	祭りの会計記録14項目を記載	第五分会	なし	箱(中) -29

番号	作成年次 (記載年次)	史料名 (見出し名)	内容	作成者・差出	宛先	備考
	大正4年8月28日	風鎮祭諸入費	取入金、寄附金、貫銭(一丁目・二丁目・三丁目)、共有金、利子、基本金、利子、徴収金及び免除除金、雑収入金、決算、不足金控	なし	なし	箱(中) - 29-2
	大正5年8月16日	風鎮祭諸入費	取入金、貫銭(一丁目・二丁目・三丁目)、利子金ノ部、基本金ノ部、基本金ノ部、寄附金ノ部、決算	なし	なし	箱(中) - 29-4 「三町会議協議事項」挟み込み
	大正6年旧7月	風鎮祭諸入費	取入金ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金、利子金	なし	なし	箱(中) - 29-7
	大正7年	風鎮祭典	入金ノ部(老丁目・式丁目・三丁目・橋より以北分)、寄附金、支払金	なし	なし	箱(中) - 29-11
	大正8年	風鎮祭典	取入ノ部(老丁目・式丁目・参丁目)、寄附金、支払金	なし	なし	箱(中) - 29-13
11	大正9年以降 [大正9年~大正15年]	会計簿	祭りの会計記録13項目を記載	第五分団	なし	箱(中) - 28
	大正9年	風鎮祭計算記	貫銭ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金、支出ノ部	なし	なし	箱(中) - 28-1
	大正10年	風鎮祭計算記	取入ノ部(一丁目・二丁目・三丁目、寄附金、支出ノ部諸店支払及其他諸雑費(三丁目)、寄附金ノ部、支出ノ部諸店支払金	なし	なし	箱(中) - 28-4
	大正11年大陽暦9月	風鎮祭計算記	取入ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金ノ部、支出ノ部(諸店支払並二諸雑費)	なし	なし	箱(中) - 28-6
	大正12年	風鎮祭計算記	取入ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金ノ部、支出ノ部 9月28日付大山改築費・11月9日付風鎮祭特設電灯破損電球代あり	なし	なし	箱(中) - 28-8
	大正13年	風鎮祭決算記	取入ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金ノ部、支出ノ部、決算後ノ支払	なし	なし	箱(中) - 28-10 踊子花但書に「拾七日八雨天二付屋体ヲ廃ス十八日八雨天二付横町内ノミ廻リシニ付花少シ」
	大正14年	風鎮祭決算記	取入ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金、支払ノ部	なし	なし	箱(中) - 28-12
12	大正15年8月 [大正15年~昭和8年]	会計簿	祭りの会計記録18項目を記載	横町向上会	なし	箱(小) - 2
	大正15年	風鎮祭決算記	取入ノ部(出銭一丁目・二丁目・三丁目)、寄附金ノ部、支出ノ部、臨時支出	なし	なし	箱(小) - 2-1
	昭和2年	風鎮祭決算	取入ノ部(老丁目・式丁目・参丁目)、寄附金、支出ノ部、金額・氏名	なし	なし	箱(小) - 2-6
	昭和3年	風鎮祭決算記	取入ノ部(一丁目・二丁目・三丁目)、寄附ノ部、運手出銭、支出ノ部、金額・氏名	なし	なし	箱(小) - 1-8
	昭和4年	風鎮祭決算記	取入ノ部(出銭貫立・一丁目甲乙組・二丁目組・三丁目甲乙組)、免役金、寄附金、支出ノ部	なし	なし	箱(小) - 2-10
	昭和5年	風鎮祭々典会計録	取入ノ部(一丁目甲組乙組・二丁目・三丁目甲組乙組)、免役金、寄附金ノ部、雑収入、支出ノ部 金額・氏名	なし	なし	箱(小) - 2-12
	昭和6年	風鎮祭祭典記	取入ノ部(一丁目甲組乙組・二丁目・三丁目甲組乙組)、退役金、寄附金、支出ノ部、事後支出ノ部 金額・氏名	なし	なし	箱(小) - 2-15
	昭和7年	風鎮祭祭典記	取入ノ部(一丁目甲組乙組・二丁目・三丁目甲組乙組)、寄附金、支出ノ部、事後収支ノ部 金額・氏名	なし	なし	箱(小) - 2-17
13	昭和8年7月 [昭和8年~昭和24年]	会計簿	祭りの会計記録59項目を記載	横町向上会		箱(小) - 6
	昭和8年	風鎮祭祭典記	取入ノ部 出銭(一丁目甲乙・二丁目・三丁目甲乙)、寄附免役花その他の収入、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-2
	昭和9年	風鎮祭祭典記	取入ノ部(一丁目甲乙・三丁目・三丁目甲乙・雑収入)、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-8
	昭和10年	風鎮祭祭典記	取入ノ部(一丁目甲乙・二丁目・三丁目甲乙、免役金)、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-12 [商品明細書]を挟み込み
	昭和10年	会計	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-13
	昭和11年	風鎮祭収支表	取入ノ部(一丁目甲乙・二丁目・三丁目甲乙、免役金)、支出ノ部、風鎮祭後収入(三丁目甲)、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-16
	昭和11年	会計収支表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-17
	昭和12年	収支会計	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-20
	昭和13年	会計表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-25
	昭和14年	会計表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-27
	昭和15年	会計表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-30 枠外に「未収入金」とあり
	昭和16年	風鎮祭収支	御神酒代のみ	なし	なし	箱(小) - 6-33
	昭和16年	収支会計表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-35
	昭和17年	収支会計表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-37
	昭和18年	支出決算表	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-40
	昭和19年	会計報告	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-42
	昭和20年	会計報告	取入ノ部、支出ノ部、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-43
	昭和21年	風鎮祭収支表	取入(一丁目甲乙・二丁目・三丁目)、支出、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-44
	昭和22年	風鎮祭収支決算表	取入合計と内訳、支出合計と内訳、差引残高	なし	なし	箱(小) - 6-49
	昭和22年	風鎮祭寄附高調	第1組から第12組分の総戸数、割当高、収入高、超過高	なし	なし	箱(小) - 6-50

史料 横町祭礼関係文書

番号	作成年次 (記載年次)	史料名 (見出し名)	内容	作成者・差出	宛先	備考	
	昭和22年	風鎮祭寄附者一覧	横町第1組から第11組分の金額と氏名	なし	なし	箱(小) - 6-51	
	[昭和22年]	下町向上会払内訳表	金額と品目、「風鎮祭神社御酒」とあり	なし	なし	箱(小) - 6-52	
	[昭和22年] 9月3日	横町向上会収支決算表	昭和21年度から昭和22年度までの残金内訳と合計、繰越金、「明治22年度風鎮祭残金」とあり	なし	なし	箱(小) - 6-53	
	昭和23年	風鎮祭寄附芳名	第1組から第11組分、御花、収入、支出、金額と氏名	なし	なし	箱(小) - 6-56	
	昭和23年8月23日	風鎮祭支出計算表	支出内訳、金額と品目	なし	なし	箱(小) - 6-57	
	昭和24年8月 (昭和24年～昭和29年)	会計簿	祭りの会計記録22項目を記載	横町向上会	なし	箱(小) - 3	
14	昭和24年	風鎮祭支出計算表	支出合計、金額、品目	なし	なし	箱(小) - 3-1	
	昭和24年	風鎮祭寄附者	寄附者名(第一組・第二組・第三隣保組・第四隣保・第五組・第六組・第七組・第八組・第九組・第十組・第十一組)、自町仁○加御花の金額	なし	なし	箱(小) - 3-2	
	昭和25年	風鎮祭収支計算表	寄附金、商工会より、御花(自町・他町)、山引音頭、収入、支出、残金	なし	なし	箱(小) - 3-5	
	昭和25年	風鎮祭寄附者氏名	一組分	なし	なし	箱(小) - 3-6	
	昭和25年	風鎮祭支出計算表	金額、品目	なし	なし	箱(小) - 3-7	
	[昭和25年]	領収書 [写](連合向上会長用提灯代)	連合向上会長用提灯代の領収書写し	昭和向上会	横町向上会	箱(小) - 3-8	
	昭和25年9月2日	領収書 [写](風鎮祭御神酒代ほか)	風鎮祭御神酒代・御幣代・規約用紙代四町負担分の領収書写し	年番 上町向上会	横町向上会	箱(小) - 3-9 上町向上会の朱印あり(不鮮明)	
	[昭和25年]	[風鎮祭寄附者氏名]	2組から11組まで、自町御花	なし	なし	箱(小) - 3-10 昭和28年8月16日付領収書を挟み込み	
	[昭和25年]	[収支計算表]	収入、御花、木戸、御札、サイ銭、支出、御花、収入合計、残高	なし	なし	箱(小) - 3-11	
	[昭和25年]	[支出表]	金額、品目	なし	なし	箱(小) - 3-12 「記」、「収入メモ」を挟み込み	
	昭和22年	横町向上会収支計算表	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、「22年度風鎮祭残高」あり	なし	なし	箱(小) - 3-15	
	[昭和24年]	[横町向上会収支計算表]	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、「風鎮祭残高」あり	なし	なし	箱(小) - 3-17	
	昭和25年	[横町向上会収支計算表]	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、「昭和25年度風鎮祭残高」あり	なし	なし	箱(小) - 3-18	
	昭和26年	[横町向上会収支計算表]	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、昭和26年度風鎮祭総収入・支出あり	なし	なし	箱(小) - 3-19	
	[昭和27年]	[横町向上会収支計算表]	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、昭和27年度風鎮祭総収入・支出あり	なし	なし	箱(小) - 3-20	
	[昭和28年]	[横町向上会収支計算表]	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、昭和28年度風鎮祭総収入・支出あり	なし	なし	箱(小) - 3-21 [昭和] 28年5月24日付領収証貼付け	
	[昭和29年]	[横町向上会収支計算表]	月日、摘要、収入、支出、残高、記事、昭和29年度風鎮祭総収入・支出あり	なし	なし	箱(小) - 3-22 昭和25年分及び昭和26年分の領収証、計算書	
	15	[昭和26年～昭和33年]	[会計簿]	祭りの会計記録62項目を記載	なし	なし	箱(小) - 5
		[昭和26年]	横町区風鎮祭寄附 [収支計算表]	1組から11組、山引音頭、下町・上町・昭和・横町御花、商工会 昭和26年風鎮祭寄附帳(一組から十一組、金額、人名) 昭和26年風鎮祭御花帳(横町区、上町区、下町区、昭和区、他町村、山引音頭の部)	なし	なし	箱(小) - 5-6
		昭和26年	風鎮祭支出表	月日、摘要、支出、残計	なし	なし	箱(小) - 5-7
[昭和27年度]		[風鎮祭収支計算表]	昭和27年風鎮祭寄附者名簿(第1組から11組、金額、人名)、山引音頭御花明細書、各商店別支出明細 昭和27年風鎮祭御花乃部(横町区、上町区・昭和区・下町区(仁輪加お花明細)、礼銭明細書)	なし	なし	箱(小) - 5-11	
昭和28年		風鎮祭御花	上町、下町、昭和、横町、山引音頭ごとの金額や人名	なし	なし	箱(小) - 5-13	
昭和29年		風鎮祭御花	横町、金額、人名	なし	なし	箱(小) - 5-17	
昭和29年		(年番) 風鎮祭収支計算書	総収入、総支出、差引残高、収入・支出明細	なし	なし	箱(小) - 5-18	
昭和29年		(年番) 風鎮祭支出明細	礼銭の部、各商店その他支払の部	なし	なし	箱(小) - 5-19	
[昭和29年]		[風鎮祭御花]	横町分残り、下町、上町、昭和、山引音頭御花	なし	なし	箱(小) - 5-20	
[昭和29年]		出銭	第一組から第十二組まで	なし	なし	箱(小) - 5-21	
昭和30年		風鎮祭収支計算書	総収入、総支出、差引残高、収入・支出明細	なし	なし	箱(小) - 5-30 備考に山引音頭分あり	
昭和30年		風鎮祭支出明細書	礼銭の部、各商店その他支払の部	なし	なし	箱(小) - 5-31	
昭和30年		風鎮祭出銭ノ部	第一組から第十一組、金額、人名	なし	なし	箱(小) - 5-32	
昭和30年		風鎮祭山引音頭御花ノ分	横町、上町、昭和、下町、金額、氏名	なし	なし	箱(小) - 5-33	
昭和30年		風鎮祭御花(仁○加)	横町、上町、昭和、下町、金額、氏名	なし	なし	箱(小) - 5-34	
昭和31年		風鎮祭収支計算書	総収入、総支出、差引残高、収入明細、金額	なし	なし	箱(小) - 5-40	
昭和31年		風鎮祭支出明細書	各商店支払の部(その他)、商店名と金額 礼銭の部、氏名と細目、金額	なし	なし	箱(小) - 5-41	
昭和31年		風鎮祭	酒、及び焼酎、御花、品目と名前	なし	なし	箱(小) - 5-42	
昭和31年		風鎮祭御花(仁○加)	草ヶ部南部、金額、名前	なし	なし	箱(小) - 5-43	
昭和31年		風鎮祭出銭ノ部	1組から12組分、金額と名前	なし	なし	箱(小) - 5-44	
昭和32年		風鎮祭収支決算書	総収入、総支出、差引残高、収入明細、金額	なし	なし	箱(小) - 5-49	
昭和32年	風鎮祭支出明細書	礼銭の部、商店支払の部・その他、氏名と金額	なし	なし	箱(小) - 5-50		

番号	作成年次 (記載年次)	史料名 (見出し名)	内容	作成者・差出	宛先	備考
	昭和32年	風鎮祭山引音頭御花分	横町区、上町区、昭和区、下町区、金額と名前	なし	なし	箱 (小) - 5 - 51
	昭和32年	風鎮祭御樽芳名	品目と名前	なし	なし	箱 (小) - 5 - 52
	昭和32年	風鎮祭出銭芳名簿	第1組から第12組分の名前と金額	なし	なし	箱 (小) - 5 - 53
	昭和33年	風鎮祭収支決算書	総収入、総支出、差引残高、収入の部、支出の部、金額 他に手踊御花、演芸御花	なし	なし	箱 (小) - 5 - 57
	昭和33年	風鎮祭支出明細書	礼銭の部、氏名と金額	なし	なし	箱 (小) - 5 - 58
	昭和33年	風鎮祭出銭芳名簿	第1組から第12組分の名前と金額	なし	なし	箱 (小) - 5 - 59
	昭和33年	風鎮祭手踊御花	横町区、下町区、昭和区、上町区分の金額と名前	なし	なし	箱 (小) - 5 - 60
	昭和33年	仁〇加御花	横町区、下町区、昭和区、上町区、その他分の金額と名前	なし	なし	箱 (小) - 5 - 61

その他

16	[明治時代]	印章	[横若印章]	なし	なし	箱 (中) - 32
17	[大正時代]	[審査員造物順位書付綴]	造物順位及び批評	なし	なし	箱 (中) - 30-10-2 4枚あり
18	[大正時代]	[演目担当表ほか一括]	演目ごとのタイコと三味の担当や [金銭支助人名簿] など	なし	なし	箱 (中) - 30-13-2-2
19	[大正時代]	キ (オビ代請求)	二輪加オビ縫賃請求	仕立やオカヨ	青年	箱 (中) - 30-60-15
20	[大正時代]	[領収書ほか綴]	商店から横若への領収書ほか綴り	シゲ店ほか	第五分会 ほか	箱 (中) - 30-74-2-6 11枚分をこより留、1~2まで一括
21	[大正時代]	御通	金額と品目	青年会第五分会	各店	箱 (中) - 35
22	[大正時代]	二〇加着寄附帳	金額と氏名	世話人藤沢たつ・佐伯せん	なし	箱 (中) - 38
23	[大正時代] 8月	御 [通]	金額と品目	第五分団	各店■ ...■	箱 (中) - 3
24	[大正時代] 9月9日	告代 (山引執行の件)	山引実行日について	第五分団長	なし	箱 (中) - 30-41-2
25	大正4年2月	高森町青年会規則	高森青年会規則、末尾に顧問名及び役員名あり	第五分会	なし	箱 (中) - 48
26	大正4年8月28日	風鎮祭諸入費	収入金、寄附金、貫銭 (一丁目・二丁目・三丁目)、共有金利息、基本金利息、徴収金及び踊免除金、雑収入金、決算、不足金控	なし	なし	箱 (中) - 29-2
27	大正9年	寄附名簿	大正9年山引分、金額と氏名	青年会第五分会	なし	箱 (中) - 39
28	[大正10年]	[包紙]	[大正10年度 風鎮際 領収証入]	なし	なし	箱 (中) - 30-60-1 1~24までを包み、こより一括
29	大正10年	寄附芳名帳	大正10年風鎮祭分、金額と氏名	第五分団	なし	箱 (中) - 47
30	大正10年8月	御通	金額と品目	高森町第五分会	なし	箱 (中) - 36
31	大正11年	計算綴	風鎮祭の計算書、金額、氏名、品目	なし	なし	箱 (中) - 15
32	[大正11年]	[現在金ほか記録]	[大正十一年度風鎮祭渡現在金三八、六八〇 入]、他に墨書あり	なし	なし	箱 (中) - 30-52
33	大正11年	寄附帳	大正11年度風鎮祭分、金額と氏名	第五分団	なし	箱 (中) - 46
34	大正11年7月	寄附者芳名簿	寄附者名と金額	第五分会	なし	箱 (中) - 20
35	大正11年9月11日	記 (酒肴料請求)	8月18日三町会議の酒肴料代	西角屋	第五分団	箱 (中) - 30-60-16
36	[大正11年] 9月11日 (旧7月31日)	会計調査	9月11日 (旧7月31日) 調分、「風鎮祭矢村祭典両口合計残余金」とあり	なし	なし	箱 (中) - 30-67
37	大正12年	十七・十八両日踊子花	十七、十八両日の踊子花代、金額・品目、氏名	第五分団	なし	箱 (中) - 2-1 1~2をこより留
38	大正12年8月	風鎮祭収支統計	金額と氏名	第五分団	なし	箱 (中) - 2-2
39	大正13年	風鎮祭収支決算帳	金額、氏名、品目	高森町青年団第五分団	なし	箱 (中) - 14-2
40	[大正13年]	[包紙]	墨書「大正13年度風鎮祭出銭割控へ」、内容物なし	なし	なし	箱 (中) - 30-4
41	大正13年	寄附帳	大正13年度風鎮祭分、金額と氏名	第五分団	なし	箱 (中) - 45
42	大正15年	寄附帳	風鎮祭での寄附名簿、金額と氏名	横町向上会	なし	箱 (中) - 30-13-1 1~2までこより一括
43	[大正15年] 11月17日	領収証 (風鎮祭紙代)	大正15年度風鎮祭紙代	後藤■喜	横町向上会	箱 (中) - 30-74-2-6
44	[昭和初期] 8月16日	領収証 (三味糸代)	三味糸代の領収	工藤商店	横町青年団	箱 (中) - 30-59-2 1~10までの包紙として使用、こより一括
45	[昭和初期] 8月16日	記 (機械縄代)	機械縄第の領収	塚本商店	横町向上会	箱 (中) - 30-59-2-1
46	[昭和2年]	記 (金銭明細)	十七日・十八日の出立及び二〇加歸り用の品目・金額	市■や	向上会	箱 (中) - 30-59-2-8
47	昭和2年8月	御通	風鎮祭での購入品目と金額	横町向 [上会]	各店	箱 (中) - 30-59-1-3
48	昭和2年8月9日	御通	金額と品目、通シ者・二〇加出立などあり	横町向上会踊子連中	各商店様	箱 (中) - 1
49	昭和2年8月15日	記 (御中食代)	旧7月18日御中食代金の領収	西角屋	横町向上会	箱 (中) - 30-59-2-10
50	[昭和] 2年8月16日	領収証 (商品代)	三味糸など7品目の金額	草村商店	横町向上会	箱 (中) - 30-59-2-3
51	昭和2年8月16日	記 (代金受取)	サイダー二本などの領収	豊後屋酒造店	横町向上会	箱 (中) - 30-59-2-6
52	昭和2年8月16日	記 (代金受取)	金1円の領収	豊後屋酒造店	横町向上会	箱 (中) - 30-59-2-7
53	[昭和] 10年7月25日消印	[葉書] (祭礼余興照会)	祭礼余興の照会	マチャン組本部	向上会長	箱 (小) - 16
54	昭和25年	風鎮祭規約	高森町連合向上会によって策定された風鎮祭の規約、第1章~第4章で構成し、全31条	高森町連合向上会	横町向上会	箱 (小) - 4

上演台本

二〇二二年（令和四年）風鎮祭にわかコンクール優勝作品

下町向上会にわか「嗚呼、熱闘甲子園」

登場人物 A キャプテン（小林亮太） B 選手（山村弥平） C 監督

口上 とざいとーざい。ただいまより下町向上会演芸部がお送りいたしますにわか

かは、外題は「嗚呼、熱闘甲子園」「嗚呼、熱闘甲子園」、最後までごゆっくりご観覧のほどをー

（道行 中央付近でB滑って尻もち 観客から笑いが起こる）

B （バッドをマイクのように持って）「♪ないんていないんしー こいをし
たあー おー きみにむうちゅう」

A ちよいちよいちよいちよいちよいちよい！（メガホンでBの頭を叩く）ちよ
い！

B はっ？

A 「♪きみにむうちゅう」じゃにゃーけん、おまえ。はあ、わかってる、今？
なに？

A あんた、甲子園の決勝よ、ここ

B キャプテン、こん曲、知らんとね

A おら、生まれとらん、そら

B キャプテン、おれも生まれとらん

A おまえ（メガホンで頭を叩く）なし歌ったつか、おまえ！

B ばあ

A ばかんごつ！ おまえね

B うん

A 甲子園、ツーアウト満塁！

B うん

A 一打サヨナラよ、もう

B あら、こら大事な場面たいな

A あたりまえたい、弥平

B うん

A おう頼むばい、集中しい、いつてくれよ、おまえ

B いやあ、ばってんねえ

A うん

B ほーんなこ

A うん

B 緊張してきた

A 緊張してきたや？

B うん

A やれるごつやれ！（メガホンを口に当てて）おまえしかおらんとぞ、もう。
集中していけ集中して

B うん、わかった（バットを構えて）おれにまかしなっせ

A まかしたぞ、弥平

B バアシツと、バシツと

A バシッと行ってけ、バシッと

B (足踏みして移動する所作)

A (メガホンを口に当てて) おうおう、弥平! もうおまえしかおらんとぞ、もう

B (何かに気づいたように) おお?

A なんや?

B キャプテン

A なんや!

B おらあね

A おお、なんや!

B これたい、こん試合。全国で流れよつとかね

A 全国さんだん、おまえ、高森ん町の人、みんながね、おまえば観とつとぞ、

今

B ほなこつや

A おおつ

B なら、(観客に向かって) 高森町の皆さあん! おれね(バットを構えて)

これで日本一になって優勝旗ば持って帰るばい!

(会場から拍手)

A おお! (拍手して) 弥平、ようゆうた

B うん

A おい、弥平、もうおまえしかおらん

B おれしかおらん?

A おまえしかおらん。おまえに任すぞ、おら

B (バットを構えて) 皆までゆうな、おれに任せえ

A おう、頼んだぞ

B よし! (足踏みして移動する所作)

A 弥平頼むぞ、弥平! 弥平!

B あああああ! (苦しそうに胸をさする)

A なに? ちやいちやいちやい! (メガホンを叩きながら近づいて) な

んや!

B ああ、思い出した!

A なんや!

B モヤモヤする

A はあ? モヤモヤするね?

B おらあね

A ほお

B キャプテンに

A ほお

B 隠し事は、しとつた

A なんやおまえ。それたあ、今、言わんにやいかんとや

B 今、言わんとねえ

A はあ?

B おらあ、打てる気がせん

A わかった、弥平

B うん

A ならね

B うん

A おれに皆、ゆえ! おれが全部受けとめてやるけん

B ならねえ、キャプテン

A うん なに
 B 言わせちもらうばってん
 A うんうん
 B おらあね
 A うん
 B 高森町の
 A うん
 B 096k歌劇団
 A はあ？
 B たあーいが好きたい！
 A 096kつてや
 B うん
 A おおお、弥平！
 B うん
 A ちよつと待てよ、おまえ（ポケットから何か取り出す）
 B うん
 A （096kのタオルを広げて）おれもね、オフィシャルグッズば 買った、
 B おらあ
 B おお！ こらこらこらこら！（同じタオルを広げて見せる）
 A おお！ おうた（互いに握手する） 弥平！
 B おおー、気が合うねえ
 A おまえ、そぎゃんと、はよゆえよ、おまえ
 B （嬉しそうに）おおー！
 A おまえ、ばかんどつ！ ばかんどつ、ばかんどつ

A B
 B イエーイ（タオルを肩に掛けニヤニヤと指を指す）
 A おらあね、弥平
 B うん
 A おらたい。たいがい096kメンバーおるばってんたい
 B うん
 A おれが好きなのはね
 B うん
 A ううん。悩んで悩んでの、ノムラクキちゃん！
 B あらあ！
 A かわええもんなあ、あらあ
 B おれも大好き
 A おお 弥平！
 B 気が合うねえ
 A （A&Bハイタッチ）
 A 気が合うねえ
 B うん
 A 弥平
 B うん
 A ならたい
 B うん
 A おまえんためにね
 B うん
 A おれが、おい。（舞台袖にあるサイン色紙を取りながら）ノムラクキちゃん
 B がどつかで観とるかもしれんけんたい

B うん

A サインばもろうてきちやる、キャプテンだけん

B はあつ、こりや盛り上がるねえ

A 盛り上がるぞお

B ユキちゃん、おるとね

A おるぞ、おるぞお

B おら、ユキちゃんのために日本一になるぞお。サヨナラ勝ちすっけんねえ

A (拍手して) 弥平

B うん

A ええぞお、おい、きた

B 決めちゃえ、決めちゃえ

A よしよし。なら、弥平

B うん

A (何かに気づいたように) おっ！ ちよっ！ 待て待て待て待て！

B うん

A おい！ おいおいおいおいおい！ そこに寝とった監督が 起きらした

B ばいた、あーた

B 起きたねえ

A うんうん。ならたい。最後のアドバイスは

B 教えちもらわにゃいかん

A うん、教えちもらいに行こう

B 行こう、行こう

だ寝ている様子)

A (メガホンを口に当てて後ろから呼びかける) 監督

B (バットで素振りしながら) かんとーく

A (Cの後ろからメガホンで大声で) ***!

C (びっくりした様子で) じゃあかあしいやい!

A & B (喜んだ様子で) 起きらした！ 起きらした！

C おおお、ちよつとまてい

A & B はい？

C 梅香苑のお迎えが来らした。準備ばしてから早よ行こ

B はあ？

A (メガホンで監督の頭を叩いて) バカんとーく！

C (Bに向かって) ああなたな新人さんかな？

A (手を振って) いや、違います

C あつ、違う？

A (Bを指して) かんとーく、これ、山村

C 小林とお

B (バットを構えて) 弥平でーす

C あー？ おまえどんな、今、なんばしよつとや？

A 自分、なんばしよつとつて。あーた、今、全国大会決勝よ、もう

C ばーあかんごつ。おら、おまえねえ

A おう

C おまえがたい

A おう

(道行 演者C入場 向かって中央 A 左 B 右 C お囃子が鳴りやんでもCはま

C じいさんって。旅行連れて行ってやるけんねえ

A おう

C たあだベンチに座つとくとええって

A (メガホンで監督の頭を叩く)

A&C (顔を見合わせて互いに) ばあか

C なあんや

A ばあかんごつ。もうね、山村が打てばサヨナラでしょうが

C (バットを構えて) おれが決むっけんねえ

C サヨナラてや

A&B うん

C (泣き出して) おまえ。おらほんまに、こん前、ばあさんが果つててたい。

こん前初盆してサヨナラしたばい。もう、ぴえん (泣く所作)

A ぴえんって

B (ちよつとふざけた感じで) ぴえん

A なんごつ！ ぴえんじゃにゃあ！

C おら、ようね

A ほお

C よう知つとるとど、ぴえんやら

B ほー 若つきやねえ

C こん前ね。孫からラインがきてからたい

A ほう

C じつちゃんはなんもこうくれんけん、ぴえんつち

A (メガホンで監督の頭を叩く) ちよつちよつちよつちよつ。かんとーく

B (ちよつとふざけた感じで) ぴえん

A ぴえんじゃにゃあ！ かんとーく！

C はい！

A 孫にはピシャつと買ってやんなつせよ、あんた

C うん。うんうん。うん？ ばつてんたい

C うん

C そう、今。なんや

A うん

C 状況はよう分からんばつてんたい

A ああん、かんとーく！

C はい

C もう九回！

A うん

C こん山村が打てばねえ

A うん

C 一打サヨナラ！ 全国日本一！ もう

A うん。そらなんや。そう日本一になつたらなんかあると？

C なんかあるどこしじゃにゃーな、弥平

A おらねえ。勝つたらねえ

B うん

A 監督ば

A うん

B 胸上げる

A (拍手をしながら) おー、監督。宙は舞います、宙は

C おお！ ばつてんたい

A うん

C おら、じいさんだったい

A うん

C 上えん行ったり、下あん行ったり。上えん行ったら、ひよこつとはっていき

するはいー (大笑い)

A ちよつとかんとーく。ねえ監督

C はい

A かとーく。上にはっていつたら、ばあさんに会えるはい

C ええ!

(A&Cで大笑い)

B 下だったらおれたちが支えよっけん

C ええ! ええねえ

A ええど、監督

C いやあ、ばってんねえ

A おう

C そうぎゃんねえ

A おう

C 日本一に拘わらないんじゃ

A (Bと顔を見合わせて) はあ? そんな、ねえ。

B うん

A 監督、ここまできたら町民もね、優勝するところば観たがつとらすもん

C おらねえ

A うん

C お客さんも、よう聞いときなつせ

A うん

C 準優勝でね、二位でええち思う

A (メガホンで監督の頭を叩く) あんたね、監督

B うん

A ここまで来て二位やら言うなら、たいがい腹かかすはい

C ばあか、ばあか。なんばあわんにね、ならんちゃよか

A はあ?

C おまえどんな、もともととくべつな、おんりいわん(指を一本立てて大笑い)

A はあ??

B (胸を押さえて) グサリ、グサリ刺さったあ

A (メガホンで弥平の頭を叩いて) おら弥平! 弥平!

B (悶えた感じで) たまらん

A 弥平!

B (悶えた感じで) うわあ

A 弥平! そぎゃんと刺さるとか、おまえ、ばかんこつ。おい

B すません

A ピシャつとせい

B ピシャとね(バットを構える)

A 監督

C ほおい

A そがんとじゃいかん

C にゃあ

A いいもんじゃにゃあ

C ばあ! あいたたたた(胸を押さえて苦しそうに)。いやあ緊迫した場面

- で申し訳にやあばってんねえ。おらねえ
- A おう
- C おまえどんにねえ
- A おう
- C 秘密しとつたことがあつとたい
- B まあた出た、あらあ？
- A なんな、今、ゆわなんとな？
- C 今、ゆってええ？
- A なんな
- C おれねえ
- A おう
- C 秘密しとつたばってんたい
- A & B おおう
- C おらねえ
- A おう
- C 散歩出るとがぁ
- A おおう
- C 散歩出るじゃにやあ
- A おう
- C したらねえ、かわえーえ女の子がたい
- A うん
- C 「ふらり高森ですが。インタビューどうですか。」って言わすじゃにやあ。だ
- A けんたい、じいさんな恋した（大笑い）
- A & B （顔を見合わせて）
- A あー、かんとーく！ そら、ノムラユキちゃんじゃろ、あんた
- C 違う！ ノムラユキコさん！
- A ああ、ノムラユキちゃん。これね、分かつとらっさん、じいさん
- B うん わかつとらん
- A じいさん
- C おう
- A おれどもねえ、推しじゃもん、そら推し
- C うわあ
- A & C 気が合う（互いに握手）
- B たいぎや。おれもおれも（B & Cで握手）
- C えー、ならね。日本一にならあね
- A うんうん
- B こらあいかん！ 困ーある！
- A 監督、おれもね。タイムがあるけん。ノムラユキちゃんのサインば、もろお
- C てきちやる。あんたんとも
- C こらあ。ならね、ちゃんと色紙にたい
- A うん
- C 「ぶろむじいさん」って
- A & B （手を打って爆笑）
- C したら、おらあ、もう（色紙を両手で持つ所作で）冥途の土産になるけえ
- ねえ
- A こら！ まだ終わるまで待つときなっせ
- C ざまにやあええな なんそら
- A ほおら監督

C おおう

A こら何したつちや勝たないと

C 勝たねば

A うん

B (やる気満々な様子で) そろそろ

C そうか

A アドバイスな

C そうか、小林

A はい

C そら、弥平んバットがつまらんちやにやーや、そら

A バットがつまらんちや

C おお。さつきから聞いてとくと

A&B あらっ？

A バットがつまらんつていいよすぞ

B いや、よかる？

A これでいかんと？ 監督

C こばやーし！

A はい

C これは、使かええ(持っていた杖を渡す)

A ええ、これ？これな。これじゃ打たれん

C ばあか。そんでねえ。おれな年金生活で困つとるけんたい。タダじゃやられん

A

A タダじゃやられんな？

C 百円で売ってけ

A 安っし

C ああ。百円で売ってけ

A 弥平。おいおい、監督がとつけもにやあこつ言わしたぞ、おまえ

B (杖とバットを持ち替え) えええつ、これえ？

A これで打てち

B (杖を構えて) よかばつてん、これで、おまえ？

A これじゃ打たれんばい、さすがに

C おおい。じゃあ、こんねえ。こんくそつまらんバット。おらね、これ二百円で買う

A

A うん？ 二百円で買うていうたつちや

C そしたらねえ。おまえどんなねえ、もう日本一。もう間違いにやあ

A おいおい、山村君

B うん

A こおれじゃ打たれんし、日本一もならねばい。こりやあねえ

B ああ、自信が無くなった

A 自信がにやあ

C おまえどんな、まだ分からんとや

A 分からん

(AとC、立ち位置を替わりCが中央に立つ)

C お客さんも分からんな

客 わからん

C こやつやはらは今、売り買いをした。売買をすればサヨナラになるじゃ、ない

か

(一同退席)

向上会会員一覽(二〇二二年度)

旭向上会

会長 児玉海人 副会長 工藤健裕 会計 本田直義
 桐原誠 飯塚直樹 古寺秀徳 黒木英雄 木村勇太
 木村允哉 後藤源喜 岩下幸樹 野村由貴

上町向上会

会長 谷川大樹 副会長 甲斐雄大 会計 鷺尾慎一
 村上純一 馬原孝平 吉良嘉文 吉良慎太郎 志柿裕次郎
 宇藤貴夫 住吉健 高木健祐 今村翔太 石坂聡太郎

横町向上会

会長 松山和隆 副会長 村山広樹 会計 森隆志
 児玉明 佐藤謙太郎 久保田一也 津留一勝 甲斐翼
 高倉翔太 香月優希 古川茉奈 石田昌司 下田康弘

下町向上会

会長 小篠勇一 副会長 小林亮太 会計 甲斐政紀
 今村信也 山村弥太郎 杉永健太 岩本俊徳 桐原高行
 荒牧大 山村純平 岩本康徳 林修一 代宮司猛
 山村弥平 安達徳隆 山口凌

昭和向上会

会長 緒方洋貴 副会長 田代琢馬 会計 井芹英憲
 田上博喜 鳩野文也 今村太一
 田代寛進 下田斗史輝 松木無我
 荒巻菜名 瀬井敬悦 村上海翔
 古西政喜 垣内太輝

調査協力者

赤峰力夫 井和幸 井強子 岩下昭久 岩下賢一 宇藤晴幸 甲斐照男
 吉良禎人 吉良充展 桐原朗吉 桐原生 工藤勇哉 熊谷文夫
 後藤秀希 下田康弘 首藤蒼一郎 武田憲一 田所醇 橋本和則
 東幸佑 藤島昇 馬原恵介 馬原孝一 安井寛子 山村唯夫
 キンキラ陽子 菊川大東 小川治雄 日田匠 森田義満 湯治清
 宮部博文 後藤健太郎 工藤眞巳(順不同)
 風鎮祭実行委員会 高森阿蘇神社 高森町商工会 大塚商店 篠田米店
 下町区有志の会 昭和第六・七組
 地域密着型特別養護老人ホームひめゆり 特別養護老人ホーム梅香苑
 上町天神区 網田神社 馬見原町有志 吉田新町有志
 本渡歴史民俗資料館 芦北町教育委員会(順不同)

この他、多くの皆様から調査にご協力・ご助言を賜りました。
 ここに厚くお礼申し上げます。

あとかぎ

このたび、本報告書が発刊の運びとなりましたことに事務局は安堵しております。

本書の発刊にあたり、「高森のにわか」が平成三十一年（二〇一九）に国選択無形の民俗文化財に選択されて以降、記録作成等について、関係機関と協議をすすめてきました。これまで、「高森のにわか」は、一回性ゆえにどのように演じられてきたのか記録が残っていないため、令和二年度より文化庁の国庫補助を受けて、「高森のにわか」の記録保存調査を行う予定でありました。

しかしながら、当時、世界的に新型コロナウイルスが蔓延し、国内においても猛威を振るう災禍に見舞われました。令和二年四月に国の緊急事態宣言が発令されるなど、風鎮祭をはじめ多くの民俗芸能の行事が中止に追い込まれました。また、高森のにわか調査員と事務局が対面すらままならない状態となり、やむなく、令和二年度の高森のにわか調査事業については中止せざるを得ませんでした。

高森のにわか調査事業は、令和三年度より三カ年計画で再開しましたが、令和三年度の高森のにわかを含む風鎮祭も中止となり、なかなか思うような聞き取り調査ができず、本格的に調査が可能となったのは、令和四年度からでした。

令和四年度、五年度と実施された風鎮祭では、多くの人が訪れ、あらためて「高森のにわか」が地域の人々の活力の源であること、精神的なバックボーンになり得る存在であることを再認識しました。

コロナ禍で人々の精神的不安が問題視される現在、本町は、向上会の

皆様をはじめ、地元関係者のご協力を得ながら、今後も永く「高森のにわか」の継承活動に協力してまいります。

報告書刊行には、多くの方に御協力していただきました。とりわけ、五町の向上会の皆様、風鎮祭実行委員会の皆様、史料調査に協力していただきました豊前屋の吉良禎人様、古写真や映像を提供していただきました地元の皆様には、心より感謝申し上げます。

そして、高森のにわか、造り物、仮装行列、祭礼、文献調査にあられた高森のにわか調査委員会の皆様及びご指導ご助言を頂いた文化庁文化財第一課、熊本県教育庁教育総務局文化課の関係各位に心から感謝申し上げます。

令和六年（二〇二四）三月三十一日

高森のにわか 調査委員会 事務局

熊本県高森町文化財調査報告書 第一集（二〇二四年）

高森のにわか

発行日 令和六年（二〇二四）三月三十一日

編集・発行 熊本県阿蘇郡高森町教育委員会

〒八六九―一六〇二

熊本県阿蘇郡高森町大字高森二一六八

電話 〇九六七―六二―〇二二七

印刷 ホープ印刷株式会社

許可なく本書の無断複製・転載・複写を禁ずる。

